

秋 田 市

湊 城 跡

—秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成17年度調査区）—

2007. 3 秋田市教育委員会

序

秋田市は秋田市土崎港地内において秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）を施行しております。しかし、当該地が周知の遺跡である「湊城跡」であることから、遺跡の保護について協議を重ね、工事着手前に発掘調査を実施し、遺跡を記録保存することにしました。

調査の結果、安土桃山時代から江戸時代の遺構・遺物が発見されました。また、湊城跡では初めての本格的な発掘調査であり、地域の歴史を考える上での貴重な成果を得ることができました。

本報告書は、平成17年度調査区の調査結果をまとめたもので、文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用していただければ、幸いに存じます。

刊行にあたり、調査にご協力いただきました関係各位の皆様には感謝申し上げますとともに、今後とも、埋蔵文化財の保護につきまして、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

平成19年3月

秋田市教育委員会
教育長 高橋 健一

例 言

- 1 本報告書は、秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う湊城跡（秋田市土崎港中央三丁目地内）の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査業務は、事業主体者が秋田市（担当課：建設部道路建設課）、業務受託者が株式会社本郷建設工務所、調査担当者が秋田市教育委員会（担当課：文化振興室）となり実施した。本発掘調査経費については、事業主体者である秋田市が負担した。なお、平成16年度に実施した確認調査は、秋田市教育委員会が調査主体となり、平成16年度国庫補助金並びに県費補助金の交付を受けて行った。
- 3 本報告書の執筆・編集および写真撮影は神田和彦が行い、小松正夫の指導と安田忠市・伊藤武士・小野隆志の助言・協力を得た。
- 4 出土遺物の陶磁器類について、有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏に鑑定をお願いした。
- 5 本報告書刊行以前に、現地説明会資料や平成17年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料、報道等により調査成果の一部が公表されているが、本報告書の記載内容をもって正式なものとする。
- 6 発掘調査、整理作業の過程で下記の機関・各氏より指導、助言、協力を賜った。（敬称略・順不同）文化庁、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、秋田県立博物館、東京都埋蔵文化財センター、秋田市立千秋美術館、秋田市市史編さん室、秋田城跡調査事務所、飯村均、五十嵐彰、五十嵐一治、宇田川浩一、井上雅孝、小野正敏、小保内裕之、大橋康二、鹿又喜隆、川口良、工藤直子、小井川和夫、坂井秀弥、庄内昭男、関根達人、高桑登、高橋忠彦、高橋学、種石悠、西井亨、羽柴直人、播摩芳紀、本田泰貴、船木義勝、水澤幸一、八重樫忠郎、山口博之

凡 例

- 1 図中には下記の略記号を用いた。
S A－柱列跡、S B－建物跡、S D－溝跡、S E－井戸跡、S K－土坑、Pit－ピット、S N－焼土遺構、S Q－集石遺構
- 2 図中の方位は、すべて真北を示す。また方位が記されていないものについては、上が真北を示す。
- 3 図中の地図には、秋田市管内図1／500,000、同1／25,000、都市計画図1／2,500を使用した。
- 4 本文中の遺物については、土器・陶磁器、土製品・木製品・瓦・石製品・金属製品・銭貨の基礎分類ごとに記述した。
- 5 実測図の中で、青磁は「青磁」の文字と、銅緑釉は「銅緑釉」の文字と、鉄釉は「鉄釉」の文字との網掛けで図示し、白磁は「白磁」の文字のみで示した。また、木製品に塗布されている赤漆は、黒漆はの網掛けで図示した。
- 6 本文中の陶磁器の生産地については、国内産は肥前系、瀬戸美濃系、京信楽系など主要な大規模生産地（地方）に関してその生産地産の製品を主とし、それに直接技術的影響を受けた周辺および地方の窯の製品も含め「系」として示した。また、より具体的生産地として窯を限定できるものについては、中国産の漳州窯、秋田県の在産窯である白岩窯や寺内窯のように記述した。
なお、肥前系陶磁器の産地同定および年代については有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏に鑑定を依頼したが、報告文の内容については、ご教示をもとに執筆を行った担当者に責がある。

目 次

序
例 言
凡 例

第 1 章 調査の概要	1
第 1 節 調査の経過	1
第 2 節 発掘作業の経過	1
第 3 節 整理作業の経過	2
第 2 章 遺跡の位置と環境	3
第 1 節 地理的環境	3
第 2 節 歴史的環境	3
(1) 周辺の遺跡	3
(2) 安東氏と湊城跡の概要	9
第 3 章 調査の方法と成果	13
第 1 節 調査の方法	13
第 2 節 層序	13
第 3 節 遺構と遺物	18
(1) IV層面検出の遺構・遺物	18
(2) V層面検出の遺構・遺物	33
(3) VI層面検出の遺構・遺物	53
(4) VII・VIII層面検出の遺構・遺物	71
(5) その他の遺物	80
(6) 出土遺物属性表および実測図	80
第 4 章 まとめ	127
第 1 節 検出遺構とその年代について	127
第 2 節 出土遺物について	131
第 3 節 中世・湊城と近世・土崎湊について	137
第 4 節 おわりに	137

写真図版
報告書抄録

第1章 調査の概要

第1節 調査の経過

秋田市では、土崎駅の利便性を図るため、秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）を秋田市土崎港中央三丁目・五丁目地内に事業着手した。しかし、当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「湊城跡」に所在することから、秋田市教育委員会との間で開発に伴う事前協議を行った。協議の結果、平成16年10月25日付けで秋田市教育委員会に埋蔵文化財事前調査の依頼があった。これを受けて秋田市教育委員会は、分布調査による現況確認と試掘による範囲確認調査を平成16年11月8・9日に実施した。調査の結果、安土桃山時代から江戸時代の遺構・遺物が確認された。平成16年12月20日付けで秋田市建設部道路建設課より秋田市教育委員会に土木工事等のための発掘調査に関する通知書（文化財保護法第57条の3第1項）が提出された。これに対し、範囲確認調査の結果に基づき、平成17年1月4日付け教生一1897で、秋田県教育委員会より工事は「恒久的な建築物、道路その他の工作物を設置する場合」に該当するため、事業予定地に対して発掘調査条件の通知があった。

協議の結果、事業主体者が秋田市（担当課：建設部道路建設課）、調査担当者が秋田市教育委員会（担当課：文化振興室）となり、平成17年度に発掘調査、平成18年度に整理作業を行うこととした。また、費用負担については事業主体者が負担し、発掘作業・整理作業の調査に関わる部分以外に関しては、業務受託者に委託することとした。平成17年7月26日付けで事業主体者の秋田市と調査担当者の秋田市教育委員会、業務受託者の株式会社本郷建設工務所の3者で発掘調査に関する協定書を結び、整理作業に関しては平成18年7月18日付けで3者で協定書を結び、事業を実施した。

第2節 発掘作業の経過

発掘作業（平成17年度）

平成17年8月1日より調査区に自立式矢板（土留工Ⅱ型鋼矢板、L=7m）の打ち込みを開始した。8月17日、近代造成土である第Ⅰ～Ⅲ層を除去し、第Ⅳ層上部で江戸時代の遺構・遺物を確認した。8月19日、グリッド杭および座標杭の設定した。8月23日より第Ⅳ層面の遺構精査、9月12日より第Ⅴ層面の遺構精査、10月3日より第Ⅵ層面の遺構精査、10月17日より第Ⅶ・Ⅷ層面の遺構精査を開始した。11月3日に市民を対象とした現地説明会を行い、175名の参加者があった。11月9日に遺構精査・記録化が終了し、11月10日に機材の撤収作業を行った。11月11日から30日までに埋め戻し、矢板の引き抜き作業を実施し全工程を終了した。

発掘作業体制（平成17年度）

調査期間	平成17年8月1日～11月30日		
調査面積	179.52㎡（調査対象面積 542.21㎡）		
事業主体者	秋田市（担当課：建設部道路建設課）		
調査担当者	秋田市教育委員会		
調査体制	秋田市教育委員会文化振興室		
	文化振興室	室長	小松正夫（調査担当）
		参事	松尾由美子

文化財担当

主席主査 西谷 隆 (調査担当)
主 事 進藤 靖 (調査担当)
主 事 中川 宏行 (調査担当)
主 事 神田 和彦 (調査担当・主務者)
主 事 小野 隆志 (調査担当)

業務受託者 株式会社 本郷建設工務所

調査作業員 伊藤弘義、千葉隆樹、佐藤忠喜、佐藤晴夫、小松田税、加賀屋喜久雄、
福島弘、松田忠、山本峰吉、石川巖、鈴木銀一、斉藤健三、鈴木長司、
三浦吉司、三浦千枝子、和田庸悦、石郷岡寿、長尾景元、渡辺範、
最上谷布美子

第3節 整理作業の経過

整理作業 (平成18年度)

平成18年8月1日より出土遺物(コンテナ45箱、および木質遺物)の洗浄を開始した。8月17日から2月28日までに室内整理作業を実施した。接合(8月下旬)、注記(8月下旬～9月)、実測(9月～12月)、トレース(11月～12月)、遺物復元(10月～12月)、写真撮影(10月～2月)、版下作成(12月～1月)、編集作業(2月)を実施し、印刷所へ入稿した。なお、12月12日～13日に有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏に陶磁器類の鑑定をしていただいた。3月30日までに校正・製本を実施し、全工程を終了した。

整理作業体制 (平成18年度)

作業期間 平成18年8月1日～平成19年3月30日

事業主体者 秋田市(担当課:建設部道路建設課)

調査担当者 秋田市教育委員会

調査体制 秋田市教育委員会文化振興室

文化振興室 室長 小松 正夫
参事 松尾 由美子
副参事 中田 好彦

文化財担当

主席主査 西谷 隆
主 事 鎌田 英智
主 事 神田 和彦(整理担当・主務者)
主 事 小野 隆志
主 事 伊藤 才城
臨時職員 佐々木 啓吾

業務受託者 株式会社 本郷建設工務所

整理作業員 千葉隆樹、松田忠、三浦千枝子、土佐菜穂子、岩谷みゆき、
宮田美奈子、今野祥子

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

湊城跡は、秋田平野を流れる雄物川河口部（秋田運河）の右岸、標高4～7mの地点に位置している（第1図）。秋田市街地北部の秋田市土崎港中央三・五・六丁目地内で、北緯39°45′26″、東経140°4′16″（世界測地系：X=-26,661、Y=-65,304）の神明社を中心とし、東西600m、南北500mの範囲である。遺跡は、現在市街地となっている（第2図）。平成17年度調査区は、遺跡の中心から西へ約150mの地点である。

遺跡は、地形分類では砂丘地にあたる（経済企画庁総合開発局国土調査課編1966、第3図）。秋田市においては、このような砂丘地は、海岸線と併行に幅2～4kmにわたって分布し、この延長は八郎潟南部まで続いており、ほとんどは被覆砂丘である。遺跡が所在する砂丘地は土崎砂丘地と呼ばれる。土崎砂丘地は、南北を旧雄物川と新城川に区切られた土崎を中心とした砂丘地で、一部に標高20m前後の高位の砂丘はあるが、大部分は10m前後の低位の砂丘地からなっている。土崎砂丘地で特徴的なことは、土崎市街地と日本石油秋田精油所の間に幅500～600mの旧河道がみられ、その一部は現在、「光沼」の地名として残っている点である。この旧河道は雄物川の旧河道と考えられ、北側は秋田市飯島穀丁の集落まで広がり、湾状の形状を呈している。土崎砂丘地の旧地形が湾状の形状を呈していることは、遺跡の立地として注意すべき点である。

第2節 歴史的環境

（1）周辺の遺跡

秋田市教育委員会が昭和61年から63年に実施した『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』（秋田市教育委員会1989）および『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書—改訂版—』（秋田市教育委員会2002）に基づいて、湊城跡周辺の遺跡について概観する。

主要な中世遺跡としては、湊城跡から約2.3km北の新城川左岸に穀丁遺跡（15世紀代）、旧雄物川下流域右岸において、約1.7km南に後城遺跡、約2.2km南に秋田城跡、約5.3km南に下タ野遺跡が所在し、雄物川下流域右岸に中世の関連遺跡が集中している（第1図）。

下タ野遺跡は、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土坑などが検出され、須恵器系陶器、中国産青磁（龍泉窯系）・白磁などが出土し、おおむね12世紀後葉～14世紀中葉頃の遺跡である（小松ほか1979、神田2003・2005）。秋田城跡は古代城柵官衙遺跡であるが、鶴ノ木地区・大小路地区・勅使館地区で中世の遺構・遺物が確認されている。掘立柱建物跡、井戸跡、竪穴状遺構、鍛冶炉跡、土壇墓などが確認され、かわらけ、中国産青磁（龍泉窯系・同安窯系）・白磁、須恵器系陶器などが出土しており、年代は12世紀末～13世紀中葉頃に位置づけられる（小松ほか1983・1993・1997・1998、小松1997、伊藤2003b）。後城遺跡は、掘立柱建物跡、井戸跡、竪穴状遺構、土壇墓、貯水施設と考えられる大形円形竪穴状遺構などが検出されている（小松ほか1978、伊藤2003a・2005）。出土遺物は、中国産陶磁器（青磁・白磁・染付）、国内産陶器（瀬戸美濃系・須恵器系・越前産・肥前系）などが出土している。年代は13世紀～16世紀末にわたるが、主体は14世紀後半～16世紀末である。穀丁遺跡は、本格的な発掘調査は行われていないが、工事中に遺物が発見された（庄内1982）。中国産青磁（碗2点）、瀬戸美濃系陶

器（花瓶1点）、須恵器系陶器（播鉢1点）、茶臼1点、鉄鍋1点、砥石1点が出土した。中国産青磁は15世紀代、国内産陶器は15世紀中葉～後葉に位置づけられると考えられる（神田2006）。

主要な近世遺跡としては、湊城から約6km南西に久保田城跡が所在する。久保田城は秋田藩主佐竹氏12代約270年間の居城で、現在の千秋公園一帯である。慶長7年（1602）に常陸国水戸城（茨城県水戸市）から秋田に転封された佐竹義宣（1570～1633）は、当初、旧領主秋田実季（1576～1659）の居城であった土崎湊城に入城した。しかし、湊城は狭小の平城であることから新城を築くこととなり、慶長8年（1603）に着工し、同9年（1604）に湊城を破却し、久保田城へ移った。

その他、湊城跡周辺には、寺子山遺跡（2：縄文）、県立聳学校遺跡（3：縄文）、高野遺跡（6：奈良・平安）、菅江真澄墓（7：近世）、児桜貝塚（8：縄文）、寺内焼窯跡（9：近世）、神屋敷遺跡（10）があり、雄物川右岸の砂丘丘陵および微高地上に周知の遺跡が所在する（第4図）。

【引用文献】

秋田市教育委員会 1989 『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』

秋田市教育委員会 2002 『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書－改訂版－』

伊藤武士 2003a 「秋田市後城遺跡－中世の湊町－」『中世出羽の諸様相－寺院・生産・城館・集落－』東北中世考古学会第9回大会（秋田大会）資料集 pp.99-108

伊藤武士 2003b 「秋田市秋田城跡－中世秋田城周辺－」『中世出羽の諸様相－寺院・生産・城館・集落－』東北中世考古学会第9回大会（秋田大会）資料集 pp.224-236

伊藤武士 2005 「秋田湊と湊安東氏の城館」『海と城の中世』東北中世考古学叢書4 高志書院 pp.109-128

神田和彦 2003 「秋田市下タ野遺跡－雄物川下流域における中世前期の集落－」『中世出羽の諸様相－寺院・生産・城館・集落－』東北中世考古学会第9回大会（秋田大会）資料集 pp.212-223

神田和彦 2005 「雄物川下流域 中世前期の集落－下タ野遺跡－」『海と城の中世』東北中世考古学叢書4 高志書院 pp.195-204

神田和彦 2006 「秋田県中世考古学会の現状と課題－秋田平野における中世遺跡の展開を中心として－」『遺跡研究の方法－東北中世考古学の12年－』東北中世考古学会第12回研究大会資料集 pp.62-70

経済企画庁総合開発局国土調査課編 1966 『土地分類基本調査 秋田 地形・表層地質・土壌』

小松正夫 1997 「中世秋田城の行方－高清水岡の考古学的見地から－」『倉田芳郎先生古希記念 生産の考古学』同成社 pp.195-204

小松正夫ほか 1978 『後城遺跡発掘調査報告書』秋田市教育委員会

小松正夫ほか 1979 『下タ野遺跡発掘調査報告書』秋田市教育委員会

小松正夫ほか 1983 『昭和57年度秋田城跡発掘調査概報』秋田市教育委員会

小松正夫ほか 1993 『平成4年度秋田城跡発掘調査概報』秋田市教育委員会

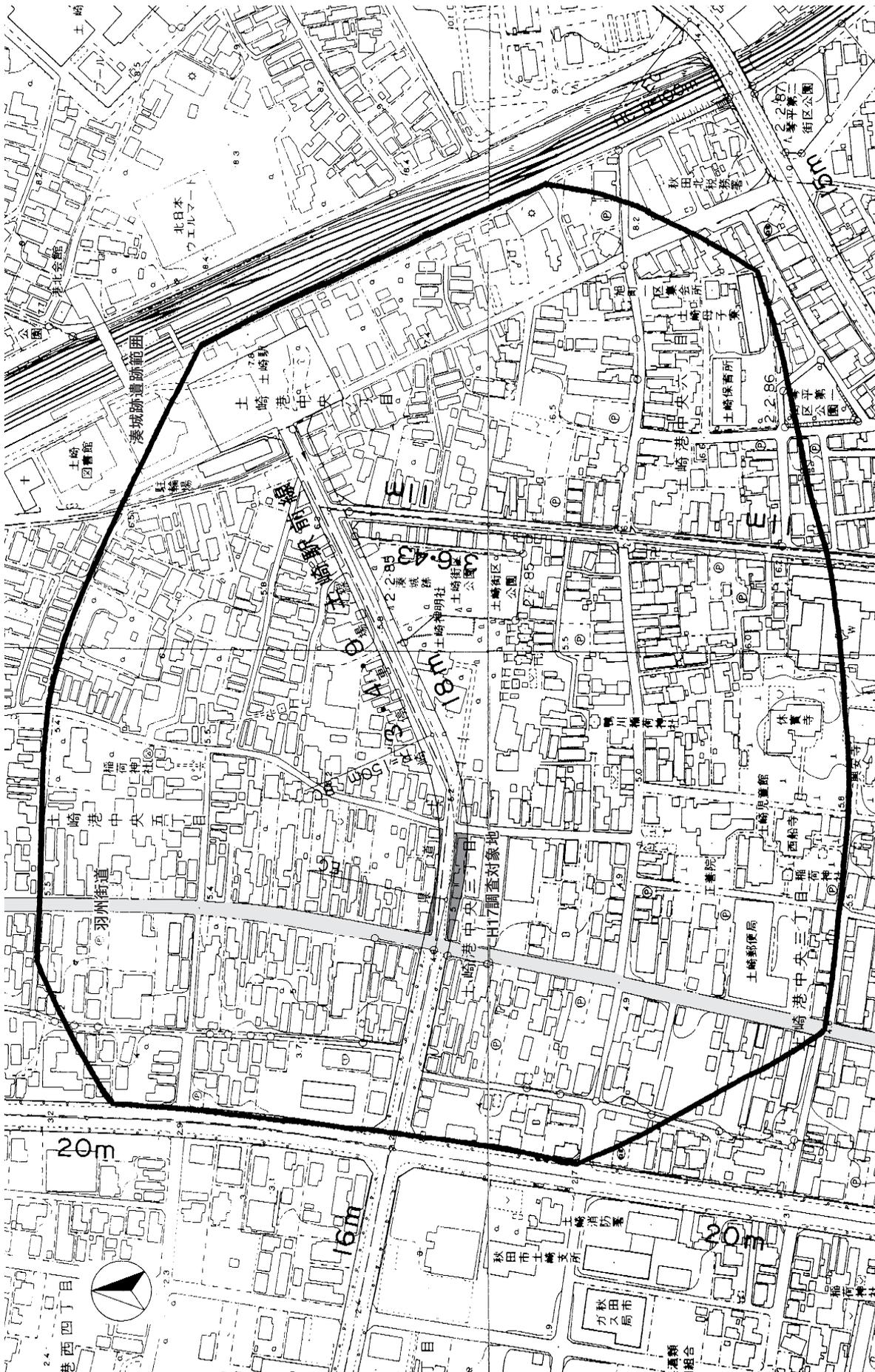
小松正夫ほか 1997 『平成8年度秋田城跡発掘調査概報』秋田市教育委員会

小松正夫ほか 1998 『平成9年度秋田城跡発掘調査概報』秋田市教育委員会

庄内昭男 1982 「秋田市飯島穀丁出土の中世遺物について」『秋田県立博物館研究報告』7 pp.95-102



第1図 遺跡位置図 (S=1/50,000)



第2図 湊城跡周辺図 (S=1/3,000)



第3図 地形分類図（経済企画庁総合開発局国土調査課編1996をもとに作図、(S=1/50,000)



第4図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

表1 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	所在地	時代	遺構・遺物
1	湊城跡	城館・町屋敷	秋田市土崎港中央三丁目他	中世・近世	柱列跡・建物跡・溝跡・井戸跡・土坑・焼土遺構・集石遺構・敷石状遺構・ピット：土器・陶器・磁器・土製品・木製品・石製品・金属製品・瓦・銭貨・動物依存体
2	寺小山遺跡	遺物包含地	秋田市土崎港中央七丁目	縄文	石錘
3	県立聳学校遺跡	遺物包含地	秋田市土崎港北二丁目17番	縄文	縄文土器・石器
4	後城遺跡	集落跡	秋田市寺内字後城	奈良・平安・中世	土壇墓・土壇・井戸跡・住居跡：土師器・須恵器・古瀬戸・越前焼・珠洲系中世陶器・青磁・白磁・古銭・鉄製品・木製品・宝篋印塔
5	秋田城跡	城柵・城館(国指定)	秋田市寺内字大畑他	縄文・奈良・平安・中世	掘立柱建物跡・竪穴住居跡・築地・柱列・井戸跡・鍛冶炉跡等：縄文土器・石器・石製品・土師器・須恵器・赤褐色土器・漆紙・木製品・鉄製品・木簡等
6	高野遺跡	遺物包含地	秋田市寺内字高野	奈良・平安	須恵器
7	菅江真澄墓	墓地(市指定)	秋田市寺内字大小路	近世	
8	児桜貝塚	貝塚	秋田市寺内字児桜29	縄文	貝塚 縄文土器・石錘・刻線礫
9	寺内焼窯跡	窯跡	秋田市寺内字堂ノ沢	近世	陶器窯跡・瓦窯跡・煉瓦窯・陶器物原・磁器物原：近世陶磁器・瓦・煉瓦・木製品
10	神屋敷遺跡	古墳擬定地	秋田市寺内字神屋敷1		直径7m、高さ1.5m程度の土盛り3基
11	根笹山遺跡	古墳擬定地	秋田市寺内字神屋敷137		径6m程高さ2mの円墳状の高まり

(2) 安東氏と湊城跡の概要

安東氏と湊城跡について、文献史料や絵図などにみられる記載を整理し、概要と変遷について述べる。

『秋田家文書』所収の「秋田家系図」によれば、^{註1}安東氏は前九年の役（1051～1062）で討伐された安倍貞任の子・高星が青森県津軽地方の藤崎に逃れ、その後、子孫の貞秀が安東太郎と称し、当家の仮名としたことに始まるとされる。やがて、愛秀の頃（鎌倉時代末頃か）に安東氏は十三湊を本拠とした。その後、盛季（？～1414）は下国家を興し、盛季の弟・鹿季（？～1423）は、盛季の命により、兵200余騎を率いて、秋田の湊を伐ち、湊家の元祖となったとされる。また、「南部世譜附録」によれば、応永17年（1410）に、安東鹿季は山北刈和野（現・大仙市刈和野）で南部守行と戦った記録がある。この他、秋田市山内字松原に所在する補陀寺には、「安東下国太郎守季位牌」があり、補陀寺の開基である安東盛季が応永21年（1414）に96才で死亡したと記載されている。安東氏が伐ったとされる、いわゆる「秋田湊」の場所は定かではないが、以上のような記述から、鹿季の頃の応永年間（1394～1428）には、秋田平野に安東氏の影響が及んでいたと考えられる。

湊安東氏の居城とされる湊城の築造については、明治期に書かれた『秋田沿革史大成』に、「土崎湊城ハ百三代後花園帝永享八酉辰年、安倍康季將軍野西北ノ方へ築ク」との記述があるが、この記述自体に根拠はなく、所在・年代ともに不明と言わざるを得ない。^{註2}

その後、安東家は、政季（？～1488）が河北郡を得、次代の忠季（？～1511）が檜山城（現・能代市）を居城として築き、檜山安東氏となった。秋田県内には能代の檜山安東氏と秋田の湊安東氏の両家が併存することとなる。元亀元年（1570）頃、愛季（？～1587）が弟・茂季を湊家に送り、両家の統合を図った。しかし、こうした強引な両家統合に湊安東氏側は反発し、天正17年（1589）に、『秋田家文書』の「湊檜山両家合戦覚書」に記されるように、両家の合戦、いわゆる「湊合戦」が起こる。湊合戦の結果、檜山安東氏の実季（1576～1659）が勝利を収め、その後実季は、檜山城から湊城へ居城を移していったようである。『秋田家文書』「御作事入用之目録」などに記されるように、慶長4～6年（1599～1601）に湊城が改修されていることが分かる。改修の内容は、御広間・御奏者之間・角屋倉・御門屋倉・御台所・御鷹部屋・御料理之間・御長屋の作事を行っている。また、改修にかかった費用・人数・材料・日数なども記されており、その内容は大がかりなものである。こうした改修は大規模であり、城の新築に近いとの見解もある（塩谷ほか1996）。

このような大改修が行われた湊城の所在については、江戸時代中期に書かれた『出羽国風土略記』に、「土崎の湊という當地に城跡あり平城にして水堀二重土手所々にあり大手は辛酉にあり搦手は北に有」と記されており、現在の周知の埋蔵文化財包蔵地としての「湊城跡」はこれを参考に設定されている。

江戸時代に入り、慶長7年（1602）佐竹義宣が常陸より秋田へ転封となり、湊城へ入城する。安東実季は常陸国宍戸へ国替えとなる。慶長9年（1604）には、新築した久保田城へ移り、湊城は破却される。その後、湊城跡周辺は土崎湊となる。元和2年（1616）には久保田城と土崎湊をつなぐ新道（羽州街道）が整備される。それまでは、久保田城に行くには、土崎湊→八柳→天徳寺門前通り→泉→手形→久保田城というルートであったが、羽州街道が整備されたことにより、土崎湊→寺内→八橋→久保田城というルートとなったとされている（加藤1941）。また、元和6年（1620）には、神明社が湊城の跡地（現在地）に移り、土崎の総鎮守となる（秋田市教育委員会編1993）。^{註3}その後、土崎湊は、日本海運・雄物川船運による物流の要所となり湊町として栄えていく。川口家に伝わる『元文中湊古絵図』（1730～1740）（第5図）、また弘化3年（1846）の『湊町古絵図』（第6図）には、江戸期の土崎湊の町割り図

などが描かれている。これによれば、平成17年度調査区は「萱村町」と呼ばれていた一画であり、文政5年（1822）以降は、「肴町」と改称されており、藩より魚の専売権が与えられていた。

以上のような、安東氏と湊城跡の概要について年表にまとめると表2のようになる。

表2 湊城跡関係年表

年号	西暦	内容
応永年間	1394～1428	津軽十三湊の安東鹿季が秋田の湊を伐つ。 「鹿季 安東二郎 盛季 鹿季に兵二百余の騎を付け、秋田之湊を伐令む、是れ湊家之元祖也、応永三十年六月十六日卒、・・・」 『秋田家文書』『秋田家系図』
永享8年	1436	湊城が築城される？ 「土崎湊城は百三代花園帝永享八酉辰年、安倍鹿季將軍野西北の方へ築く。」 『秋田沿革史大成 下』
天正17年	1589	湊合戦がおこる。 『秋田家文書』『湊檜山両家合戦覚書』
慶長4年～6年	1599～1601	安東実季が湊城の大改修をおこなう。 御広間・御奏者間、角屋倉・門屋倉・御台所・御鷹部屋・御料理之間・御長屋を工事した費用・人数・日数等の記述がある。『秋田家文書』『御作事入用之目録』など 「土崎の湊という當地に城跡あり平城にして水堀二重土手所々にあり大手は辛酉にあり搦手は北に有」『出羽国風土略記』
慶長7年	1602	佐竹義宣が常陸より湊城へ入城。安東実季は常陸国宍戸へ。
慶長9年	1604	佐竹義宣が久保田城へ移り、湊城は破却。
元和2年	1616	久保田城と土崎湊をつなぐ新道（羽州街道）が完成。
元和6年	1620	神明社が湊城の跡地（現在地）に移り、土崎の総鎮守となる。

註1）安東氏に関する家系図はこの他に様々あるが、ここでは、実季の死去の前年（1658）に完成されたとされ、秋田家に伝わる「秋田家系図」を参考した。文献としては、塩谷ほか1996に所収されたものを参照した。

註2）原文に「永享八酉辰年」とあるが、実際には永享八年は「丙辰」である。

註3）神明社では大正2年（1913）に300年祭、昭和38年（1963）に350年祭をおこなっており、神明社の根本の創建が慶長18年（1613）、湊城跡地に社殿等が整ったのが元和6年（1620）とする説もある。（秋田市教育委員会編2002）

【引用・参考文献】

塩谷順耳ほか 1996 『秋田市史 第八巻 中世 史料編』 秋田市

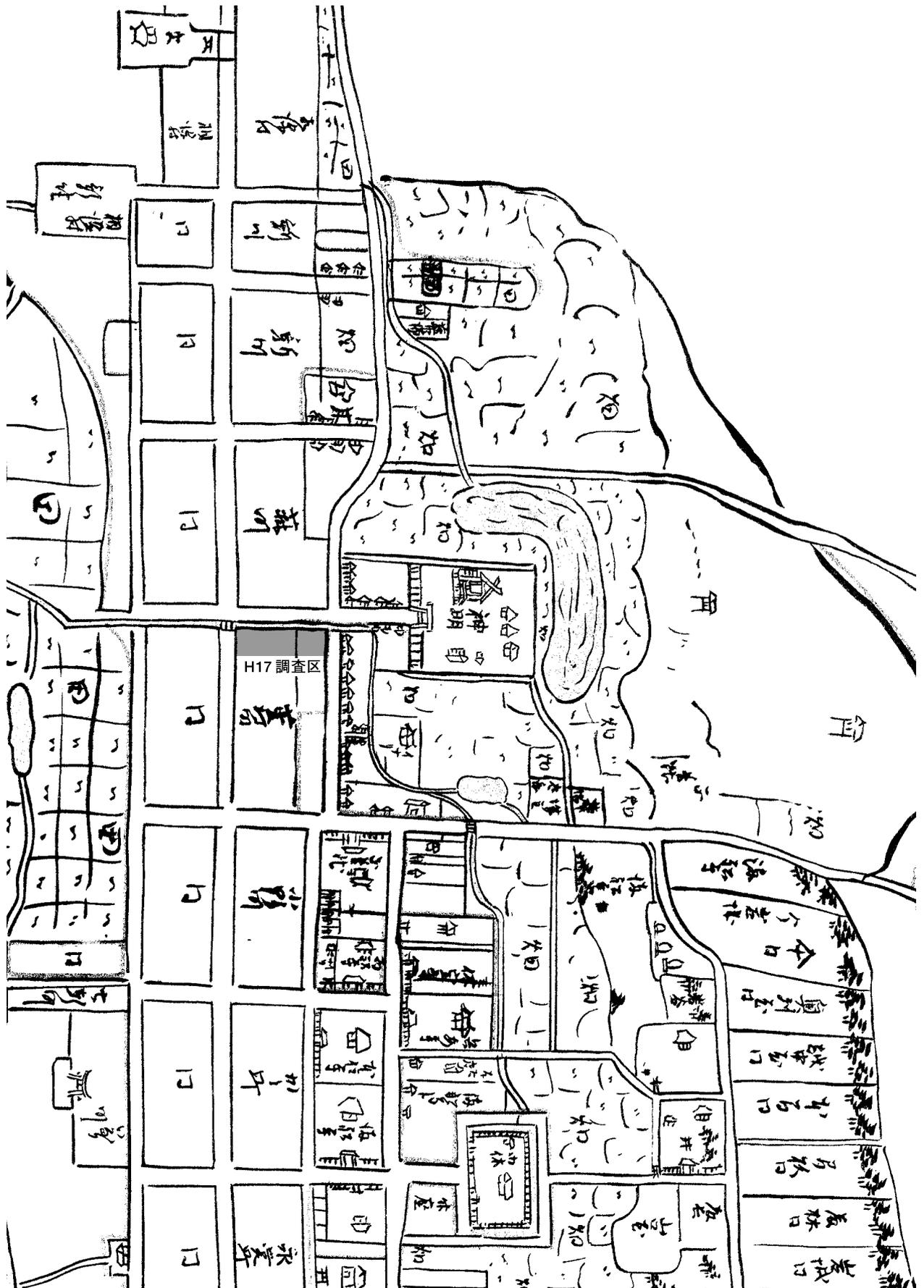
秋田市教育委員会編 1993 『土崎港祭りの曳山行事』

秋田市教育委員会編 2002 『土崎神明社の曳山行事伝承活用テキスト』

加藤助吉 1941 『土崎港町史』 秋田市役所土崎出張所

橋本宗彦 1898 『秋田沿革史大成 下』（復刻版 橋本宗彦 1973 『秋田沿革史大成 下』 加賀谷書店 所収）

進藤重記 1762 『出羽国風土略記』（進藤重記 1974 『出羽国風土略記』 歴史図書 所収）



第5図 元文年中湊古絵図（加藤1941より転載）



第6図 湊町古絵図（川口家蔵、加藤1941より転載）

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査対象地に一区画 4 m×4 mのグリッドを設定した(第7図)。グリッドの南北軸は調査区にあわせた形で任意の方向である。グリッド南北軸に直行するグリッド東西軸を設定した。グリッド南北軸に算用数字、グリッド東西軸に2文字のアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の交点で両者を組み合わせてグリッド名とした。また、グリッド杭とは別に、世界測地系に基づいた座標杭を9点設置した。各座標杭は下記のとおりである。

A : (X=-26,675.000 Y=-65,445.000)、B : (X=-26,671.000 Y=-65,445.000)

C : (X=-26,669.500 Y=-65,445.000)、D : (X=-26,677.500 Y=-65,445.000)

E : (X=-26,675.000 Y=-65,438.000)、F : (X=-26,675.000 Y=-65,419.000)

G : (X=-26,675.000 Y=-65,413.000)、H : (X=-26,675.000 Y=-65,449.000)

I : (X=-26,675.000 Y=-65,461.000)

結果として、グリッド南北軸は真北方向軸に対して6° 12′ 00″ 東偏することとなる。

調査対象地は市街地軟弱地盤で、また地下水位が高い地点であるため、調査区となる部分に自立式矢板(土留工Ⅱ型鋼矢板、L=7 m)の打ち込みを行った。調査区設定にあたっては、周辺建物への影響を考慮し、道路境界線から約2 m、宅地境界線から約3 m離れた。また調査対象地の西端に約10 m、東端に約5 mの土砂運搬作業スペースを確保した。結果として調査区は、矢板の外寸で南北に3.4 m(内寸3 m)、東西に52.8 m(内寸52.4 m)の179.52 m²(矢板内寸で157.2 m²)となった。

遺物の取り上げは、グリッド名・層位名等を記録したグリッド上げを基本とし、適宜、出土地点を記録し取り上げた。遺構平面図・断面図・土層断面図は、1/20の縮尺で作成した。遺構写真は35 mm版および6×7ブローニー版を使用し、モノクロフィルムおよびリバーサルフィルムで記録した。遺物は調査終了時で、55 cm×34 cm×15 cmのコンテナで45箱で、その他一部コンテナに収容できない木製遺物があった。遺物は洗浄・接合・注記・復元作業を行い、実測図を1/1で作成した。遺物写真は6×7ブローニー版を使用し、モノクロフィルムおよびリバーサルフィルムで撮影した。

第2節 層序

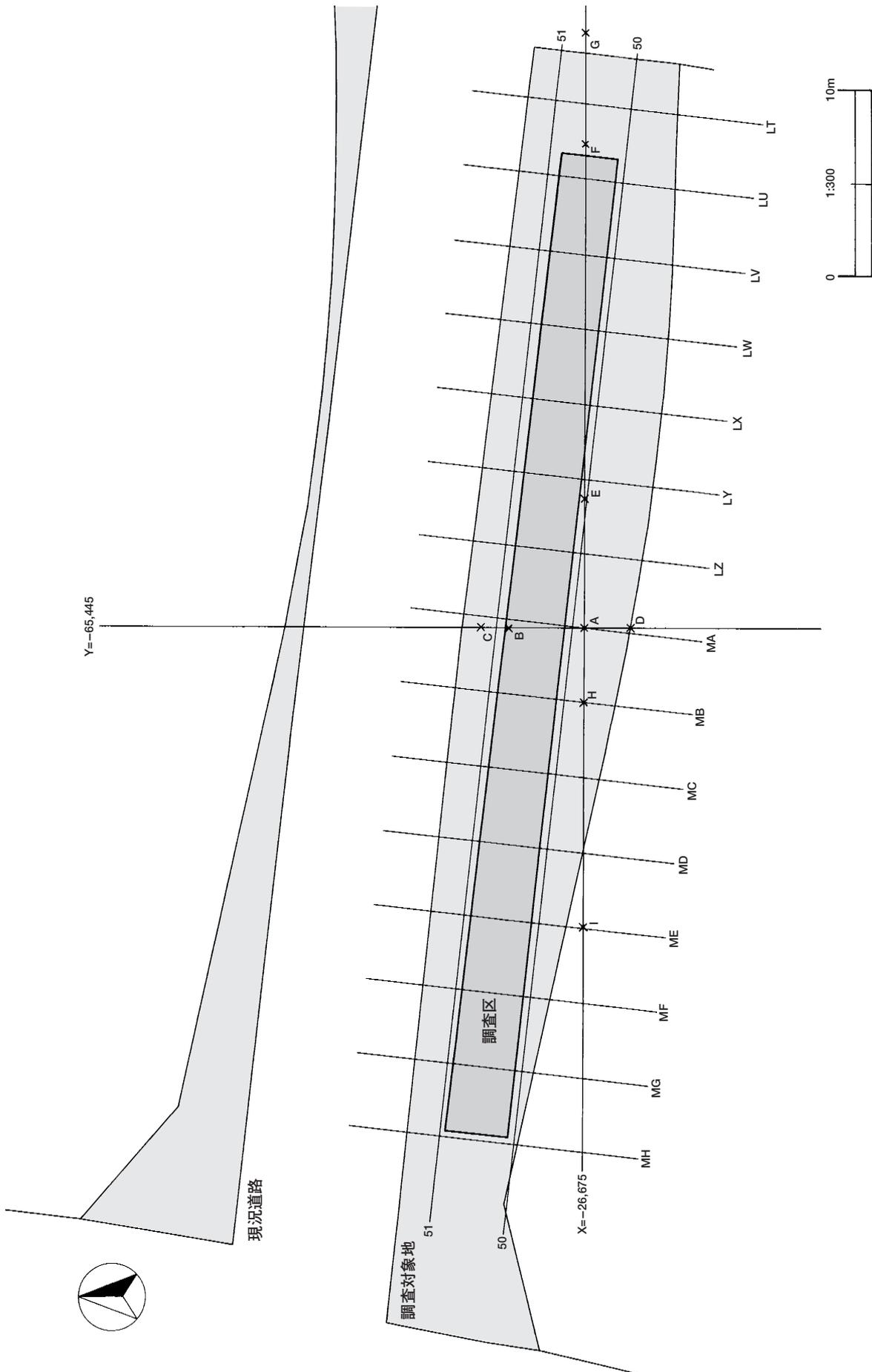
調査区の層序は下記のとおりである(第8～10図、図版6)。

第Ⅰ層(表土) 暗褐色土(10YR3/4)に碎石が混じる。また、場所によって、第Ⅰa層(暗褐色土〔10YR3/4〕に炭化物が混じる)、第Ⅰb層(黄褐色砂〔10YR5/8〕に暗褐色砂質土〔10YR3/4〕がブロック状に混じる)の層が入る。

第Ⅱ層(近代造成土) 灰黄褐色粘土(10YR4/2)に灰色粘土(5Y5/1)が混じる。明治時代以降の遺物が出土している。

第Ⅲ層(近代造成土) 黄褐色砂(10YR5/8)。また、場所によって、第Ⅲa層(黄褐色砂〔10YR5/8〕に暗褐色砂質土〔10YR3/3〕が混じる)、第Ⅲb層(黄褐色砂〔10YR5/8〕に灰黄褐色土〔10YR4/2〕が混じる)、第Ⅲc層(黄褐色砂〔10YR5/8〕ににぶい黄褐色砂〔10YR4/3〕と暗褐色砂質土〔10YR3/3〕と赤色砂〔10YR4/6〕が層状に混じる)が部分的に入る。明治時代以降の遺物が出土している。

第Ⅳ層(江戸時代の整地層①) 暗褐色砂質土(10YR3/3)。また、場所によって、第Ⅳa層(黒褐色土



第7図 グリッド配置図

〔10YR2/1〕に炭化物が多く混じる)。第Ⅳb層(黒褐色土〔10YR3/4〕に炭化物が少量混じる)、第Ⅳc層(暗褐色砂質土〔10YR3/3〕に黄褐色土〔10YR5/8〕と直径1～2cmの小礫が混じる)、第Ⅳd層(黄褐色砂〔10YR5/8〕)、第Ⅳe層(灰オリーブ色粘土〔5Y5/2〕に明黄褐色粘土〔10YR6/8〕がブロック状に混じる)が部分的に入る。江戸時代の遺構・遺物が確認された。

第Ⅴ層 (江戸時代の整地層②) オリーブ灰色砂質土(2.5GY5/1)に暗オリーブ灰色砂質土(2.5GY4/1)と暗褐色砂質土(10YR3/3)が混じる。また、場所によって、第Ⅴa層(黄褐色砂質土〔10YR5/8〕)が部分的に入る。江戸時代の遺構・遺物が確認された。

第Ⅵ層 (江戸時代の整地層③) オリーブ灰色粘土(2.5GY5/1)。また、場所によって、第Ⅵa層(黒褐色砂〔10YR3/2〕)、第Ⅵb層(灰黄褐色砂〔10YR6/2〕)、第Ⅵc層(暗褐色砂質土〔10YR3/4〕)、第Ⅵd層(褐色砂〔10YR4/4〕ににぶい黄褐色砂〔10YR5/4〕が混じる)が部分的に入る。江戸時代の遺構・遺物が確認された。

第Ⅶ層 (安土桃山時代の整地層) 暗褐色砂(10YR3/3)に直径1～10cmの礫が混じる。MA区から東側のみに確認される。安土桃山時代から江戸時代初頭の遺構・遺物が確認された。

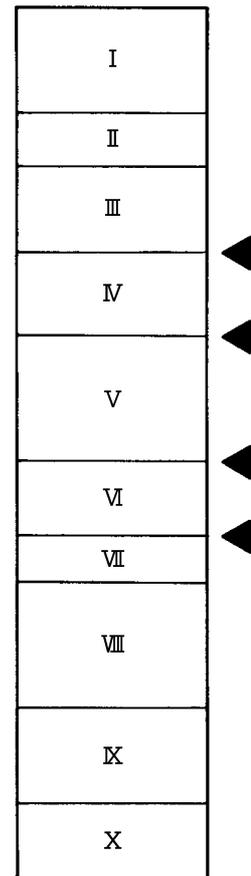
第Ⅷ層 (安土桃山時代の整地層) オリーブ灰色粘土(2.5GY5/1)と暗オリーブ灰色砂(2.5GY4/1)の互層。調査区全面に認められる。東端部のみに第Ⅷa層(灰色砂〔5Y6/1〕)がある。安土桃山時代から江戸時代初頭の遺構・遺物が確認された。

第Ⅸ層 (地山飛砂層) 褐色砂(10YR4/4)に植物遺体が混じる。自然堆積層で無遺物層である。

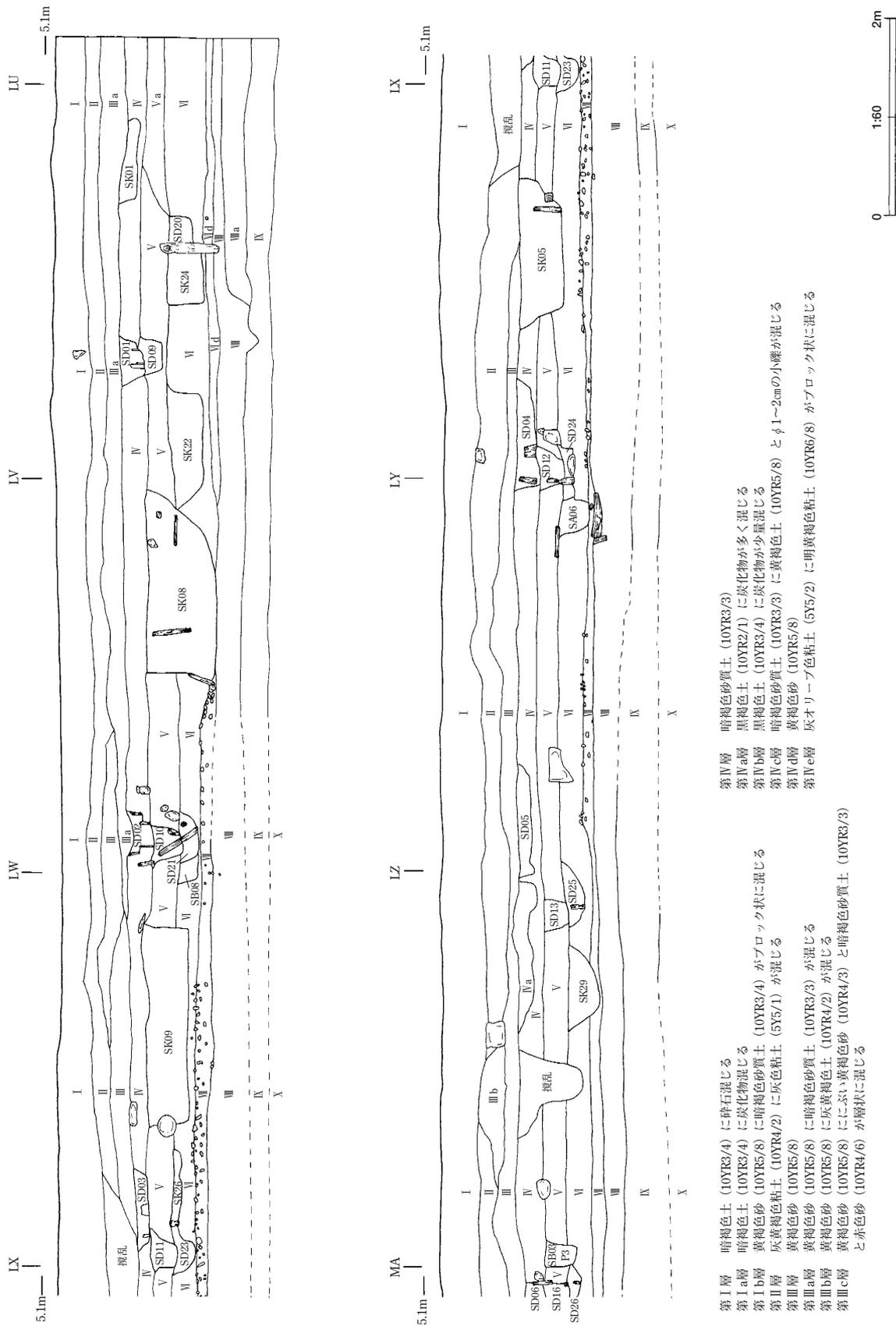
第Ⅹ層 (地山飛砂層) 灰色砂(10YR5/1)に植物遺体が混じる。自然堆積層で無遺物層である。

調査地は東から西へゆるやかに傾斜しており、西側が低くなっている。そのため、西側により多く整地層が堆積している傾向がある。

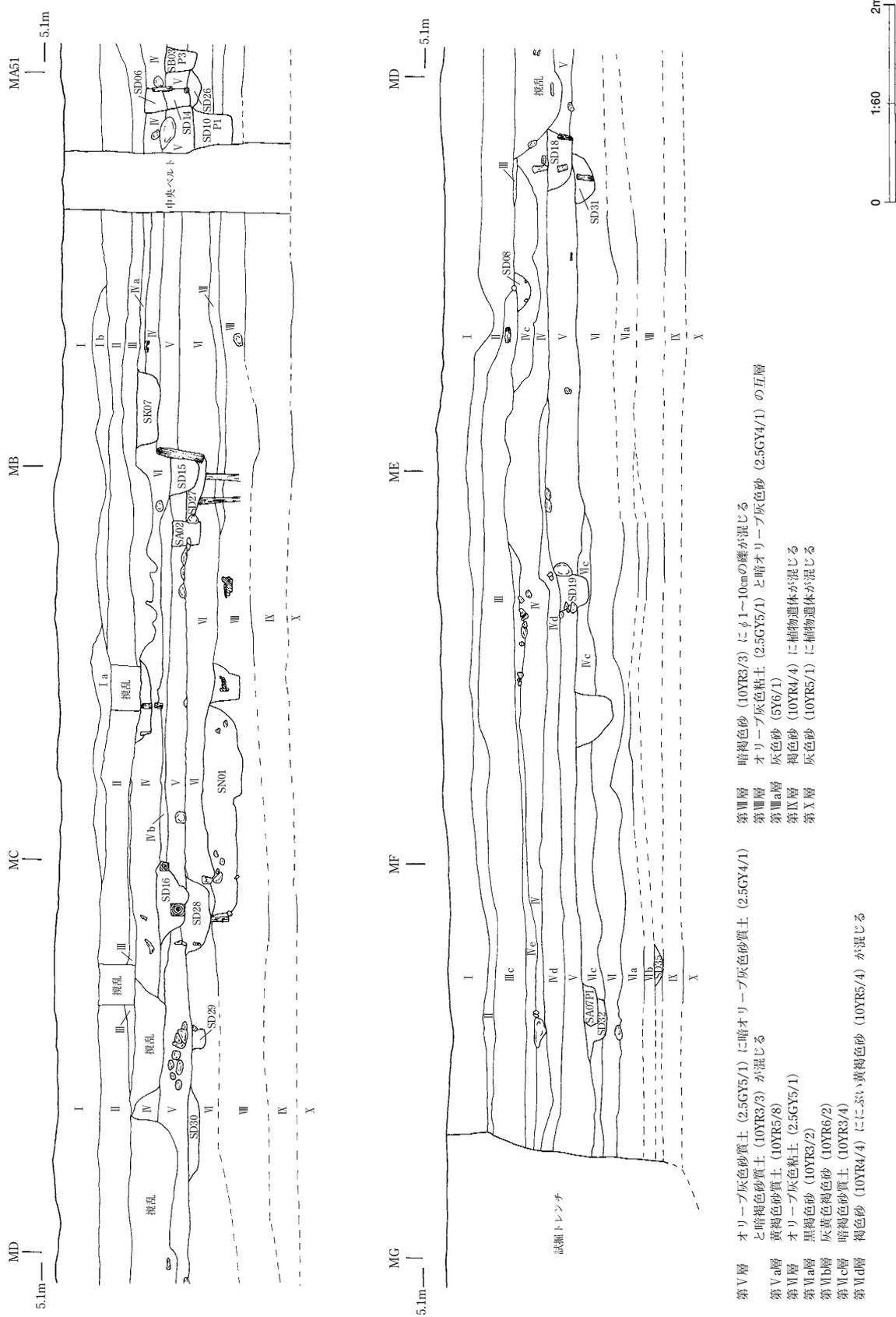
遺構確認面は、第Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ・Ⅷ層の4面で確認された。各層は人為的に造成された整地層である。調査地周辺は、軟弱地盤であるため、建物の建て替えの際等に、整地をし、盛土しているものと考えられる。中・近世の整地層(第Ⅳ～Ⅷ層)だけで、約1mの堆積がみられる。



第8図 基本層序柱状図



第9図 調査区北壁土層断面図①



第10図 調査区北壁土層断面図②

第3節 遺構と遺物

遺構は第IV、V、VI、VII・VIII層の4面で確認された(第11・12図)。以下、各層ごとに検出された遺構・遺物について述べる。

(1) 第IV層面検出の遺構・遺物

第IV層面からは、柱列跡1列(SA01)、溝跡8条(SD01～08)、井戸跡1基(SE01)、土坑7基(SK01～07)、ピット4基(Pit01～04)が検出された(第11図、図版2・9～10)。また遺物は、遺構内および整地層である第IV層から、土器・陶磁器、土製品、木製品、石製品、瓦、金属製品、銭貨が出土した。

柱列跡

1号柱列跡(第13図、図版9)

MB50区で検出された。南北方向の柱列跡で、少なくとも3基の掘り方が確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約5度東に振れている。柱間隔は北から0.6m+0.7mである。柱掘り方は、直径約25cm(P1・3)と約50cm(P2)の円形で、深さは確認面から約20cmである。いずれも柱痕跡が認められ、P1・3では直径約10cm、P2では約20cmである。P1では直径約10cmの丸材が遺存していた。陶磁器の年代より、遺構構築年代は18世紀代以降であると考えられる。

1号柱列跡出土遺物

陶磁器(第42図1、図版20)：P1掘り方出土である。肥前系磁器青磁の香炉もしくは瓶である。高台付近と内面は無釉で、外面は青磁釉と陰刻を施している。

溝跡

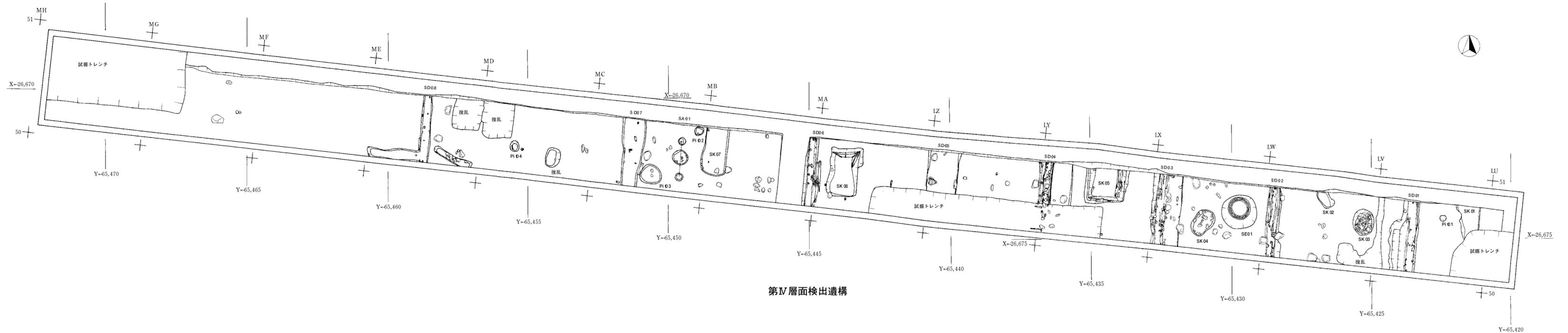
1号溝跡(第14図)

LU50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.5m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約7度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約30cm、深さは確認面から約30cmで、断面形は逆台形状を呈する。溝の側壁には板材が遺存しており、内側に杭を打ち込んで補強している。溝西側には溝構築時の掘り方と浅い皿状の窪みが確認されている。側壁板材と杭には焼け跡がある。また、側壁板材は建築部材を転用している。陶磁器の年代より、遺構廃絶期は19世紀前半と考えられる。

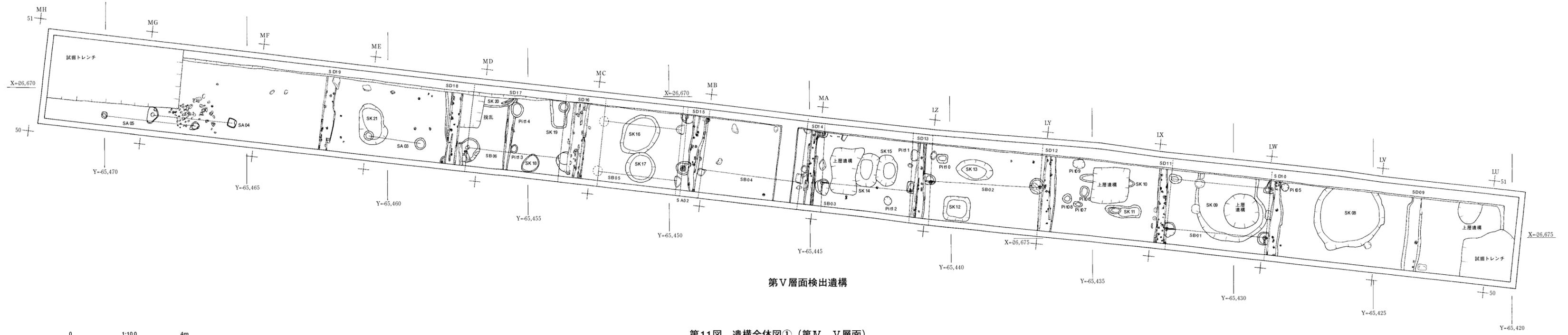
1号溝跡出土遺物

陶磁器(第42図2～4、図版20)：すべて埋土出土である。2は肥前系磁器色絵である。外面に赤色と緑色の絵具で上絵付けし、内面は口縁部に四方禪文、二重圈線を染付けている。3は肥前系磁器染付蓋で、端反碗の蓋である。つまみ内部には一重方形枠に変形字を染付けている。焼継痕がある。4は産地不明の磁器染付蓋で、端反碗の蓋である。つまみ内部には一重方形枠に変形字を染付けている。焼継痕があり、つまみ内部に「□ル」の焼継印がある。

瓦(第76図1、図版48)：1は埋土出土である。棧瓦で、暗赤褐色を呈する赤瓦である。

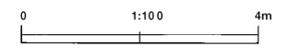


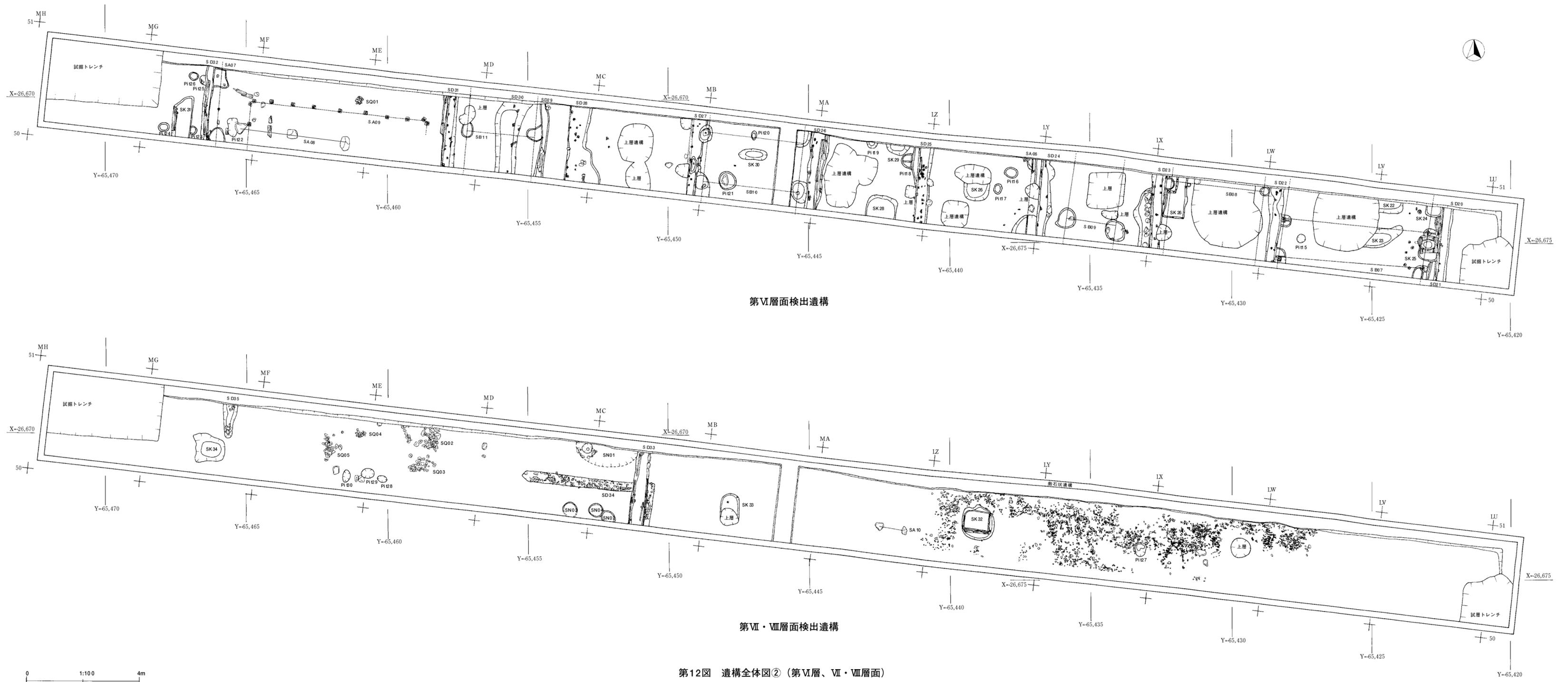
第IV層面検出遺構



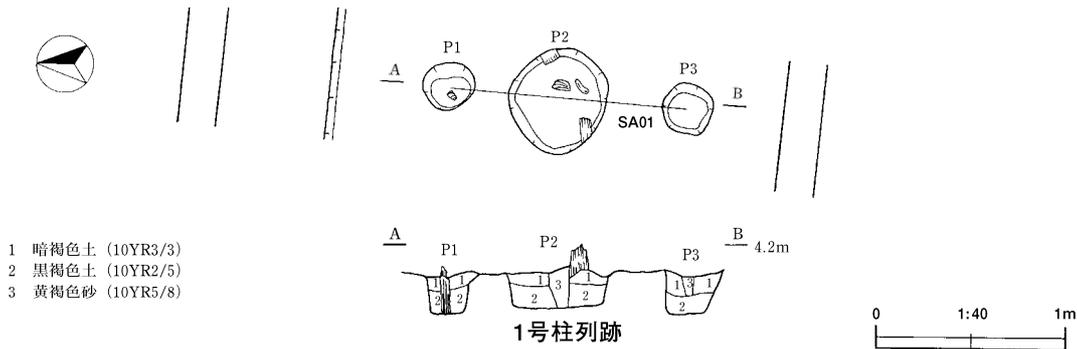
第V層面検出遺構

第11図 遺構全体図① (第IV、V層面)





第12図 遺構全体図② (第Ⅵ層、Ⅶ・Ⅷ層面)



第13図 第IV層面検出遺構 (1号柱列跡)

2号溝跡 (第14図)

LV50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.4 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約6度東へ振れている。溝は1回の作り替えが確認される。当初、溝の側壁間の幅は約40 cm、深さは確認面から約20 cmで、断面は鍋底状を呈する。作り替え後は幅約20 cm、深さ10 cmで浅い鍋底状を呈する。側壁には板材が遺存しており、内側に杭を打ち込んで補強している。側壁板材と杭には焼け跡がある。また、側壁板材には建築部材を転用している。陶磁器の年代より、遺構構築年代と廃絶年代はともに18世紀後葉～19世紀中葉と考えられる。

2号溝跡出土遺物

陶磁器 (第42図5～8、図版20) : 5・8は埋土出土、6・7は掘り方出土である。5は肥前系陶器皿である。内外面に灰釉を施し、体部下半と高台は無釉で、蛇の目釉剥ぎを施す。6は肥前系磁器染付碗である。外面に清朝風の文様、口縁部内面に雷文を染付けている。焼継痕がある。7は肥前系磁器染付碗である。外面二重網目文、内側に一重網目文と見込みに菊花文、底裏には一重方形枠に「渦福」銘を染付けている。8は産地不明の磁器染付蓋で、外面に清朝風の文様、内面に雷文風の文様を染付けている。

木製品 (第69図1・2、図版46) : すべて掘り方出土である。1は箸である。2は小型の曲物の底板である。

3号溝跡 (第14図、図版9)

LW～LX50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約7度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約20 cm、深さは確認面から約20 cmで鍋底状を呈する。側壁には板材が遺存しており、内側に杭で、外側を礫で補強している。溝東側には浅い皿状の窪みが確認される。側壁板材には焼け跡がある。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は19世紀中葉までと考えられる。

3号溝跡出土遺物

陶磁器 (第42・43図9～17、図版20・21) : すべて埋土出土である。9は寺内窯産陶器蓋である。平蓋で外面上部と内面に鉄釉を施す。10は白岩窯産陶器鉢である。外面に鉄釉を施し、外面口縁部と内面になまこ釉を施す。11は産地不明の陶器甕である。内外面に鉄釉を施し、上半部には鉄釉を二度掛けしている。体部下端と底面は無釉である。底部内面に足つきハマの重ね積みの痕跡がある。12は肥前系磁器染付碗で、見込みにコンニャク印判による五弁花を染付けている。13は肥前系磁器

染付碗で、見込みには極めて簡略化された「壽」を染付けている。14は肥前系磁器染付碗で、広東碗となる器形である。外面にねじ花文を染付けている。15は肥前系磁器染付碗で、筒形碗となる器形である。16は肥前系磁器染付小坏である。釉は乳白色を呈する藁灰釉である。17は産地不明の磁器染付蓋で、端反碗の蓋である。焼継痕がある。

土製品（第66図1、図版44）：1は埋土出土で、小型で土師質の土錘である。

木製品（第69図3・4、図版46）：すべて埋土出土である。3は箸である。4は縁が湾曲した折敷であると考えられる。表裏に赤漆、端面には黒漆が塗布されている。

4号溝跡（第14図）

LX～LY50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが1.5m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約5度東へ振れている。溝は1回の作り替えが確認される。当初は溝の側壁間の幅は約30cm、深さは確認面から約20cmで、断面は鍋底状を呈する。作り替え後は、幅約20cm、深さ約20cmで断面は鍋底状を呈する。いずれも側壁には板材が遺存しており、当初は内側に、作り替え後は内側と外側に杭を打ち込み補強している。溝底面には円礫が確認された。溝東側には浅い皿状の窪みが確認される。側壁板材と杭には焼け跡がある。陶磁器の年代より、遺構構築年代と廃絶年代は、18世紀後半～19世紀中葉と考えられる。

4号溝跡出土遺物

土器・陶磁器（第43・44図18～25、図版22）：18～20、24・25は埋土出土、21～23は掘り方出土である。18は産地不明の陶器播鉢である。19は肥前系磁器染付碗で、菊と氷裂文を染付けている。20は肥前系磁器青磁碗で、外面青磁釉、内面口縁部に四方襷文を染付けている。21は肥前系磁器染付皿で、外面に唐草文、内面に草花文を染付けている。22は肥前系磁器染付瓶で、外面に蛸唐草文を染付けている。23は産地不明の磁器戸車である。24はかわらけ皿で、型押し成形の非ロクロ製の手づくねである。内外面口縁部に横方向のナデ、内面底部に不定方向のナデがみられる。25は素焼き土師質の焙烙の取手部分である。穿孔がある。

土製品（第66図2、図版44）：2は掘り方出土で、小型で土師質の土錘である。

木製品（第69図5、図版46）：5は掘り方出土で、不明木製品である。小型の円盤状に加工され、中央に穿孔がある。

金属製品（第77図1、図版49）：1は埋土出土で、真鍮製の煙管吸口である。IV～V期に該当する（古泉1987）。

5号溝跡（第14図、図版9）

LY50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが1.5m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約4度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約20cm、深さは確認面から約20cmで、断面はU字形を呈する。側壁に板材は遺存していなかった。溝東側には浅い皿状の窪みが確認される。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀以降と考えられる。

5号溝跡出土遺物

陶磁器（第44図26・27、図版22）：すべて埋土出土である。26は産地不明の陶器碗である。口縁部内外面に銅緑釉を施す。27は肥前系磁器青磁香炉である。外面と口縁部内面に青磁釉を施し、高台

付近と高台内、内面体部下半は無釉である。見込みに砂状付着物がみられる。高台内に「九口」の墨書が認められる。

銭貨(第81図1、図版51)：1は埋土出土で、銅銭の寛永通寶である。銭文の書体等から新寛永(初鑄1697年)の分類に該当する。

6号溝跡(第14図、図版9)

LZ50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.4 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約6度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約20 cm、深さは確認面から約40 cmで、断面は深い鍋底状を呈する。側壁に板材が遺存しており、内側に杭を打ち込み補強している。また東側側壁にはさらに板材を面的に敷き補強している。側壁板材には焼け跡がある。また、側壁板材は建築部材を転用している。陶磁器の年代より、遺構構築年代と廃絶年代は19世紀前半と考えられる。

6号溝跡出土遺物

陶磁器(第44図28～30、図版22・23)：28・30は埋土出土、29は掘り方出土である。28は瀬戸美濃系磁器染付碗である。29は肥前系磁器染付碗である。内外面口縁部に雷文を染付けている。30は肥前系磁器染付皿で、有田産である。外面に唐草文、内面に草花、裏底に「大明成化年製」銘を染付けている。また、高台内にハリ支え痕があり、焼継痕がある。陶磁器の年代は大部分が19世紀前半であるが、30のみ18世紀前半でありやや年代が古い。これは、有田産の大皿精製品で焼継痕があることなどから、伝製品であると考えられる。

土製品(第66図3、図版44)：3は掘り方出土で、小型で土師質の土錘である。

木製品(第69図6・7、図版46)：すべて埋土出土である。6は不明木製品である。先端を斜めに加工し、中央に穿孔している。7は曲物である。底板があり、桜皮の綴じ皮が遺存している。

瓦(第76図2、図版48)：2は埋土出土である。棧瓦で、灰色を呈するいぶし瓦である。釘穴が1カ所認められる。

金属製品(第77図2、図版49)：2は埋土出土で、真鍮製の煙管吸口である。IV～V期に該当する(古泉1987)。小口には羅宇の木質部が遺存している。

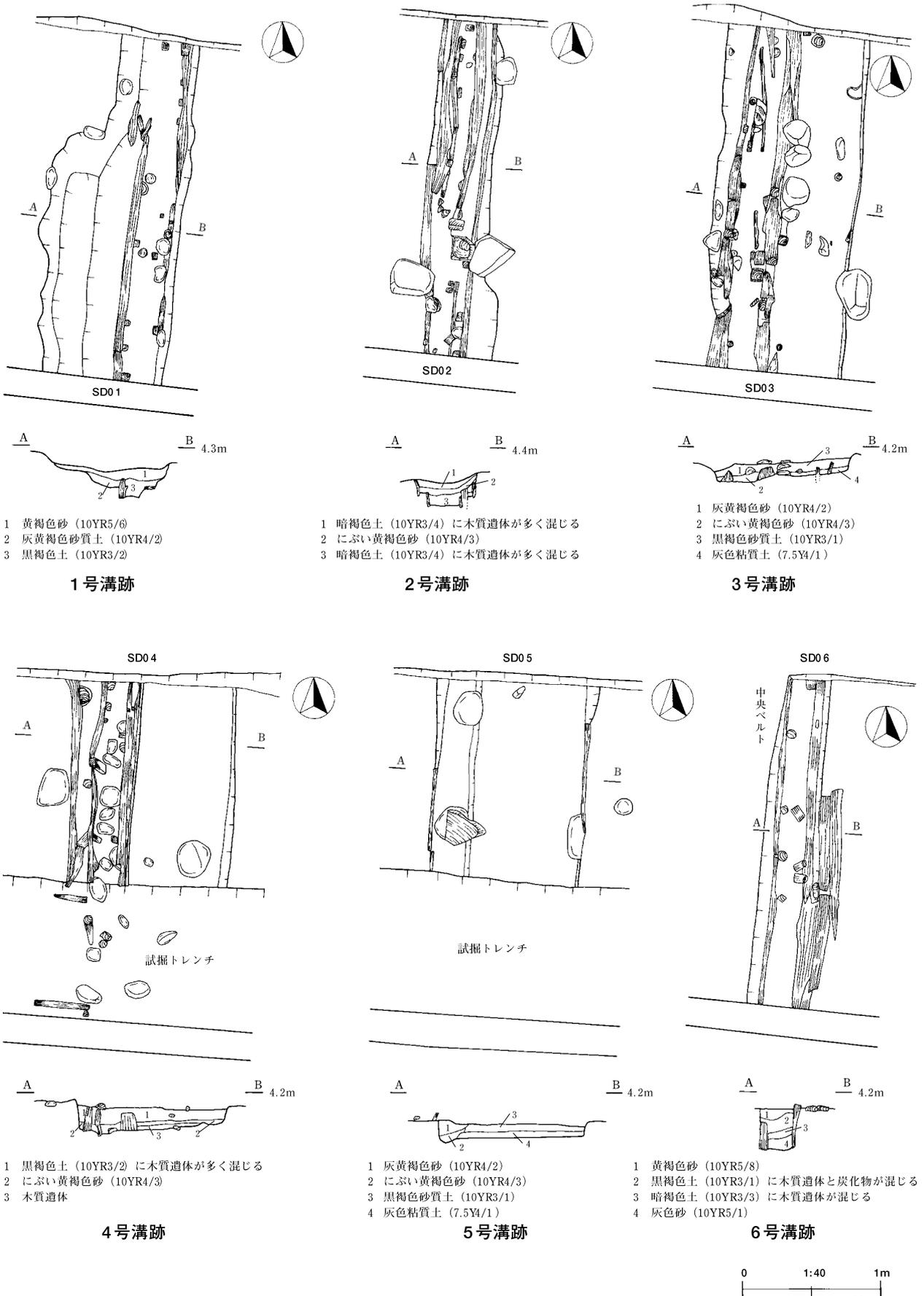
7号溝跡(第15図、図版9)

MB50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.4 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約6度東へ振れている。明確な溝の側壁が確認されなかったが、1・3・4・5溝跡のように、溝の外側に浅い皿状の窪みが付随する構造であると考えられる。全体で幅約70～80 cm、深さは確認面から約20 cmで、断面は鍋底状を呈する。所々に側壁の板材を補強したと考えられる杭が確認される。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀代と考えられる。

7号溝跡出土遺物

陶磁器(第44図31、図版23)：31は埋土出土である。肥前系陶器刷毛目鉢である。内外面全面に鉄釉を施し、内面に白化粧土で波状の刷毛目文を描く。

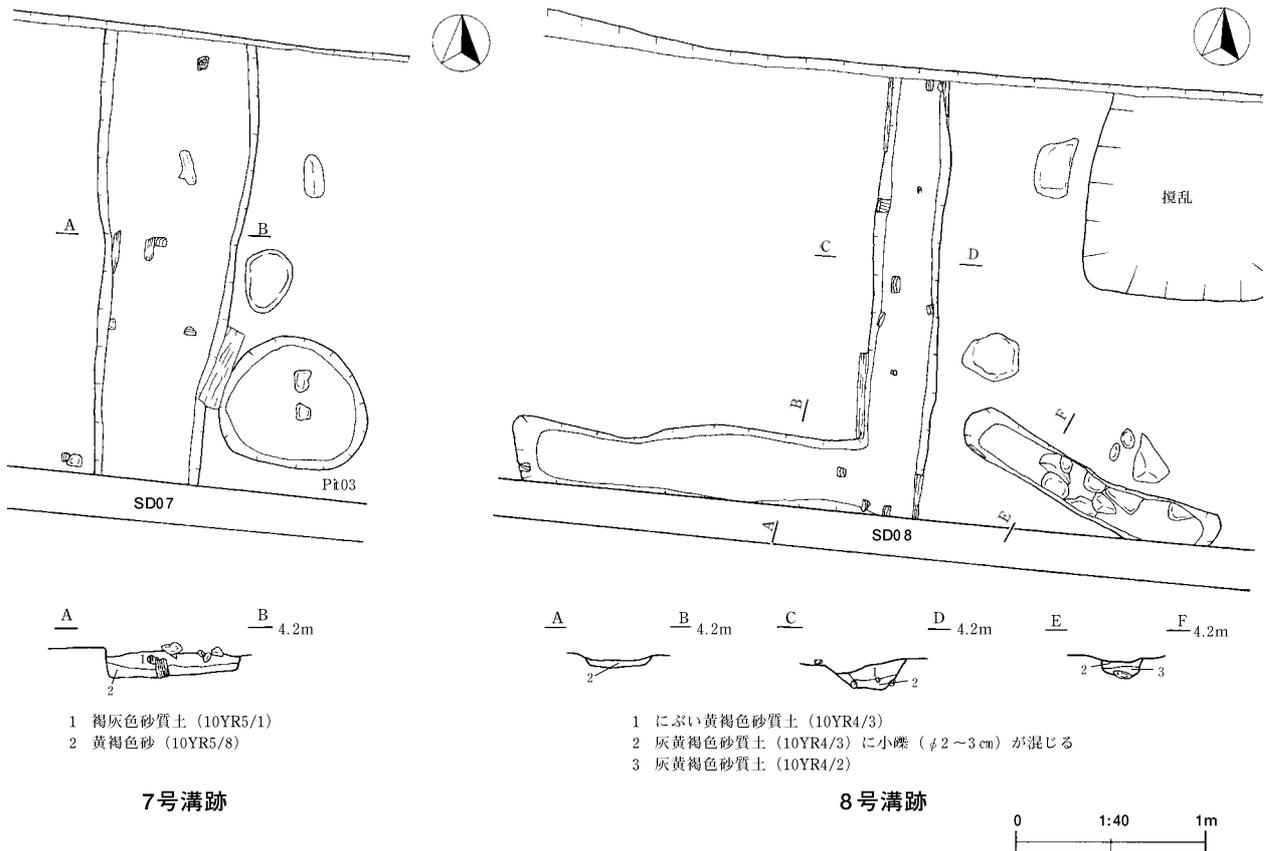
第3章 調査の方法と成果
 (1) 第IV層面



第14図 第IV層面検出遺構 (1~6号溝跡)

8号溝跡 (第15図、図版10)

MD～ME区で検出された。3条の溝跡からなり、南北方向が1条、その南端から東西方向の溝が2条取り付く形となっている。南北方向は長さが2.4m確認され、調査区外へ延びる。東側は長さが1.8m、西側は長さが1.5m確認される。南北方向の溝は、北で約5度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約20～40cm、深さは確認面から約5～20cmで、断面はU字状もしくは皿状を呈する。側壁の板材は遺存していないが、板材を補強したと考えられる杭が確認される。



第15図 第IV層面検出遺構 (7・8号溝跡)

井戸跡

1号井戸跡 (第16図、図版10)

LW50区で検出された。掘り方平面は円形で、直径約1.2m、深さは確認面から約2mである。掘り方の中央よりやや北側に円形の井側を組んでいる。井側は直径約70cmの底を抜いた桶を逆さにして3段積み重ねている。桶は長さ70cm、幅10～15cmの板材を15～16枚組み合わせたものを使用し、最下層の桶の先端は先鋭に加工されており、掘り方より深く打ち込まれている。中段と最下層の桶には竹製のタガが遺存していた。陶磁器の年代より、遺構構築年代は18世紀後半で、廃絶年代は19世紀後半以降と考えられる。

1号井戸跡出土遺物

陶磁器 (第44図32～34、図版23) : 32・33は埋土出土、34は掘り方出土である。32は瀬戸美濃系磁

第3章 調査の方法と成果
 (1) 第IV層面

器染付碗である。西洋コバルトを用いている。33は瀬戸美濃系磁器染付輪花皿である。西洋コバルトを用いている。34は肥前系磁器染付皿である。蛇ノ目凹形高台となっている。

瓦 (第76図3、図版48) : 3は掘り方出土である。棧瓦で、灰色を呈するいぶし瓦である。「小二」の刻線が認められる。

土坑

1号土坑 (第17図)

LT~LU50区で検出された。平面は不整形で、試掘調査トレンチによって切られている。深さは確認面から約20cmである。底面は平坦である。

1号土坑出土遺物

陶磁器 (第44図35、図版23) : 埋土出土である。産地不明の陶器播鉢である。

2号土坑 (第17図)

LV50区で検出された。平面は楕円形で、長軸約70cm、短軸約40cm、深さは確認面から約10cmである。壁は南側では緩やかに立ち上がる。陶磁器の年代より、遺構の廃絶年代は18世紀後半~19世紀前半と考えられる。

2号土坑出土遺物

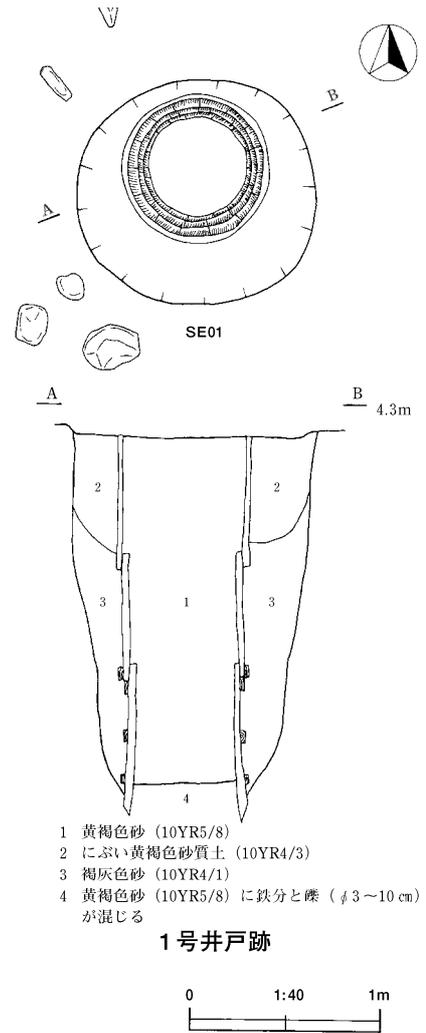
陶磁器 (第45図36、図版23) : 36は埋土出土である。肥前系磁器染付皿で、外面に唐草文を染め付ける。二次加熱を受けている。

3号土坑 (第17図)

LV50区で検出された。平面は円形で、長軸約90cm、短軸約70cm、深さは確認面から約25cmである。壁は緩やかに立ち上がる。検出状況では直径約2~10cmの小礫が集中した。土坑底面には直径約10~20cm程度の礫が確認された。

3号土坑出土遺物

陶磁器 (第45図37・38、図版23) : すべて遺構底面出土である。37は白岩窯産陶器片口である。外面鉄釉を施し、その上から内面全面と外面口縁部になまこ釉を施す。高台付近は無釉である。内面見込みに足つきハマの積み重ね痕跡がある。二次加熱を受けている。38は産地不明の陶器壺である。内外面鉄釉を施し、外面体部上半に鉄釉を二度掛けしている。二次加熱を受けている。



第16図 第IV層面検出遺構 (1号井戸跡)

4号土坑 (第17図、図版10)

LW50区で検出された。平面は楕円形で、長軸約1 m、短軸約70 cm、深さは確認面から約10 cmである。壁はやや急にたちあがり、土坑底面および埋土中に礫が確認された。

4号土坑出土遺物

木製品 (第69図8、図版46) : 8は下駄である。小型の一木下駄で、丸型の削り下駄である。

石製品 (第74図1、図版48) : 1は埋土出土で、灰色の凝灰岩製の砥石である。

5号土坑 (第17図、図版10)

LX50区で検出された。平面は方形と考えられ、北側は調査区外へ延びる。東西方向で幅約1.5 m、深さは確認面から約50 cmである。壁に枳板と考えられる板材が遺存しており、焼け跡がある。底面は平坦である。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は19世紀前半と考えられる。

5号土坑出土遺物

陶磁器 (第45図39・40、図版23・24) : すべて埋土出土である。39は肥前系磁器染付碗で、内面に鷺文を染付けている。また内面には足つきハマの積み重ね痕跡がある。40は肥前系磁器色絵皿で、内面に赤・緑・金色の絵具で上絵付けし、高台内に「富貴長春」銘を染付けている。蛇ノ目凹形高台で、有田産である。

木製品 (第69図9、図版46) : 9は埋土出土で、差菌下駄で、角型の陰卯下駄である。

6号土坑 (第17図、図版10)

LZ50区で検出された。平面は方形で、長軸約1.7 m、短軸約1 m、深さは確認面から約50 cmである。壁はやや急にたちあがり、底面は中央がやや深くなる。北側の壁に板材が遺存しており、板材は幅約10 cmの横木を幅3 cm程度の棒状の材で固定している。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は19世紀前半と考えられる。

6号土坑出土遺物

陶磁器 (第45図41、図版24) : 埋土出土である。肥前系磁器碗で、内外面に雷文を染付けている。端反碗の器形と考えられる。

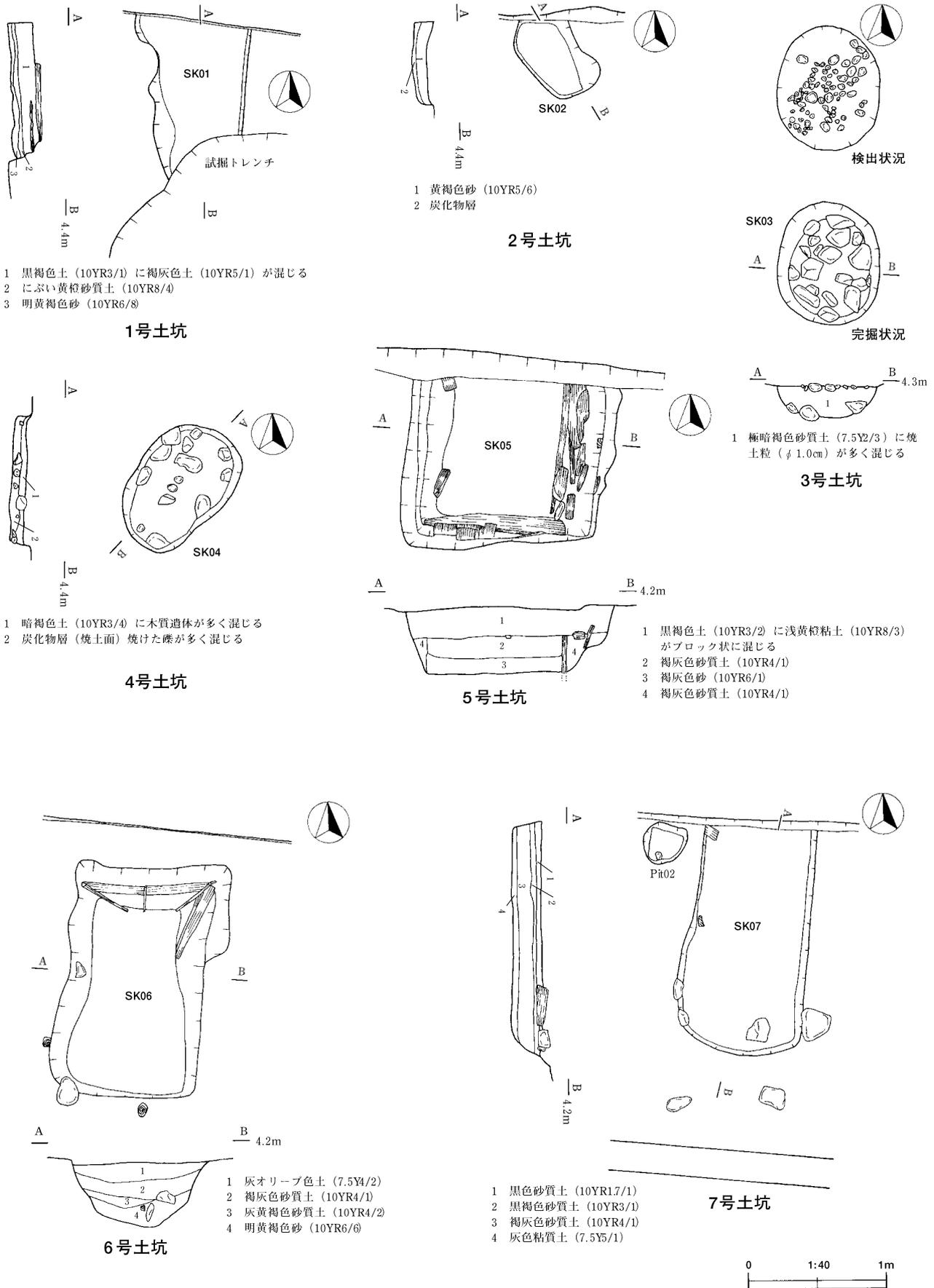
7号土坑 (第17図、図版10)

MA50区で検出された。平面は隅丸方形と考えられ、北側は調査区外へ延びる。長軸1.7 m以上、短軸約90 cm、深さは確認面から約25 cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平らである。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀後半～19世紀中葉と考えられる。

7号土坑出土遺物

土器・陶磁器 (第45図42～46、図版24) : すべて埋土出土である。42は寺内窯産陶器蓋であり、灰釉に白化粧土で刷毛目を施し、鉄絵で梅を描く。43は肥前系磁器染付碗で、端反碗の器形である。44は肥前系磁器染付皿で、外面に唐草文を染付けている。45は肥前系磁器染付小坏である。46は素焼き土師質の焙烙の取手部分である。取手には穿孔がある。

第3章 調査の方法と成果
 (1) 第IV層面



第17図 第IV層面検出遺構 (1~7号土坑)

ピット03出土遺物

土製品(第66図4・5、図版44)：すべて埋土出土である。4・5は土師質の土錘である。4は小型、5は中型である。

銭貨(第81図2、図版51)：2は埋土出土で、銅銭の寛永通寶である。銭文の書体等から古寛永(初鑄1636年)の分類に該当する。

IV層出土遺物

土器・陶磁器(第46～49図47～81、図版24～27)

〔陶器〕47～57は陶器である。

(碗類)47は産地不明の灰釉陶器碗で、内外面口縁部に銅緑釉を施し、外面体部下半は無釉である。

(蓋類)48～51は寺内窯産陶器蓋である。48は外面に鉄釉を施す。49は灰釉に簡描である。50は灰釉に呉須で絵付けしている。51は平蓋の器形で、鉄釉を施す。

(瓶類)52は産地不明陶器の瓶か茶入れで、内面は全面に鉄釉、外面に藁灰釉を施す。53は寺内窯産陶器土瓶で、化粧掛け後、銅・鉄釉で山水文を絵付けしている。

(鉢類)54は産地不明の陶器輪花鉢で、灰釉を内外面に施し、口縁部に銅緑釉を施す。胎土は硬質である。55は産地不明の陶器片口で、外面体部下端に下方からのケズリ調整を施している。56は産地不明の陶器擂鉢で、内外面全面に鉄釉を施している。

(甕類)57は産地不明の陶器甕で、内外面全面に灰釉を施している。

〔磁器〕58～77は磁器である。

(碗類)58～61・65は肥前系磁器染付碗、62～64は瀬戸美濃系磁器染付碗である。58は丸碗で、外面にコンニャク印判で文様を染付している。59は丸碗で、見込みに手書きで簡略化された五弁花を染付けている。60は丸碗で、外面二重網目文、内面は極めて簡略化された菊と一重網目文を染付けている。61は端反碗で、見込みに崩れた「寿」字文を染付けている。62～64は端反碗である。65は西洋コバルトで外面蛸唐草、内面雷文を染付けている。

(皿類)66は肥前系磁器輪花皿で、口紅を施している。67は肥前系磁器紅皿で、型押し成形されており、外面は口縁部以外は露胎である。

(鉢類)68は肥前系磁器染付鉢で、角鉢の器形である。焼継痕がある。

(蓋類)69～70・72は肥前系磁器染付蓋で、71は瀬戸美濃系磁器染付蓋である。69はつまみ内に「大明年製」銘、70は裏側天井に「寿」字文を染付けている。

(壺類)73は肥前系磁器染付油壺である。梅樹文を染付けている。

(その他)74は肥前系磁器白磁餌入である。75・76は肥前系磁器色絵人形で、猫形のものである。75は色絵で、黒色と緑色の絵具で上絵付けしてある。76は二次加熱を受けており、色絵の種類は不明である。77は戸車である。

〔土器〕78～81は土器である。

(灯火具)78～80は素焼き土師質の灯火具ひょうそくで、いずれも無釉である。80は取手付きである。いずれも灯芯用の突起部分を中心に煤状付着物がみられる。

(土風炉) 81は素焼き土師質の土風炉である。口縁部には煤状付着物がみられる。

陶磁器の年代は、おおむね18世紀後半～19世紀前半であり、第IV層はこの時期に形成された整地層と考えられる。

土製品 (第66図6～13、図版44)

6～11は小型で土師質の土錘である。12・13は中型で土師質の土錘である。

木製品 (第70図10～17、図版46)

10は箸である。11は小型の曲物底板で、1カ所長方形の削り部分がある。12は折敷である。判読不明の焼き印がみられ、周囲に5カ所の小さな穿孔がある。13は大型曲物の底板である。14は一木下駄で、丸形の削り下駄である。歯がないタイプである。15は栓である。16は折敷で、「北」の墨書が認められる。17は不明木製品で、頭部を斜めに加工し、抉りがみられる。抉りに穿孔が施されている。

石製品 (第74図2、図版48)

2は粘板岩製の硯である。側面と裏面に刻書がみられ、下端が破損している。

金属製品 (第77図3～12、図版49)

3は真鍮製の煙管雁首でV期、4・5は真鍮製の煙管吸口でIV～V期に該当する(古泉1987)。5は陰刻の文様が施されている。6・7は簪である。6は真鍮製で先端が欠損している。7は銅製である。8～11は鉄製の釘である。頭部の形態から8・9は折釘、10は断面が扁平で、皆折釘である。12は不明金属製品である。銅製で、頭部に方形の穴が一カ所、胴部に円形の穴が二カ所あり、下端は中空になっている。

瓦 (第76図4・5、図版49)

4は棧瓦で、灰色を呈するいぶし瓦である。釘穴が一カ所認められる。5は棧瓦で、暗赤褐色を呈する赤瓦である。

銭貨 (第81図3～8、図版51)

すべて銅銭の寛永通寶である。銭文の書体等から、3は古寛永(初鑄1636年)、4～5は新寛永(初鑄1697年)、6は新寛永の「秋田川尻銭」(1738年より1745年にかけて鑄銭)、7は新寛永の「文銭」(初鑄1668年)、8は新寛永の「背二十一波銭」(初鑄1768年)の分類に該当する。

(2) 第V層面検出の遺構・遺物

第V層面からは、柱列跡4列(SA02～05)、建物跡6棟(SB01～06)、溝跡11条(SD09～19)、土坑14基(SK08～21)、ピット10基(Pit05～14)が検出された(第11図、図版3・11～13)。遺物は、遺構内および第V層から、土器・陶磁器、土製品、木製品、石製品、金属製品、銭貨が出土した。

柱列跡

2号柱列跡(第18図、図版11)

MB50区で検出された。南北方向の柱列跡で、少なくとも2基の掘り方が確認され、調査区外へ延びている。方向は北で約4度東に振れている。柱間隔は1.8mである。柱掘り方は直径約50cmの円形で、深さは確認面から約35～40cmである。柱材が遺存しており、P1では一辺約12cm、P2では一辺約15cmの角材である。掘り方埋土には礫を入れ、柱を固定している。

2号柱列跡出土遺物

銭貨(第81図9、図版51)：9はP1の掘り方出土で、銅銭の寛永通寶である。銭文の書体等から、新寛永(初鑄1697年)の分類に該当する。

3号柱列跡(第18図、図版11)

MD50区で検出された。東西方向の柱列跡で、2基の掘り方からなる。方向は西で約8度北へ振れている。柱間隔は1.9mである。柱掘り方は直径約35～40cmの円形で、深さは確認面から約35～40cmである。柱痕跡が残されており、直径約10～12cmである。

4号柱列跡(第18図、図版12)

MF50区で検出された。東西方向の柱列跡で、2基の掘り方からなる。方向は西で約8度北へ振れている。柱間隔は2.7mである。柱掘り方はP1は直径約30cmの方形、P2は直径約40～50cmの不定形である。深さは確認面から約35～40cmである。すべての柱掘り方で柱材の抜き取りが行われている。陶磁器の年代より、遺構構築年代は18世紀前半と考えられる。

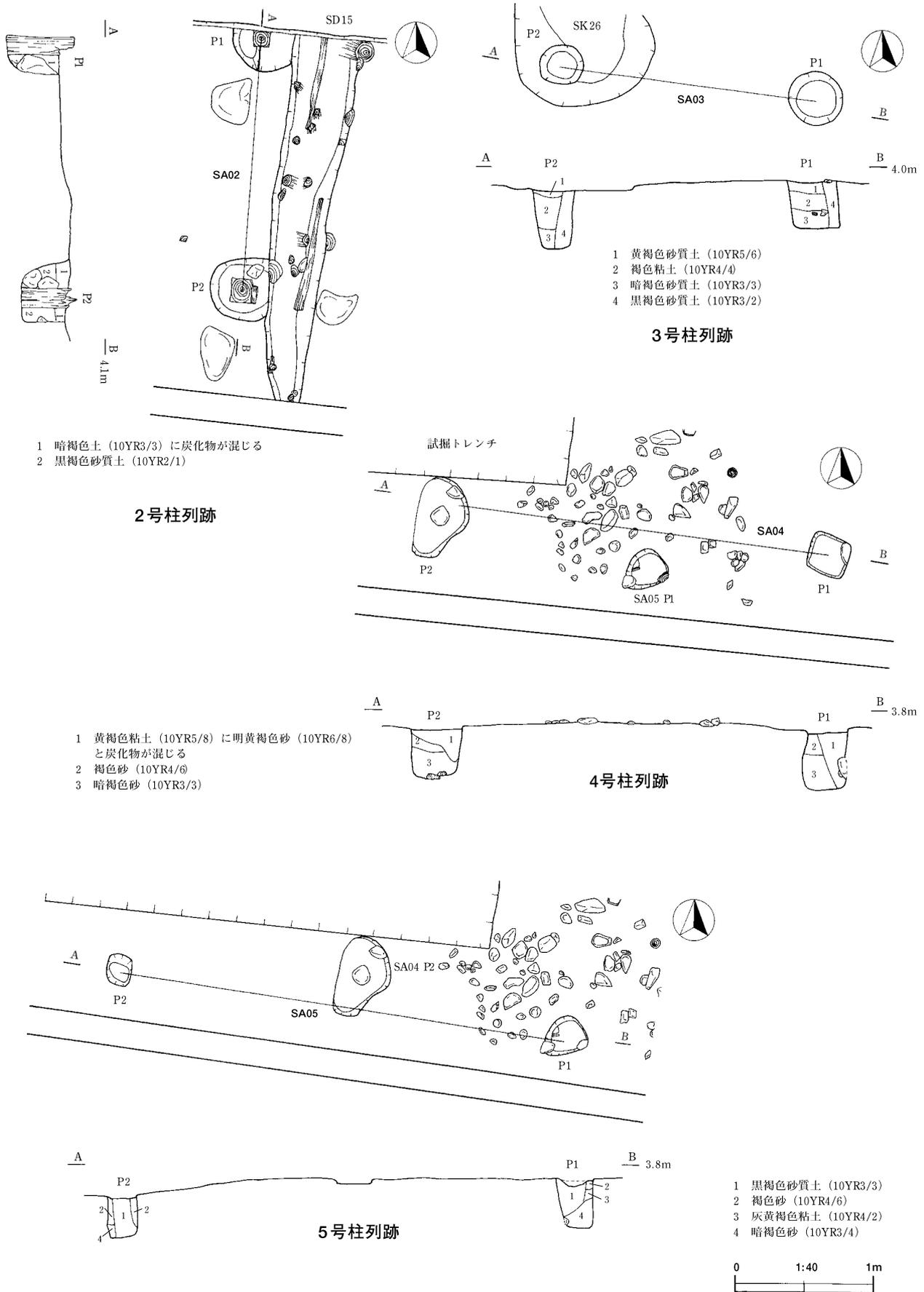
4号柱列跡出土遺物

陶磁器(第50図82、図版28)：82は掘り方出土である。肥前系磁器染付皿である。

5号柱列跡(第18図、図版12)

MF～MG50区で検出された。東西方向の柱列跡で、2基の掘り方からなる。方向は西で約9度北へ振れている。柱間隔は3.3mである。柱掘り方は直径約20～30cmの円形で、深さは確認面から約30～35cmである。すべての柱掘り方で柱材の抜き取りが行われている。

第3章 調査の方法と成果
 (2) 第V層面



第18図 第V層面検出遺構 (2~5柱列跡)

建物跡

1号建物跡 (第19図、図版12)

10・11号溝跡間のLW50区で検出された。南北棟の掘立柱建物跡である。少なくとも4基の掘り方が確認され、梁間1間(3.5m)、桁行1間以上(…+1.8m+…)で、調査区外へ延びる。建物方位は桁行が北で約8度東へ振れている。柱掘り方は、直径約30～45cmの円形または楕円形で、深さは確認面から約30～45cmである。柱材が遺存しており、直径約14～16cmの丸材である。9号土坑と10・11号溝跡と重複し、10・11号溝跡より古く、9号土坑との切り合い関係はない。陶磁器の年代より、遺構構築年代は18世紀代と考えられる。

1号建物跡出土遺物

土器・陶磁器(第50図83・84、図版28)：すべてP2掘り方出土である。83は肥前系磁器白磁皿で、蛇ノ目釉剥ぎを施し、高台付近は無釉である。84は素焼き土師質の灯火具で、有脚ひょうそくである。無釉である。灯芯の突起部分付近と口縁部内面に煤状付着物がみられ、脚部には釘穴がある。

2号建物跡 (第19図、図版12)

12・13号溝跡間のLY50区で検出された。南北棟の掘立柱建物跡である。少なくとも2基の掘り方が確認され、梁間1間(3.9m)、桁行1間以上で、調査区外へ延びる。建物方位は桁行が北で約6度東へ振れている。柱掘り方は、直径約35～55cmの円形または楕円形で、深さは確認面から約25～50cmである。柱材が遺存しており、直径約10cmの丸材である。12・13号溝跡、12・13号土坑と重複し、12・13号溝跡より古く、12・13号土坑との切り合い関係はない。陶磁器の年代より、遺構構築年代は18世紀前半と考えられる。

2号建物跡出土遺物

陶磁器(第50図85～87、図版28)：すべて掘り方出土で、85・87はP2出土、86はP1出土である。85は肥前系陶器鉢で、外面口縁部に薄い銅緑釉、内面は素地に白色化粧土で文様を描き、その上から口縁部に銅緑釉を施す。86は肥前系磁器染付碗で、外面に氷裂文を染付けている。87は肥前系磁器青磁香炉で、外面と口縁部内面に青磁釉を施し、内面体部下半は無釉である。

木製品(第71図18、図版47)：18はP1掘り方出土で、独楽である。中心を抉っている。

金属製品(第78図13、図版50)：13はP1の掘り方出土で、鉄製の折釘である。

銭貨(第81図10、図版51)：10はP2の掘り方出土で、真鍮製の雁首銭である。

3号建物跡 (第20図、図版12)

13・14号溝跡間のLZ50区で検出された。南北棟の掘立柱建物跡である。少なくとも3基の掘り方が確認され、梁間1間(3.1m)、桁行1間以上(…+1.8m+…)で、調査区外へ延びる。建物方位は桁行が北で約7度東へ振れている。柱掘り方は、直径約40～50cmの楕円形もしくは隅丸方形で、深さは確認面から約30～40cmである。柱材が遺存しており、P1・3は一辺約10～12cmの角材、P2は北側の一辺を約12cmに直線状に加工しているが、他は丸材のまま使用されている。また、P2では掘り方底部に扁平な礫が据えられている。13・14号溝跡、14・15号土坑、ピット11・12と重複するが、13・14号溝跡より古く、その他の遺構との切り合い関係はない。陶磁器の年代より、遺構構築年

代は18世紀後半と考えられる。

3号建物跡出土遺物

陶磁器（第50図88、図版28）：88はP1の掘り方出土で、肥前系磁器白磁紅皿である。型押し成形されており、外面体部下半は無釉である。

金属製品（第78図14、図版50）：14はP2の掘り方出土で、銅製の皿である。口縁部内外面に煤状付着物がみられる。

4号建物跡（第20図、図版12）

14・15号溝跡間のMA50区で検出された。南北棟の礎石柱建物跡である。少なくとも3基の礎石が確認され、梁間1間（3.5m）、桁行1間以上（…+1.8m+…）で、調査区外へ延びる。建物方位は桁行が北で約9度東へ振れている。礎石は、直径約20～30cmの扁平な礫で、礎石下には掘り方などは確認されなかった。

5号建物跡（第21図、図版13）

15・16号溝跡間のMB50区で検出された。南北棟の礎石柱建物跡である。少なくとも2基の礎石が確認され、梁間1間、桁行1間以上（…+1.8m+…）で、調査区外へ延びる。建物方位は桁行が北で約6度東へ振れている。礎石は、直径約30～40cmの扁平な礫で、礎石下には掘り方などは確認されなかった。西側の礎石は後世に移動したものと考えられる。16・17号土坑と重複するが、切り合い関係はない。

5号建物跡出土遺物

石製品（第74図3、図版48）：3はS2の底面出土で、白色の泥岩製の基石である。

6号建物跡（第21図、図版13）

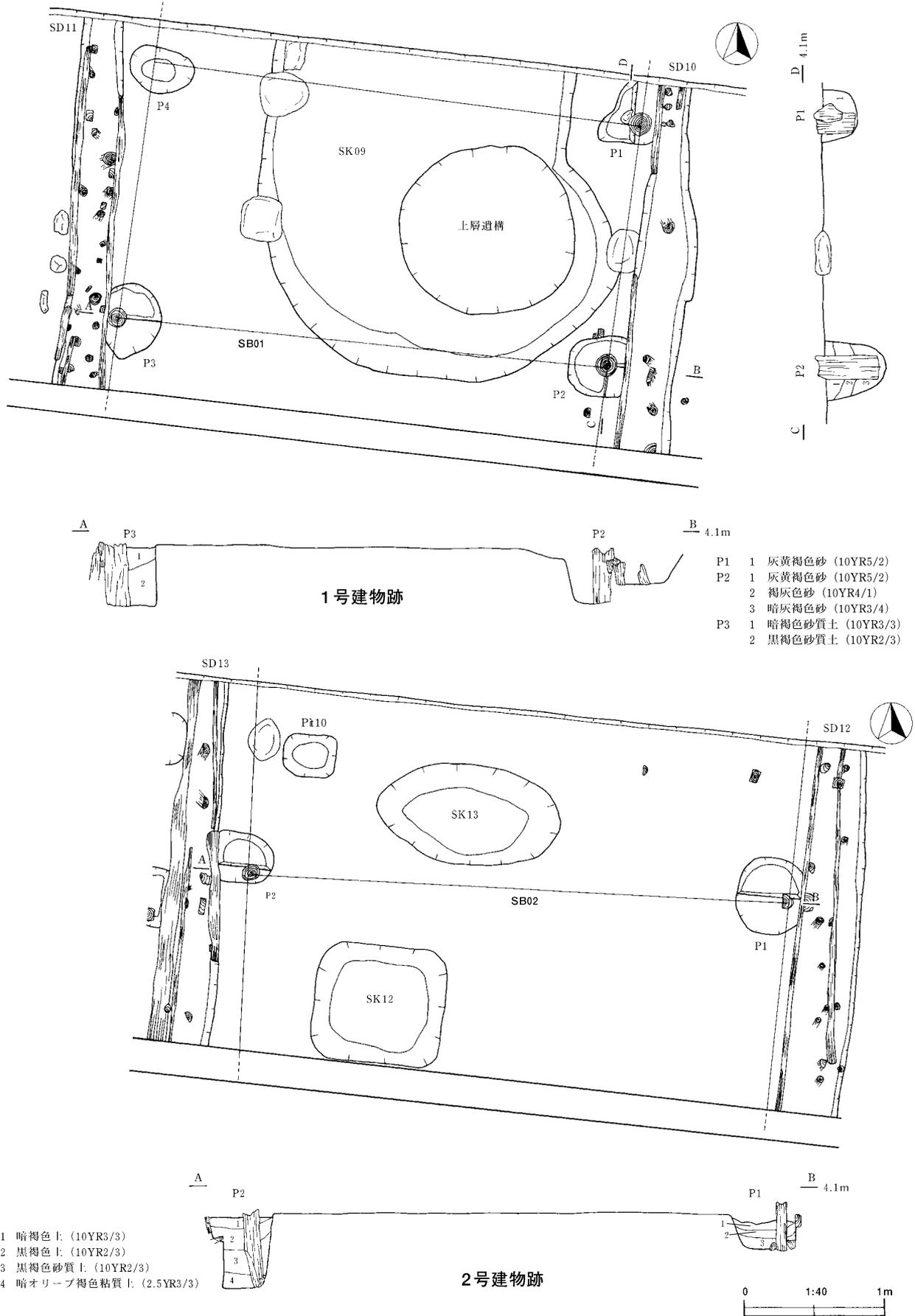
16・18号溝跡間のMC50区で検出された。南北棟の掘立柱建物跡である。少なくとも2基の掘り方が確認され、梁間1間（3.3m）、桁行1間以上で、調査区外へ延びる。建物方位は桁行が北で約7度東へ振れている。掘り方は直径約70cmの円形で、深さは確認面から約15～25cmである。掘り方は比較的浅く、上部は削平を受けているものと考えられる。すべての柱掘り方で柱材の抜き取りが行われている。17号溝跡、18・19・20号土坑、ピット13・14と重複するが、19号土坑より新しく、その他とは切り合い関係はない。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀代と考えられる。

6号建物出土遺物

陶磁器（第50図89・90、図版28）：すべて抜き取り埋土出土で、89はP2、90はP1出土である。

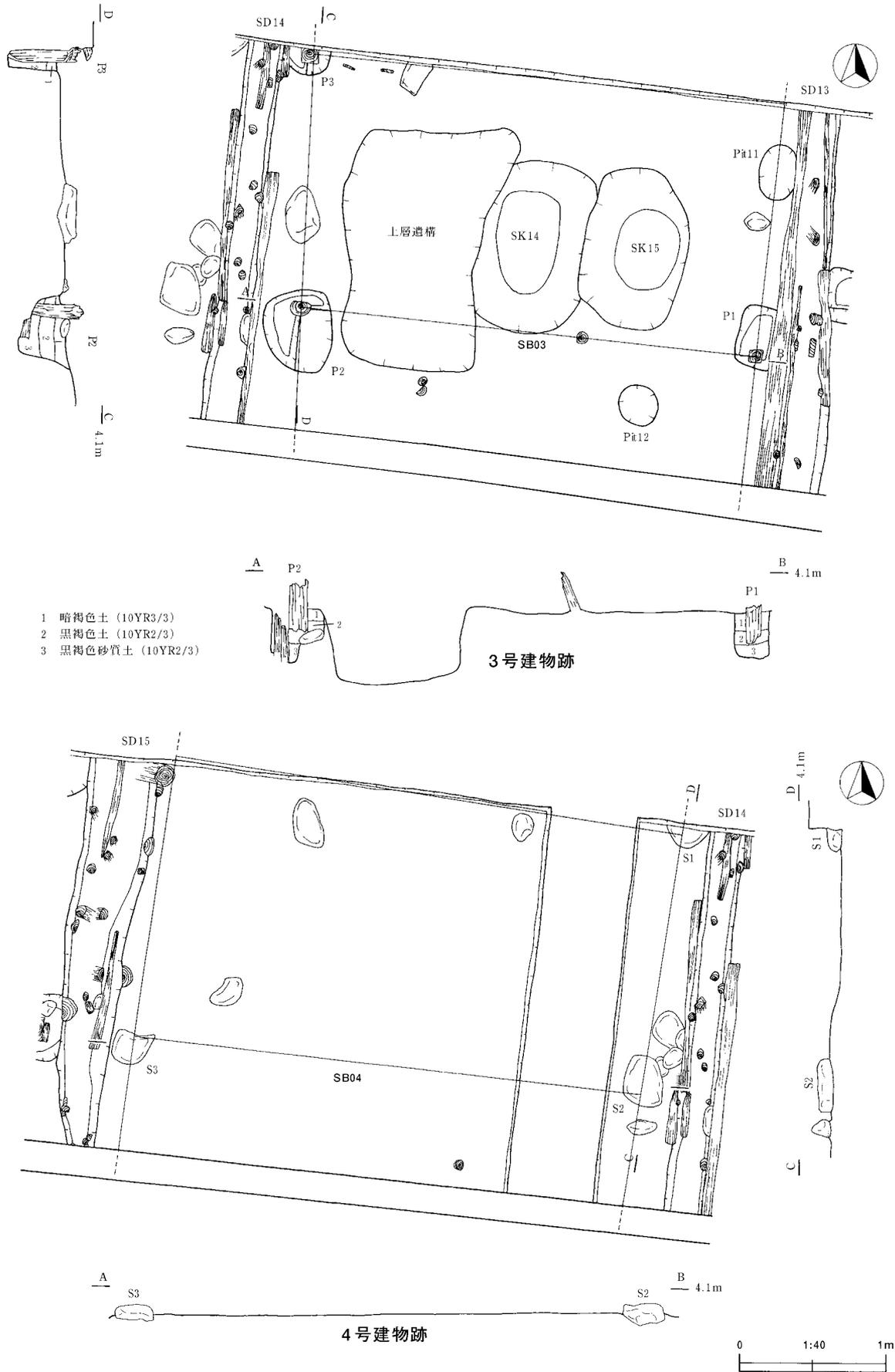
89は肥前系磁器染付皿で、蛇ノ目釉剥ぎを施し、見込みに一重圏線を染付けている。呉須は発色が悪く、暗緑色を呈している。90は肥前系磁器染付皿で、内面に二重格子文を染付けている。

金属製品（第78図15、図版49）：15はP2の抜き取り埋土出土で、真鍮製の煙管吸口である。Ⅳ～Ⅴ期に該当する（古泉1987）。

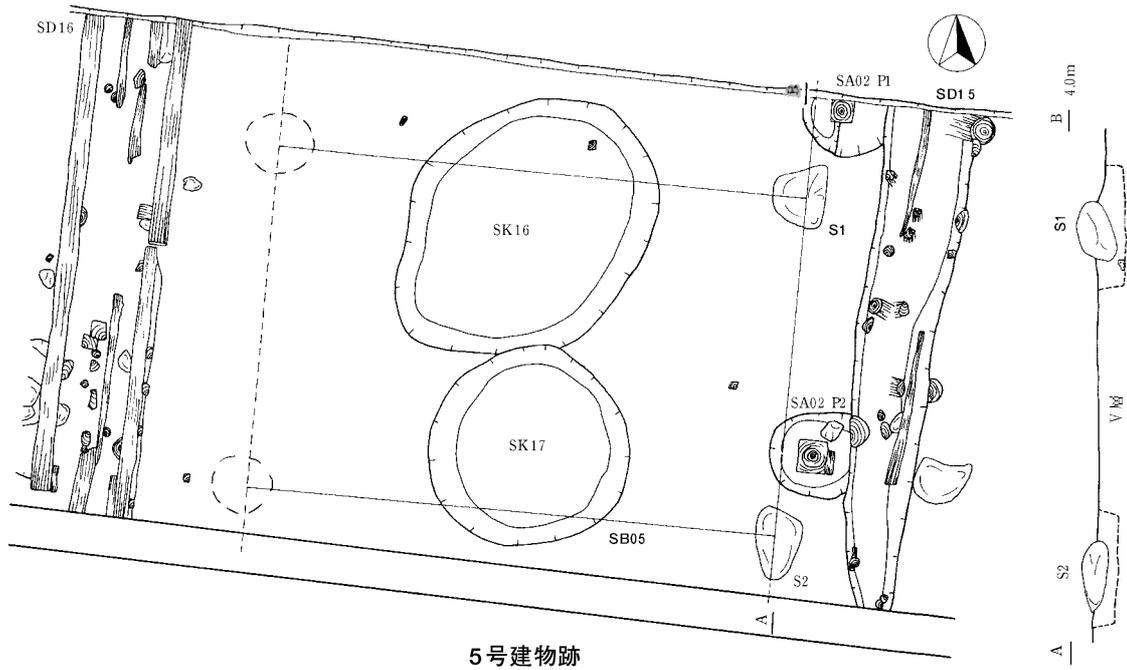


第19図 第V層面検出遺構 (1・2号建物跡)

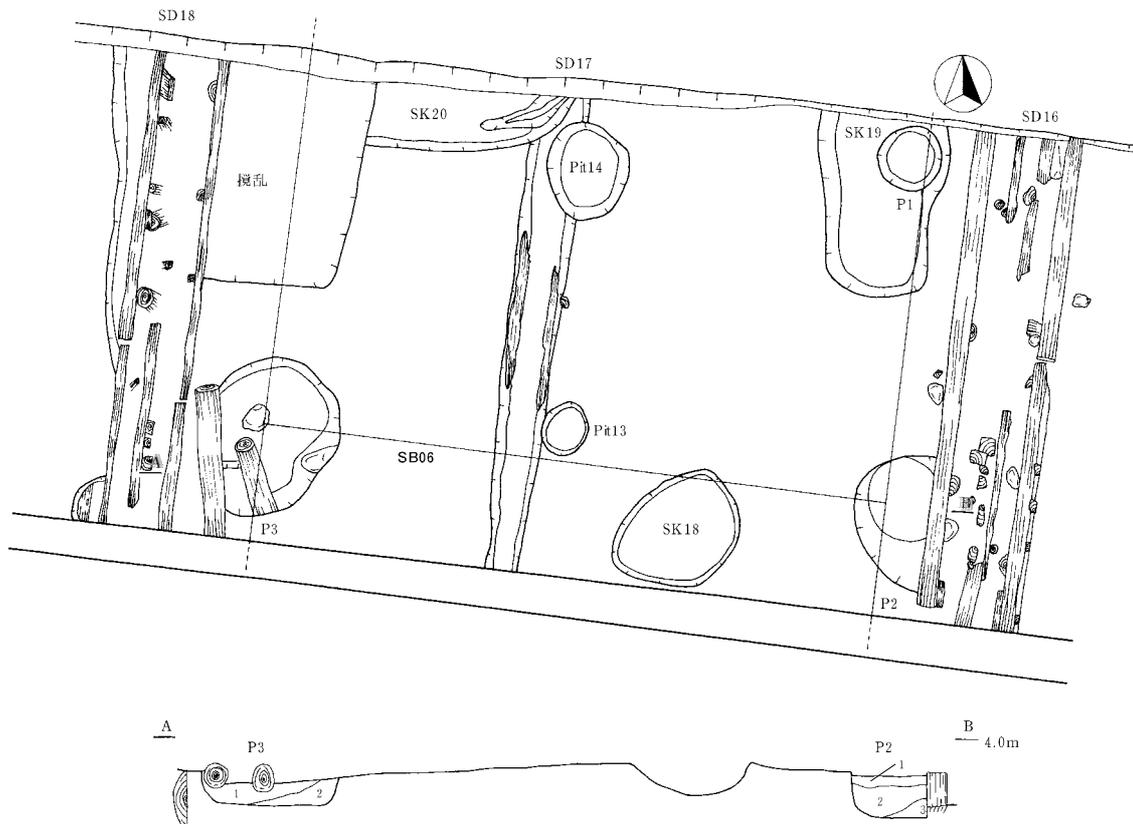
第3章 調査の方法と成果
 (2) 第V層面



第20図 第V層面検出遺構 (3・4建物跡)

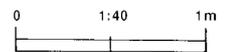


5号建物跡



6号建物跡

- P2 1 褐灰色砂 (10YR4/1)
 2 黒褐色砂質土 (10YR3/3)
 3 灰褐色砂 (10YR5/2)
 P3 1 黒褐色砂質土 (10YR3/3)
 2 灰褐色粘質土 (10YR5/2)



第21図 第V層面検出遺構 (5・6号建物跡)

溝跡

9号溝跡 (第22図)

LU50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約6度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約35～60 cm、深さは確認面から約20 cmで、断面はU字状を呈する。側壁に板材は一部に遺存しており、側壁の板材を補強したと考えられる打ち込み杭が確認される。板材には焼け跡がある。

10号溝跡 (第22図)

LV50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約8度東へ振れている。溝の側壁間の幅は20～40 cm、深さは確認面から約25 cmで、断面は鍋底状を呈する。西側側壁に板材が遺存しており、内側に杭を打ち込み補強している。1号建物と重複し、これよりも新しい。杭には焼け跡がある。

10号溝跡出土遺物

木製品 (第71図19、図版47) : 19は埋土出土で、箸である。

11号溝跡 (第22図、図版13)

LW50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約4度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約30 cm、深さは確認面から約30 cmで、断面は深い鍋底状を呈する。側壁に板材が遺存しており、内側に杭を打ち込み補強している。側壁板材と杭には焼け跡がある。1号建物跡と重複し、これよりも新しい。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀代～19世紀前半と考えられる。

11号溝跡出土遺物

陶磁器 (第50図91～93、図版28) : すべて埋土出土である。91は産地不明の陶器人形である。龍の脚と考えられ、銅緑釉を施している。92は肥前系磁器染付碗で、外面にコンニャク印判で文様を染付けている。93は肥前系磁器染付瓶で、外面に蛸唐草文を染付けている。内面は無釉である。

12号溝跡 (第22図)

LX50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約7度東へ振れている。溝は1回の作り替えが確認される。当初、溝の側壁間の幅は約45～50 cmで、深さ約15 cmである。作り替え後は、幅約20～30 cm、深さ約20 cmで断面は鍋底状を呈する。側壁には板材が遺存しているが、東側壁の当初の板材は確認されなかった。当初の板材があった部分には内側に、作り替え後の東側壁の板材には内側と外側に、杭を打ち込み補強している。側壁板材と杭には焼け跡がある。2号建物跡と重複し、これよりも新しい。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀後半と考えられる。

12号溝跡出土遺物

陶磁器 (第50図94、図版28) : 埋土出土である。肥前系磁器染付皿で、蛇ノ目釉剥ぎを施し、内面に花唐草文を染付けている。

木製品 (第71図20、図版47) : 20は埋土出土で、箸である。

13号溝跡 (第22図、図版13)

LZ50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約7度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約20～30 cm、深さは確認面より約15 cmで、断面は皿状である。側壁には板材が遺存しており、内側に杭を打ち込み補強している。側壁板材には焼け跡がある。2・3号建物跡、ピット11と重複するが、これらよりも新しい。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀後半と考えられる。

13号溝跡出土遺物

陶磁器 (第50図95、図版28) : 95は埋土出土である。肥前系磁器青磁碗で、外面に青磁釉を施し、内面に四方襷文と花を染付けている。

木製品 (第71図21、図版47) : 21は埋土出土で、箸である。

14号溝跡 (第22図)

MA50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6 m確認され、調査区外へ延びる。方向は、北で約6度東へ振れている。溝は1回の作り替えが確認される。当初は溝の側壁間の幅は約30 cmであるが、作り替え後は、幅約10 cmである。深さはいずれも確認面から約15 cmで、断面は鍋底状を呈する。いずれも側壁には板材が遺存しており、当初は内側に、作り替え後の東側壁の板材には内側と外側に杭を打ち込み補強している。5号建物跡と重複し、これよりも新しい。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀代と考えられる。

14号溝跡出土遺物

陶磁器 (第51図96、図版28) : 96は埋土出土である。肥前系陶器刷毛目文鉢で、白化粧土で波状の刷毛目文を施す。外面体部下半は無釉である。

金属製品 (第78図16、図版50) : 16は埋土出土で、鉄製の折釘である。

15号溝跡 (第22図)

MB50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約8度東へ振れている。溝は1回の作り替えが確認される。当初は溝の側壁間の幅は約20～40 cmで、作り替え後は、北側で幅約30 cmとなっている。深さは確認面より約30 cmで、断面は逆台形状を呈する。側壁には板材が遺存しており、当初は内側に、作り替え後は内側と外側に杭を打ち込み補強している。杭には焼け跡がある。5号建物跡と重複し、これよりも新しい。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は、18世紀代と考えられる。

15号溝跡出土遺物

陶磁器 (第51図97～100、図版29) : すべて埋土出土である。97は肥前系陶器刷毛目文甕である。口縁部内外面に白化粧土で、撫でつけたような刷毛目文を施す。98は瀬戸美濃系磁器染付碗で、焼継痕がある。99は肥前系磁器染付皿で裏底に二重方形枠に「福」銘を染付けている。100は肥前系磁器染付蓋である。焼成失敗品で、染付の文様は判別できない。

土製品 (第66図14、図版45) : 14は埋土出土で、小型で土師質の土錘である。

木製品（第71図22・23、図版47）：すべて埋土出土である。22は不明木製品である。板状で中央がやや抉れている。赤漆が塗布されている。23は箸である。

金属製品（第78図17・18、図版49・50）：すべて埋土出土である。17は銅製の針と考えられる。頭部に穿孔があり、螺旋状にねじれている。18は真鍮製の煙管雁首で、小口付近に陰刻がみられる。V期に該当する（古泉1987）。

16号溝跡（第22図）

MC50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約5度東へ振れている。溝は1回の作り替えが確認される。当初は、溝の側壁間の幅は約50cmで、作り替え後は約30cmとなっている。深さは確認面より約30cmで、断面は鍋底状を呈する。側壁には板材が遺存しており、当初は内側に、作り替え後は内側と外側に杭を打ち込み補強している。側壁板材と杭には焼け跡がみられる。6号建物跡と重複し、これよりも新しい。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は19世紀前半と考えられる。

16号溝跡出土遺物

土器・陶磁器（第51図101～104、図版29）：すべて埋土出土である。101は産地不明の陶器輪花皿である。灰釉を施し、貫入がみられる。102は肥前系磁器染付碗であり、外面に草花文を染付けている。103は肥前系磁器の戸車である。104は素焼き土師質の小型壺である。

土製品（第66図15・16、図版45）：すべて埋土出土である。15・16は小型で土師質の土錘である。

17号溝跡（第23図）

MC50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.5m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約5度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約18～30cm、深さは確認面より約10cmで、断面は鍋底状である。側壁には板材が遺存しており、外側に杭を打ち込み補強している。20号土坑、ピット13・14と重複し、これらよりも古い。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀前半と考えられる。

17号溝跡出土遺物

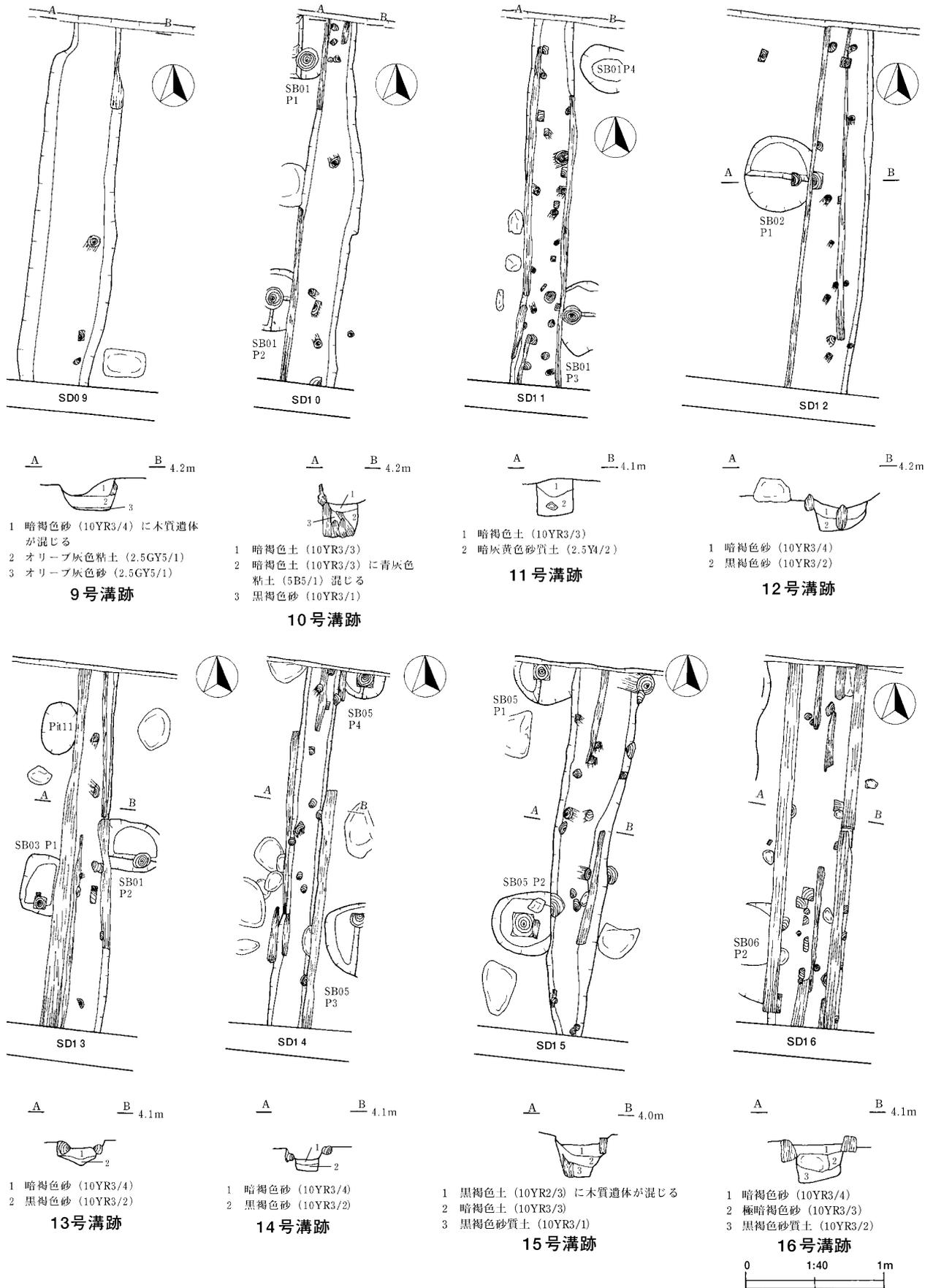
陶磁器（第51図105、図版29）：105は埋土出土である。肥前系陶器刷毛目文鉢で、外面は鉄釉を施し、その上に白化粧土で刷毛目文を施す。高台は無釉である。内面は白化粧土で刷毛目文を施す。

18号溝跡（第23図）

MC～MD50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約5度東へ振れている。溝は1回の作り替えが確認される。当初の溝の側壁間の幅は約35～40cmであるが、作り替え後は、幅約10cmである。深さは確認面より約40cmで、断面の深い鍋底状である。いずれも側壁には板材が遺存しており、当初は内側に、作り替え後には内側と外側に杭を打ち込み補強している。側壁と杭には焼け跡がみられる。遺構埋土上層には直径約15～20cmの礫が多数敷き詰められていた。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀後半と考えられる。

18号溝跡出土遺物

陶磁器（第51図106・107、図版29）：すべて埋土出土である。106は肥前系磁器白磁紅皿で、型押し成形で、高台は無釉である。107は肥前系磁器色絵仏飯器で、赤色の絵具で上絵付けしている。



第22図 第V層面検出遺構 (9~16号溝跡)

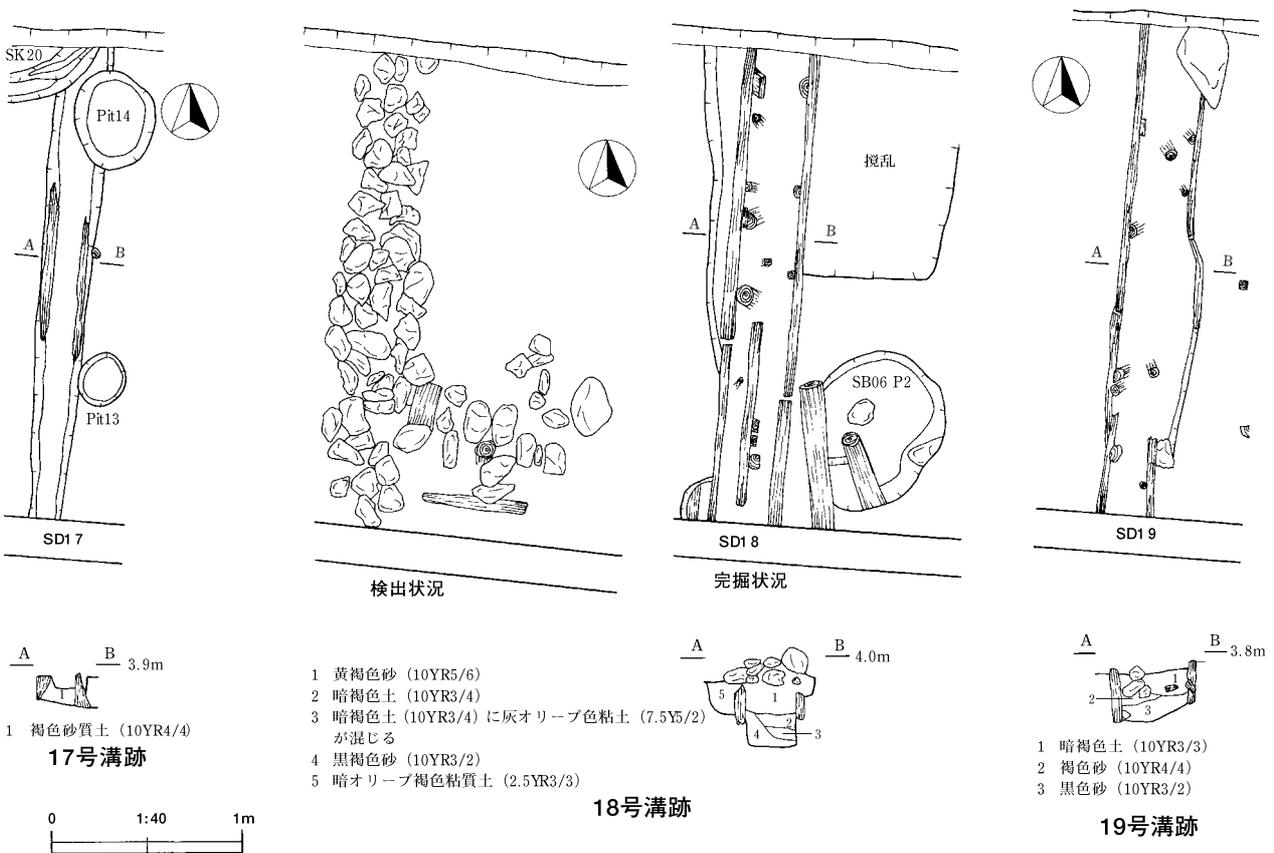
19号溝跡 (第23図、図版13)

ME50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6 m確認され、調査区外へ延びる。方向は、北で約7度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約25～40 cmで、深さは確認面から約25 cmで、鍋底状を呈する。側壁には板材が遺存しており、内側に杭を打ち込み補強している。側壁と杭には焼け跡がある。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀前葉～19世紀前半と考えられる。

19号溝跡出土遺物

陶磁器 (第51図108・109、図版29) : すべて埋土出土である。108は肥前系磁器染付碗で、内外面に菊と氷裂文を染付けている。109は肥前系磁器染付皿で、蛇ノ目凹形高台で、外面に花唐草文、内面に草花文を染付けている。

木製品 (第71図24、図版47) : 24は掘り方出土で、箸である。



第23図 第V層面検出遺構 (17～19号溝跡)

土坑

8号土坑 (第24図、図版13)

LV50区で検出された。平面は円形で、直径約2.5 m、深さは確認面から約40 cmである。壁は緩やかに立ち上がる。検出状況では、直径約5～25 cmの礫が集中していた。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は19世紀初頭と考えられる。

8号土坑出土遺物

土器・陶磁器 (第51・52図110・111、図版29・30) : いずれも埋土上層出土である。110は肥前系

磁器染付碗で、広東碗の器形である。見込みには一重圈線内に昆虫文、外面には草花文と蝶を染付けている。高台内には朱で「工□」と書かれている。111は素焼き土師質の焙烙である。取手部分に穿孔がみられ、口縁部は片口状に張り出す部分がある。

瓦（第76図6、図版48）：6は埋土出土である。棧瓦で、灰色を呈するいぶし瓦である。

9号土坑（第24図、図版13）

LW50区で検出された。平面は不整形で、直径約2.5m、深さは確認面から約50cmである。壁はやや急に立ち上がる。1号建物と重複するが、切り合い関係はない。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀代と考えられる。

9号土坑出土遺物

陶磁器（第52図112・113、図版30）：すべて埋土出土である。112は肥前系磁器染付皿で、蛇ノ目釉剥ぎを施し、高台は無釉である。内面に松葉文を染付けている。113は肥前系磁器青磁蓋で、外面に青磁釉を施し、内面に四方襷文と二重圈線内にコンニャク印判による五弁花を染付けている。

土製品（第66図17、図版45）：17は埋土出土で、フイゴ羽口である。

10号土坑（第24図）

LX50区で検出された。平面は楕円形で、長軸約2m、短軸約25cm、深さは確認面から約10cmである。壁は緩やかに立ち上がる。

11号土坑（第24図）

LX50区で検出された。平面は不整楕円形で、長軸約1.3m、短軸約40cm、深さは確認面から約5～20cmである。壁は緩やかに立ち上がる。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀後半と考えられる。

11号土坑出土遺物

陶磁器（第52図114、図版30）：114は埋土出土である。肥前系磁器染付皿で、外面に草花文、内面に菖蒲文と蝶を染付けている。

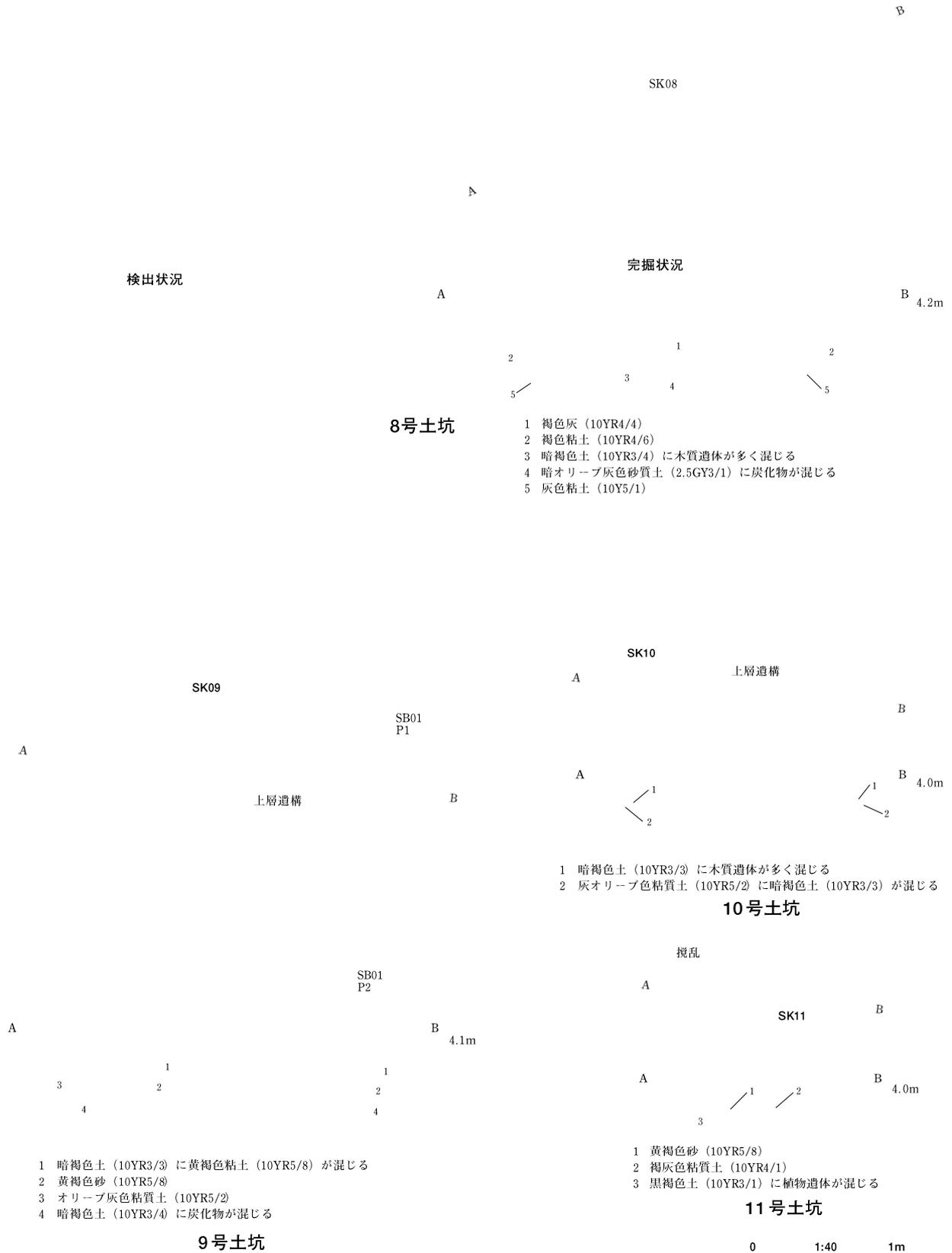
金属製品（第78図19、図版49）：19は埋土出土で、真鍮製の煙管吸口で、Ⅳ～Ⅴ期に該当する（古泉1987）。

12号土坑（第25図）

LY50区で検出された。平面は隅丸方形で、長軸約1m、短軸約80cm、深さは確認面から約20cmである。壁は緩やかに立ち上がる。2号建物と重複するが、切り合い関係はない。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀代と考えられる。

12号土坑出土遺物

陶磁器（第52図115、図版30）：115は埋土出土である。肥前系磁器染付仏飯器で、外面に崩れた雨降文を染付けている。



第24図 第V層面検出遺構 (8~11号土坑)

13号土坑 (第25図)

LY50区で検出された。平面は楕円形で、長軸約1.3 m、短軸約70 cm、深さは確認面から約15～35 cmである。東側は深く壁は急に立ち上がる。西側は浅く、壁は緩やかに立ち上がる。2号建物と重複し、切り合い関係はない。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀後葉～19世紀初頭と考えられる。

13号土坑出土遺物

土器・陶磁器 (第52図116・117、図版30) : すべて埋土出土である。116は肥前系磁器染付碗で、外面に梵字文を染付けている。117はかわらけ皿で、型押し成形の非ロクロ製の手づくねである。内外面ともに、口縁部に横方向のナデ、底部および体部下半に不定方向のナデがみられる。

金属製品 (第78図20、図版49) : 20は埋土出土で、真鍮製の煙管雁首で、V期に該当する (古泉1987)。

14号土坑 (第25図)

LZ50区で検出された。平面は楕円形で、長軸約1.2 m、短軸約70 cm、深さは確認面から約10 cmである。壁は緩やかに立ち上がる。3号建物跡と15号土坑と重複し、15号土坑より古く、3号建物跡とは切り合い関係はない。陶磁器の年代より遺構廃絶年代は18世紀後半と考えられる。

14号土坑出土遺物

陶磁器 (第52図118～120、図版30) : すべて埋土出土である。118は産地不明の陶器碗である。貫入がみられ、透明釉を施している。119は肥前系磁器青磁碗で、外面は青磁釉で、内面に四方嚮文、裏底に「筒江」銘を染付けている。120はかわらけ皿で、型押し成形の非ロクロ製の手づくねである。内外面ともに、横方向を基本とするナデがみられる。

石製品 (第74図4、図版48) : 4は埋土出土で、灰色の凝灰岩の砥石である。両端が破損している。

15号土坑 (第25図)

LZ50区で検出された。平面は楕円形で、長軸約1.1 m、短軸約70 cm、深さは確認面から約20 cmである。壁は緩やかに立ち上がる。3号建物跡と14号土坑と重複し、14号土坑より新しく、3号建物跡とは切り合い関係はない。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀代と考えられる。

15号土坑出土遺物

土器・陶磁器 (第52・53図121・122、図版30・31) : すべて埋土出土である。121は肥前系磁器染付皿で、内面に格子文を染付け、蛇ノ目釉剥ぎを施している。122は素焼き土師質の焙烙の取手である。取手部分に穿孔がある。

土製品 (第66図18・19、図版45) : すべて埋土出土である。18は土師質の臼などの部品であると考えられる。中央に穿孔があり、表面には放射状に刻線がある。19は小型で土師質の土錘である。

金属製品 (第78図21、図版50) : 21は埋土出土で、鉄製の折釘である。

16号土坑 (第25図)

MB50区で検出された。平面は楕円形で、長軸約1.6 m、短軸約1.2 m、深さは確認面から約40 cmである。壁は急に立ち上がる。5号建物跡と17号土坑と重複し、17号土坑より古く、5号建物跡とは切り合い関係はない。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀前半と考えられる。

16号土坑出土遺物

陶磁器（第53図123、図版31）：123は埋土出土である。肥前系陶器刷毛目片口である。内外面に白化粧土により刷毛目文を施す。外面は刷毛目文は波状である。

17号土坑（第25図）

MB50区で検出された。平面は円形で、直径約1.1m、深さは確認面から約30cmである。壁はやや急に立ち上がる。5号建物跡と16号土坑と重複し、16号土坑より新しく、5号建物跡とは切り合い関係はない。遺構廃絶年代は、江戸中期～後期であると考えられる。

17号土坑出土遺物

土器・陶磁器（第53図124～129、図版31）：すべて埋土出土である。124は肥前系陶器灰釉皿で、砂目積み痕跡がある。外面は体部下半と底部は無釉である。125は産地不明の陶器鉢である。外面に鉄釉を施し、その上に内面と外面口縁部に銅緑釉を施す。126は産地不明の陶器挿鉢である。127・128は素焼き土師質の灯火具のひょうそくで、いずれも無釉である。127には灯心用の突起部分を中心に煤状付着物がみられる。129は素焼き土師質の火入れである。外面に草花の陰刻線が施される。陶磁器の年代が明確なものは、124砂目積みの灰釉皿で17世紀前半であるが、その他のものと比べると極端に古い。

土製品（第66図20、図版45）：20は埋土出土で、中型で土師質の土錘である。

18号土坑（第25図）

MC50区で検出された。平面は楕円形で、長軸約70cm、短軸約60cmで、深さは確認面から約15cmである。壁は緩やかに立ち上がる。6号建物と重複するが、切り合い関係はない。

18号土坑出土遺物

土器（第53図130、図版31）：130は埋土出土である。素焼き土師質の灯火具で、有脚ひょうそくである。無釉であり、灯芯用の突起部分を中心に煤状付着物がみられる。脚部には釘穴がみられる。
銭貨（第81図11・12、図版51）：11・12は埋土出土で、銅銭の寛永通寶である。銭文の書体等から、11は古寛永（初鑄1636年）、12は新寛永（初鑄1697年）の分類に該当する。

19号土坑（第25図）

MC50区で検出された。平面は楕円形と考えられ、長軸約1m以上、短軸約65cmで、深さは確認面から約10cmである。壁は緩やかに立ち上がる。6号建物跡と重複するが、切り合い関係はない。

19号土坑出土遺物

陶磁器（第53図131、図版31）：131は埋土出土である。寺内窯産陶器土瓶で、内面は鉄釉を薄く施し、外面は化粧掛け後、銅と呉須で草花文を染付けている。底部は無釉である。

20号土坑（第25図）

MC50区で検出された。平面は楕円形と考えられ、長軸約1m以上、短軸約40cm以上、深さは確認面から約20～25cmである。東側は深くなり、壁は急に立ち上がる。17号溝跡と重複し、これよりも新しい。

21号土坑（第25図）

MD50区で検出された。平面は不整楕円形であり、長軸約1.4 m、短軸約0.8～1 m、深さは確認面から約10～20 cmである。北側は深くなり、南側は浅くなる。壁は急に立ち上がる。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀後半と考えられる。

21号土坑出土遺物

陶磁器（第53図132・133、図版32）：すべて埋土出土である。132は肥前系磁器染付碗で、内面に手書きの五弁花を染付けている。133は肥前系磁器染付蓋で、外面に氷裂文を染付けている。

ピット7出土遺物

陶磁器（第53図134・135、図版32）：すべて埋土出土である。134は産地不明の陶器碗である。乳白色の藁灰釉を内外面に施し、貫入がみられる。外面体部下端は無釉である。135は陶器灯火具の受付皿である。内面は鉄釉を施し、外面は無釉である。底部切り離しは回転糸切りである。

V層出土遺物

土器・陶磁器（第54～56図136～172、図版32～35）

〔陶器〕 136～149は陶器である。

（碗類） 136は産地不明の灰釉陶器碗で、内外面口縁部に銅緑釉を施し、高台は無釉である。

（皿類） 137は白岩窯産灰釉陶器皿で、外面に灰釉、内面に薄いなまこ釉を施す。外面体部下半は無釉である。

（灯火具） 138～139は産地不明の陶器灯火具受付皿である。138は内面と外面口縁部に灰釉を施す。二次加熱を受けている。139は無釉である。

（蓋類） 140～142は産地不明の陶器蓋である。140は外面に鉄釉を施す。二次加熱がみられる。

141は外面に乳白色を呈する藁灰釉を施し、底面は回転糸切りによる切り離し痕がみられる。

142は寺内窯産の蓋で、平蓋の器形である。内面と外面口縁部に鉄釉を施す。

（瓶類） 143は産地不明の灰釉陶器土瓶で、外面体部下半と内面口縁部は無釉である。

（搦鉢） 144は肥前系陶器搦鉢である。内外面に鉄釉を施す。

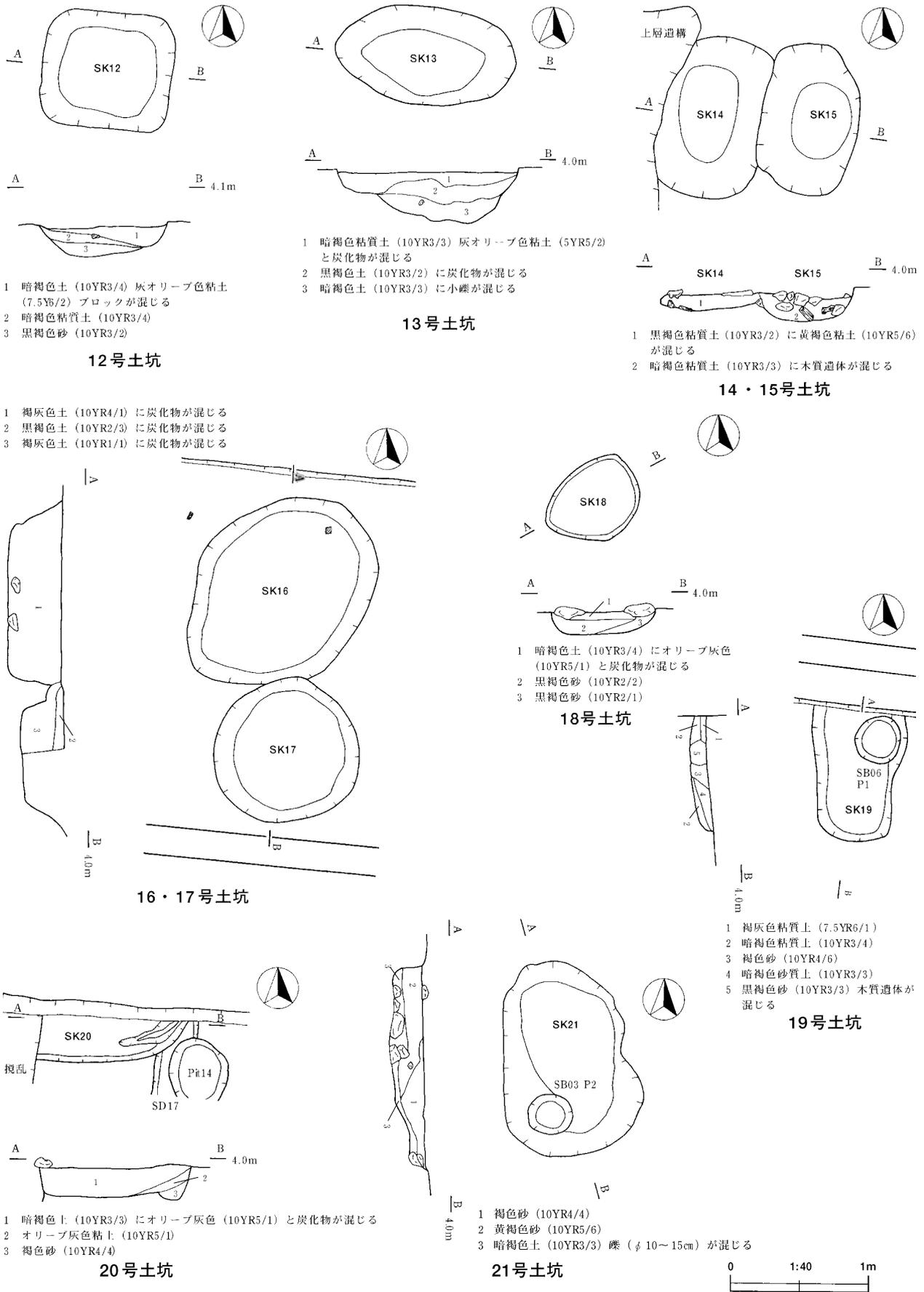
（甕類） 145は白岩窯産小型陶器甕である。内外面に鉄釉を施し、その上から外面口縁部～体部上半、内面口縁部になまこ釉を施す。146は肥前系陶器甕である。内外面に鉄釉を施す。内面には格子目状の当て具痕がみられる。

（その他） 147は産地不明の狛犬形の陶器人形である。透明釉を施し、銅緑釉で装飾している。148は産地不明の大黒天形の陶器人形である。透明釉を施し、銅緑釉で装飾している。149は窯道具の脚付ハマで、脚が5カ所ある。

〔磁器〕 150～167は磁器である。

（碗類） 150は肥前系磁器染付碗で、小碗の器形である。外面にコンニャク印判による文様を染め付けている。151は肥前系磁器染付碗で、外面に雨降り文を染付け、口紅を施している。152は肥前系磁器染付碗で、外面に二重網目文、内面に一重網目文と菊、裏底には一重方形枠に「渦福」銘を染付けている。153は肥前系磁器染付碗で、蛇ノ目釉剥ぎを施している。154は肥前系

第3章 調査の方法と成果
 (2) 第V層面



第25図 第V層面検出遺構 (12~21号土坑)

磁器染付碗で、外面にコンニャク印判による文様を、裏底に「大明年製」銘を染付けている。155は肥前系磁器染付碗で、外面に草花文、裏底に「大明年製」銘を染付けている。156は肥前系磁器染付碗で、広東碗の器形である。内外面に清朝風の文様を染付けている。

(皿類) 157は肥前系磁器染付皿で、外面に花唐草文、内面に草花文を染付けている。漆継痕がある。158は肥前系磁器染付皿で、波佐見産と考えられる。外面に花唐草文、内面に割菊文とコンニャク印判による五弁花、裏底に「渦福」を染付けている。159は肥前系磁器染付皿で、内面に二重格子目文を染付け、蛇ノ目釉剥ぎを施している。160は肥前系磁器染付皿で、内面に松葉文を染付け、蛇ノ目釉剥ぎを施している。高台は無釉である。161は肥前系磁器染付皿で、内面に草花文と見込みに手書きの五弁花、裏底に二重方形枠に「渦福」銘を染付けている。

(小坏) 162は肥前系磁器色絵小坏で、内面に赤色・緑色・金色の絵具で上絵付けしている。163は肥前系磁器染付小坏で、外面に草花文を染付けている。

(その他) 164は肥前系磁器染付仏飯器で、外面に格子文を染付けている。165は肥前系磁器仏飯器の脚部である。166は肥前系磁器染付水滴である。方形で、型押し成形によって作られている。167は肥前系磁器染付人形で、猿形である。顔と足の部分に鉄釉で装飾を施している。背面には2カ所に穿孔がある。

〔土器〕 168～172は土器である。

(かわらけ) 168はかわらけ皿で、非ロクロ製の手づくねである。外面は口縁部に横方向、内面は不定方向のナデがみられる。169はかわらけ皿で、型押し成形の非ロクロ製の手づくねである。外面は口縁部に横方向、内面は不定方向のナデがみられる。170はかわらけ皿で、型押し成形の非ロクロ製の手づくねである。大形の皿である。内外面ともに横方向のナデがみられる。

(灯火具) 171は素焼き土師質の灯火具で、ひょうそくである。無釉で、底部切り離しは回転糸切りである。灯芯用の突起付近に煤状着物がみられる。

(その他) 172は素焼き土師質の火鉢である。残存している部分から復元すると両側に取手がつく形態となる。

陶磁器の年代は、おおむね17世紀後葉～18世紀代であり、第V層は、この時期に形成された整地層と考えられる。

土製品 (第66・67図21～32、図版45)

21～23は面子である。土師質で中央に穿孔がある。21・22は五弁の花が型押しされている。23は中央が円盤状に型押ししている。24～32は土錘である。24～27、29～32は土師質、28は須恵質である。24～26は小型で、27～30は中型、31は大型である。31は貫通孔の両端が欠損しており、使用による痕跡と考えられる。32は下端が平坦になっており、スノコ状圧痕があり、表面も粗雑な作りである。

木製品 (第71・72図25～31、図版47)

25は大型の曲物底板である。26は椀で、内外面に黒漆が塗布されている。27・28は箸である。29は小型の一木下駄で、角型の連歯下駄である。前歯付近に台側から釘が2カ所打ちこまれている。30は細身の刷毛の柄と考えられる。下端に赤漆が塗布されている。31は不明木製品で、貝殻状を呈し外

側には三角形の抉りがある。

石製品（第74図5～8、図版48）

5は粘板岩製の硯である。上端は破損している。6は緑色の凝灰岩製の砥石である。上端部が破損している。7は白色の凝灰岩製の砥石である。上端部が破損している。8は黒色の砂岩製の不明石製品である。中央に穿孔が認められる。

金属製品（第78図22～26、図版49・50）

22～25は真鍮製の煙管で、22は雁首、23～25は吸口である。22はⅡ期、23はⅡ～Ⅲ期、24・25はⅣ～Ⅴ期に該当する（古泉1987）。24・25の小口付近には羅字の木質部が遺存している。26は鉄製の皿である。

銭貨（第81図13～28、図版51）

13～26は銅製の寛永通寶である。銭文の書体等から、13は古寛永（初鑄1636年）、14～19は新寛永（初鑄1697年）、20～22は新寛永の「秋田川尻銭」（1738年より1745年にかけて鑄銭）、23～25は新寛永の「文銭」（初鑄1668年）、26は新寛永の「背元銭」（初鑄1741年）の分類に該当する。27・28は真鍮製の雁首銭である。

(3) 第Ⅵ層面検出の遺構・遺物

第Ⅵ層面からは、柱列跡4列(SA06～09)、建物跡5棟(SB07～11)、溝跡13条(SD20～32)、土坑10基(SK22～31)、集石遺構1基(SQ01)、ピット12基(Pit15～26)が検出された(第12図、図版4・14～16)。遺物は、遺構内および第Ⅵ層から、土器・陶磁器、土製品、木製品、石製品、瓦、金属製品、銭貨が出土した。

柱列跡

6号柱列跡(第26図)

LY50区で検出された。南北方向の柱列跡で、少なくとも2基の掘り方が確認され、調査区外へ延びている。方向は北で約5度東に振れている。柱間隔は2.4mである。柱掘り方は、直径約40～60cm以上の円形であると考えられ、深さは確認面から約20～30cmである。すべての掘り方で柱材の抜き取りが行われている。24号溝跡と重複し、これよりも古い。陶磁器の年代から、遺構廃絶年代は18世紀前半と考えられる。

6号柱列跡出土遺物

陶磁器(第57図173、図版35)：173はP2の抜き取り埋土出土である。肥前系磁器染付碗で、外面にコンニャク印判による文様を染付けている。

7号柱列跡(第26図、図版14)

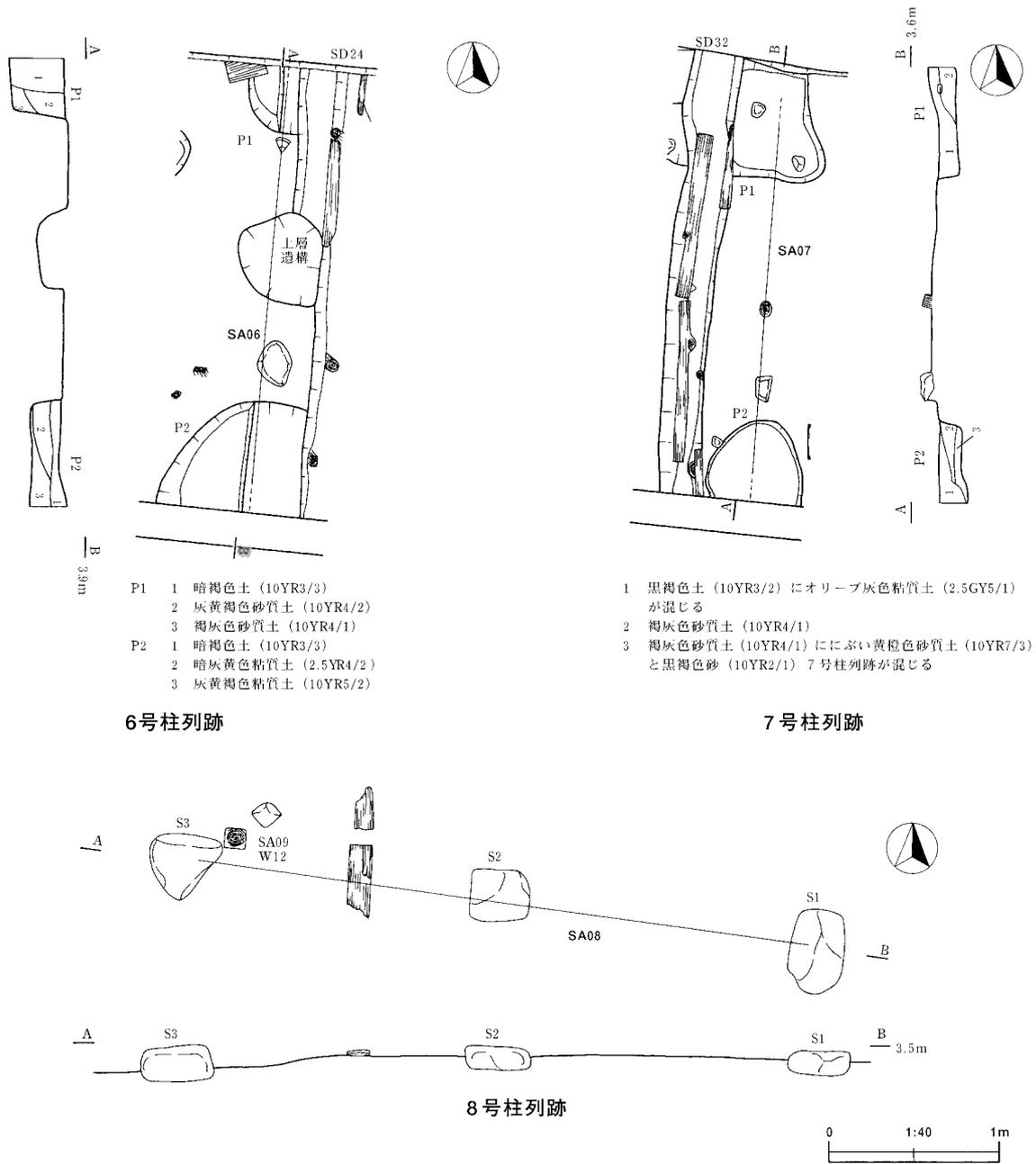
MF50区で検出された。南北方向の柱列跡で、少なくとも2基の掘り方が確認され、調査区外へ延びている。方向は北で約5度東に振れている。柱間隔は2.1mである。柱掘り方は、直径約60cm以上の円形および不整形であると考えられ、深さは確認面から約15cmである。すべての掘り方で柱材で抜き取りが行われている。32号溝跡と重複し、これよりも古い。

8号柱列跡(第26図、図版14)

ME～MF50区で検出された。Ⅵ層上面というよりはやや下層で検出された。東西方向の柱列跡で、3基の礎石からなる。柱間隔は1.8m+1.8mである。方向は、東で約8度北に振れている。礎石は直径約30～40cmの扁平な礫で、礎石下には掘り方などは確認されなかった。9号柱列と重複し、切り合い関係はないが、やや下層で検出されていることから、これより古いと考えられる。

9号柱列跡(第27図、図版15)

MD～MF区で検出された。W2～10は東西方向で、W11～12は南北方向へ振れる。W1は南側に柱は確認されなかったが、W1からも南北方向へ振れる可能性がある。方向は東西方向は西で約6度北へ振れ、南北方向は北で約5度東へ振れる。柱間隔は、W2～10は0.6m+0.7m+0.8m+0.9m+0.95m+0.75m+0.8m+0.6mで、W11～12は0.7mである。柱は一辺約10～12cmの角材で長さは65～70cmあり、先端を先鋭に加工している。掘り方はなく、打ち込まれている。8号柱列と重複し切り合い関係はないが、8号柱列よりもやや上層で検出されていることから、これより新しいと考えられる。



第26図 第VI層面検出遺構 (6~8号柱列跡)

建物跡

7号建物跡 (第28図、図版15)

21・22号溝跡間のLU50区で検出された。南北棟の掘立柱建物跡である。少なくとも4基の掘り方が確認され、梁間1間 (5.1m)、桁行1間以上 (…+1.4m+…) で、調査区外へ延びる。建物方向は桁行が北で約7度東へ振れている。掘り方は、P1・4は直径約40cm、P2・3は直径約50cm以上の円形で、深さは確認面から約30~50cmである。柱材が遺存しており、P1・3・4は一辺10~12cmの角材で、P2は直径約14cmの丸材である。掘り方底部にはいずれも根石が確認され、P4は根石

の上に礎板が確認された。21・22号溝跡、22～25号土坑、ピット15と重複し、20・21号溝跡、25号土坑より古く、その他との切り合い関係はない。

8号建物跡 (第29図、図版15)

22・23号溝跡間のLW50区で検出された。南北棟の掘立柱建物跡である。少なくとも2基の掘り方が確認され、梁間1間(3.3m)、桁行1間以上で、調査区外へ延びる。建物方位は桁行が北で約5度東へ振れている。柱掘り方は直径約30～40cmの円形で、深さは確認面から約20cmである。すべての柱掘り方で柱材の抜き取りが行われている。22・23号溝跡、26号土坑と重複し、22・23号溝跡より古く、26号土坑より新しい。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀前半と考えられる。

8号建物跡出土遺物

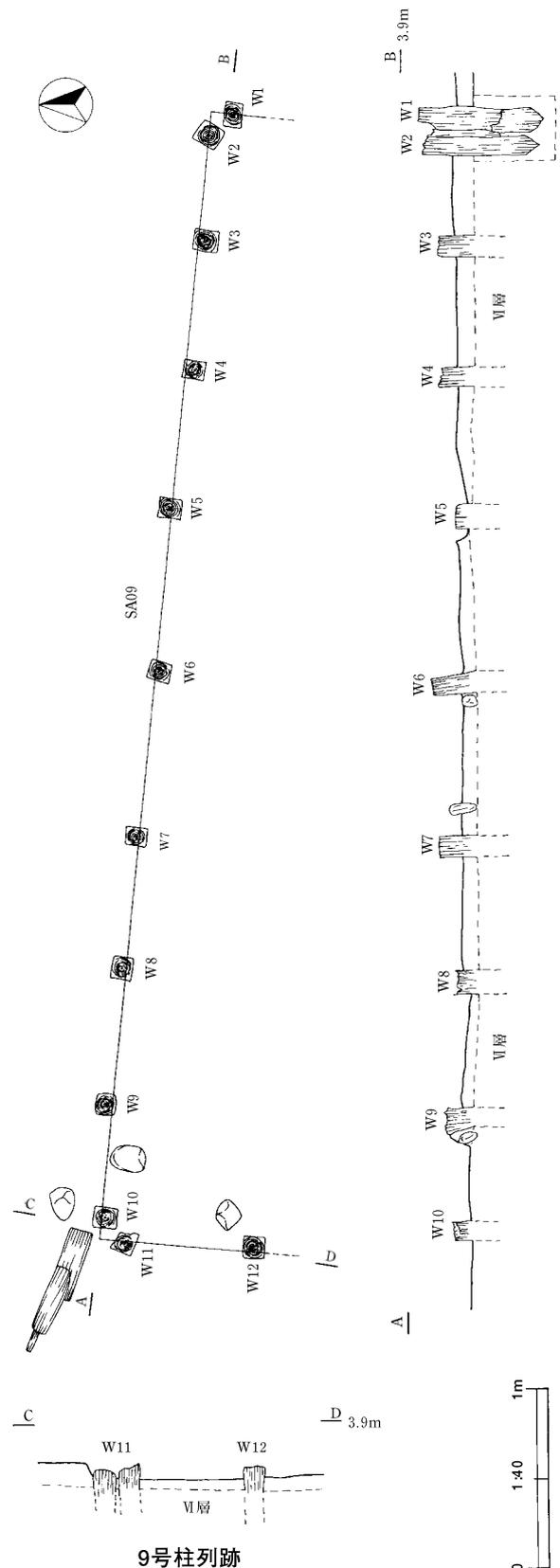
陶磁器 (第57図174、図版35) : 174はP1の抜き取り埋土出土である。肥前系磁器染付皿で、外面に花唐草文を染付けている。

9号建物跡 (第29図、図版15)

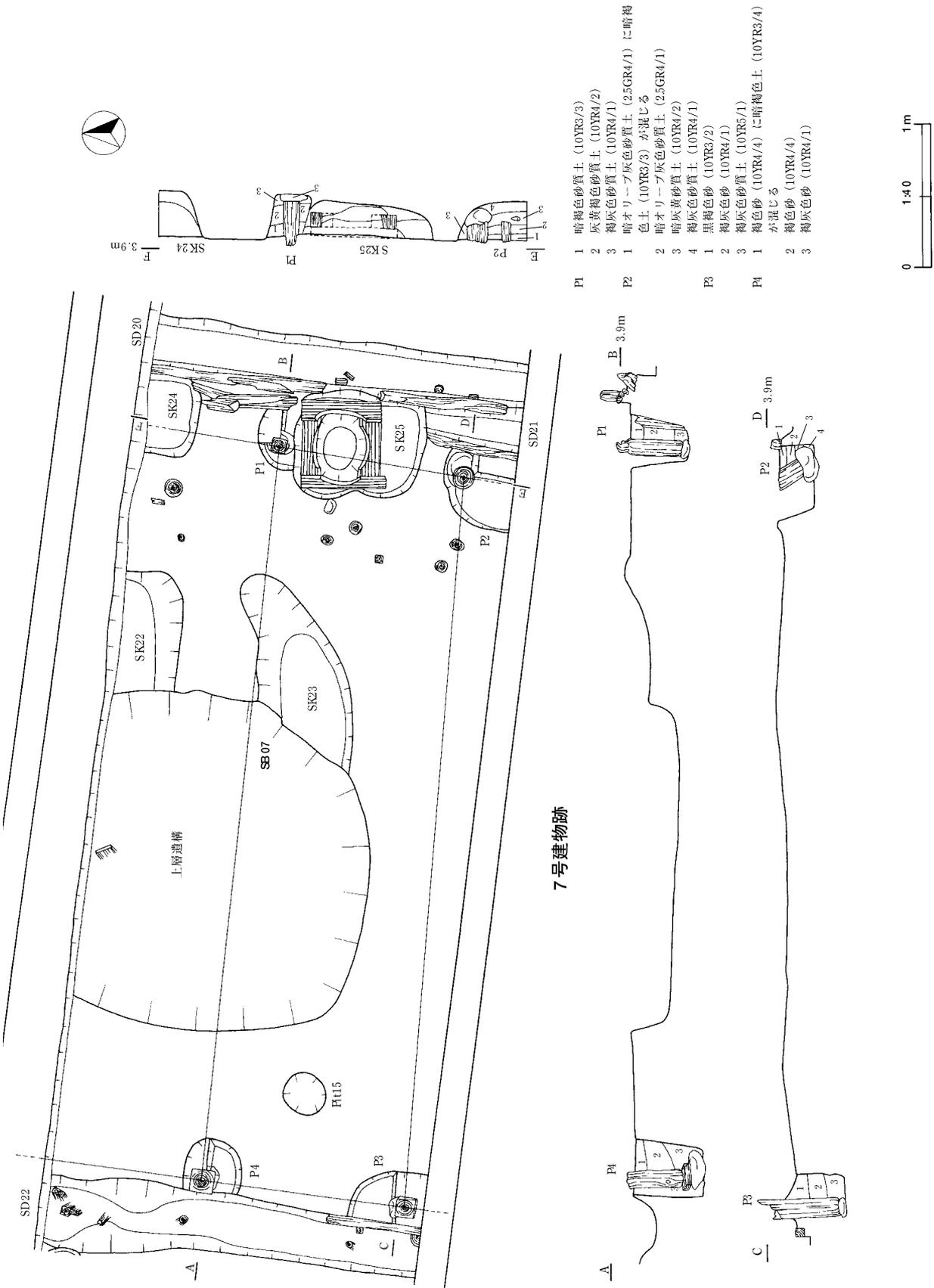
23・24号溝跡間のLX50区で検出された。南北棟の掘立柱建物跡である。建物方位は桁行が北で約10度東へ振れている。少なくとも2基の掘り方が確認され、梁間1間(1.8m)、桁行1間以上で、深さは確認面から約20～30cmである。すべての掘り方で柱材の抜き取りが行われている。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀後半と考えられる。

9号建物跡出土遺物

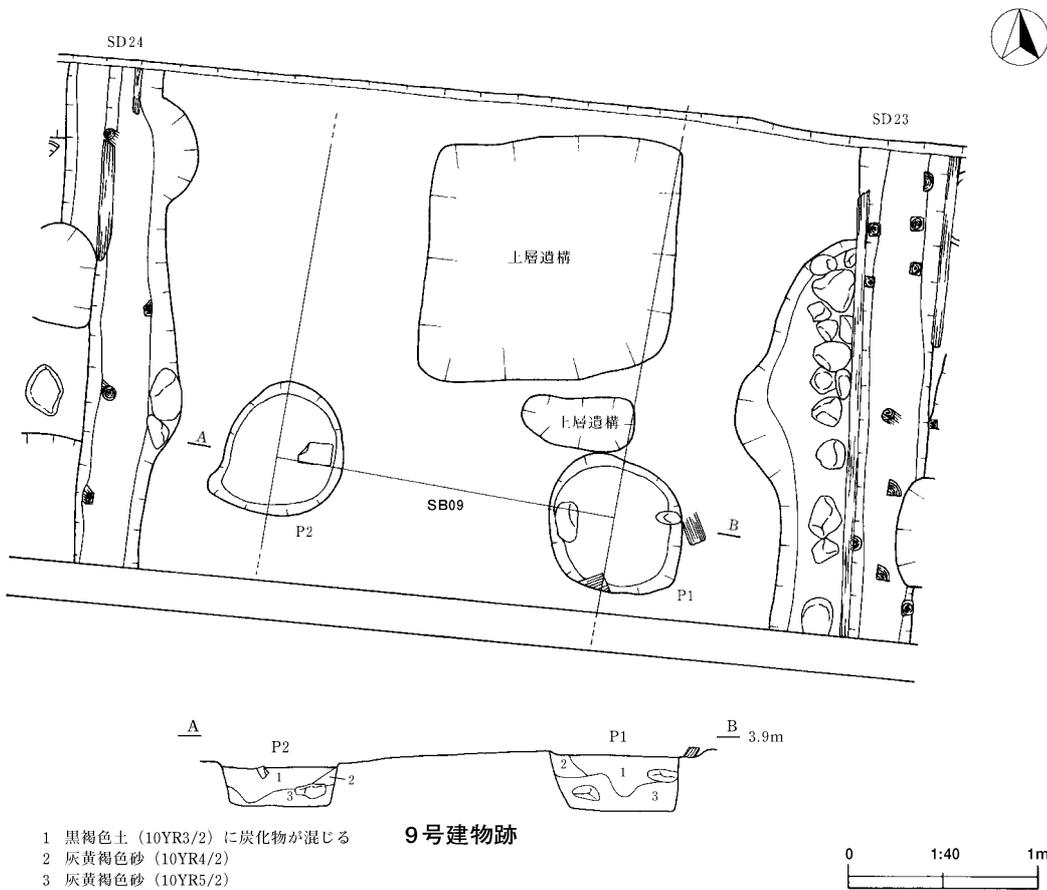
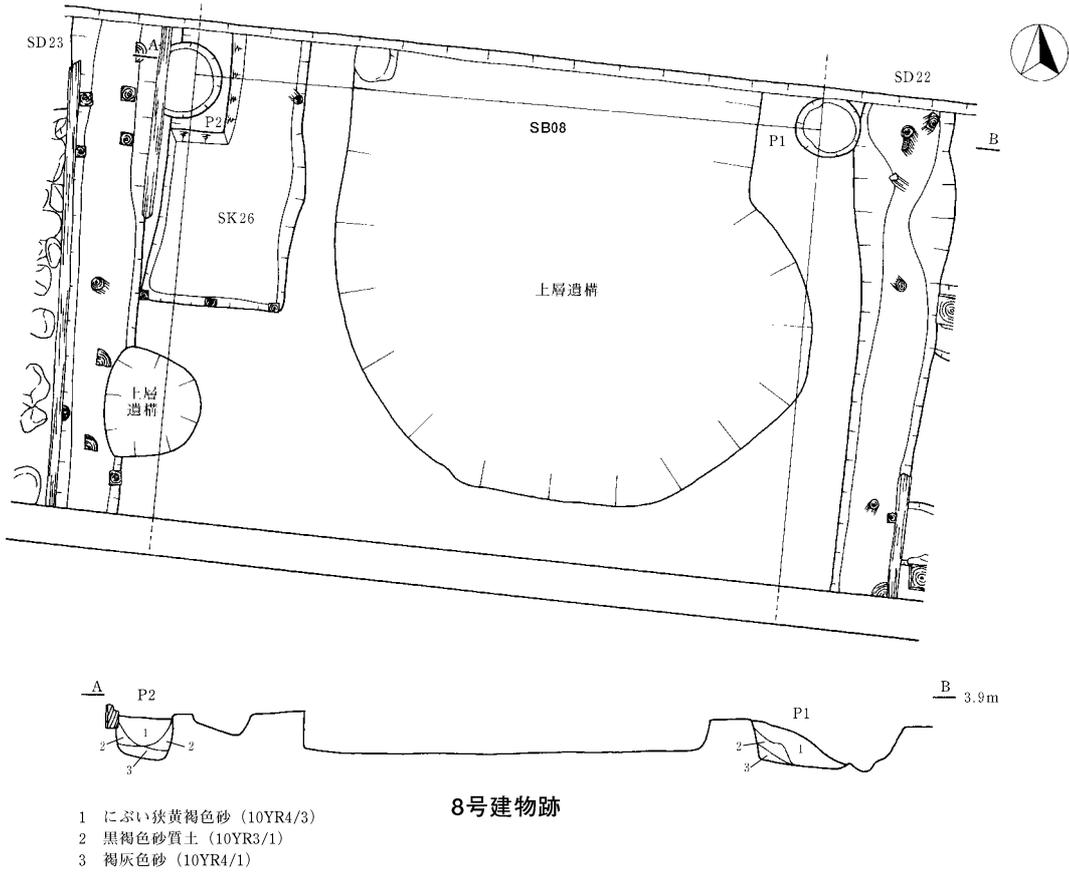
陶磁器 (第57図175、図版35) : 175はP2の抜き取り埋土出土である。肥前系磁器染付皿で、外面に花唐草を、内面に草花文を染付け、見込みにコンニャク印判による五弁花、裏底に「渦福」銘を染付けている。



第27図 第VI層面検出遺構 (9号柱列跡)



第28図 第Ⅵ層面検出遺構 (7号建物跡)



第29図 第VI層面検出遺構 (8・9号建物跡)

10号建物跡 (第30図、図版15)

26・27号溝跡間のMA50区で検出された。南北棟の掘立柱建物跡である。少なくとも4基の掘り方が確認され、梁間1間(3.3m)、桁行1間(1.8m)以上で、調査区外へ延びる。建物方位は桁行が北で約7度東へ振れている。掘り方は、直径長軸約60cm以上、短軸約50～60cmの楕円形で、深さは確認面から約30～50cmである。すべての柱掘り方で柱材の抜き取りが行われている。26・27号溝跡、30号土坑、ピット21と重複し、26・27号溝跡より新しく、その他とは切り合い関係はない。陶磁器の年代から、遺構構築年代は17世紀後半、遺構廃絶年代は18世紀代と考えられる。

10号建物跡出土遺物

陶磁器(第57図176～178、図版35)：176はP3抜き取り埋土、177はP2掘り方埋土、178はP2抜き取り埋土の出土である。176は肥前系磁器染付碗で、外面にコンニャク印判による文様を染付けている。177は肥前系磁器染付碗で、外面に「壽」文を染付けている。178は肥前系磁器染付小杯で、外面に笹文を染付けている。

木製品(第72図32、図版47)：32はP3抜き取り埋土出土で、小型の曲物底板である。2カ所穿孔が認められる。

金属製品(第79図27、図版50)：27はP1抜き取り埋土出土で、真鍮製の煙管吸口である。Ⅱ～Ⅲ期に該当する(古泉1987)。

11号建物跡 (第30図、図版16)

29・31号溝跡間のMC50区で検出された。南北棟の掘立柱建物である。少なくとも2基の掘り方が確認され、梁間1間(2.4m)、桁行1間以上で、調査区外へ延びる。建物方位は桁行が北で約7度東へ振れている。掘り方は長軸約50～60cm、短軸約40cmの楕円形で、深さは確認面から約10cmである。掘り方は浅く、上部は削平を受けているものと考えられる。すべての掘り方で柱材の抜き取りが行われている。29・30号溝跡と重複し、29号溝跡より古く、30号溝跡との切り合い関係はない。

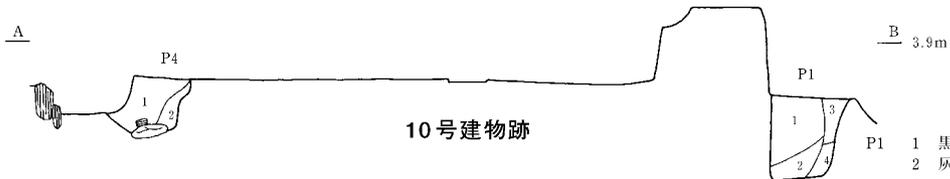
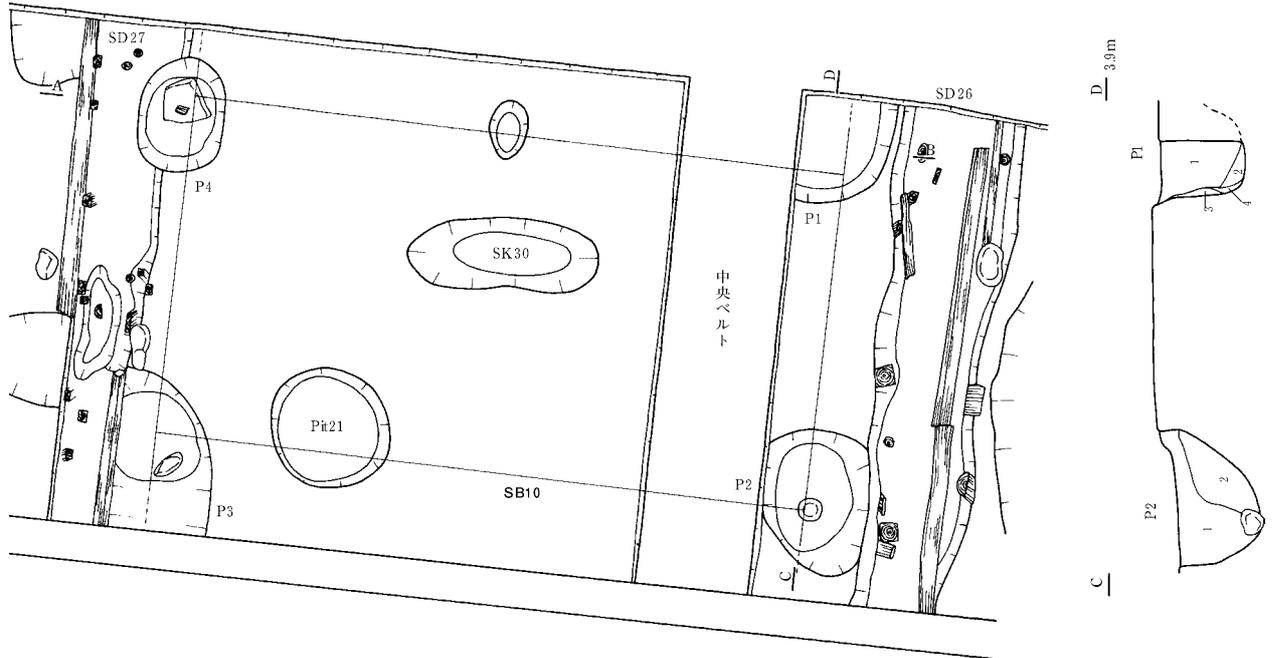
溝跡

20号溝跡 (第31図、図版16)

LU50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約8度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約30cm、深さは確認面から約10cmで、断面はU字形を呈する。西側側壁に板材が遺存しており、内側に杭を打ち込み補強している。21号溝跡、24・25号土坑と重複し、21号溝跡、24号土坑より新しく、25号土坑より古い。また、20号溝跡は21号溝跡を作り替えたものと考えられる。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は17世紀末以降と考えられる。

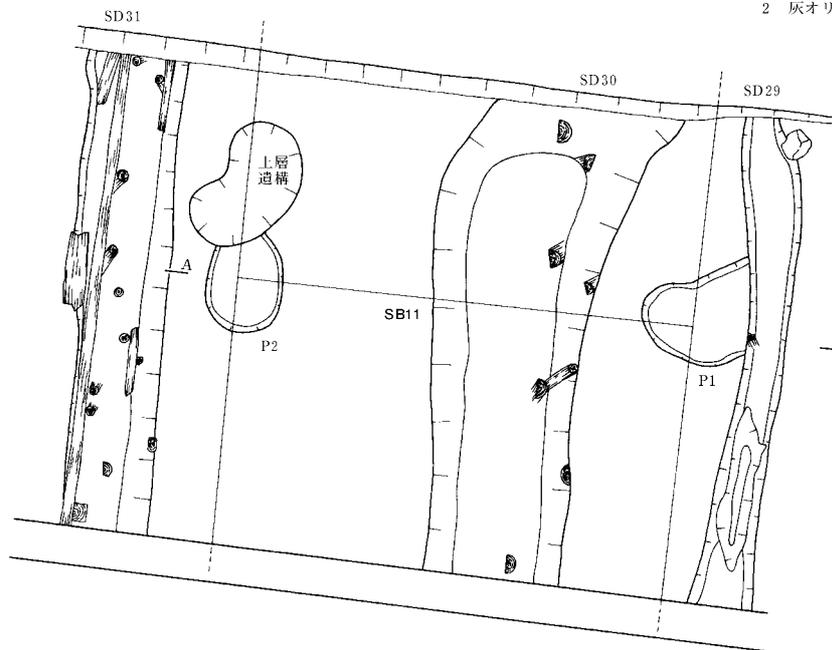
20号溝跡出土遺物

陶磁器(第57図179、図版35)：179は埋土出土である。肥前系磁器染付碗で、外面に雨降り文を染付け、口紅を施している。



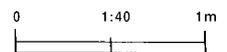
10号建物跡

- P1 1 黒褐色土 (10YR3/1) に炭化物が混じる
- 2 灰黄褐色土 (10YR4/2)
- 3 灰オリーブ色粘質土 (10YR4/2)
- 4 褐灰色粘質土 (10YR4/1)
- P2 1 灰オリーブ色粘質土 (10YR4/2)
- 2 褐灰色砂質土 (10YR4/1)
- P4 1 黒褐色土 (10YR3/1) に炭化物が混じる
- 2 灰オリーブ色粘質土 (10YR4/2)



11号建物跡

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) に炭化物が混じる
- 2 オリーブ灰色粘質土 (2.5GY3/1) に黒褐色土 (10YR3/2) が混じる



第30図 第VI層面検出遺構 (10~11号柱列跡)

21号溝跡 (第31図、図版16)

LU50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.2 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約7度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約30 cm、深さは確認面から約10 cmで、断面は鍋底状を呈する。西側側壁に板材が遺存している。側壁板材には焼け跡がみられる。7号建物跡、20号溝跡と24・25号土坑と重複し、20号溝跡、24・25号土坑より古く、7号建物より新しい。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀前半と考えられる。

21号溝跡出土遺物

陶磁器 (第57図180、図版35) : 180は埋土出土である。肥前系陶器刷毛目片口で、内外面鉄釉を施し、白化粧土で波状の刷毛目文を施している。

22号溝跡 (第31図)

LV50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約7度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約35～50 cm、深さは確認面から約15 cmで断面は鍋底状を呈する。東側側壁に板材が遺存しており、内側に杭を打ち込み補強している。7号建物跡と重複し、これよりも新しい。

23号溝跡 (第31図、図版16)

LW～LX区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約6度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約30～40 cm、深さは確認面より約20 cmで、断面はU字形を呈する。側壁に板材が遺存しており、内側に杭を打ち込み補強している。杭には焼け跡がある。溝西側には掘り方が確認され、直径約10～20 cmの礫を詰め、板材を補強している。8号建物跡と重複し、これよりも新しい。陶磁器の年代より、遺構構築年代は17世紀前半と考えられる。

23号溝跡出土遺物

陶磁器 (第57図181、図版35) : 181は掘り方出土である。肥前系陶器灰釉皿で、砂目積み痕跡がみられる。

金属製品 (第79図28、図版50) : 28は埋土出土で銅製の鋳である。

24号溝跡 (第31図)

LY50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約6度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約30～40 cm、深さは確認面から約15 cmで、断面は鍋底状を呈する。側壁に板材が遺存しており、内側に杭を打ち込み補強している。溝の両側には掘り方が確認され、東側掘り方では直径約10～20 cmの礫を詰め込み、板材を補強している。6号柱列と重複し、これよりも新しい。

24号溝跡出土遺物

金属製品 (第79図29、図版50) : 29は掘り方出土で真鍮製の煙管雁首で、Ⅳ期に該当する(古泉1987)。

25号溝跡 (第31図、図版16)

LY50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で

約6度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約20cmで、深さは確認面から約12cmで、断面は鍋底状を呈する。側壁には板材が遺存しており、内側と外側に杭を打ち込み補強している。溝両側には掘り方が確認される。ピット18と重複し、これよりも新しい。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は17世紀後半と考えられる。

25号溝跡出土遺物

陶磁器（第57図182、図版35）：182は埋土出土である。肥前系陶器刷毛目鉢で、内外面に鉄釉、体部上半に白化粧土で波状の刷毛目文、その上から銅緑釉を施している。

木製品（第72図33、図版47）：33は埋土出土で、箸である。

銭貨（第82図29、図版51）：29は埋土出土で、銅製の寛永通寶である。銭文の書体等から、新寛永の「文銭」（初鑄1668年）の分類に該当する。

26号溝跡（第31図）

LZ～MA50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約8度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約40～50cm、深さは約15cmで、断面は鍋底状を呈する。側壁には板材が遺存しており、内側と外側に杭を打ち込み補強している。杭には焼け跡がみられる。溝東側に掘り方が確認される。10号建物跡と重複し、これより古い。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は17世紀後半～18世紀初頭と考えられる。

26号溝跡出土遺物

陶磁器（第57図183・184、図版35）：すべて埋土出土である。183は肥前系陶器刷毛目碗で、内外面に白化粧土で刷毛目文を施している。184は肥前系磁器染付碗で、外面に梅樹文を染付けている。

木製品（第72図34、図版47）：34は埋土出土で、不明木製品である。上部に抉りがあり、釘が打たれている。

石製品（第75図9、図版48）：9は掘り方出土で、白色の凝灰岩製の砥石である。上端が破損している。

27号溝跡（第32図）

MA～MB50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約7度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約30～40cm、深さは確認面から約8cmで、断面はU字状である。側壁に板材が遺存しており、内側に杭を打ち込み補強している。杭には焼け跡がみられる。10号建物跡と重複し、これよりも古い。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は17世紀中葉～18世紀前半と考えられる。

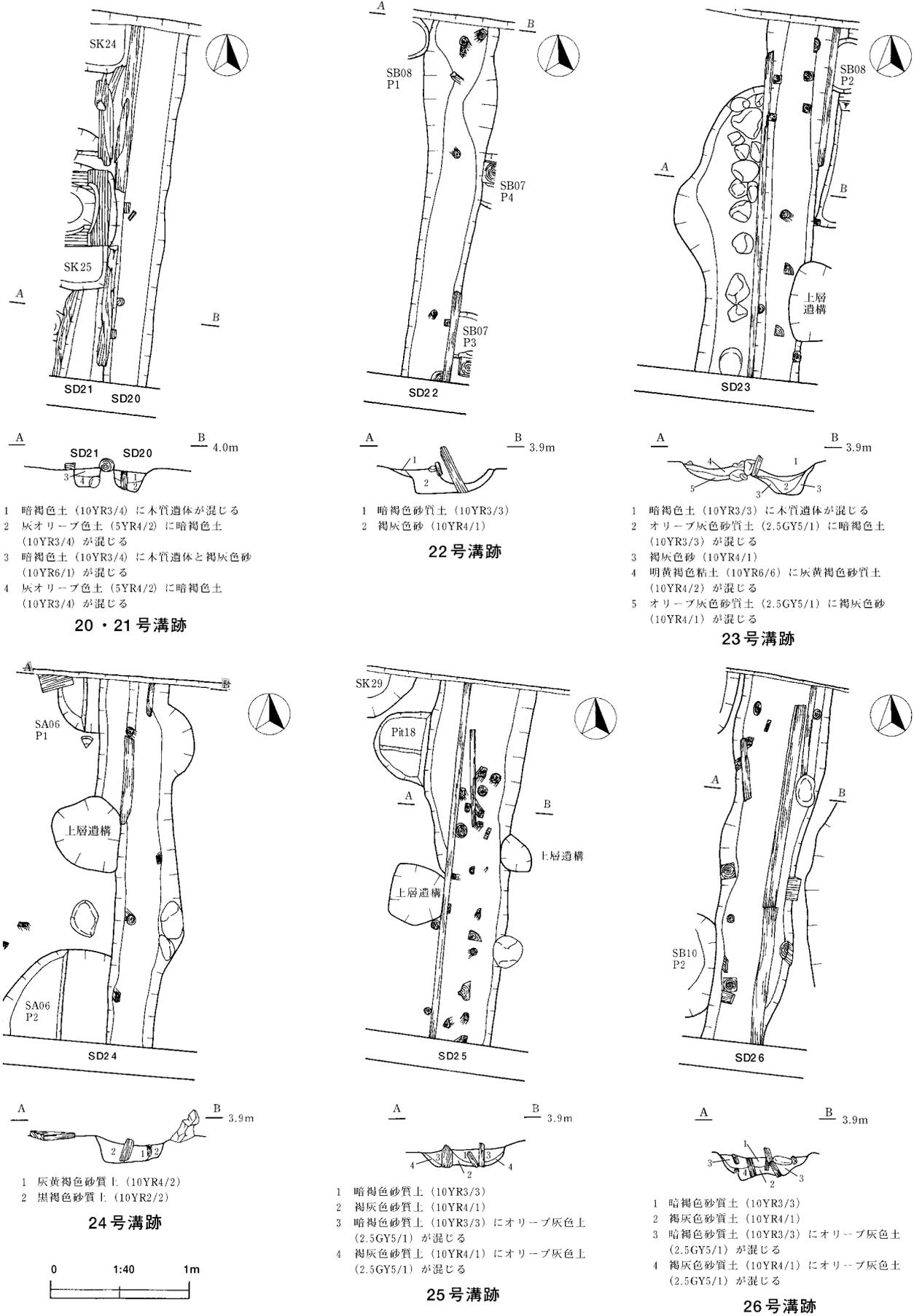
27号溝跡出土遺物

陶磁器（第57図185・186、図版35）：すべて埋土出土である。185は肥前系磁器染付碗で、外面に二重網目文、内面に一重網目文を染付けている。186は肥前系磁器青磁碗で、見込みに菊花文を染付け、外面に青磁釉を施し、高台は無釉である。

土製品（第67図33、図版45）：33は埋土出土で、大型で土師質の土錘である。

木製品（第72図35、図版48）：35は埋土出土である。小型の一木下駄で、角形の削り下駄である。歯はなく、眼は側面に抜けている。

第3章 調査の方法と成果
(3) 第VI層面



第31図 第VI層面検出遺構 (20～26号溝跡)

28号溝跡 (第32図)

MC50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約8度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約30 cm、深さは確認面から約14 cmで、断面は鍋底状を呈する。西側側壁に板材が遺存しており、内側に杭を打ち込み補強している。東側側壁は板材は確認されなかったが、補強のための打ち込み杭が確認されている。杭には焼け跡がみられる。溝東側には掘り方が確認されている。陶磁器の年代より、遺構構築年代は18世紀前半と考えられる。

28号溝跡出土遺物

陶磁器 (第57・58図187～189、図版36) : 187・189は掘り方、188は埋土出土である。187は肥前系陶器皿で、外面は灰釉の上に口縁部のみ鉄釉を施している。内面は鉄釉を施している。188は陶器播鉢片であるが、円盤状に加工している。189は肥前系磁器染付皿で、内面に草花文を染付けている。裏底の銘は欠損のため不明である。

金属製品 (第79図30、図版50) : 30は埋土出土で、鉄製の折釘である。

29号溝跡 (第32図)

MC50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約10度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約14～20 cm、深さ約6 cm、断面は鍋底状を呈する。11号建物跡と重複し、これより新しい。

30号溝跡 (第32図)

MC50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さ約2.6 mが確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約6度東へ振れている。溝の幅は約70 cm、深さ約14 cm、断面は皿状を呈する。側壁の板材は遺存していなかったが、東側で板材を補強していたと考えられる打ち込み杭が確認される。杭には焼け跡がある。11号建物と重複するが、切り合い関係はない。陶磁器の年代から、遺構廃絶年代は18世紀代と考えられる。

30号溝跡出土遺物

陶磁器 (第58図190～192、図版36) : すべて埋土出土である。190は瀬戸美濃系陶器碗で、腰鏝碗の器形である。外面は鉄釉を施し、口縁部に乳白色の藁灰釉を施し、内面は藁灰釉を施し、貫入がみられる。191は肥前系陶器香炉で、外面は藁灰釉を施し、横方向の文様を呉須で染付けている。高台は無釉である。内面は体部上半に藁灰釉をを施し、体部下半は無釉である。192は肥前系陶器刷毛目鉢で、内面に白化粧土で波状の刷毛目文を施し、その上から内外面ともに口縁部から体部上半にかけて鉄釉を施している。

31号溝跡 (第32図)

MD50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.5 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約5度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約20 cm、深さは約15 cm、断面は逆台形を呈する。側壁の板材が遺存しており、西側は内側に、東側は外側に杭を打ち込み補強している。側壁板材と杭には焼け跡がある。陶磁器の年代から、遺構廃絶年代は18世紀末～19世紀中葉と考えられる。

31号溝跡出土遺物

陶磁器（第58図193～195、図版36）：すべて埋土出土である。193は産地不明の磁器染付碗で、外面に篋と笹文、見込みに井桁菱を染付けている。194は産地不明の磁器染付蓋で、天井に昆虫文、つまみ内部には一重方形枠に変形字を染付けている。195は白岩窯産の陶器瓶で、外面になまこ釉、内面に鉄釉を施している。底部は無釉で、回転糸切り痕を残している。

石製品（第75図10、図版48）：10は埋土出土で、白色の凝灰岩製の砥石である。

金属製品（第79図31、図版50）：31は埋土出土で、真鍮製の煙管である。雁首と吸口が共伴して出土した。雁首と吸口にはともに線刻と点描による文様が施されている。また雁首の小口には羅宇の木質部が遺存している。Ⅴ期に該当する（古泉1987）。

32号溝跡（第32図）

MF50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約9度東へ振れている。溝の幅は約15cm、深さは約5cm、断面は不明である。上部は大部分削平を受けていた。側壁の板材が遺存しており、内側に杭を打ち込み補強している。側壁板材には焼け跡がある。7号柱列跡とピット25と重複し、これらより新しい。

土坑

22号土坑（第33図）

LU50区で検出された。平面は楕円形と考えられ、長軸約80cm以上、短軸約50cm以上である。東側壁は急に立ち上がる。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀前半と考えられる。

22号土坑出土遺物

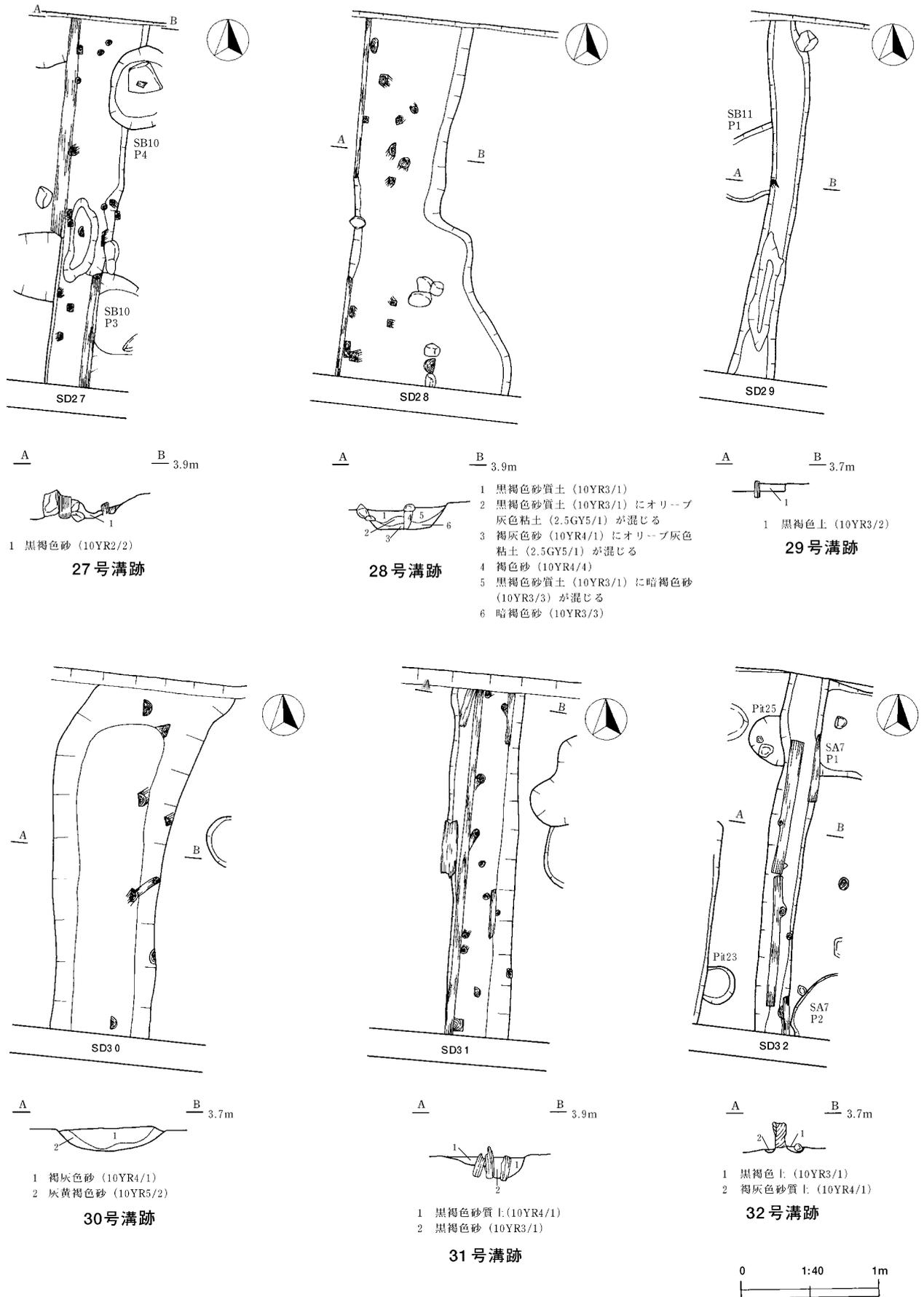
陶磁器（第58図196、図版37）：196は埋土出土である。肥前系磁器染付皿で、外面に花唐草文、内面に草花文を染付けている。漆継ぎ痕がある。

23号土坑（第33図）

LU50区で検出された。平面は楕円形と考えられ、長軸は1.2m以上、短軸約60cmである。東側壁は緩やかに立ち上がる。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀後半と考えられる。

23号土坑出土遺物

陶磁器（第58～60図197～206、図版37～38）：すべて埋土出土である。197は京信楽系鉄絵碗である。鉄絵で草花を描いている。198は産地不明の陶器蓋で、平蓋の器形である。199は肥前系陶器刷毛目鉢で、内面に白化粧土で波状の刷毛目文を施し、内外面口縁部から体部上半に鉄釉を施している。200・201は産地不明の搗鉢で、内外面に鉄釉を施している。202は肥前系磁器染付碗で、外面に二重網目文、内面に一重網目文、見込みに菊を染付けている。203・204は肥前系磁器染付皿で、内面に格子文を染付け、蛇ノ目釉剥ぎを施している。205は肥前系磁器染付皿で、外面に花唐草文、内面に草花文と見込みにコンニャク印判による五弁花を染付けている。206は肥前系磁器染付皿で、外面に花唐草文、内面に草花文と見込みに手書きの五弁花、裏底に「大明成化年製」を染付けている。裏底にはハリ支え痕がある。



第32図 第Ⅵ層面検出遺構 (27~32号溝跡)

木製品（第72図36～38、図版47）：すべて埋土出土である。36・37は箸である。38は独楽で、中心を抉っている。

24号土坑（第33図）

LU50区で検出された。平面は隅丸方形と考えられ、長軸は約60cm、短軸約30cm、深さは確認面より約30cmである。南側は急に立ち上がる。21号溝跡と重複し、これよりも新しい。

25号土坑（第33図、図版16）

LU50区で検出された。平面は隅丸方形で、長軸約90cm、短軸約70cm、深さは確認面より約20cmである。一辺が約60cmの方形に組んだ木枠が据えてあり、木枠内側は掘鉢状に斜めに加工されている。また、木枠内の土坑底面も掘鉢状になっている。大甕などを据えるような施設であったと考えられる。木枠外側と下層は掘り方であり、南側の掘り方壁は緩やかに立ち上がる。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は18世紀後半～19世紀中葉と考えられる。

25号土坑出土遺物

陶磁器（第60図207、図版38）：207は埋土出土である。肥前系磁器染付皿で、外面に松葉文、内面に山水文を染付けている。

26号土坑（第33図、図版16）

LW50区で検出された。平面は方形で、長軸約1.5m以上、短軸約70cm、深さは確認面から約8cmである。断面は皿状で、壁はゆるやかにたちあがり、壁に杭が打ち込まれていた。8号建物と重複し、これよりも古い。

27号土坑（第33図）

LY50区で検出された。平面は隅丸方形と考えられ、直径約90cm、深さは確認面から約18cmである。壁は緩やかに立ち上がる。

28号土坑（第33図）

LZ50区で検出された。平面は隅丸方形と考えられ、直径約1m、深さは確認面から約10cmである。壁は緩やかに立ち上がる。

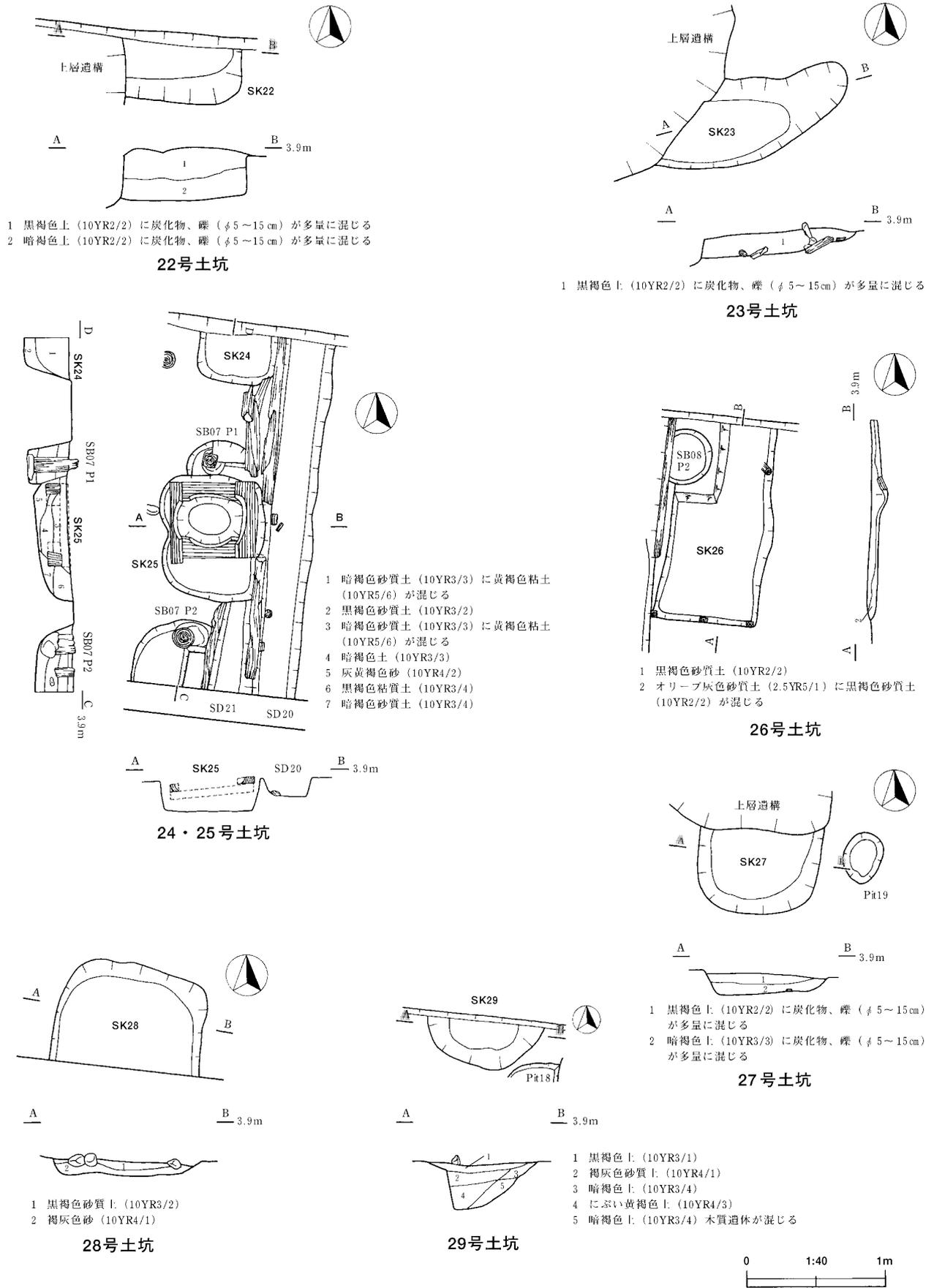
28号土坑出土遺物

土器（第60図208、図版38）：208は埋土出土である。土風炉である。

木製品（第72図39～42、図版47）：すべて埋土出土である。39～41は箸である。42は櫛である。

29号土坑（第33図）

LZ50区で検出された。平面は楕円形と考えられ、長軸約80cm、短軸約40cm以上、深さは確認面から約35cmである。西壁は急にたちあがり、東壁は緩やかに立ち上がる。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は17世紀後半と考えられる。

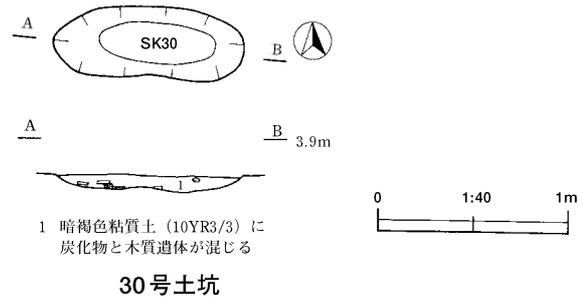


第33図 第VI層面検出遺構 (22~29号土坑)

29号土坑出土遺物

陶磁器 (第60図209、図版38) : 209は埋土出土である。肥前系磁器染付碗で、裏底に「大明」銘を染付けている。

木製品 (第73図43・44、図版47) : すべて埋土出土である。43は箸である。44は曲物底板である。

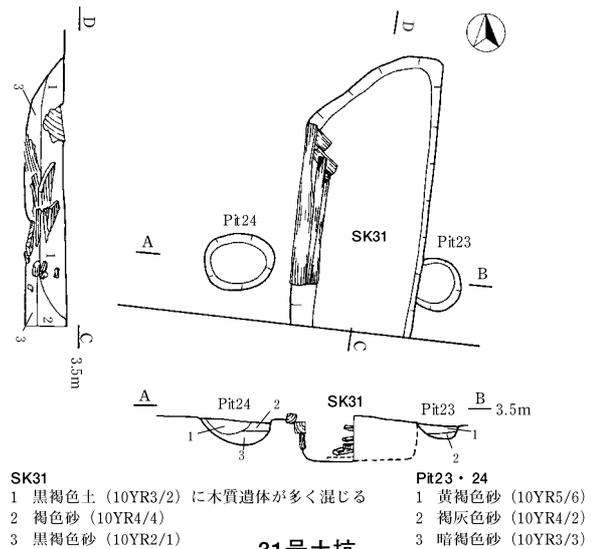


30号土坑 (第34図)

MA50区で検出された。平面は楕円形と考えられ、長軸約1m、短軸約40cm、深さは確認面から約10cmである。壁は緩やかに立ち上がる。

31号土坑 (第34図)

MF50区で検出された。平面は楕円形と考えられ、長軸約1.5m以上、短軸約70cm、深さは確認面から約25cmである。壁は急に立ち上がる。土坑の東西にはピットが付随している。

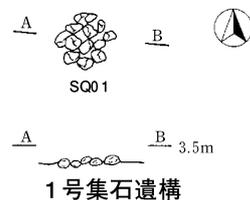


第34図 第Ⅵ層面検出遺構 (30・31号土坑)

集石遺構

1号集石遺構 (第35図)

ME50区で検出された。第Ⅵ層上面よりはやや下層から検出されている。直径約3~10cmの小礫が集積されていた。礫下部に掘り方などは確認されなかった。



第35図 第Ⅵ層面検出遺構 (1号集石遺構)

第Ⅵ層出土遺物

土器・陶磁器 (第60~63図210~247、図版39~42)

〔陶器〕 210~225は陶器である。

(皿類) 210は肥前系陶器灰釉溝縁皿で、釉は黄灰色を呈し、砂目積み痕があり、高台は無釉である。高台脇と高台内に削りを施している。211は肥前系陶器鉄釉皿で、砂目積み痕があり、内外面鉄釉を施し、高台は無釉である。高台脇と高台内に削りを施している。212は肥前系陶器灰釉皿で、釉は黄灰色を呈し、砂目積み痕があり、高台は無釉である。高台脇と高台内に削りを施している。213は肥前系陶器灰釉溝縁皿で、釉は黄灰色を呈し、砂目積み痕があり、畳付以外は全面施釉をする。高台内に削りを施している。214は肥前系陶器灰釉溝縁皿で、釉は黄白色を呈し、砂目積み痕があり、畳付以外は全面に施釉をする。高台内に削りを施している。215は肥前系陶器灰釉溝縁皿で、釉は褐灰色を呈し、砂目積み痕があり、体部下半から高台は無釉である。高台脇と高台内に削りを施している。216は肥前系陶器灰釉溝縁皿で、釉は黄灰色を呈し、砂目積み痕があり、体部下半から高台は無釉である。高台内に削りを施している。

畳付に底部切り離しの際の糸切り痕が残されている。217は肥前系陶器灰釉溝縁皿で、釉は黄灰色を呈し、砂目積み痕があり、高台は無釉である。高台内に削りを施している。218は肥前系陶器灰釉皿で、釉は緑灰色を呈し、蛇ノ目釉剥ぎを施す。高台は一部施釉されているが、大半は無釉である。また、高台内に削りを施している。219瀬戸美濃系陶器折縁皿で、釉は黄色を呈し、口縁端部に一条の溝、体部上半に放射状の陰刻が施されている。220は瀬戸美濃系陶器皿で、釉は黄色を呈し、口縁部端部に2条の細い溝、体部上半に2条の細い溝を施している。221は肥前系陶器灯明皿で、内外面に鉄釉を施し、底部は無釉である。底部切り離しの回転糸切り痕が残されている。

(托子) 222は肥前系陶器托子である。内外面に鉄釉を施し、外面の体部下半から高台は無釉である。

(瓶類) 223は肥前系陶器刷毛目瓶で、内外面に鉄釉を施し、外面は鉄釉を削り取り胎土見せによって、波状の刷毛目文を描いている。

(搗鉢) 224は肥前系陶器搗鉢で、搗目は引きっぱなしで、搗目端部に波状の櫛目が施されている。

(甕類) 225は肥前系陶器甕で、内面に格子目の当て具痕が残されている。

〔磁器〕 226～246は磁器である。

(碗類) 226は肥前系磁器染付碗で、外面に一重網目文、内面に鋸歯状の文様を染付けている。227は肥前系磁器染付碗で、外面に草文を染付けている。228は肥前系磁器染付碗で、外面に草花文を染付けている。229は肥前系磁器染付碗で、外面に一重網目文を染付けている。230は肥前系磁器染付碗で、外面に柳文を染付けている。231は肥前系磁器染付碗で、外面は草花文と蝶を染付けている。232は肥前系磁器染付碗で、外面は蝶を染付けている。233は肥前系磁器白磁碗で、器高の低い器形で、畳付に砂が付着している。234は中国産磁器呉須染付碗で、外面に牡丹と草花を染付けている。

(皿類) 235は肥前系磁器色絵皿で、内面に赤色の絵具で上絵付けしている。236・237は肥前系磁器染付皿で、内面に梅花文を染付けている。236は二次加熱を受けている。238は肥前系磁器染付皿で、内面に山水文を染付けている。畳付に砂が付着している。239は肥前系磁器染付皿で、内面に二重圏線を2条染付け、蛇ノ目釉剥ぎを施している。畳付には砂が付着している。240は肥前系磁器染付皿で、内面に格子文を染付け、蛇ノ目釉剥ぎを施している。241は肥前系磁器白磁皿で、蛇ノ目釉剥ぎを施し、外面の体部下半と高台は無釉である。242は肥前系磁器染付皿で、外面に花唐草文を染付けている。243は肥前系磁器染付皿で、外面に花唐草文、内面に草花文を染付けている。

(香炉) 244は肥前系磁器青磁香炉で、外面と口縁部内面に青磁釉を施し、内面体部下半は無釉である。

(人形) 245は肥前系磁器色絵人形で、人形の頭部分で、赤色と黒色で上絵付けしている。246は肥前系磁器色絵人形で、赤色で上絵付けしている。

〔土器〕 247は土器である。

(瓦質土器) 247は瓦質土器の香炉で、胎土は黒色を呈し、円形と刺突の陰刻が放射状に施されている。

陶磁器の年代はおおむね17世紀代であり、第Ⅵ層はこの時期に形成された整地層と考えられる。

土製品 (第67・68図34～45、図版45)

34～45は土錘である。38は須恵質で、その他は土師質である。34・35は小型、36～40は中型、41～45は大型である。40には円形の陰刻がある。34・36・39・45は貫通孔の端が欠損しており、使用による痕跡と考えられる。

木製品 (第73図45・46、図版47・48)

45は差菌下駄の菌である。46は栓である。

石製品 (第75図11、図版48)

11は粘板岩製の硯である。上端・下端・左部分が破損している。

瓦 (第76図7、図版49)

7は棧瓦で、灰色を呈するいぶし瓦である。

金属製品 (第79図32～39、図版50)

32～34は真鍮製の煙管で、32は雁首、33・34は吸口である。32・33はⅢ期、34はⅣ期に該当する(古泉1987)。35～37は鉄製の釘である。38は鉄製の鏝である。39は鉄製の鎌と考えられる。

銭貨 (第82図30～36、図版51)

30・32～35は銅製、31は鉄製の寛永通寶である。銭文の書体等から、30～31は古寛永(初鑄1636年)、32～33は新寛永(初鑄1697年)、34は新寛永の「秋田川尻銭」(1738年より1745年にかけて鑄銭)、35は新寛永の「文銭」(初鑄1668年)の分類に該当する。36は熙寧元寶(北宋、初鑄1068年)である。

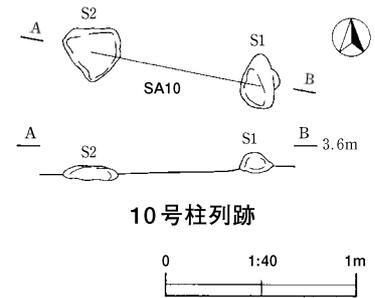
(4) 第Ⅶ・Ⅷ層面検出の遺構・遺物

第Ⅶ・Ⅷ層面からは、柱列跡1列(SA10)、溝跡3条(SD33～35)、土坑3基(SK32～34)、集石遺構4基(SQ02～05)、敷石状遺構1面、ピット4基(Pit27～30)が検出された(第12図、図版5・17～19)。MA50区から東側は第Ⅶ層面、MB50から西側は第Ⅷ層面が遺構検出面となる。遺物は、遺構内および第Ⅶ・Ⅷ層から、土器・陶磁器、土製品、木製品、石製品、瓦、金属製品が出土した。

柱列跡

10号柱列跡(第36図)

LZ50区で検出された。東西方向の柱列跡で、2基の礎石からなる。柱間隔は90cmである。方向は西で約11度北に振れている。礎石は直径約20～30cmの扁平な礫で、礎石下には掘り方などは確認されなかった。



10号柱列跡

溝跡

第36図 第Ⅶ・Ⅷ層面検出遺構
(10号柱列跡)

33号溝跡(第37図、図版17)

MB50区で検出された。南北方向の溝跡で、長さが2.6m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約8度東へ振れている。溝の側壁間の幅は約40cm、深さは確認面から約10cmで、断面は鍋底状を呈する。側壁に板材が遺存しており、内側に杭を打ち込み補強している。溝両側には掘り方が確認される。東側壁では掘り方に直径約10～20cmの礫を詰めて補強していた痕跡がみられた。34号溝跡と重複し、これよりも新しい。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は17世紀中葉と考えられる。

33号溝跡出土遺物

陶磁器(第64図248～250、図版42)：すべて埋土出土である。248は肥前系陶器灰釉碗で、口紅を施している。249は肥前系磁器染付皿で、内面に文様を染付けている。250は肥前系磁器染付皿で、内面に文様を染付けている。

34号溝跡(第37図、図版18)

MB～MC50区で検出された。東西方向に4.7m確認され、その後南に90度屈曲している。そこからさらに、南北方向に1.5m確認され、調査区外へ延びる。東西方向は西で約7度北へ振れ、南北方向は北で約7度東へ振れている。溝の幅は約25～40cm、深さは約10cmで、断面は鍋底状を呈する。溝の底面および埋土には直径約2～20cmの礫が敷き詰められている。33号溝跡と重複し、これより古い。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は17世紀前葉と考えられる。

34号溝跡出土遺物

陶磁器(第64図251、図版42)：251は埋土出土である。肥前系陶器灰釉碗である。

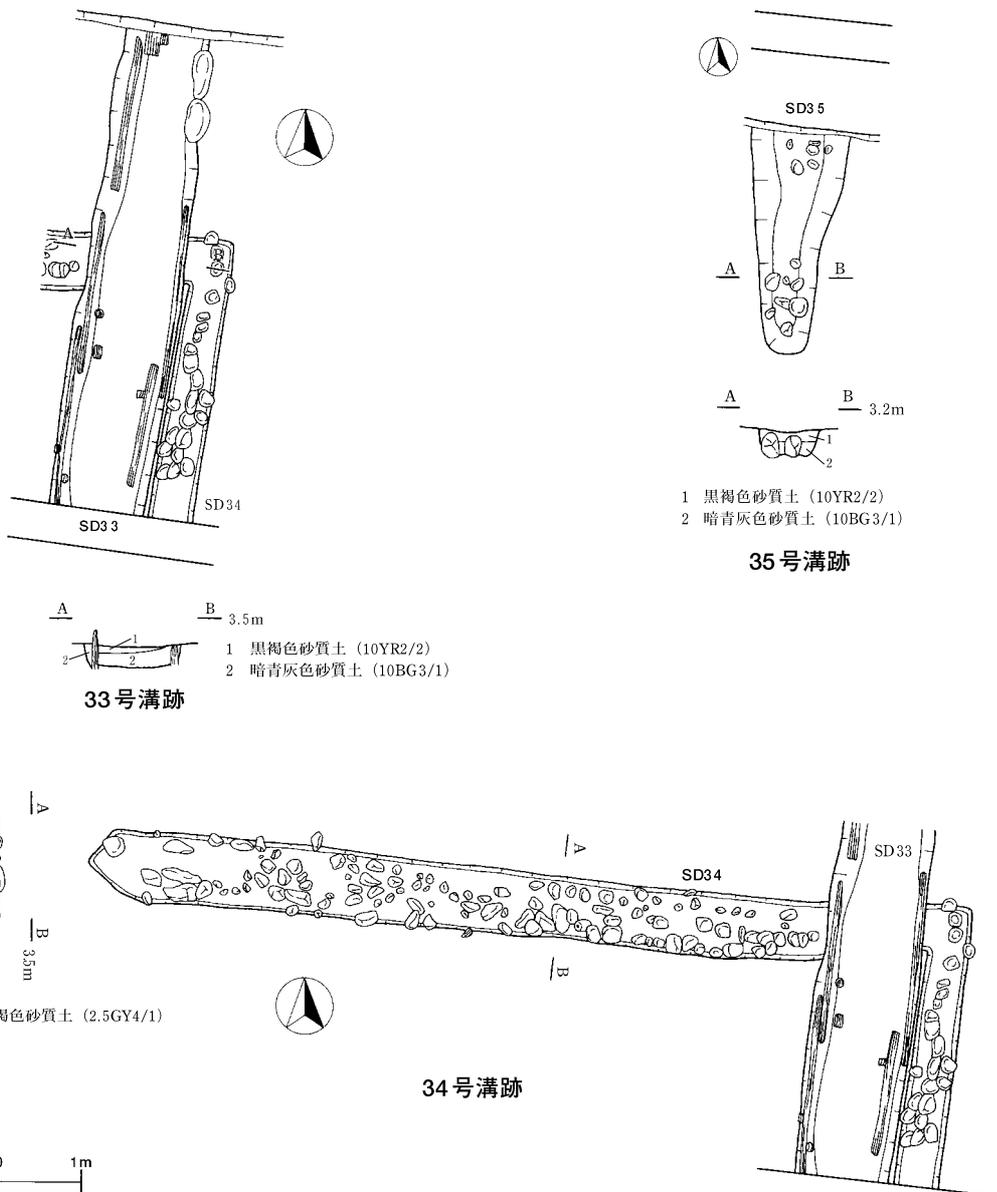
土製品(第68図46、図版45)：46は埋土出土で、大型で土師質の土錘である。菊文が陰刻されている。

35号溝跡 (第37図、図版18)

MF50区で検出された。南北方向の溝跡で、1.2 m確認され、調査区外へ延びる。方向は北で約5度東へ振れている。溝の幅は約30~50 cm、深さは約10 cmで、断面は逆台形を呈する。溝の底面および埋土には直径約2~10 cmの礫がみられる。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は17世紀初頭と考えられる。

35号溝跡出土遺物

陶磁器 (第64図252、図版42) : 252は埋土出土である。肥前系陶器皿で、釉は緑灰色を呈し、高台は無釉である。高台内に削りを施し、畳付け付近には砂の付着がみられる。



第37図 第Ⅶ・Ⅷ層面検出遺構 (33~34号溝跡)

土坑

32号土坑 (第38図、図版18)

LY50区で検出された。平面は隅丸方形で、直径約12cm、深さは確認面より約25cmである。土坑内に、長軸90cm、短軸70cmの木枠が設けられており、土坑底面は平坦である。木枠外側には掘り方が確認された。また、木枠内に板材が2重に伏せられた状況で検出された。板材は上層では南北方向、下層では東西方向に配置されていた。

33号土坑 (第38図)

MA50区で検出された。平面は楕円形で、長軸約70cm以上、短軸約65cm、深さ約20cmである。底面はやや凹凸があり、壁はやや急に立ち上がる。

34号土坑 (第38図)

MF50区で検出された。平面は不整形で、直径は約1m、深さ約15cmである。断面は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。陶磁器の年代より、遺構廃絶年代は17世紀前葉と考えられる。

34号土坑出土遺物

陶磁器 (第64図253～255、図版42) : すべて埋土出土である。253は肥前系陶器灰釉溝縁皿で、釉は黄灰色を呈している。254は肥前系陶器灰釉皿で、釉は黄灰色を呈し、砂目積み痕があり、畳付以外は全面に施釉をする。高台内に削りを施している。255は肥前系磁器染付碗で、外面に文様を染め付けている。虫食いがみられ、畳付は無釉である。

集石遺構

2号集石遺構 (第39図、図版19)

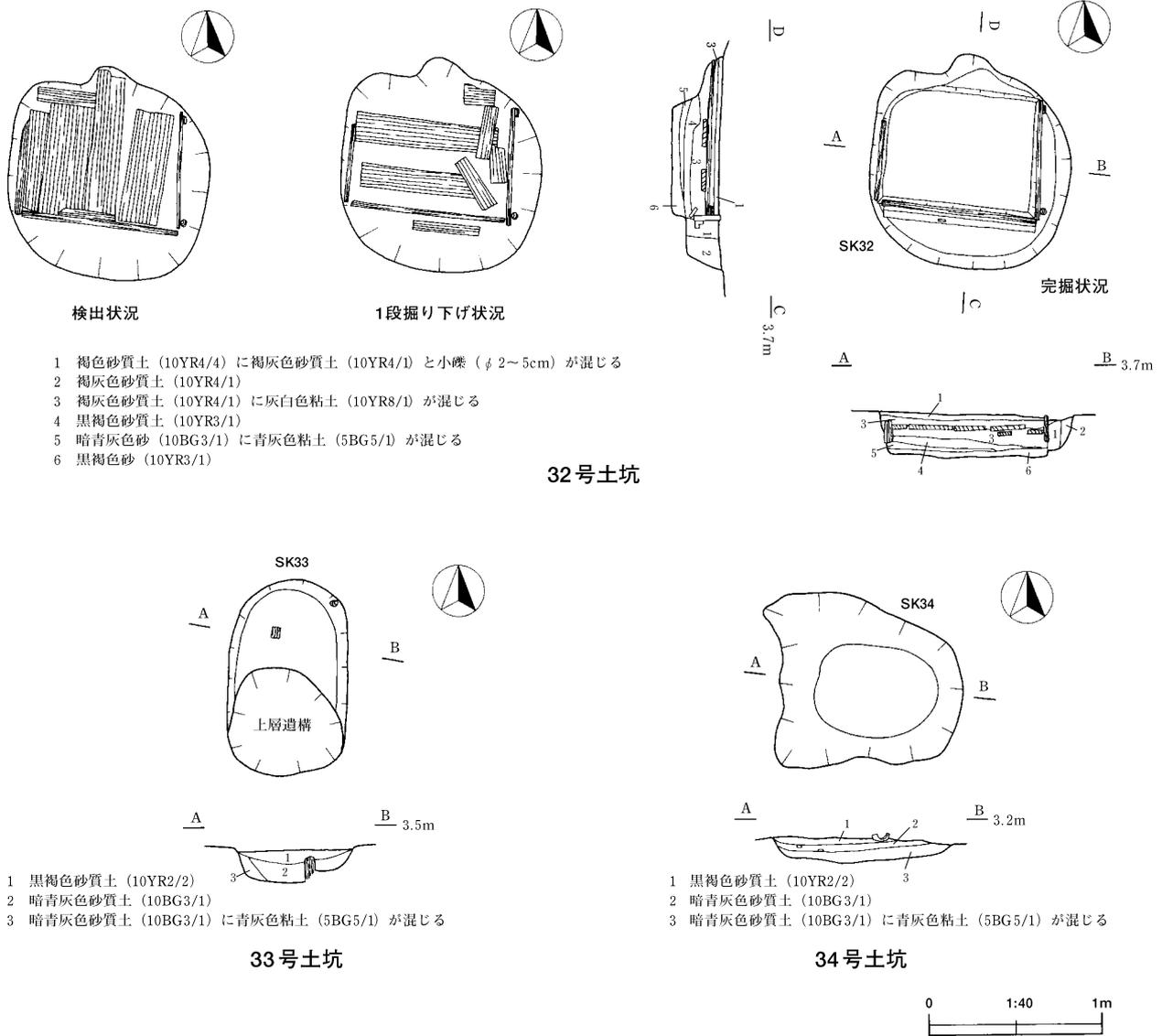
MD50区で検出された。長軸約1.4m、短軸約80cm以上の範囲に、直径約5～25cmの礫が集中して確認された。周囲に掘り方などは確認されなかった。陶磁器の年代より、遺構構築年代は17世紀初頭と考えられる。

2号集石遺構出土遺物

陶磁器 (第64図256・257、図版43) : 集石に混じって出土した。256は肥前系陶器灰釉溝縁皿で、釉は灰色を呈し、砂目積み痕があり体部下半から高台は無釉である。高台脇と高台内に削りを施している。257は肥前系陶器鉄釉瓶で、外面に鉄釉を施し、底部と内面は無釉である。底部には砂が付着している。

3号集石遺構 (第39図)

MD50区で検出された。長軸約1m、短軸約50cmの範囲に直径約5～15cmの礫が集中して確認された。周囲に掘り方などは確認されなかった。



- 1 褐色砂質土 (10YR4/4) に褐灰色砂質土 (10YR4/1) と小礫 (φ 2~5cm) が混じる
- 2 褐灰色砂質土 (10YR4/1)
- 3 褐灰色砂質土 (10YR4/1) に灰白色粘土 (10YR8/1) が混じる
- 4 黒褐色砂質土 (10YR3/1)
- 5 暗青灰色砂 (10BG3/1) に青灰色粘土 (5BG5/1) が混じる
- 6 黒褐色砂 (10YR3/1)

32号土坑

33号土坑

34号土坑

第38図 第Ⅶ・Ⅷ層面検出遺構 (32~34号土坑)

4号集石遺構 (第39図)

ME50区で検出された。直径約30 cmの範囲に直径約5~10 cmの礫が集中して確認された。周囲に掘り方などは確認されなかった。

5号集石遺構 (第39図)

ME50区で検出された。長軸約1 m、短軸約70 cmの範囲に直径約5~20 cmの礫が集中して確認された。周囲に掘り方などは確認されなかった。

敷石状遺構 (第40図、図版6・17)

LV~LW50区で検出された。東西方向は14 m確認された。南北方向は調査区全面に1.6 m確認され調査区外へ延びる。直径約1~10 cmの小礫が敷き詰められていた。これらの小礫は、第Ⅶ層とした暗褐色砂に含まれているものである。この第Ⅶ層下には第Ⅷ層とした粘土と砂の互層が堆積している。この第Ⅷ層は、層厚約2~3 cm、幅約20~40 cmの単位で粘土と砂が交互に確認され、全体で約20~

50 cmの堆積が確認された。これらは砂と粘土を人為的に交互に造成したものと考えられる。なお、第Ⅶ層はMA区まで、第Ⅷ層は調査区全面に確認された。陶磁器の年代より、遺構構築年代は、16世紀末～17世紀初頭と考えられる。

敷石状遺構出土遺物

敷石状遺構に伴う出土遺物は、第Ⅶ層出土であり、第Ⅶ層出土遺物の項で後述する。

焼土遺構

第1号焼土遺構 (第41図、図版19)

MB～MC50区で検出された。平面は楕円形と考えられ、長軸約2.2 m以上、短軸約70 cm以上、深さは約20 cmである。西側に直径約5～20 cmの礫の集石がみられ、その周辺は浅い皿状の窪みが確認された。この浅い皿状の窪みに赤褐色の焼土が含まれている。

第2号焼土遺構 (第41図、図版19)

MB50区で検出された。平面は円形で、直径約50 cm、深さ約5 cmの浅い皿状である。壁は緩やかに立ち上がる。埋土には赤褐色の焼土が含まれている。

第3号焼土遺構 (第41図、図版19)

MC50区で検出された。平面は円形で、直径約50 cm、深さ約5 cmの浅い皿状である。壁は緩やかに立ち上がる。埋土には赤褐色の焼土が含まれている。

第4号焼土遺構 (第41図、図版19)

MB～MC50区で検出された。平面は円形で、直径約50 cm、深さ約5 cmの浅い皿状である。壁は緩やかに立ち上がる。埋土には赤褐色の焼土が含まれている。

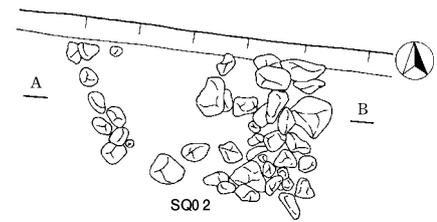
第Ⅶ層出土遺物

第Ⅶ層は、LY区から東側のみに確認され、敷石状遺構の範囲と同位置に広がっている。

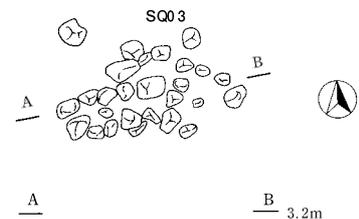
土器・陶磁器 (第64図258～262、図版43)

〔陶器〕 258～260は陶器である。

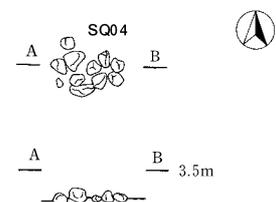
(Ⅲ類) 258は瀬戸美濃系陶器灰釉皿で、黄色の灰釉が



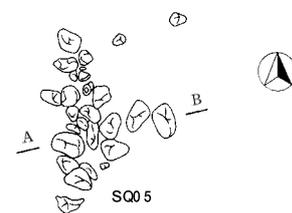
2号集石遺構



3号集石遺構

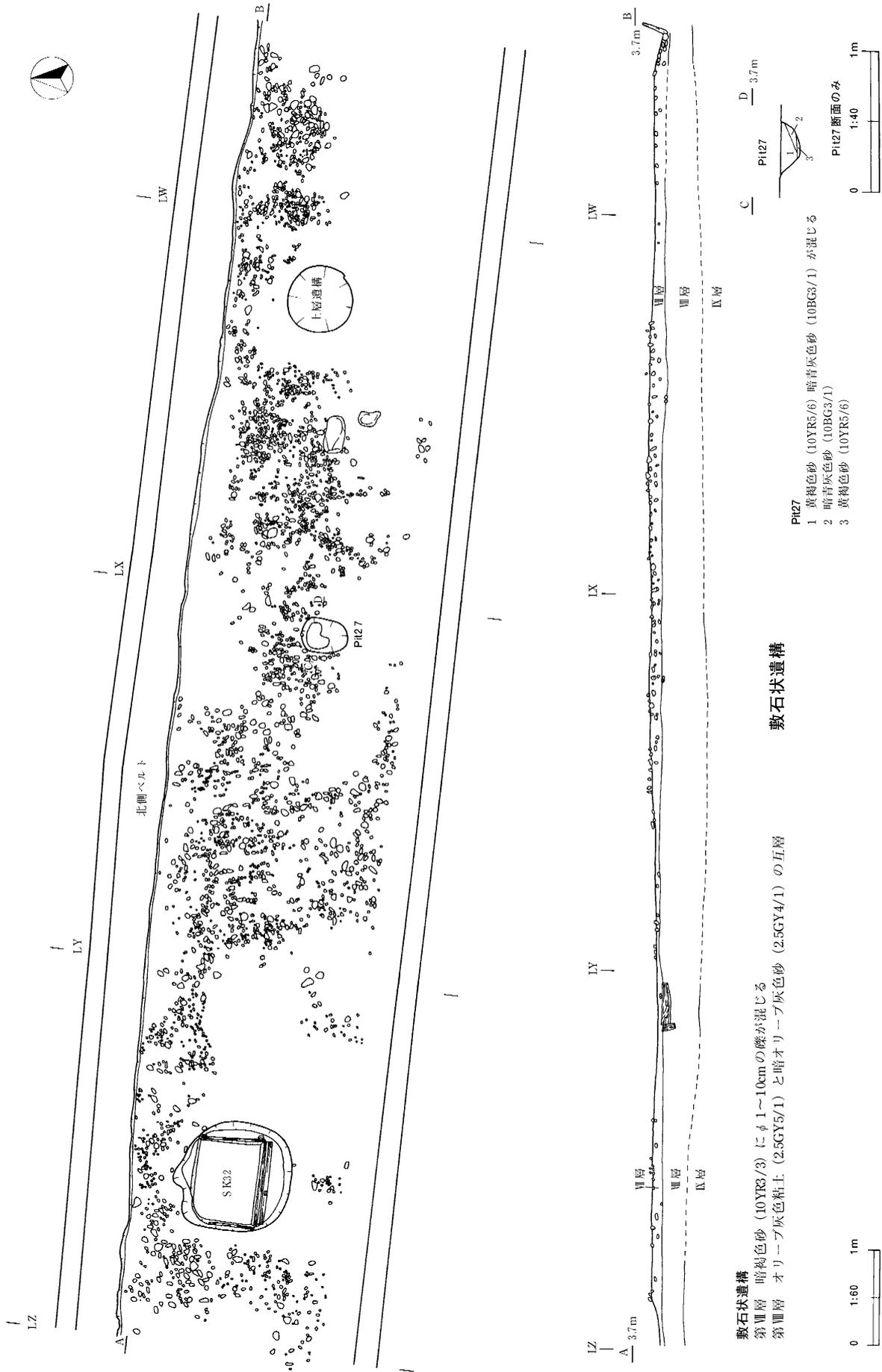


4号集石遺構

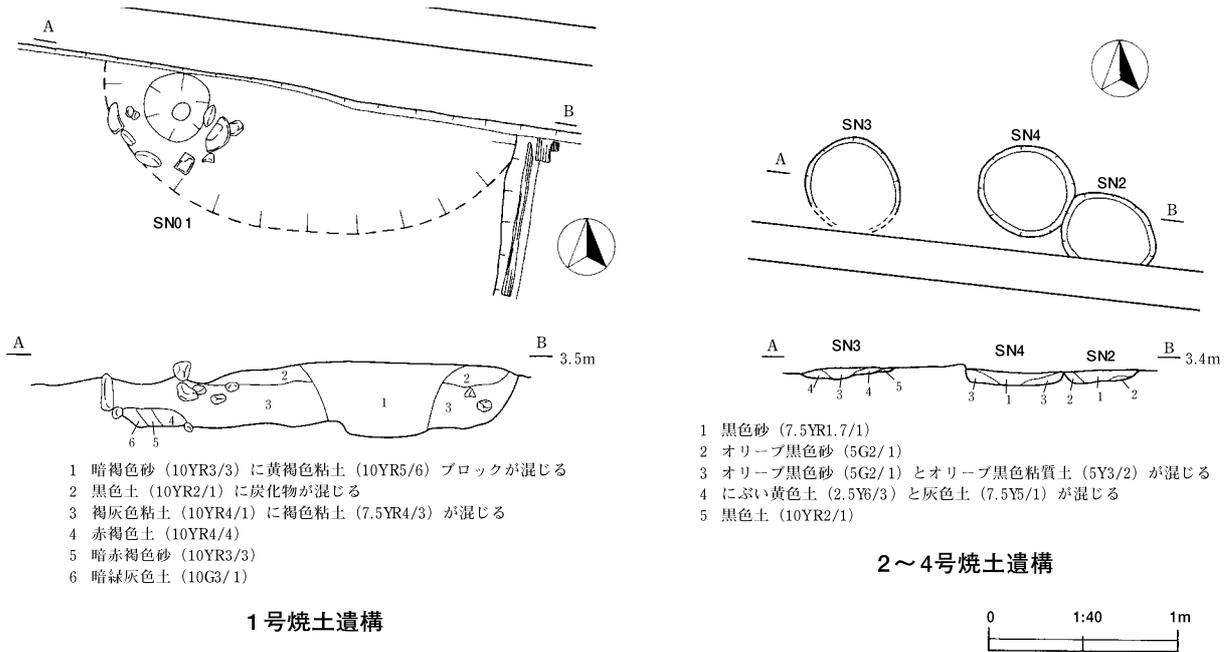


5号集石遺構

第39図 第Ⅶ・Ⅷ層面検出遺構
(2～5号集石遺構)



第40図 第Ⅶ・Ⅷ層面検出遺構 (敷石状遺構)



第41図 第Ⅶ・Ⅷ層面検出遺構 (1～4号焼土遺構)

施されている。259は肥前系陶器鉄絵皿で、胎土目痕があり、釉は乳白色を呈し、高台は無釉である。高台脇と高台内に削りを施している。内面に鉄絵で植物文を描いている。

〔香炉〕260は肥前系陶器鉄釉香炉である。内外面に鉄釉を施し、内外面口縁部に鉄釉を二度掛けしている。

〔磁器〕261・262は磁器である。

〔皿類〕261は中国産漳州窯系磁器呉須染付端反皿で、呉須で草花を染付けている。262は中国産磁器白磁輪花皿である。

陶磁器の年代は、おおむね16世紀末～17世紀初頭で、第Ⅶ層はこの時期に形成された整地層と考えられる。したがって、敷石状遺構の構築年代も同様の年代である。

土製品 (第68図47～48、図版45)

47・48は中型で土師質の土錘である。

木製品 (第73図47、図版48)

47は箸である。

金属製品 (第80図40～42、図版50)

40・41は鉄製の釘である。41は頭巻釘である。42は真鍮製の煙管吸口で、Ⅰ～Ⅲ期に該当する(古泉1987)。

第Ⅷ層出土遺物

土器・陶磁器 (第65図263～281、図版43～44)

〔陶器〕 263～274は陶器である。

(碗類) 263は中国産漳州窯系陶胎染付端反碗である。呉須で内面に草花文を染付けている。胎土は軟質で、黄白色を呈している。264は肥前系陶器鉄絵皿で、内外面に乳白色の藁灰釉を施し、鉄絵を描いている。265は肥前系陶器鉄絵皿で、内外面に灰釉を施し、植物文を鉄絵で描いている。266は肥前系陶器鉄絵皿で、胎土目痕があり、内外面に乳白色の藁灰釉を施し、植物文を鉄絵で描いている。267は肥前系陶器皿で、内外面に乳白色の藁灰釉を施している。

(小坏) 268は肥前系陶器小坏で、底部は無釉である。底部に切り離しの回転糸切り痕が残されている。

(皿類) 269・270は瀬戸美濃系陶器志野丸皿で、口縁部内面に呉須で染付を施している。271は瀬戸美濃系陶器皿で、内面に緑黄色の釉を施し、菊花の印花文を施している。272は瀬戸美濃系陶器皿で、胎土目痕がみられ、外面に黄色の釉を施し、高台は無釉である。

(搦鉢) 273は肥前系陶器搦鉢で、口縁部内外面に鉄釉を施している。

(甕類) 274は肥前系陶器甕で、外面に鉄釉を施し、縄突帯がある。内面は、同心円文の当て具痕が残されている。

〔磁器〕 275～280は磁器である。

(碗類) 275は中国産漳州窯系磁器端反碗で、呉須で内外面に文様を染付けている。胎土は硬質で白色を呈している。276は中国産漳州窯系磁器染付碗で、呉須で内外面に文様を染付けている。胎土は硬質で白色を呈している。277は中国産磁器染付碗で、呉須で内外面に文様を染付けている。胎土は硬質で灰色を呈し、釉はやや黄緑色を帯びた透明釉である。

(皿類) 278は中国産磁器染付皿である。呉須で内面に文様を染付けている。胎土は硬質で灰白色を呈している。279は中国産漳州窯系白磁皿で、胎土はやや軟質で、釉は乳白色を呈している。280は中国産白磁皿で、高台は内傾し、シャープな作りである。豊付以外は施釉しており、釉は灰白色を呈している。

〔土器〕 281は土器である。

(香炉) 281は瓦質土器香炉で、底面には三足脚がついていた痕跡が残されている。外目には菊の印花文が施されている。

陶磁器の年代は、280は16世紀前半、271が16世紀後半とやや古いが、おおむね16世紀末～17世紀初頭のものが多く、第Ⅷ層はこの時期に形成された整地層と考えられる。

土製品 (第68図49～53、図版45)

49～53は土師質の土錘である。49～51は中型で、52・53は大型である。49は貫通孔の端が欠損しており、使用による痕跡と考えられる。

木製品 (第73図48～51、図版48)

48は椀である。内外面に赤漆が塗布されている。49～51は箸である。

石製品（第75図12、図版48）

12は粘板岩製の硯である。下端・右部分が破損している。

瓦（第76図8、図版49）

8は丸瓦で、灰色を呈するいぶし瓦である。胎土は砂が多量に混じり、白色砂がラミナ状に混じる。裏面には布目圧痕が残されている。

金属製品（第80図43・44、図版50）

43・44は鉄製の釘である。43は折釘で、44は角釘である。

(5) その他の遺物

上述の遺物以外に、第Ⅳ～Ⅵ層面において、動物遺存体が出土している(図版51-⑤・⑥)。代表的なもののみ報告を行う。

1はⅤ層出土で、鹿角である。先端を意図的に切断している。2は第Ⅵ層面検出の28号土坑埋土出土で、鹿角である。発育の悪い鹿角で、先端に擦痕がみられる。3は第Ⅳ層出土で、犬の右上腕骨である。近位端側は意図的に割られたと考えられるスパイラルフラクチャーがみられる。4は第Ⅴ層面検出の13号土坑埋土出土で、鳥類の左橈骨である。5は第Ⅵ層出土で、シジミである。6は第Ⅳ層出土で、サザエである。7は第Ⅴ層出土で、サルボウである。8は第Ⅳ層出土で、ハマグリである。9は第Ⅳ層面検出で、7号土坑埋土出土のアワビである。

(6) 出土遺物属性表および実測図

表3～13、第42～82図に出土遺物の属性表および実測図を掲載した。表3～13の凡例は下記のとおりである。

凡例

- 1 土器・陶磁器、土製品、木製品、石製品、瓦、金属製品、銭貨の基本分類ごとに番号を付与した。
- 2 図番号は、実測図の番号と一致している。
- 3 土器・陶磁器について、土器・陶器・磁器で分類を行った。また、施釉や絵付けにより、染付・青磁・白磁・色絵等の細分が可能であり、「特徴」欄に記載した。
- 4 土器・陶磁器では、国外産の貿易陶磁については、大きく中国系等の国別を示し、国内産については肥前系、瀬戸美濃系、京信楽系等、主要な大規模生産地(地方)に関し、その生産地産のものを主として、それに直接技術的影響を受けた周辺及び地方の窯のものも含め「系」として示した。また、より具体的生産地として窯を限定できるものについては、中国産の漳州窯、秋田県の在地窯の白岩窯や寺内窯のように示した。
- 5 土器・陶磁器の年代については、各生産地における編年区分を用いるとともに、より年代を限定できるものについては、西暦で年代で示した。また、窯を限定できるものについては、生産・操業期間に基づき年代を示した。
- 6 陶磁器類の編年区分については、主要生産地については生産地の編年区分を示した。肥前系については大橋氏による編年の時期区分を示し、瀬戸美濃系については大窯編年の時期区分を示した。なお、肥前系陶器の時期区分は次のとおりである(九州近世陶磁学会2000)。
I期 1580～1610年代 (I-1期 1580～1594年頃、I-2期 1594年頃～1610年代に細分)
II期 1610～1650年代
(磁器についてはII期から開始。II-1期 1610～1630年、II-2期 1630～1650年代に細分)
III期 1650～1690年代
IV期 1690～1780年代
V期 1780～1860年代
- 7 煙管の分類については、古泉による分類(古泉1987)に基づき行った。

表3 土器・陶磁器属性一覧①

番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	分類	器種	生産地	年代	編年区分	特徴
1	第42図	SA01 P1 掘り方		磁器	香炉か瓶	肥前系	18C代	Ⅳ期	青磁
2	第42図	SD01 埋土		磁器	碗	肥前系	1780～1810年代	Ⅴ期	色絵
3	第42図	SD01 埋土		磁器	蓋	肥前系	1820～1860年代	Ⅴ期	染付、端反碗の蓋、焼継痕
4	第42図	SD01 埋土		磁器	蓋	不明	1820～1860年代		染付、端反碗の蓋、焼継痕
5	第42図	SD02 埋土		陶器	皿	肥前系	1780～1860年代	Ⅴ期	灰釉、蛇ノ目釉剥ぎ
6	第42図	SD02 掘り方		磁器	碗	肥前系	1820～1860年代	Ⅴ期	染付、焼継痕
7	第42図	SD02 掘り方		磁器	碗蓋	肥前系	18C代	Ⅳ期	染付
8	第42図	SD02 埋土		磁器	蓋	不明	1820～1860年代		染付
9	第42図	SD03 埋土		陶器	蓋(平蓋)	寺内窯	18C末～19C中葉		鉄釉
10	第42図	SD03 埋土		陶器	鉢	白岩窯	18C後葉～19C中葉		外面鉄釉、内面なまこ釉
11	第42図	SD03 埋土		磁器	甕	不明			内外面鉄釉、上半部鉄釉二度掛け
12	第43図	SD03 埋土		磁器	碗	肥前系	18C後半	Ⅳ期	染付、コンニャク印判の五弁花
13	第43図	SD03 埋土		磁器	碗	肥前系	18C後半～19C前半	Ⅳ～Ⅴ期	染付
14	第43図	SD03 埋土		磁器	碗(広東碗)	肥前系	1780～1810年代	Ⅴ期	染付
15	第43図	SD03 埋土		磁器	碗(筒型碗)	肥前系	18C後半	Ⅳ期	染付
16	第43図	SD03 埋土		磁器	小坏	肥前系	18C後半	Ⅳ期	染付
17	第43図	SD03 埋土		磁器	蓋	不明	1820～1860年代		染付、端反碗の蓋、焼継痕
18	第43図	SD04 埋土		陶器	搦鉢	不明			
19	第43図	SD04 埋土		磁器	碗	肥前系	18C後半	Ⅳ期	染付
20	第43図	SD04 埋土		磁器	碗	肥前系	1780～1810年代	Ⅴ期	青磁
21	第43図	SD04 掘り方		磁器	皿	肥前系	1820～1860年代	Ⅴ期	染付
22	第43図	SD04 掘り方		磁器	瓶	肥前系	19C前半	Ⅴ期	染付
23	第43図	SD04 掘り方		磁器	戸車	不明	19C		—
24	第43図	SD04 埋土		土器	かわらけ(皿)	在地系土器			型づくり手づくね
25	第44図	SD04 埋土		土器	焙烙	在地系土器			
26	第44図	SD05 埋土		陶器	碗	不明			
27	第44図	SD05 埋土		磁器	香炉	肥前系	18C代	Ⅳ期	青磁
28	第44図	SD06 埋土		磁器	碗	瀬戸美濃系	19C前半		染付
29	第44図	SD06 掘り方		磁器	碗	肥前系	19C前半	Ⅴ期	染付
30	第44図	SD06 埋土		磁器	皿	肥前系(有田産)	18C前半	Ⅳ期	染付、「大明成化年製」銘、ハリ支え痕、焼継痕
31	第44図	SD07 埋土		陶器	鉢	肥前系	18C代	Ⅳ期	刷毛目
32	第44図	SE01 埋土		磁器	碗	瀬戸美濃系	19C後半		西洋コバルトで染付
33	第44図	SE01 埋土		磁器	皿	瀬戸美濃系	19C後半		西洋コバルトで染付、輪花皿
34	第44図	SE01 掘り方		磁器	皿	肥前系	18C後半～19C前半	Ⅳ～Ⅴ期	染付、蛇の目凹形高台
35	第44図	SK01 埋土		陶器	搦鉢	不明			
36	第45図	SK02 埋土		磁器	皿	肥前系	18C後半～19C前半	Ⅳ～Ⅴ期	染付
37	第45図	SK03 底面		陶器	片口	白岩窯	18C後葉～19C中葉		鉄釉、なまこ釉
38	第45図	SK03 底面		陶器	壺	不明			内外面鉄釉、外面上半部鉄釉二度かけ
39	第45図	SK05 埋土		磁器	碗	肥前系	19C前半	Ⅴ期	染付
40	第45図	SK05 埋土		磁器	皿	肥前系(有田産)	1730～1750年代	Ⅳ期	色絵、「富貴長春」銘
41	第45図	SK06 埋土		磁器	碗(端反碗)	肥前系	1820～1860年代	Ⅴ期	染付
42	第45図	SK07 埋土		陶器	蓋	寺内窯	18C末～19C中葉		灰釉、刷毛目、鉄絵
43	第45図	SK07 埋土		磁器	碗(端反碗)	肥前系	1820～1860年代	Ⅴ期	染付
44	第45図	SK07 埋土		磁器	皿	肥前系	18C後半	Ⅳ期	染付
45	第45図	SK07 埋土		磁器	小坏	肥前系	18C後半	Ⅳ期	染付
46	第45図	SK07 埋土		土器	焙烙	在地系土器			
47	第46図	Ⅳ層	MC50	陶器	碗	不明			灰釉、銅緑釉
48	第46図	Ⅳ層	LZ50	陶器	蓋	寺内窯	18C末～19C中葉		鉄釉
49	第46図	Ⅳ層	LY50	陶器	蓋	寺内窯	18C末～19C中葉		灰釉筒描
50	第46図	Ⅳ層	MA50	陶器	蓋	寺内窯	18C末～19C中葉		染付
51	第46図	Ⅳ層	LY50	陶器	蓋(平蓋)	寺内窯	18C末～19C中葉		鉄釉
52	第46図	Ⅳ層	MC50	陶器	瓶か茶入	不明			
53	第46図	Ⅳ層	MA50	陶器	土瓶	寺内窯	18C末～19C中葉		化粧掛け、鉄釉
54	第46図	Ⅳ層	LY50	陶器	鉢	不明			輪花
55	第46図	Ⅳ層	MB50	陶器	片口	不明			下端ケズリ調整、無釉
56	第46図	Ⅳ層	MA50	陶器	搦鉢	不明			内外面鉄釉
57	第47図	Ⅳ層	MA50	陶器	甕	不明			灰釉
58	第47図	Ⅳ層	LW50	磁器	碗	肥前系	18C代	Ⅳ期	染付、コンニャク印判
59	第47図	Ⅳ層	LY50	磁器	碗	肥前系	18C後半～19C前半	Ⅳ～Ⅴ期	染付、手書きの五弁花
60	第47図	Ⅳ層	LX50	磁器	碗	肥前系	18C代～19C前半	Ⅳ～Ⅴ期	染付
61	第47図	Ⅳ層	LZ50	磁器	碗	肥前系	19C前半	Ⅴ期	染付
62	第47図	Ⅳ層	LU50	磁器	碗	瀬戸美濃系	19C前半		染付
63	第47図	Ⅳ層	MB50	磁器	碗	瀬戸美濃系	1820～1860年代		染付
64	第48図	Ⅳ層	MA50	磁器	碗	瀬戸美濃系	19C前半		染付
65	第48図	Ⅳ層	MC50	磁器	碗	肥前系	19C後半		西洋コバルト
66	第48図	Ⅳ層	LY50	磁器	皿(輪花皿)	肥前系	19C前半	Ⅴ期	口紅
67	第48図	Ⅳ層	LX50	磁器	紅皿	肥前系	19C前半	Ⅴ期	白磁
68	第48図	Ⅳ層	MA50	磁器	鉢(角鉢)	肥前系	18C前半～中葉	Ⅳ期	染付、焼継痕
69	第48図	Ⅳ層	LU50	磁器	蓋	肥前系	1820～1850年代	Ⅴ期	染付
70	第48図	Ⅳ層	LY50	磁器	蓋(広東碗蓋)	肥前系	1780～1810年代	Ⅴ期	染付
71	第48図	Ⅳ層	LU50	磁器	蓋	瀬戸美濃系			染付

第3章 調査の方法と成果
(6) 属性表・実測図

表4 土器・陶磁器属性一覧②

番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	分類	器種	生産地	年代	編年区分	特徴
72	第48図	IV層	LU50	磁器	蓋	肥前系	18C代	IV期	染付
73	第49図	IV層	MA50	磁器	油壺	肥前系	18C後半~19C前半	IV~V期	染付
74	第49図	IV層	LY50	磁器	餌入	肥前系			白磁
75	第49図	IV層	LV50	磁器	人形	肥前系	17C後	IV期	色絵、猫形
76	第49図	IV層	LY50	磁器	人形	肥前系	19C前半	V期	色絵、猫型
77	第49図	IV層	LW50	磁器	戸車	不明	19C前半		
78	第49図	IV層	LU50	土器	灯火具 (ひょうそく)	在地系土器			
79	第49図	IV層	LX50	土器	灯火具 (ひょうそく)	在地系土器			
80	第49図	IV層	LU50	土器	灯火具 (ひょうそく)	在地系土器			
81	第49図	IV層	MC50	土器	土風炉	在地系土器			
82	第50図	SA04 P2掘り方		磁器	皿	肥前系	18C前半	IV期	染付
83	第50図	SB01 P2掘り方		磁器	皿	肥前系	18C代	IV期	白磁、蛇ノ目釉剥ぎ
84	第50図	SB01 P2掘り方		土器	灯火具 (ひょうそく)	在地系土器			
85	第50図	SB02 P2掘り方		陶器	鉢	肥前系	17C末~18C前半	IV期	刷毛目、銅緑釉
86	第50図	SB02 P1掘り方		磁器	碗	肥前系	18C前半	IV期	染付
87	第50図	SB02 P2掘り方		磁器	香炉	肥前系	18C前半	IV期	青磁
88	第50図	SB03 P1掘り方		磁器	紅皿	肥前系	18C後半	IV期	白磁
89	第50図	SB06 P2抜き取り		磁器	皿	肥前系	18C代	IV期	染付
90	第50図	SB06 P1抜き取り		磁器	皿	肥前系	18C代	IV期	染付
91	第50図	SD11埋土		陶器	人形	不明			銅緑釉
92	第50図	SD11埋土		磁器	碗	肥前系	18C代	IV期	染付、コンニャク印判
93	第50図	SD11埋土		磁器	瓶	肥前系	19C前半	V期	染付
94	第50図	SD12埋土		磁器	皿	肥前系	1750~1810年代	IV~V期	染付
95	第50図	SD13埋土		磁器	鉢	肥前系	18C後半	IV期	外面青磁、内面染付
96	第51図	SD14埋土		陶器	鉢	肥前系	18C代	IV期	刷毛目
97	第51図	SD15埋土		陶器	甕	肥前系	17C末~18C前半	IV期	刷毛目
98	第51図	SD15埋土		磁器	碗	瀬戸美濃系			染付、焼継痕
99	第51図	SD15埋土		磁器	皿	肥前系	18C前半	IV期	染付
100	第51図	SD15埋土		磁器	蓋	肥前系	18C代	IV期	染付、焼成失敗品
101	第51図	SD16埋土		陶器	皿	不明			輪花
102	第51図	SD16埋土		磁器	碗	肥前系	19C前半	V期	染付
103	第51図	SD16埋土		磁器	戸車	肥前系	19C前半	V期	
104	第51図	SD16埋土		土器	壺	在地系土器			
105	第51図	SD17埋土		陶器	鉢	肥前系	18C前半	IV期	刷毛目
106	第51図	SD18埋土		磁器	紅皿	肥前系	18C後半	IV期	白磁
107	第51図	SD18埋土		磁器	仏飯器	肥前系	18C後半	IV期	色絵
108	第51図	SD19埋土		磁器	碗	肥前系	18C前葉~中葉	IV期	染付
109	第51図	SD19埋土		磁器	皿	肥前系	18C後半~19C前半	IV~V期	染付、蛇ノ目凹形高台
110	第51図	SK08埋土上層		磁器	碗(広東碗)	肥前系	1810年代	V期	染付
111	第52図	SK08埋土上層		土器	焙烙	在地系土器			
112	第52図	SK09埋土		磁器	皿	肥前系	18C代	IV期	染付、蛇ノ目釉剥ぎ、高台無釉
113	第52図	SK09埋土		磁器	蓋	肥前系	1760~1780年代	IV期	外面、青磁染付
114	第52図	SK11埋土		陶器	皿	肥前系	18C後半	IV期	染付
115	第52図	SK12埋土		磁器	仏飯器	肥前系	1690~1780年代	IV期	染付
116	第52図	SK13埋土		磁器	碗	肥前系	1770~1810年代	IV~V期	染付
117	第52図	SK13埋土		土器	かわらけ(皿)	在地系土器			型づくり手づくね
118	第52図	SK14埋土		陶器	碗	不明			
119	第52図	SK14埋土		磁器	碗	肥前系	1750~1780年代	IV期	外面青磁、内面染付、「筒江」銘
120	第52図	SK14埋土		土器	かわらけ(皿)	在地系土器			型づくり手づくね
121	第52図	SK15埋土		磁器	皿	肥前系	18C代	IV期	染付
122	第53図	SK15埋土		土器	焙烙	在地系土器			
123	第53図	SK16埋土		陶器	片口	肥前系	18C前半	IV期	刷毛目
124	第53図	SK17埋土		陶器	皿	肥前系	1610~1630	II期	砂目積み痕
125	第53図	SK17埋土		陶器	鉢	不明			鉄釉、口縁部外面、内面に銅緑釉
126	第53図	SK17埋土		陶器	拵鉢	不明			
127	第53図	SK17埋土		土器	灯火具 (ひょうそく)	在地系土器			
128	第53図	SK17埋土		土器	灯火具 (ひょうそく)	在地系土器			
129	第53図	SK17埋土		土器	火入	在地系土器			
130	第53図	SK18埋土		土器	灯火具 (ひょうそく)	在地系土器			
131	第53図	SK19埋土		陶器	土瓶	寺内窯	18C末~19C中葉		鉄釉、銅と呉須で染付
132	第53図	SK21埋土		磁器	碗	肥前系	18C後半	IV期	染付、手描きの五弁花
133	第53図	SK21埋土		磁器	蓋	肥前系	18C後半	IV期	染付
134	第53図	Pit07埋土		陶器	碗	不明			
135	第53図	Pit07埋土		陶器	灯火具(受付皿)	不明			鉄釉
136	第54図	V層	MA50	陶器	碗	不明			灰釉に銅緑釉
137	第54図	V層	LX50	陶器	皿	白岩窯	18C後葉~19C中葉		外面灰釉、内面なまこ釉
138	第54図	V層	MA50	陶器	灯火具(受付皿)	不明			灰釉、被熱あり

表5 土器・陶磁器属性一覧③

番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	分類	器種	生産地	年代	編年区分	特徴
139	第54図	V層	MA50	陶器	灯火具(受付皿)	不明			無釉
140	第54図	V層	MB50	陶器	蓋	不明			外面鉄釉
141	第54図	V層	MD50	陶器	蓋	不明			
142	第54図	V層	MC50	陶器	蓋(平蓋)	寺内窯	18C末～19C中葉		鉄釉
143	第54図	V層	MA50	陶器	土瓶	不明			灰釉
144	第54図	V層	LU50	陶器	搦鉢	肥前系	18C代	IV期	
145	第54図	V層	ME50	陶器	甕	白岩窯	18C後葉～19C中葉		鉄釉、なまこ釉
146	第54図	V層	MD50	陶器	甕	肥前系	18C代	IV期	鉄釉、格子目の当て具痕
147	第54図	V層	MD50	陶器	人形	不明			狛犬、透明釉に銅緑釉
148	第55図	V層	MC50	陶器	人形	不明			大黒天、透明釉に銅緑釉
149	第55図	V層	LU50	陶器	脚付ハマ	不明			
150	第55図	V層	MD50	磁器	碗	肥前系	18C代	IV期	染付、コンニャク印判
151	第55図	V層	LU50	磁器	碗	肥前系	1670～1700年代	Ⅲ～IV期	染付、口紅
152	第55図	V層	MC50	磁器	碗	肥前系	18C代	IV期	染付
153	第55図	V層	LW50	磁器	碗	肥前系	18C後半～19C前半	IV～V期	染付、蛇ノ目釉剥ぎ
154	第55図	V層	MA50	磁器	碗	肥前系	18C前半	IV期	染付、コンニャク印判、「大明年製」銘
155	第55図	V層	LZ50	磁器	碗	肥前系	1680～1700年代	IV期	染付、「大明年製」銘
156	第55図	V層	MA50	磁器	碗(広東碗)	肥前系	1770～1800年代	IV期	染付
157	第55図	V層	MD50	磁器	皿	肥前系	18C前半	IV期	染付、漆継痕
158	第55図	V層	ME50	磁器	皿	肥前系	1750～1810	IV～V期	染付、コンニャク印判の五弁花
159	第56図	V層	MC50	磁器	皿	肥前系	18C代	IV期	染付、蛇ノ目釉剥ぎ
160	第56図	V層	LZ50	磁器	皿	肥前系	1680～1740年代	IV期	染付、蛇ノ目釉剥ぎ
161	第56図	V層	LU50	磁器	皿	肥前系	18C前半	IV期	染付、手書き五弁花
162	第56図	V層	LV50	磁器	小坏	肥前系	18C後半	IV期	色絵
163	第56図	V層	MD50	磁器	小坏	肥前系	18C前半	IV期	染付
164	第56図	V層	MA50	磁器	仏飯器	肥前系	1780～1860	V期	染付
165	第56図	V層	MA50	磁器	仏飯器	肥前系	18C代	IV期	
166	第56図	V層	MB50	磁器	水滴	肥前系			染付
167	第56図	V層	MD50	磁器	人形	肥前系			猿、白磁、顔に鉄釉、染付
168	第56図	V層	LY50	土器	かわらけ(Ⅲ)	在地系土器			
169	第56図	V層	LU50	土器	かわらけ(Ⅲ)	在地系土器			型づくり手づくね
170	第56図	V層	LU50	土器	かわらけ(Ⅲ)	在地系土器			型づくり手づくね
171	第56図	V層	MB50	土器	灯火具(受付皿)	在地系土器			
172	第56図	V層	MC50	土器	火鉢	在地系土器			
173	第57図	SA06 P2 抜き取り		磁器	碗	肥前系	1700～1740年代	IV期	染付、コンニャク印判
174	第57図	SB08 P1 抜き取り		磁器	皿	肥前系	18C前半	IV期	染付
175	第57図	SB09 P2 抜き取り		磁器	皿	肥前系	1750～1810年代	IV～V期	染付、コンニャク印判の五弁花
176	第57図	SB10 P3 抜き取り		磁器	碗	肥前系	18C初	IV期	染付、コンニャク印判
177	第57図	SB10 P2 掘り方		磁器	碗	肥前系	1650～1660年代	Ⅲ期	染付
178	第57図	SB10 P2 抜き取り		磁器	小坏	肥前系	18C後半	IV期	染付
179	第57図	SD20 埋土		磁器	碗	肥前系	1680～1700年代	Ⅲ～IV期	染付、口紅
180	第57図	SD21 埋土		陶器	片口	肥前系	18C前半	IV期	刷毛目
181	第57図	SD23 掘り方		陶器	皿	肥前系	1610～30年代	Ⅱ期	灰釉、砂目積み痕
182	第57図	SD25 埋土		陶器	鉢	肥前系	17C後半	Ⅲ期	刷毛目、鉄釉、銅緑釉
183	第57図	SD26 埋土		陶器	碗	肥前系	17C末～18C初	IV期	刷毛目
184	第57図	SD26 埋土		磁器	碗	肥前系	17C後半	Ⅲ期	染付
185	第57図	SD27 埋土		磁器	碗	肥前系	18C前半	IV期	染付
186	第57図	SD27 埋土		磁器	碗	肥前系	1640～1650年代	Ⅱ-2期	青磁、染付
187	第57図	SD28 掘り方		陶器	皿	肥前系	17C後半～18C前半	Ⅲ～IV期	内面鉄釉、外面灰釉
188	第57図	SD28 埋土		陶器	搦鉢	不明			円盤状に加工
189	第58図	SD28 掘り方		磁器	皿	肥前系	18C前半	IV期	染付
190	第58図	SD30 埋土		陶器	碗(腰銘碗)	瀬戸美濃系	18C末～19C初		藁灰釉、鉄釉
191	第58図	SD30 埋土		陶器	香炉	肥前系	1680～1740年代	Ⅲ～IV期	藁灰釉、染付
192	第58図	SD30 埋土		陶器	鉢	肥前系	17C後半	Ⅲ期	刷毛目、鉄釉
193	第58図	SD31 埋土		磁器	碗	不明			染付
194	第58図	SD31 埋土		磁器	蓋	不明			染付
195	第58図	SD31 埋土		陶器	瓶	白岩窯	18C後葉～19C中葉		内面鉄釉、外面なまこ釉
196	第58図	SK22 埋土		磁器	皿	肥前系	18C前半	IV期	染付、漆継痕
197	第58図	SK23 埋土		陶器	碗	京信楽系			鉄絵
198	第58図	SK23 埋土		陶器	蓋(平蓋)	不明			鉄釉
199	第58図	SK23 埋土		陶器	鉢	肥前系	17C後半	Ⅲ期	刷毛目、鉄釉
200	第59図	SK23 埋土		陶器	搦鉢	不明			
201	第59図	SK23 埋土		陶器	搦鉢	不明			
202	第59図	SK23 埋土		磁器	碗	肥前系	1700～1750年代	IV期	染付
203	第59図	SK23 埋土		磁器	皿	肥前系	1680～1740年代	Ⅲ～IV期	染付、蛇ノ目釉剥ぎ
204	第59図	SK23 埋土		磁器	皿	肥前系	17C後半～18C前半	Ⅲ～IV期	染付、蛇ノ目釉剥ぎ
205	第59図	SK23 埋土		磁器	皿	肥前系	1750～1810年代	IV～V期	染付、コンニャク印判の五弁花
206	第60図	SK23 埋土		磁器	皿	肥前系	18C前半	IV期	染付、「大明年製」銘、手書き五弁花
207	第60図	SK25 埋土		磁器	皿	肥前系	1780～1860年代	V期	染付
208	第60図	SK28 埋土		土器	風炉	在地系土器			
209	第60図	SK29 埋土		磁器	碗	肥前系	1650～1670年代	Ⅲ期	染付、「大明」銘
210	第60図	VI a層	MD50	陶器	皿	肥前系	1610～1620年代	Ⅱ期	灰釉、砂目積み痕

第3章 調査の方法と成果
(6) 属性表・実測図

表6 土器・陶磁器属性一覧④

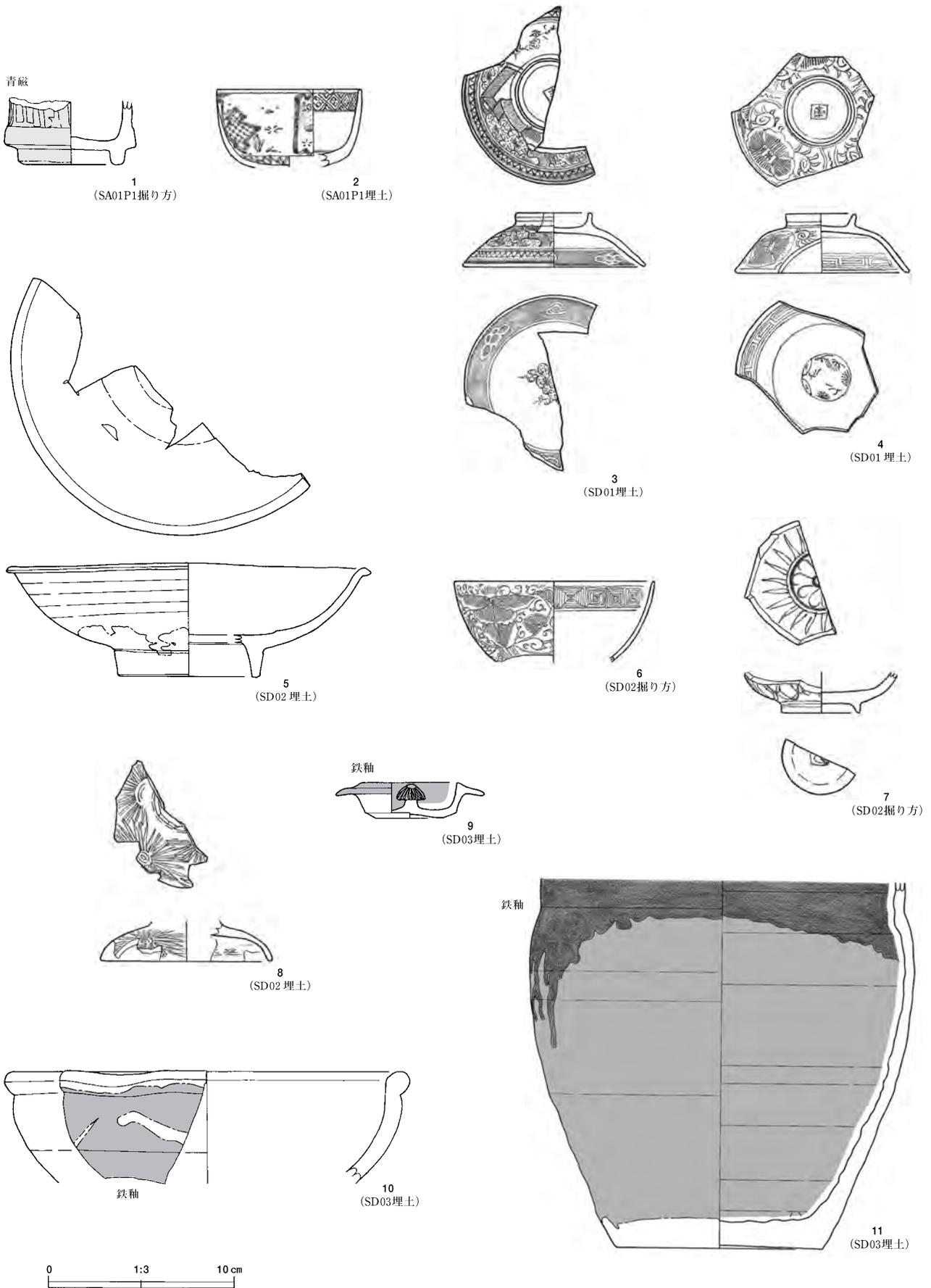
番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	分類	器種	生産地	年代	編年区分	特徴
211	第60図	Ⅵ a層	MD50	陶器	皿	肥前系	1610～1630年代	Ⅱ期	鉄釉、砂目積み痕
212	第60図	Ⅵ層	LT50	陶器	皿	肥前系	1610～1630年代	Ⅱ期	灰釉、砂目積み痕
213	第60図	Ⅵ a層	ME50	陶器	皿 (灰釉溝縁皿)	肥前系	1610～1630年代	Ⅱ期	灰釉、砂目積み痕
214	第61図	Ⅵ a層	MD50	陶器	皿 (灰釉溝縁皿)	肥前系	1610～1630年代	Ⅱ期	灰釉、砂目積み痕
215	第61図	Ⅵ a層	ME50	陶器	皿 (灰釉溝縁皿)	肥前系	1610～1630年代	Ⅱ期	灰釉、砂目積み痕
216	第61図	Ⅵ a層	MD50	陶器	皿 (灰釉溝縁皿)	肥前系	1610～1630年代	Ⅱ期	灰釉、砂目積み痕
217	第61図	Ⅵ a層	MD50	陶器	皿 (灰釉溝縁皿)	肥前系	1610～1630年代	Ⅱ期	灰釉、砂目積み痕
218	第61図	Ⅵ層	ME50	陶器	皿	肥前系	1690～1780年代	Ⅳ期	灰釉、蛇ノ目釉剥ぎ
219	第61図	Ⅵ層		陶器	皿(折縁皿)	瀬戸美濃系	16C代	大窯期	灰釉
220	第61図	Ⅵ層	ME50	陶器	皿	瀬戸美濃系	17C代		灰釉
221	第61図	Ⅵ層	MC50	陶器	灯明皿	肥前系			鉄釉
222	第61図	Ⅵ a層	ME50	陶器	托子	肥前系	17C前半	Ⅱ期	鉄釉
223	第61図	Ⅵ層	MB50	陶器	瓶	肥前系	17C後半	Ⅲ期	刷毛目
224	第62図	Ⅵ層	ME50	陶器	插鉢	肥前系			
225	第62図	Ⅵ層	LZ50	陶器	甕	肥前系	17C後半	Ⅲ期	鉄釉、格子目の当て具痕
226	第62図	Ⅵ a層	ME50	磁器	碗	肥前系	1640～1650年代	Ⅱ-2期	染付
227	第62図	Ⅵ a層	MF50	磁器	碗	肥前系	1630～1650年代	Ⅱ-2期	染付
228	第62図	Ⅵ a層	MF50	磁器	碗	肥前系	1610～1630年代	Ⅱ-1期	染付
229	第62図	Ⅵ a層	ME51	磁器	碗	肥前系	1640～50年代	Ⅱ-2期	染付
230	第62図	Ⅵ a層	ME50	磁器	碗	肥前系	1650年代前後	Ⅱ-2～Ⅲ期	染付
231	第62図	Ⅵ a層	ME50	磁器	碗	肥前系	17C後半	Ⅲ期	染付
232	第62図	Ⅵ層	MB50	磁器	碗	肥前系	17C後半	Ⅲ期	染付
233	第62図	Ⅵ層	LX50	磁器	碗	肥前系	1630～1650	Ⅱ-2期	白磁
234	第62図	Ⅵ層	MC50	磁器	碗	中国産			染付、漆継痕
235	第62図	Ⅵ a層	ME50	磁器	皿	肥前系	17C後半	Ⅲ期	色絵
236	第62図	Ⅵ a層	ME50	磁器	皿	肥前系	17C後半	Ⅲ期	染付
237	第62図	Ⅵ層	MC50	磁器	皿	肥前系	1650～1690年代	Ⅲ期	染付
238	第63図	Ⅵ a層	MD50	磁器	皿	肥前系	1630～1650年代	Ⅱ-2期	染付
239	第63図	Ⅵ a層	ME50	磁器	皿	肥前系	1610～1630年代	Ⅱ-1期	染付、蛇ノ目釉剥ぎ、砂目積み痕
240	第63図	Ⅵ層	ME50	磁器	皿	肥前系	1690～1780年代	Ⅳ期	染付、蛇ノ目釉剥ぎ
241	第63図	Ⅵ層	MD50	磁器	皿	肥前系	18C代	Ⅳ期	白磁、蛇ノ目釉剥ぎ
242	第63図	Ⅵ層	MB50	磁器	皿	肥前系	18C前半	Ⅳ期	染付
243	第63図	Ⅵ層	LY50	磁器	皿	肥前系	18C前半	Ⅳ期	染付
244	第63図	Ⅵ層	LV50	磁器	香炉	肥前系	17C末～18C前半	Ⅳ期	青磁
245	第63図	Ⅵ a層	MF50	磁器	人形	肥前系	17C後半	Ⅲ期	色絵
246	第63図	Ⅵ a層	MD50	磁器	人形	肥前系	17C後半	Ⅲ期	色絵
247	第63図	Ⅵ a層	MB50	瓦質土器	香炉	不明			
248	第64図	SD33埋土		陶器	碗	肥前系	17C後半	Ⅲ期	灰釉、口紅
249	第64図	SD33掘り方		磁器	皿	肥前系	1630～1650年代	Ⅱ-2期	染付
250	第64図	SD33埋土		磁器	皿	肥前系	1630～1650年代	Ⅱ-2期	染付
251	第64図	SD34埋土		陶器	碗	肥前系	1610～1630年代	Ⅱ-1期	灰釉
252	第64図	SD35埋土		陶器	皿	肥前系	1610年代前後	Ⅱ期	灰釉
253	第64図	SK34埋土		陶器	皿 (灰釉溝縁皿)	肥前系	1610～1630年代	Ⅱ期	灰釉
254	第64図	SK34埋土		陶器	皿	肥前系	1610～1630年代	Ⅱ期	灰釉、砂目積み痕
255	第64図	SK34埋土		磁器	碗	肥前系	1610～1630年代	Ⅱ-1期	染付
256	第64図	SQ02		陶器	皿 (灰釉溝縁皿)	肥前系	1610～1630年代	Ⅱ期	灰釉
257	第64図	SQ02		陶器	瓶	肥前系	1600～1610年代	Ⅰ期	鉄釉
258	第64図	Ⅶ層	LY50	陶器	皿	瀬戸美濃系			
259	第64図	Ⅶ層	MA50	陶器	皿	肥前系	1600～1610年代	Ⅰ期	藁灰釉、鉄釉、胎土目積み痕
260	第64図	Ⅶ層	MA50	陶器	香炉	肥前系	1600～1610年代	Ⅰ期	鉄釉、灰釉
261	第64図	Ⅶ層	MF50	磁器	皿	中国産 (漳州窯系)	16C末～17C初		染付
262	第64図	Ⅶ層	LY50	磁器	皿(輪花皿)	中国産	16C末～17C初		白磁、輪花
263	第65図	Ⅷ層	MF50	陶器	碗(端反碗)	中国産 (漳州窯系)	16C末～17C初		染付、胎土軟質、黄白色
264	第65図	Ⅷ層	MD50	陶器	皿	肥前系	1600～1620年代	Ⅰ～Ⅱ期	藁灰釉、鉄絵
265	第65図	Ⅷ層	MD50	陶器	皿	肥前系	1610年代	Ⅰ～Ⅱ期	灰釉、鉄絵
266	第65図	Ⅷ層	MD50	陶器	皿	肥前系	1600～1620年代	Ⅰ～Ⅱ期	藁灰釉、胎土目積み痕、鉄絵
267	第65図	Ⅷ層	LV50	陶器	皿	肥前系	1600年代前後	Ⅰ期	灰釉
268	第65図	Ⅷ層	ME50	陶器	小坏	肥前系	1610～1630年代	Ⅱ期	灰釉、底部回転糸切り
269	第65図	Ⅷ層	ME50	陶器	皿(丸皿)	瀬戸美濃系	16C末～17C初		陶胎染付、志濃丸皿
270	第65図	Ⅷ層	MF50	陶器	皿(丸皿)	瀬戸美濃系	16C末～17C初		陶胎染付、志濃丸皿
271	第65図	Ⅷ層	MF50	陶器	皿	瀬戸美濃系	16C後半	大窯期	
272	第65図	Ⅷ層	LW50	陶器	皿	瀬戸美濃系	17C前半	連房期	胎土目積み痕
273	第65図	Ⅷ層	MA50	陶器	插鉢	肥前系	1610～1630年代	Ⅱ期	鉄釉
274	第65図	Ⅷ層	MF50	陶器	甕	肥前系	17C前半	Ⅰ～Ⅱ期	外面鉄釉、同心円の当て具痕

表7 土器・陶磁器属性一覧⑤

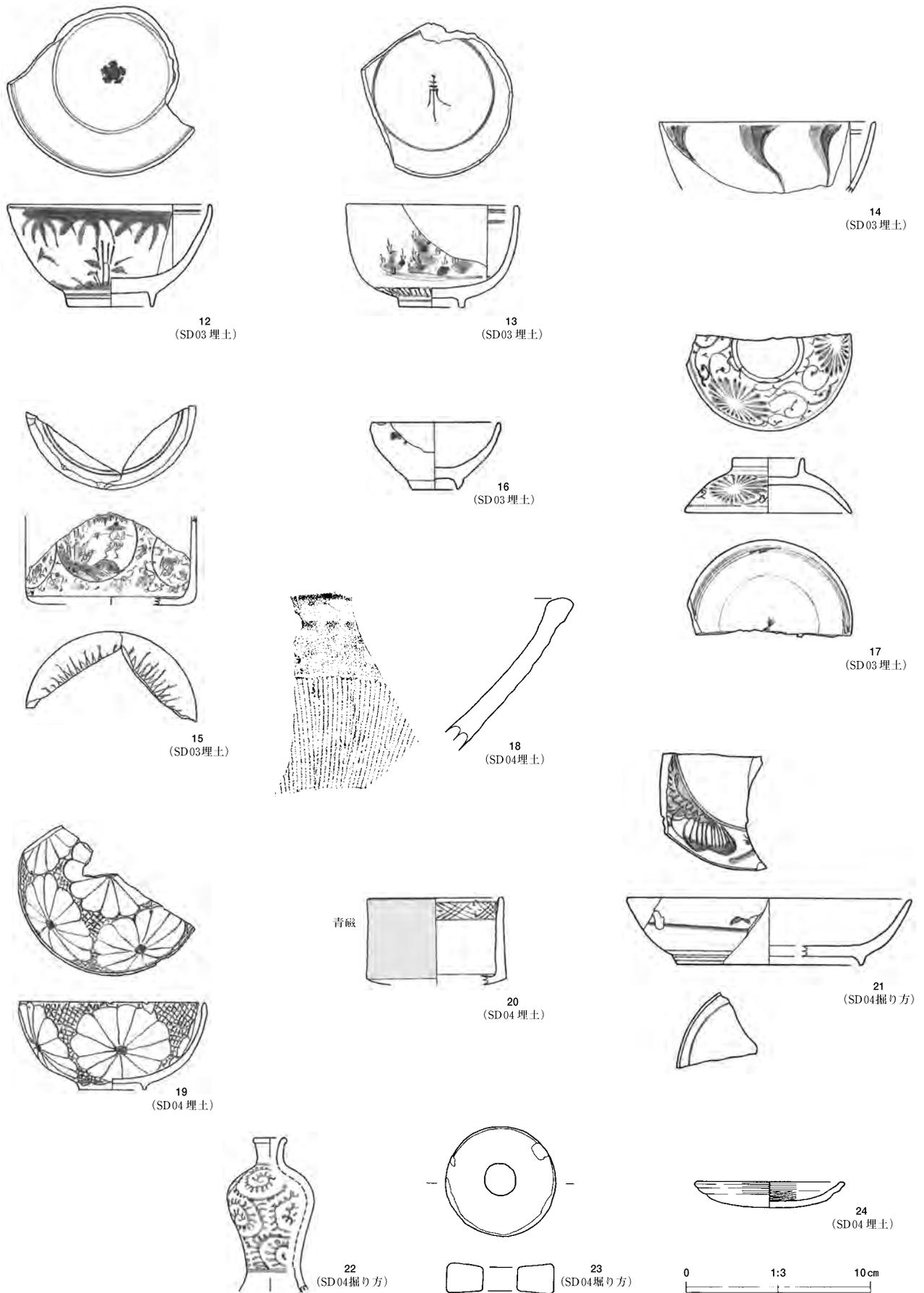
番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	分類	器種	生産地	年代	編年区分	特徴
275	第65図	Ⅷ層	MF50	磁器	碗(端反碗)	中国産 (漳州窯系)	17C初		染付、胎土硬質
276	第65図	Ⅷ層	LV50	磁器	碗	中国産 (漳州窯系)	16C末～17C初		染付、胎土硬質
277	第65図	Ⅷ層	ME50	磁器	碗	中国産	16C末～17C初		染付、胎土硬質
278	第65図	Ⅷ層	MF50	磁器	皿	中国産	16C末～17C初		染付、胎土硬質
279	第65図	Ⅷ層	MB50	磁器	皿	中国産 (漳州窯系)	16C末～17C初		白磁、胎土やや軟質
280	第65図	Ⅷ層	MA50	磁器	皿	中国産	16C前半		白磁C類
281	第65図	Ⅷ層	MD50	瓦質土器	香炉	不明			三足脚

表8 土製品属性一覧

番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	分類	素材	長さ (cm)	最大幅 (cm)	重量 (g)	土錘類型
1	第66図	SD03埋土		土錘	土師質	3.4	2.8	20	1類
2	第66図	SD04掘り方		土錘	土師質	4.0	2.4	25	1類
3	第66図	SD06掘り方		土錘	土師質	4.2	2.5	28	1類
4	第66図	Pit03埋土		土錘	土師質	5.6	3.4	64	1類
5	第66図	Pit03埋土		土錘	土師質	6.3	6.0	216	2類
6	第66図	Ⅳ層	LW50	土錘	土師質	3.1	2.2	13	1類
7	第66図	Ⅳ層	MA50	土錘	土師質	3.7	2.6	23	1類
8	第66図	Ⅳ層	MC50	土錘	土師質	4.1	3.4	36	1類
9	第66図	Ⅳ層	LZ50	土錘	土師質	4.4	3.3	39	1類
10	第66図	Ⅳ層	LU50	土錘	土師質	5.0	3.2	52	1類
11	第66図	Ⅳ層	LX50	土錘	土師質	5.4	2.9	50	1類
12	第66図	Ⅳ層	MC50	土錘	土師質	4.5	5.2	116	2類
13	第66図	Ⅳ層	LX50	土錘	土師質	6.6	4.7	152	2類
14	第66図	SD15埋土		土錘	土師質	3.4	2.3	17	1類
15	第66図	SD16埋土		土錘	土師質	3.6	2.8	26	1類
16	第66図	SD16埋土		土錘	土師質	5.0	3.4	54	1類
17	第66図	SK09埋土		羽口	土師質	7.9	7.8	268	—
18	第66図	SK15埋土		臼?	土師質	7.1	7.0	70	—
19	第66図	SK15埋土		土錘	土師質	5.2	3.3	49	1類
20	第66図	SK17埋土		土錘	土師質	5.8	5.0	174	2類
21	第66図	V層	LY50	面子	土師質	3.7	3.6	11	—
22	第66図	V層	LW50	面子	土師質	3.9	2.3	7	—
23	第67図	V層	MC50	面子	土師質	5.1	5.2	25	—
24	第67図	V層	MB50	土錘	土師質	3.3	2.2	17	1類
25	第67図	V層	MA50	土錘	土師質	5.1	2.8	39	1類
26	第67図	V層	MA50	土錘	土師質	5.9	2.8	42	1類
27	第67図	V層	LW50	土錘	土師質	5.7	4.2	99	2類
28	第67図	V層	LY50	土錘	須恵質	5.6	4.8	158	2類
29	第67図	V層	MB50	土錘	土師質	5.7	5.3	144	2類
30	第67図	V層	LU50	土錘	土師質	6.5	4.8	118	2類
31	第67図	V層	LZ50	土錘	土師質	9.6	7.2	478	3類
32	第67図	V層	MC50	土錘	土師質	4.1	4.2	61	4類
33	第67図	SD27埋土		土錘	土師質	7.7	5.8	236	3類
34	第67図	Ⅵ層	MC50	土錘	土師質	4.1	2.6	25	1類
35	第67図	Ⅵ層	LZ50	土錘	土師質	5.2	2.6	32	1類
36	第67図	Ⅵa層	ME50	土錘	土師質	5.6	5.1	128	2類
37	第67図	Ⅵ層	ME50	土錘	土師質	5.8	5.2	144	2類
38	第67図	Ⅵ層	ME50	土錘	須恵質	6.0	5.2	176	2類
39	第67図	Ⅵ層	LU50	土錘	土師質	7.0	5.4	158	2類
40	第67図	Ⅵa層	ME50	土錘	土師質	7.2	5.8	242	2類
41	第68図	Ⅵ層	MC50	土錘	土師質	9.0	7.5	440	3類
42	第68図	Ⅵ層	MC50	土錘	土師質	9.1	7.1	418	3類
43	第68図	Ⅵa層	ME50	土錘	土師質	9.5	6.7	420	3類
44	第68図	Ⅵ層	LV50	土錘	土師質	8.9	7.3	500	3類
45	第68図	Ⅵ層	LV50	土錘	土師質	10.0	7.7	585	3類
46	第68図	SD34埋土		土錘	土師質	10.7	7.2	494	3類
47	第68図	Ⅶ層	LW50	土錘	土師質	4.7	4.9	104	2類
48	第68図	Ⅶ層	LY50	土錘	土師質	6.5	4.3	114	2類
49	第68図	Ⅷ層	MC50	土錘	土師質	5.6	3.8	75	2類
50	第68図	Ⅷ層	MD50	土錘	土師質	5.4	5.5	154	2類
51	第68図	Ⅷ層	MF50	土錘	土師質	6.6	4.7	162	2類
52	第68図	Ⅷ層	LZ50	土錘	土師質	10.2	7.4	530	3類
53	第68図	Ⅷ層	MC50	土錘	土師質	10.2	7.3	458	3類

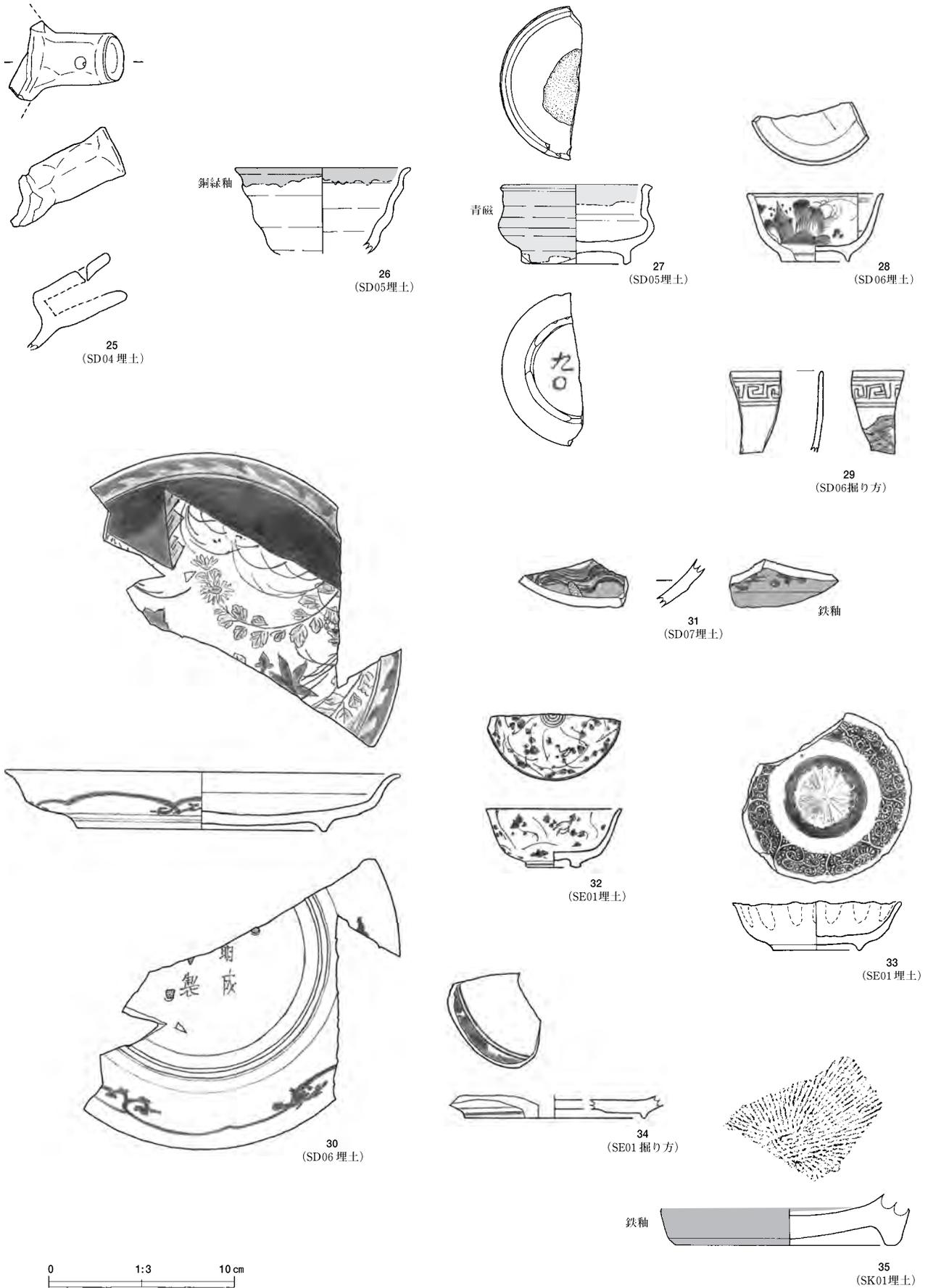


第42図 土器・陶磁器 (第IV層面遺構内出土①)

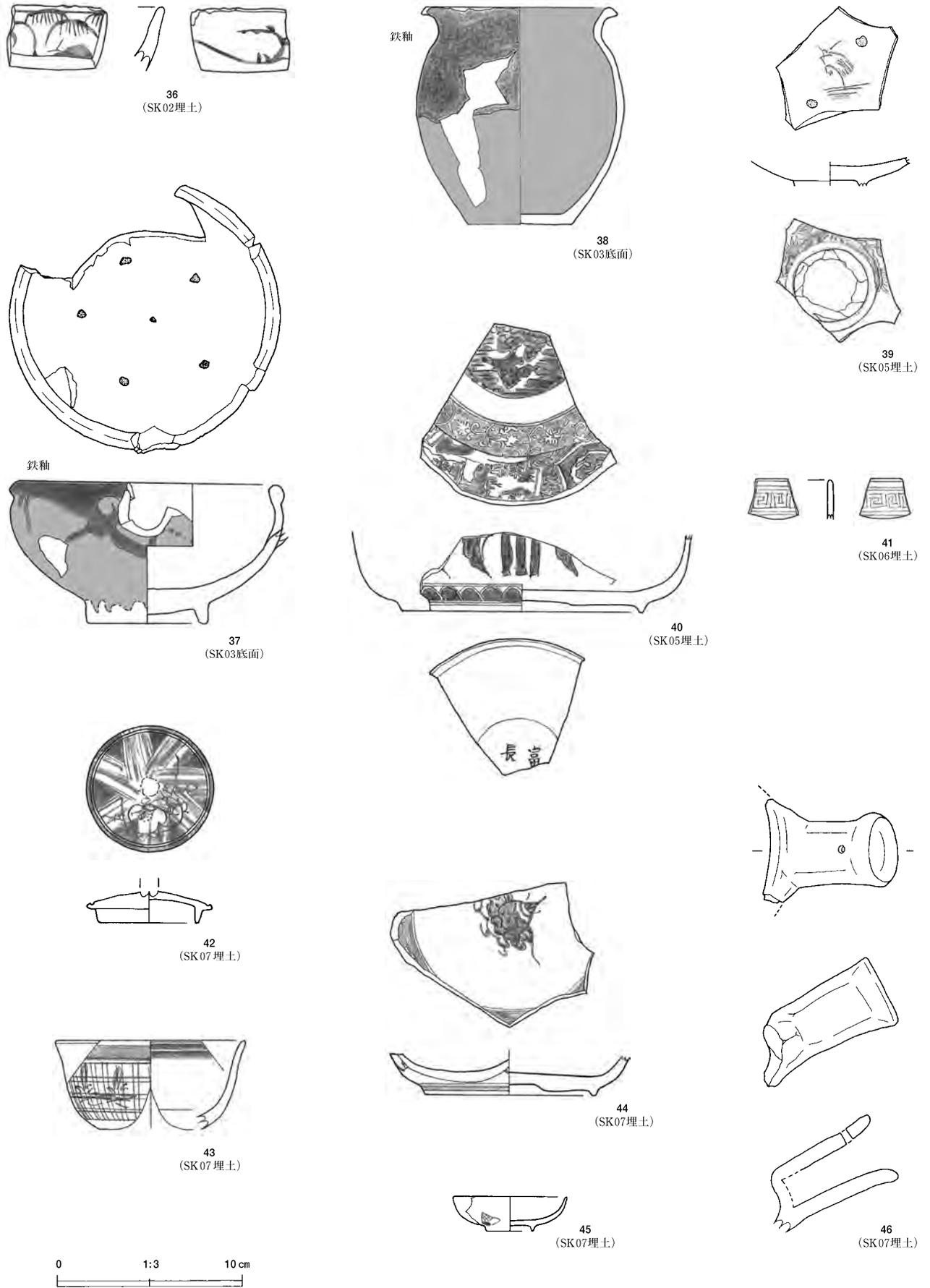


第43図 土器・陶磁器 (第IV層面遺構内出土②)

第3章 調査の方法と成果
 (6) 属性表・実測図

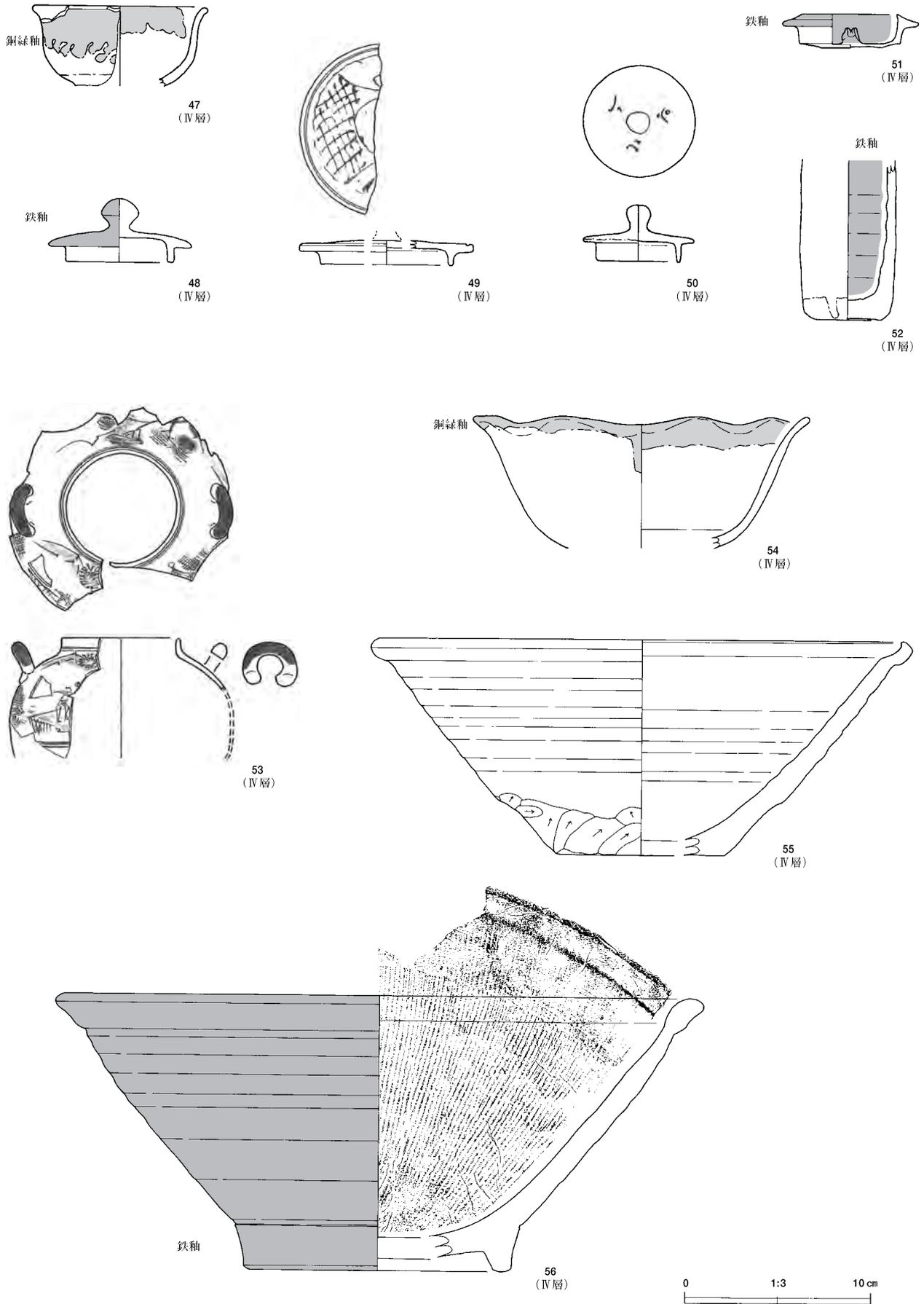


第44図 土器・陶磁器 (第IV層面遺構内出土③)

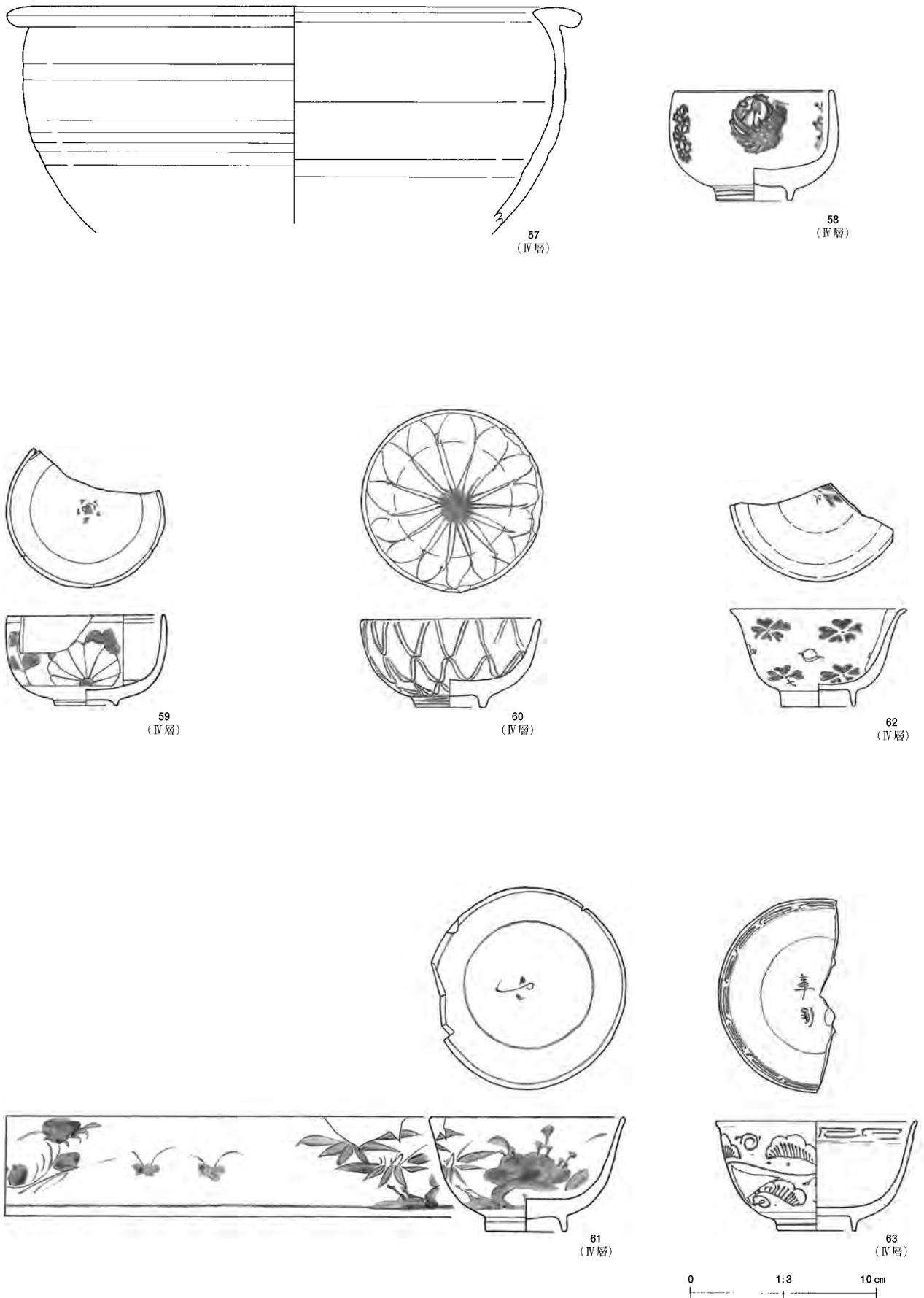


第45図 土器・陶磁器 (第IV層面遺構内出土④)

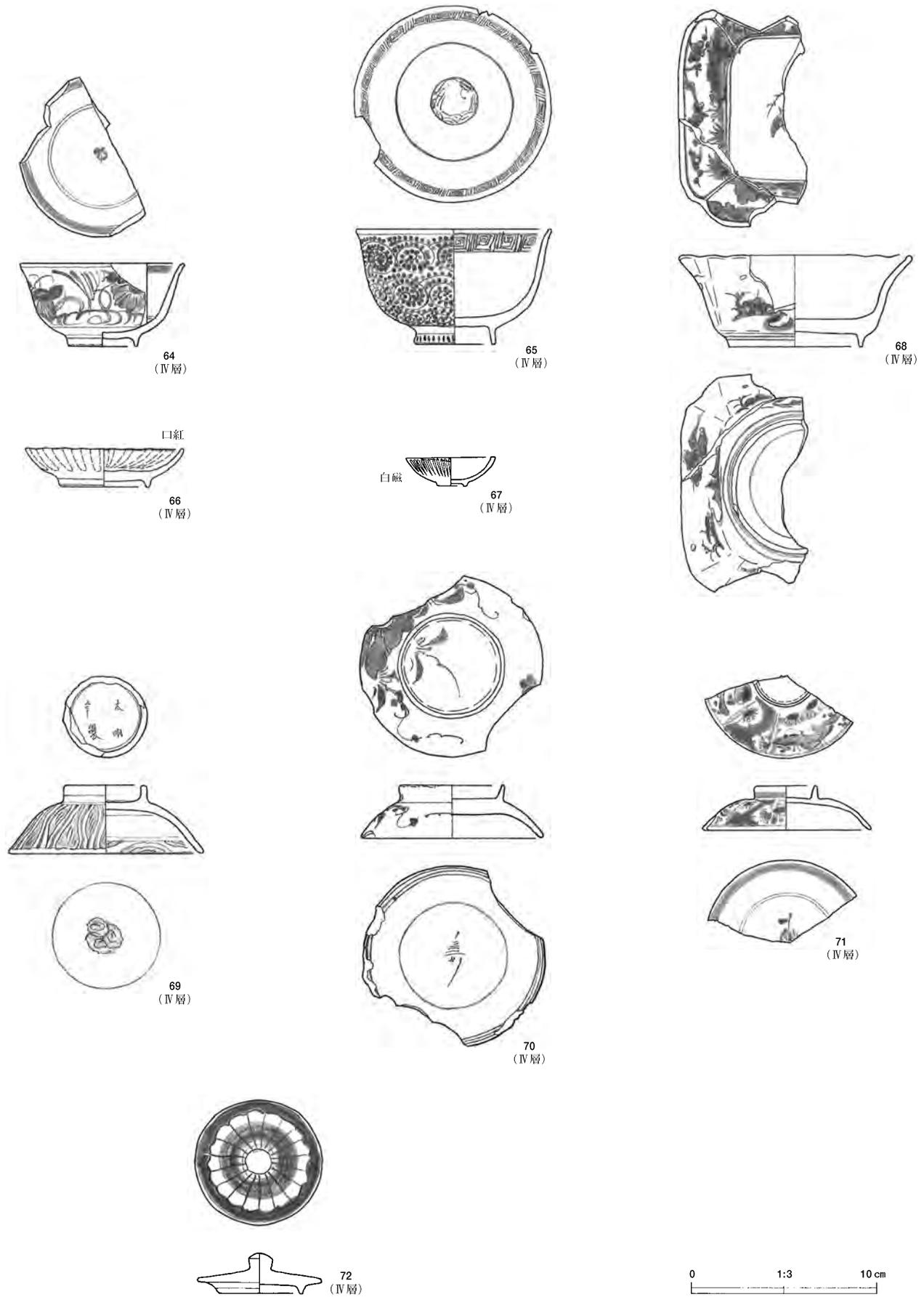
第3章 調査の方法と成果
 (6) 属性表・実測図



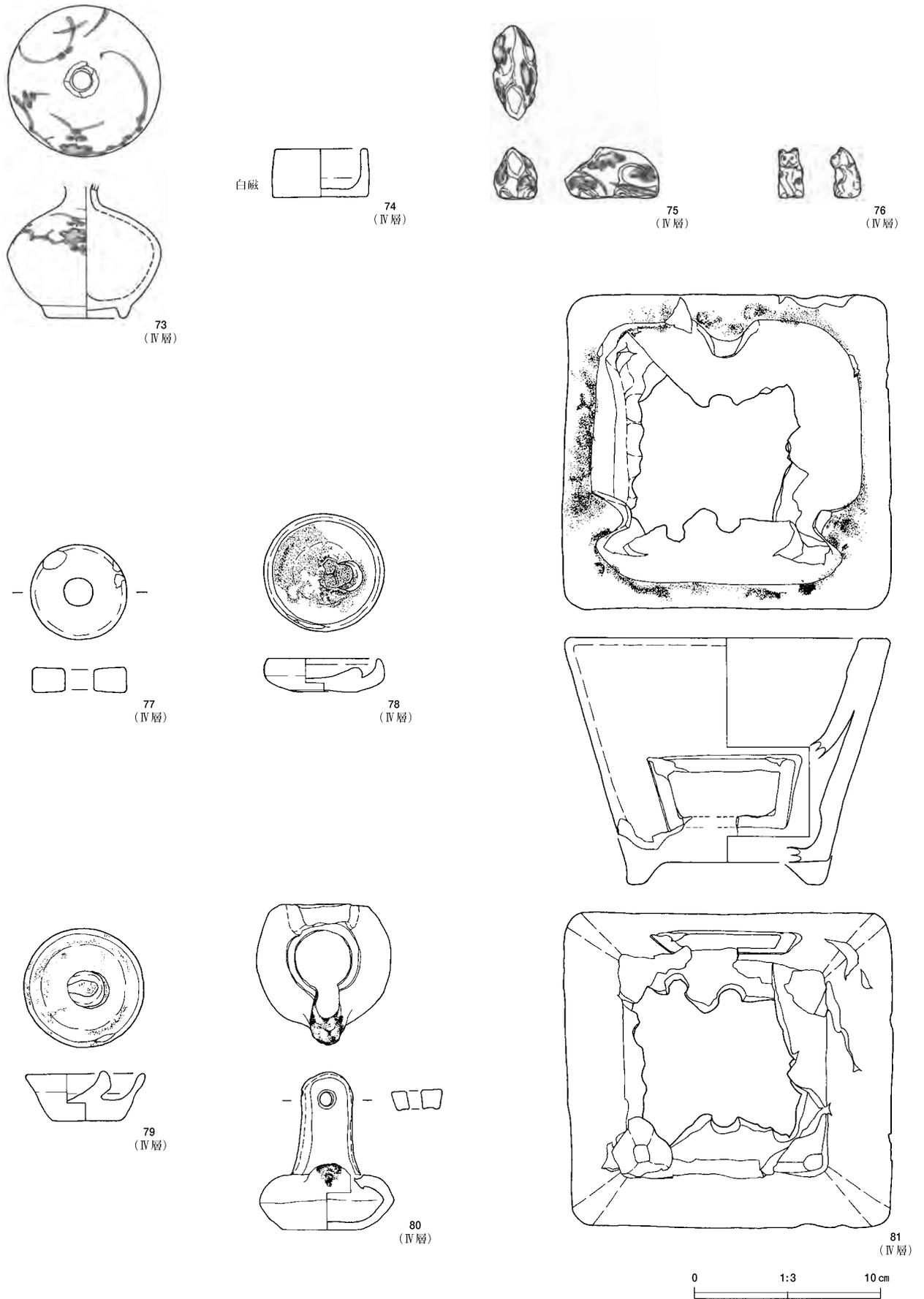
第46図 土器・陶磁器 (第IV層出土①)



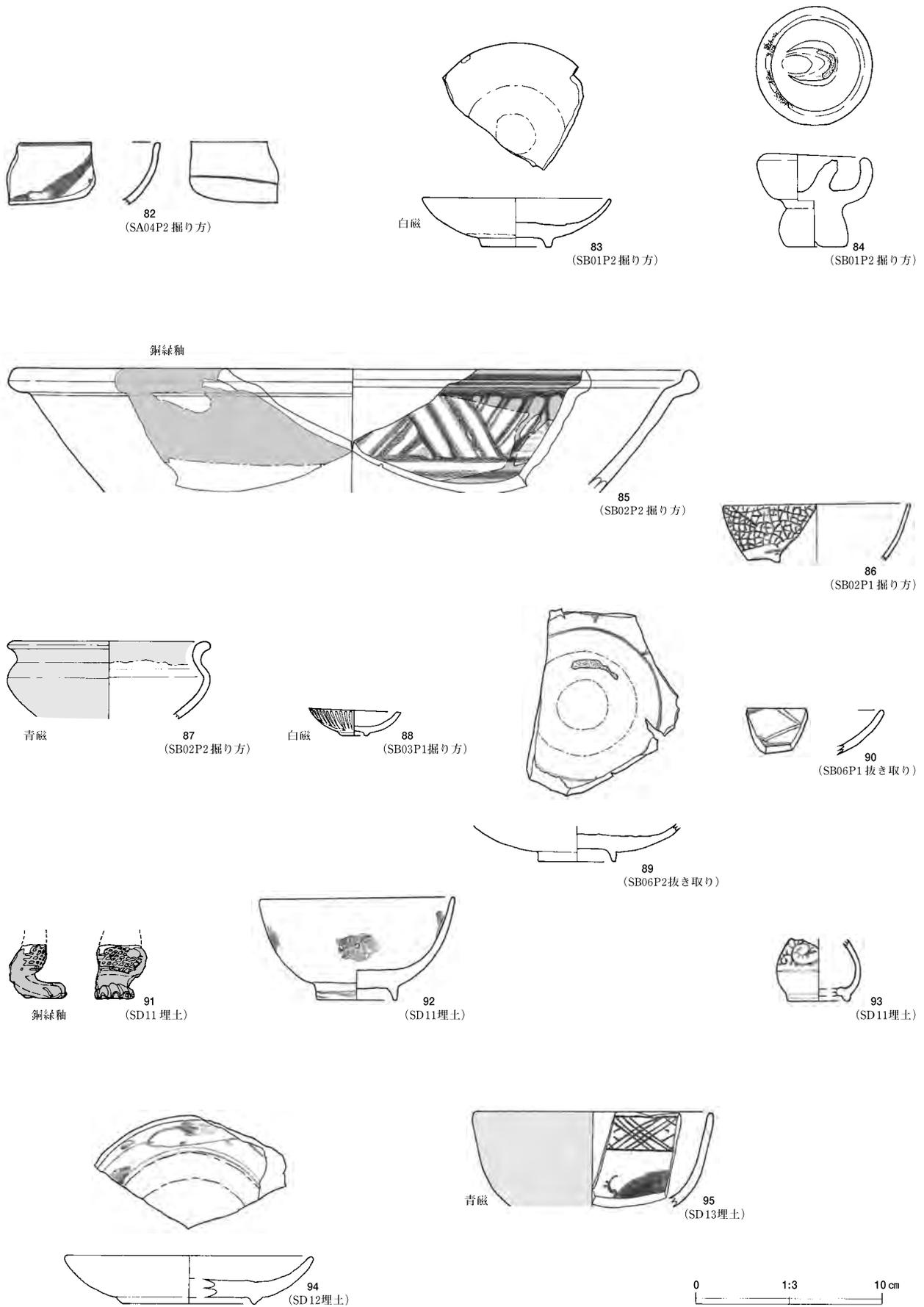
第47図 土器・陶磁器 (第IV層出土②)



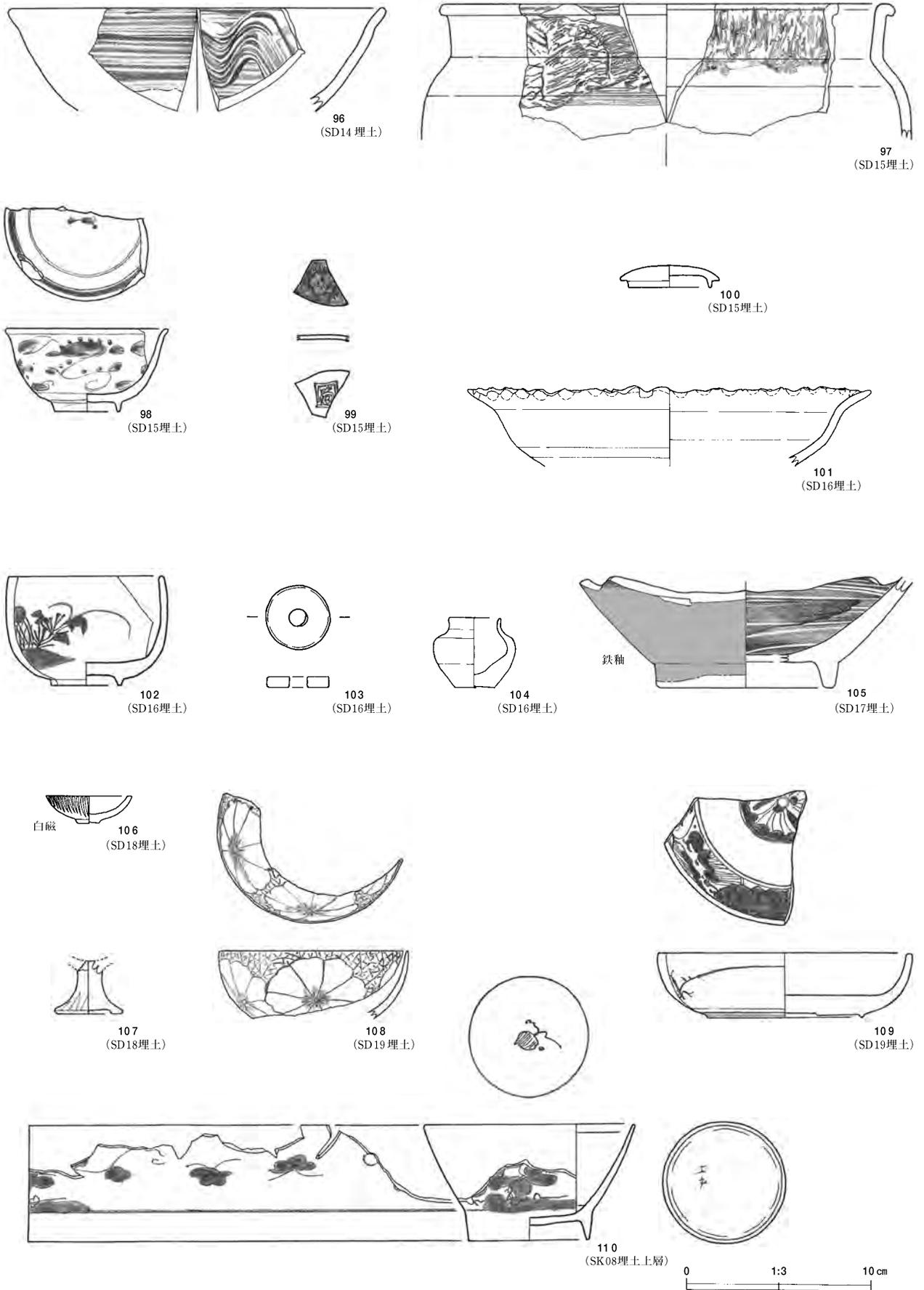
第48図 土器・陶磁器 (第IV層出土③)



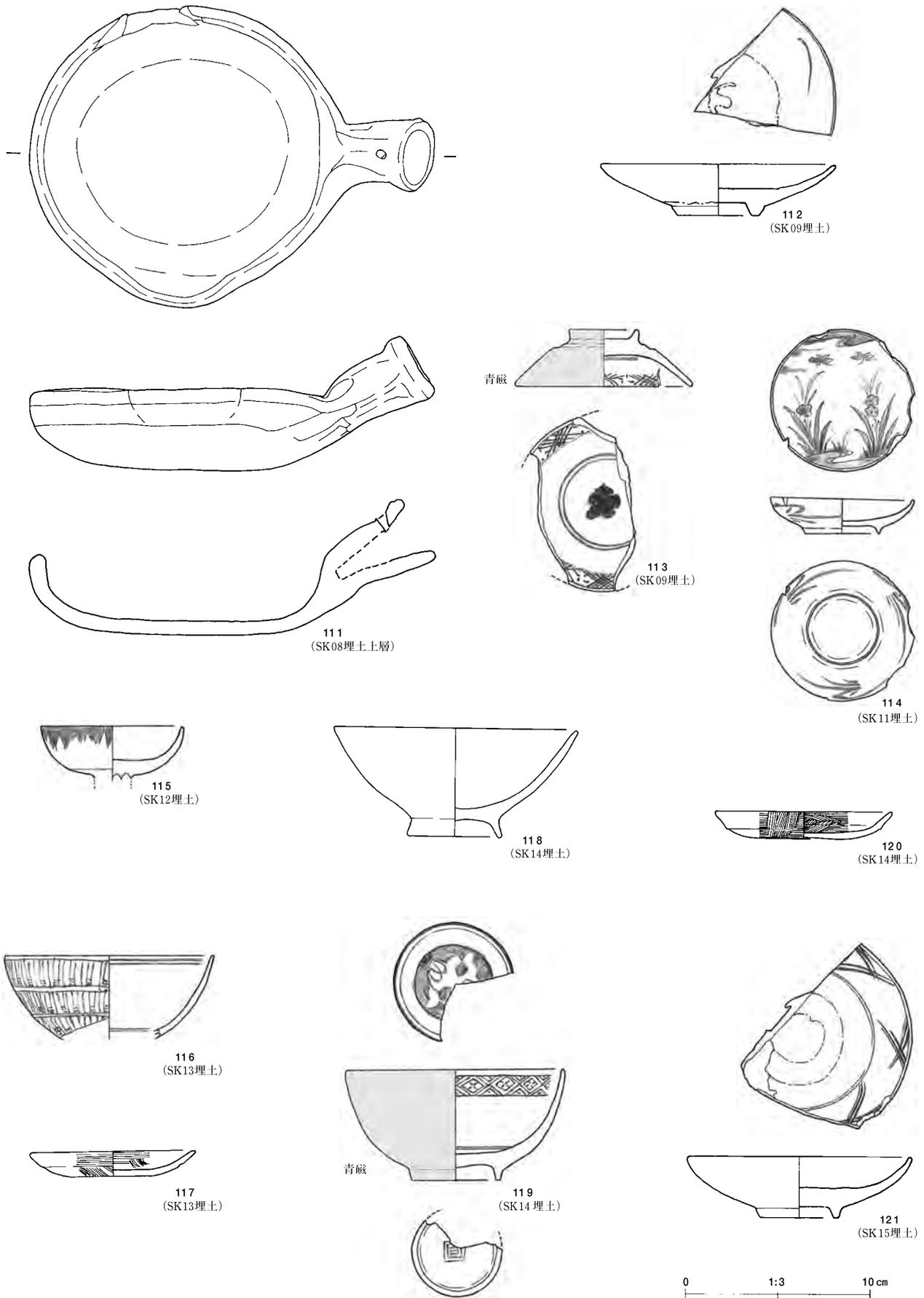
第49図 土器・陶磁器 (第IV層出土④)



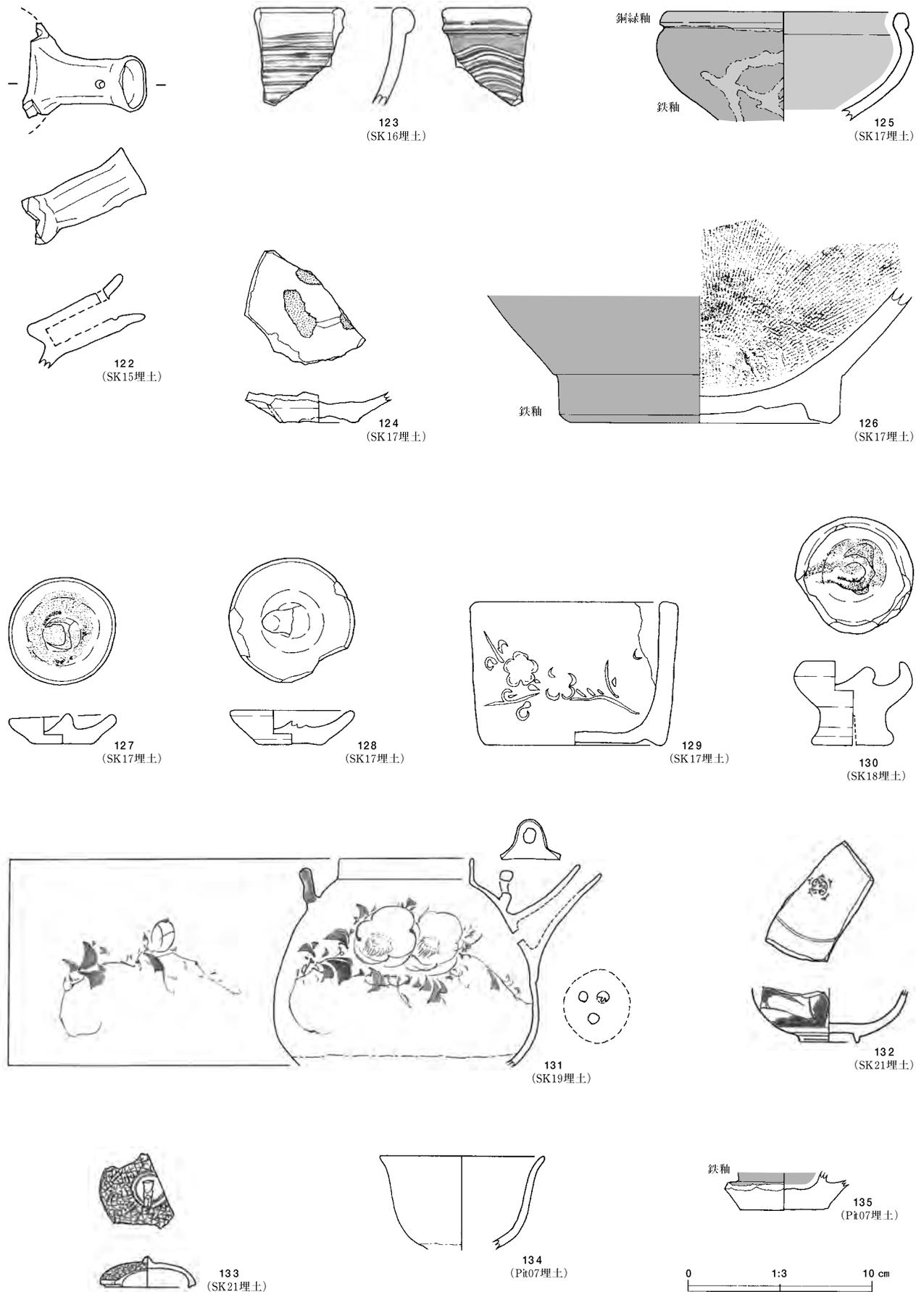
第50図 土器・陶磁器 (第V層面遺構内出土①)



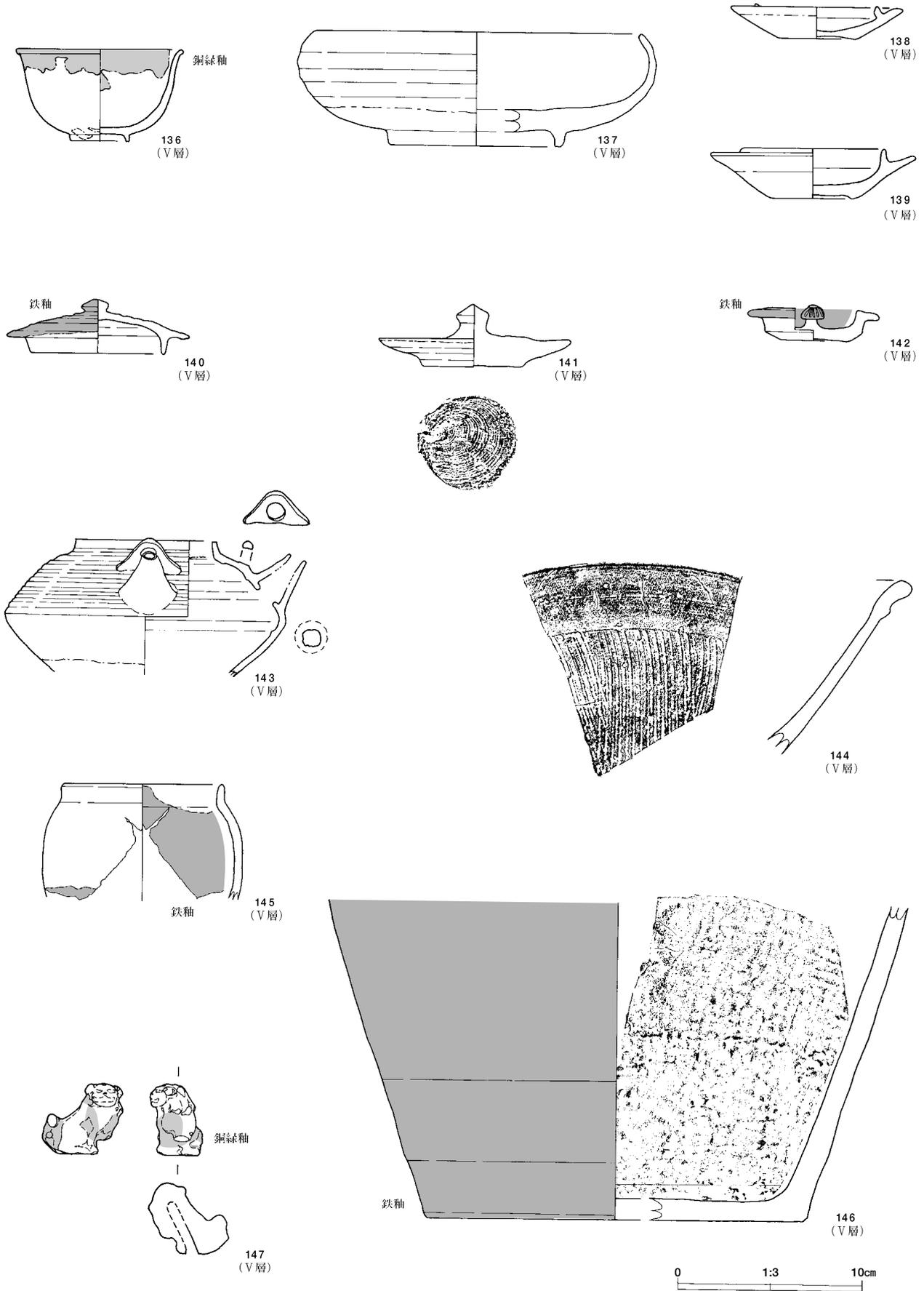
第51図 土器・陶磁器 (第V層面遺構内出土②)



第52図 土器・陶磁器 (第V層面遺構内出土③)



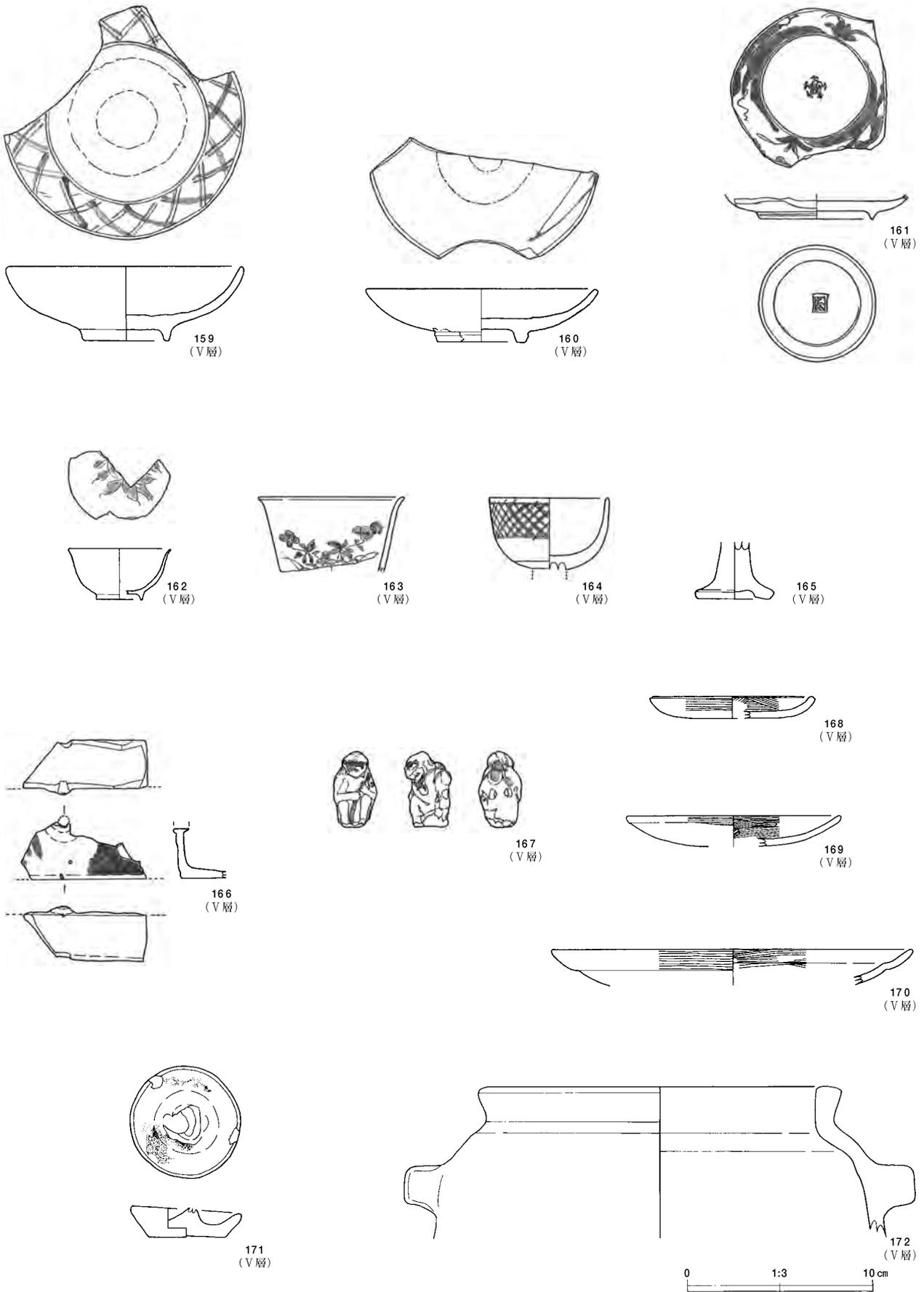
第53図 土器・陶磁器 (第V層面遺構内出土④)



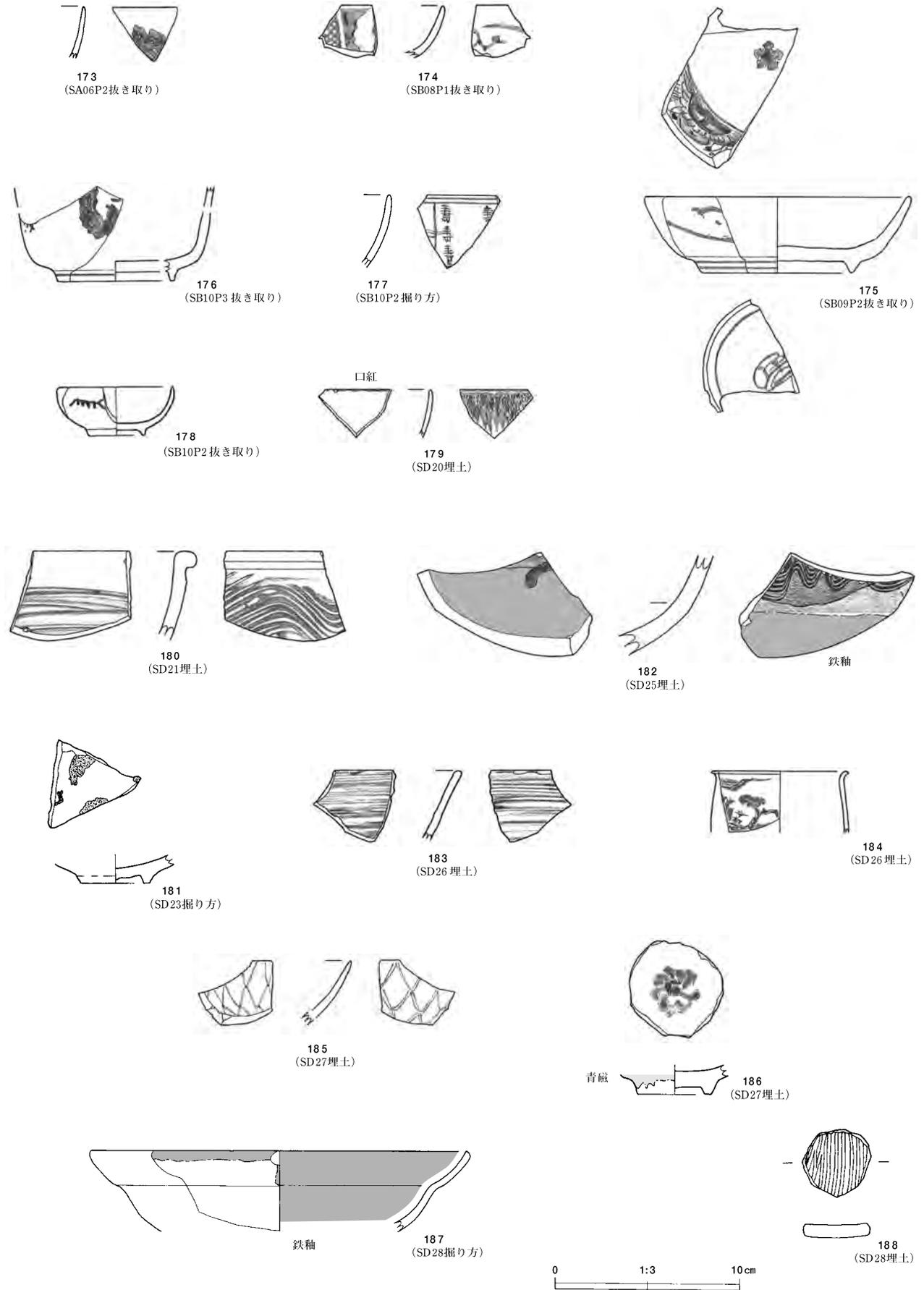
第54図 土器・陶磁器（第V層出土①）



第55図 土器・陶磁器 (第V層出土②)

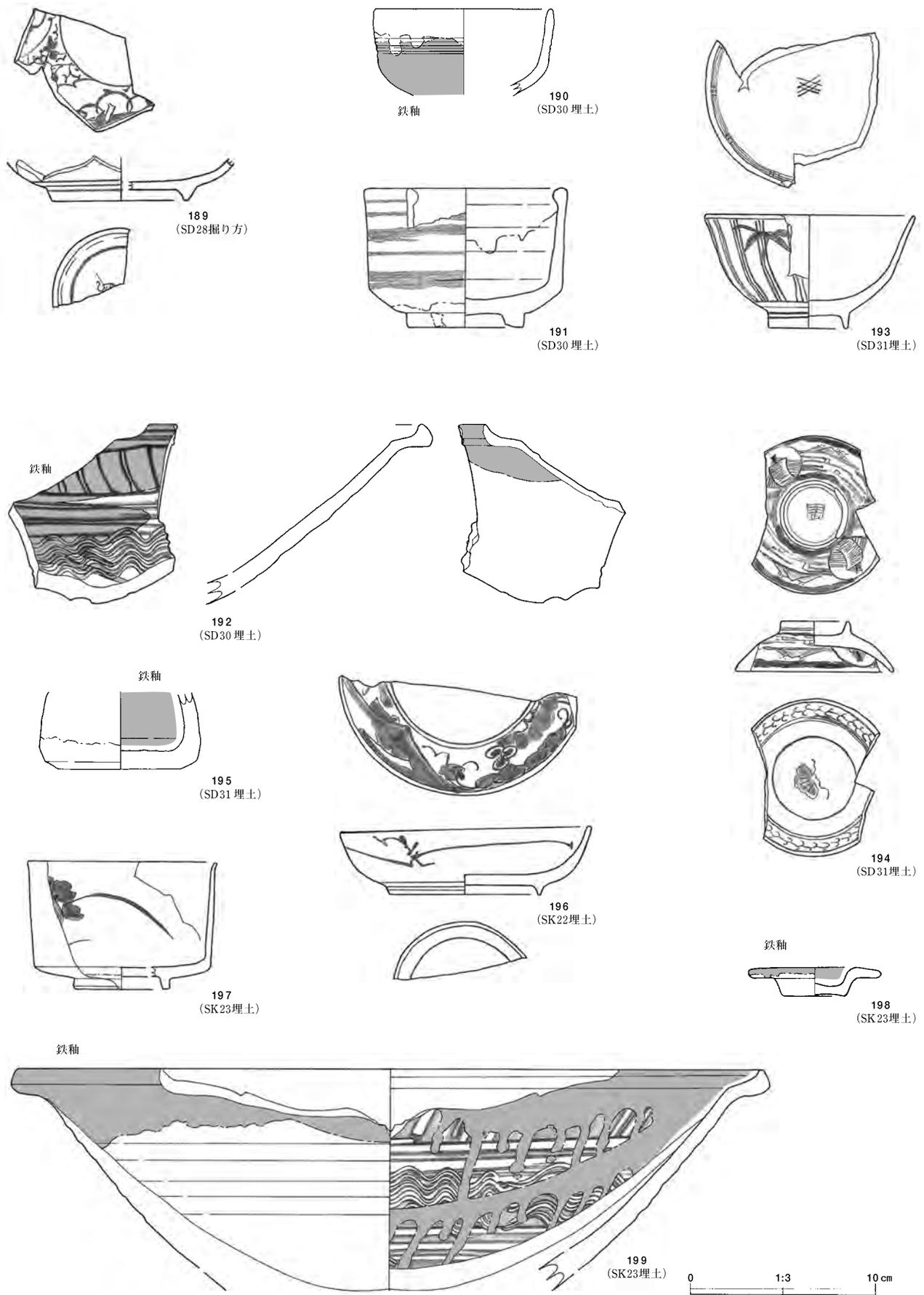


第56図 土器・陶磁器 (第V層出土③)

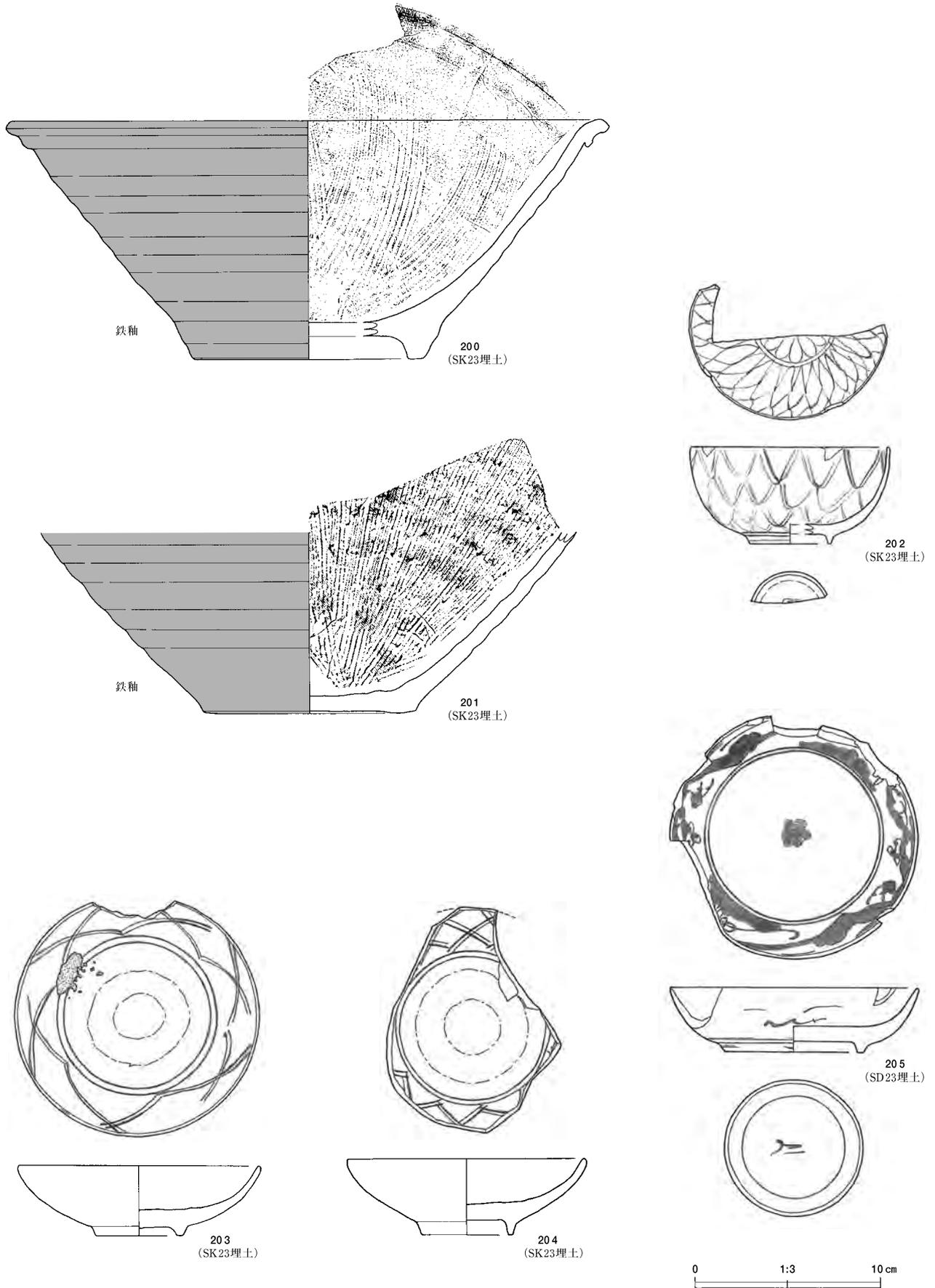


第57図 土器・陶磁器 (第Ⅵ層面遺構内出土①)

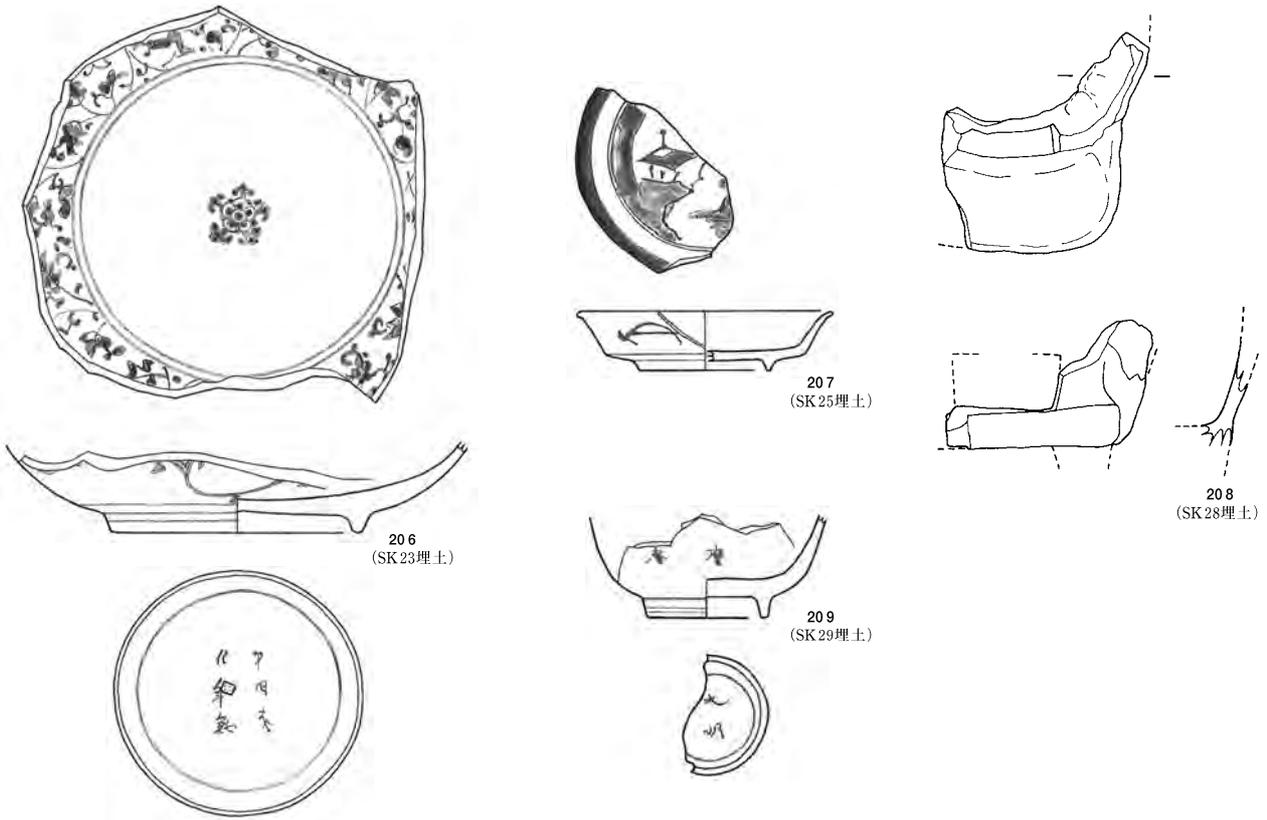
第3章 調査の方法と成果
 (6) 属性表・実測図



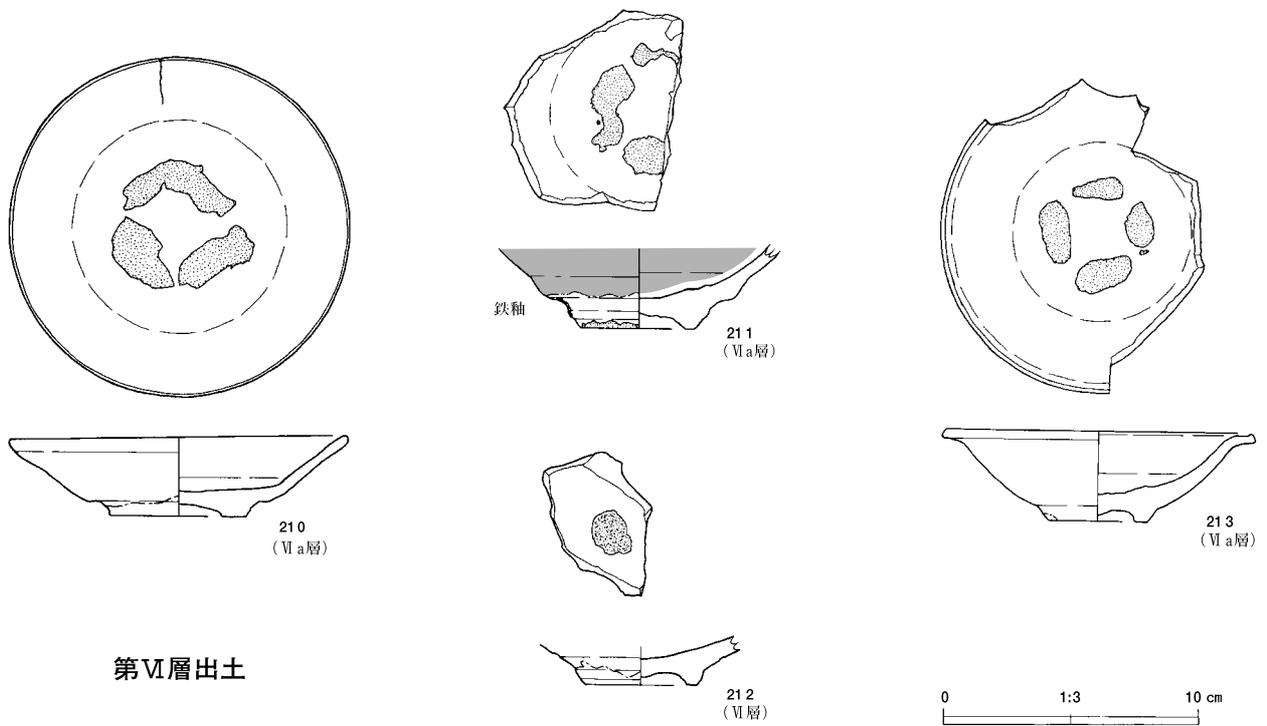
第58図 土器・陶磁器 (第Ⅵ層面遺構内出土②)



第59図 土器・陶磁器 (第Ⅵ層面遺構内出土③)

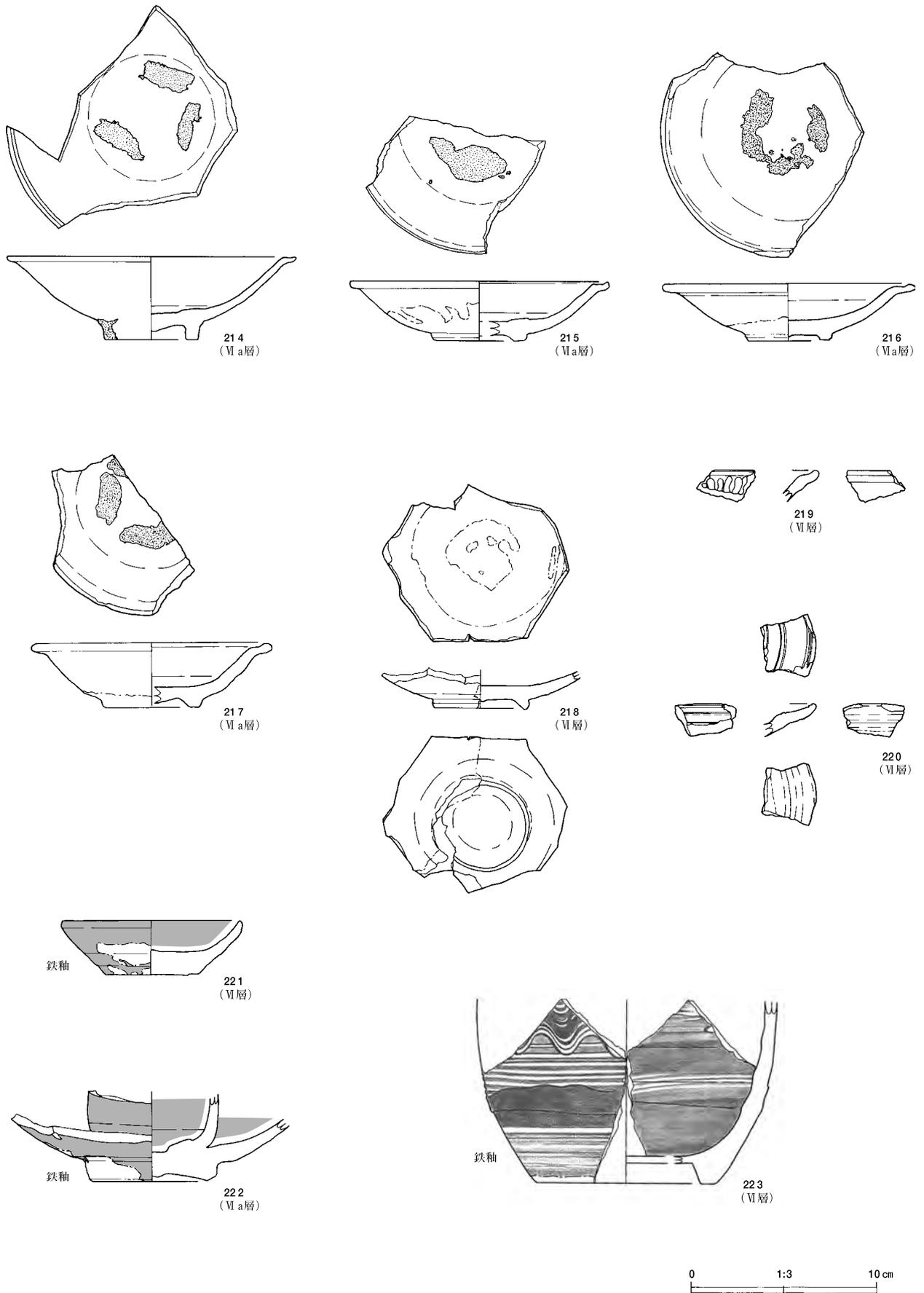


第Ⅵ層面遺構内出土



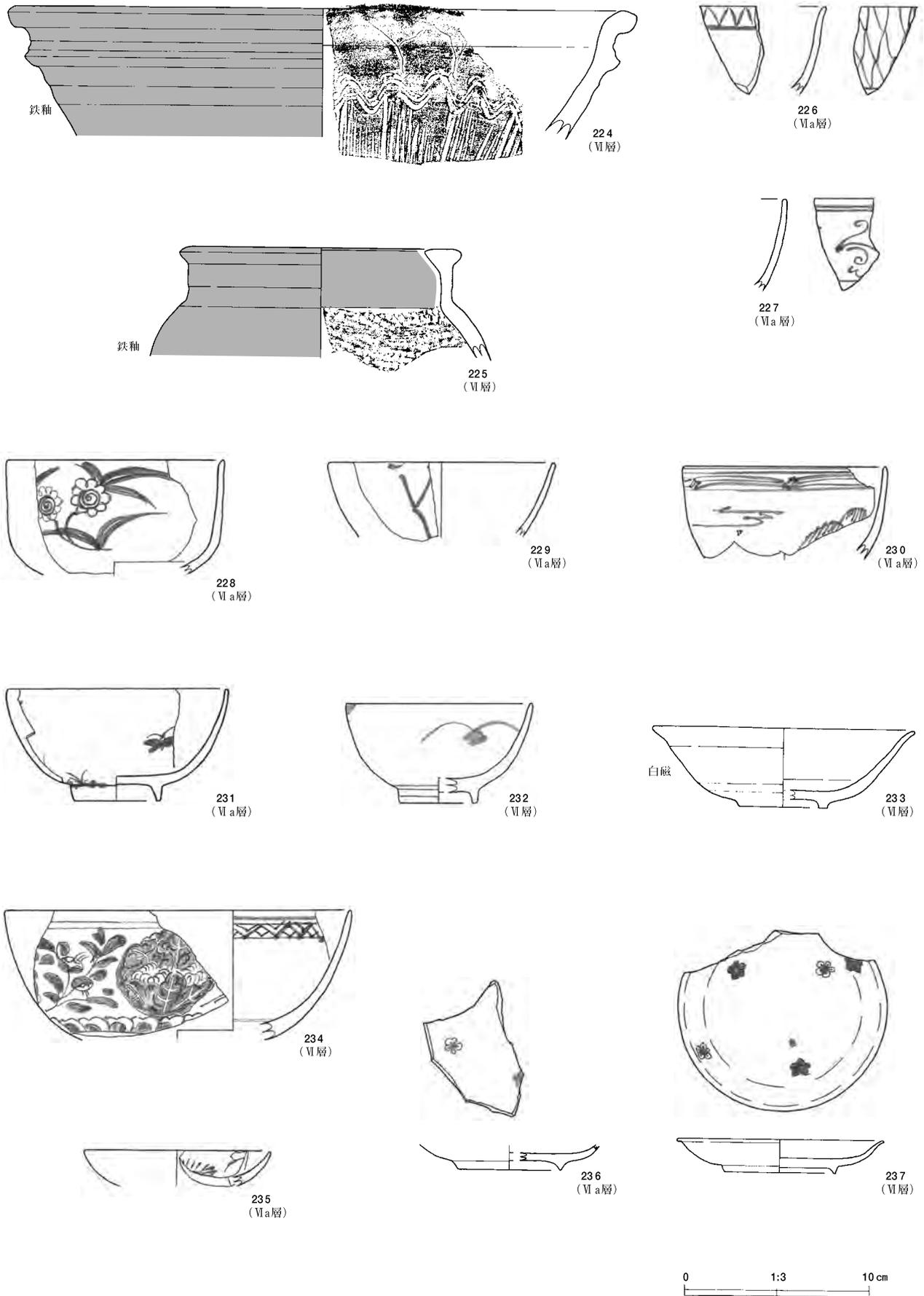
第Ⅵ層出土

第60図 土器・陶磁器 (第Ⅵ層面遺構内④、第Ⅵ層出土①)

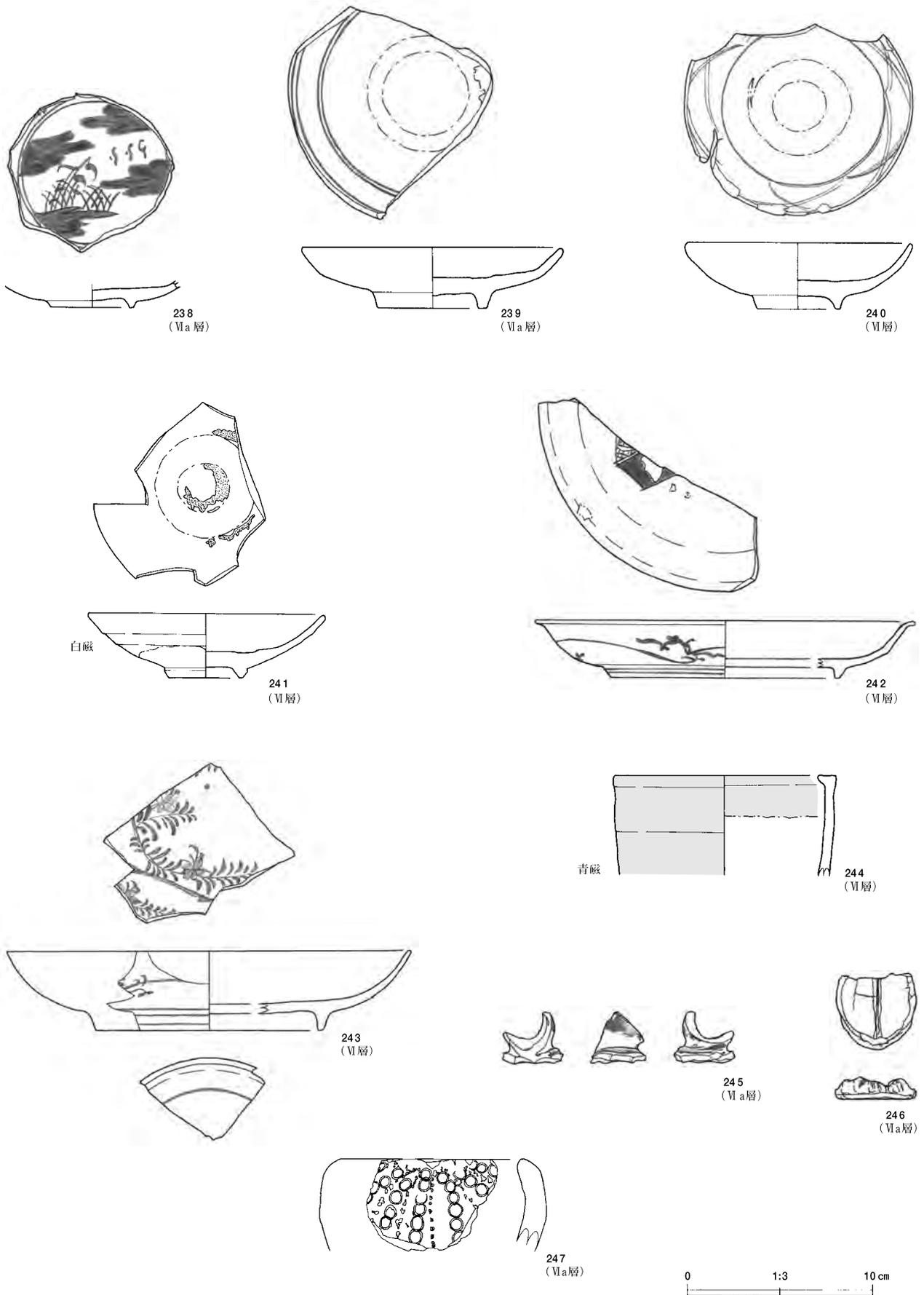


第61図 土器・陶磁器 (第VI層出土②)

第3章 調査の方法と成果
 (6) 属性表・実測図

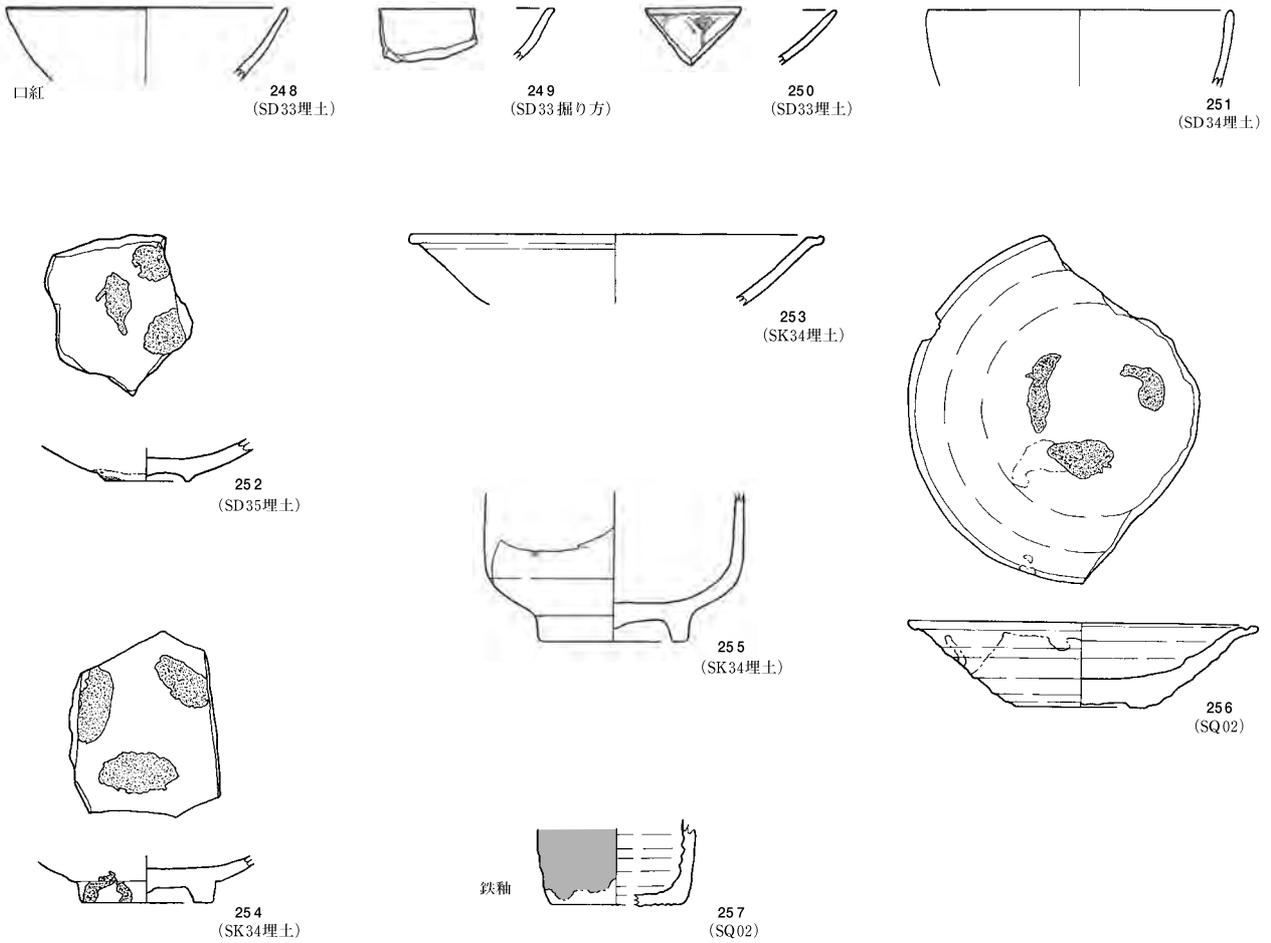


第62図 土器・陶磁器 (第Ⅵ層出土③)

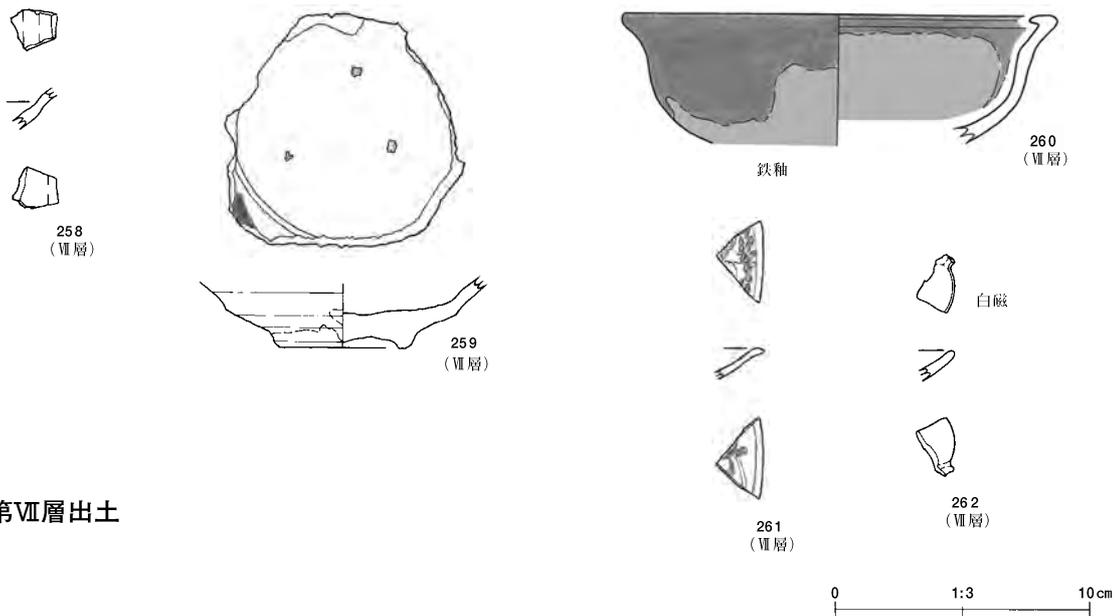


第63図 土器・陶磁器 (第VI層出土④)

第3章 調査の方法と成果
 (6) 属性表・実測図

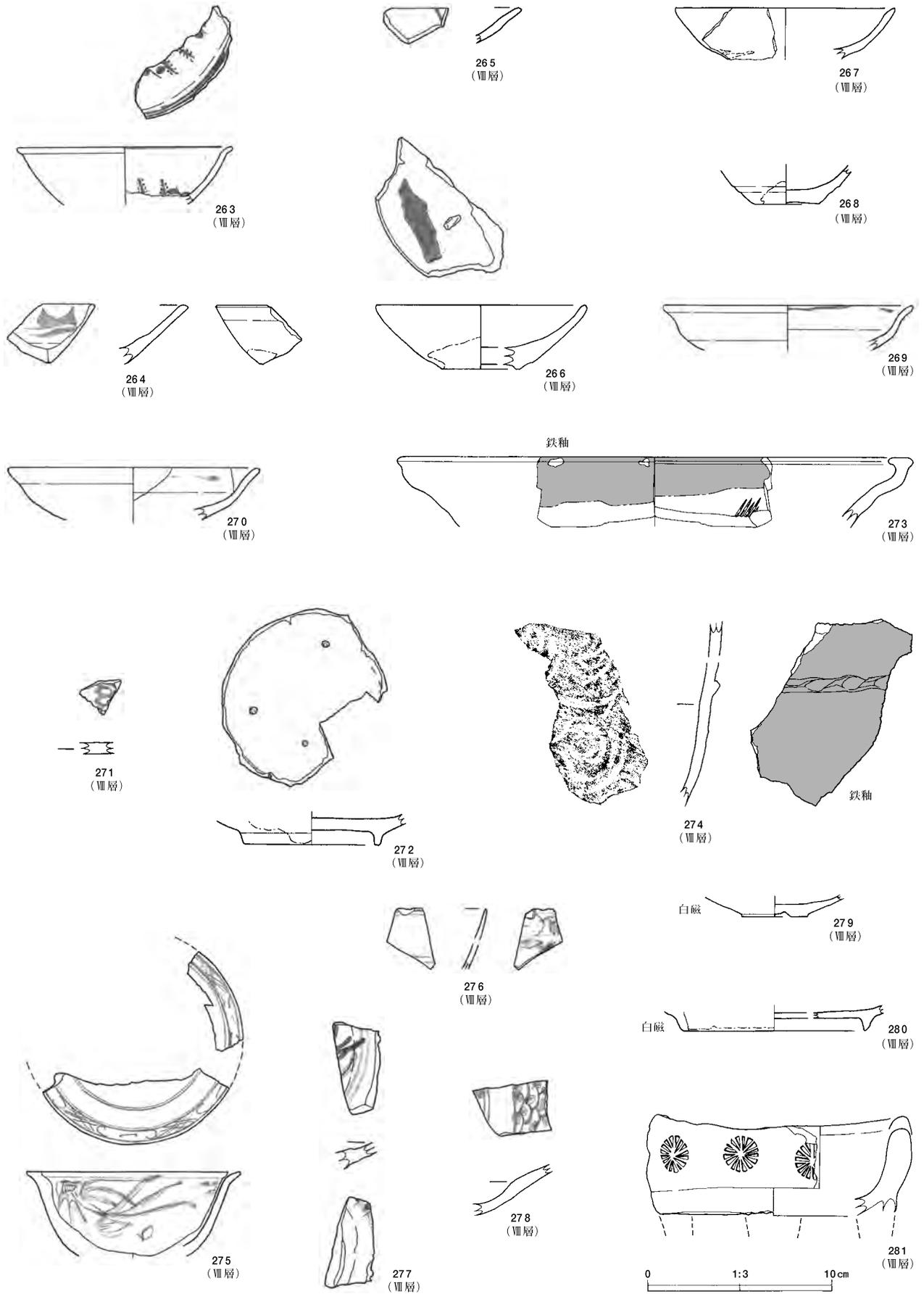


第Ⅶ・Ⅷ層面遺構内出土

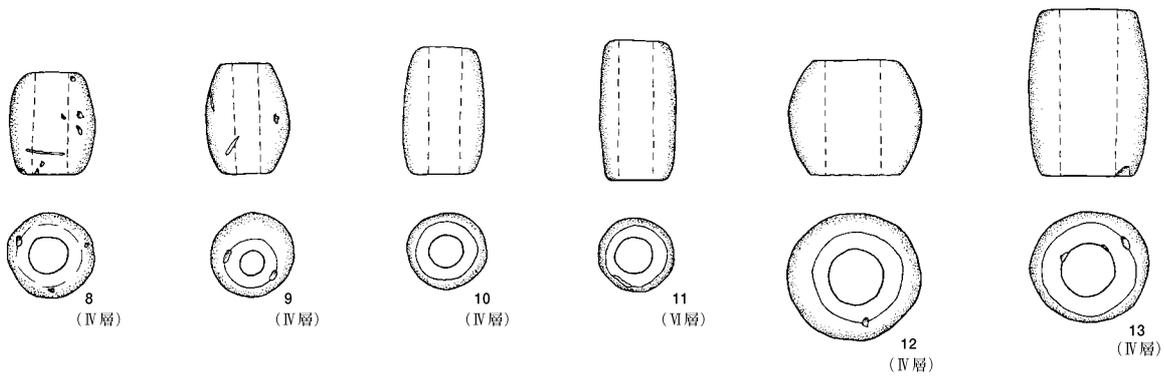
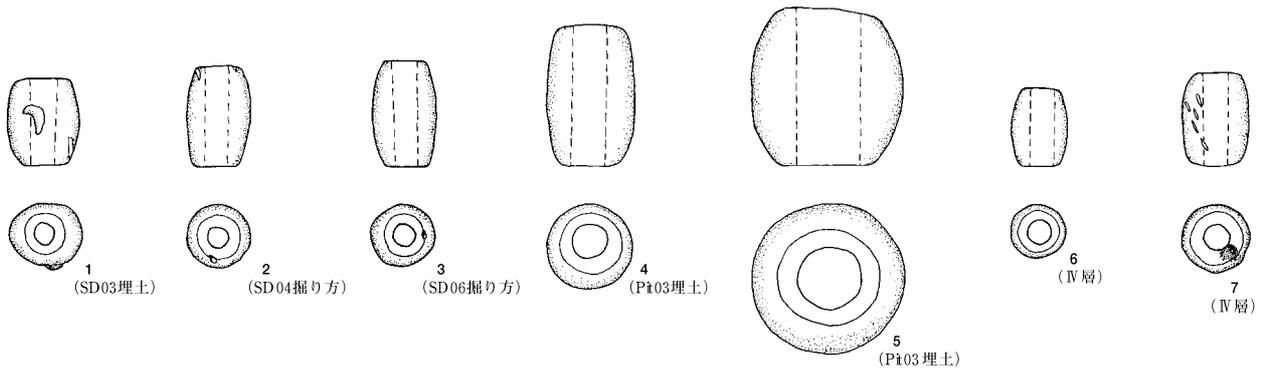


第Ⅶ層出土

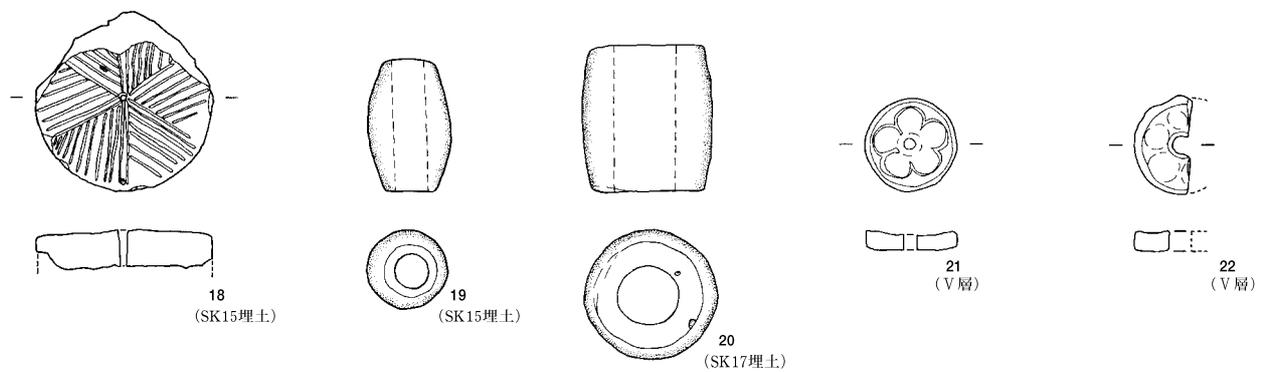
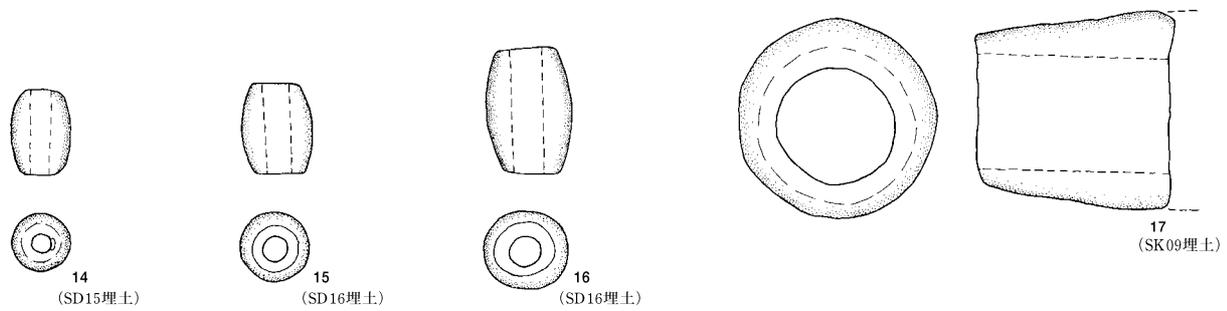
第64図 土器・陶磁器 (第Ⅶ・Ⅷ層面遺構内、第Ⅶ層出土)



第65図 土器・陶磁器 (第Ⅶ層出土)



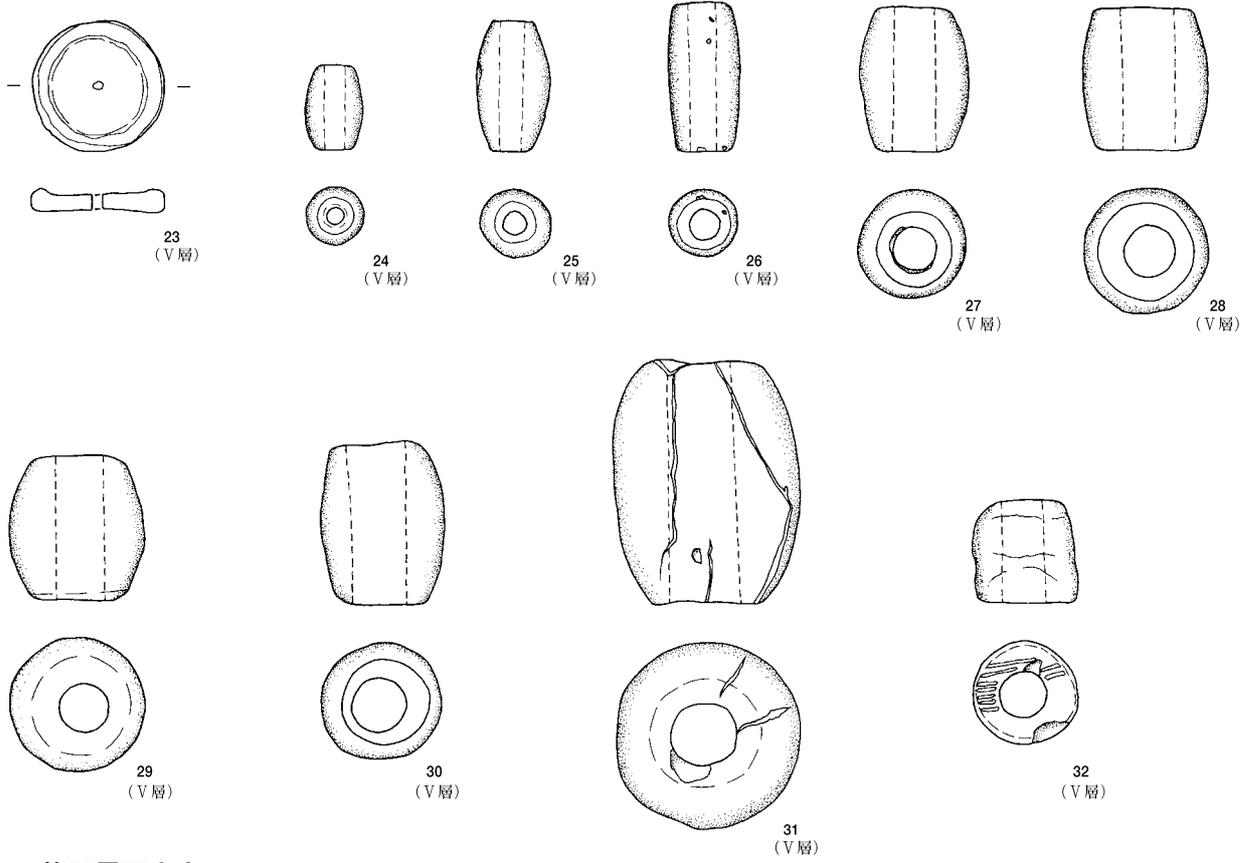
第IV層面出土



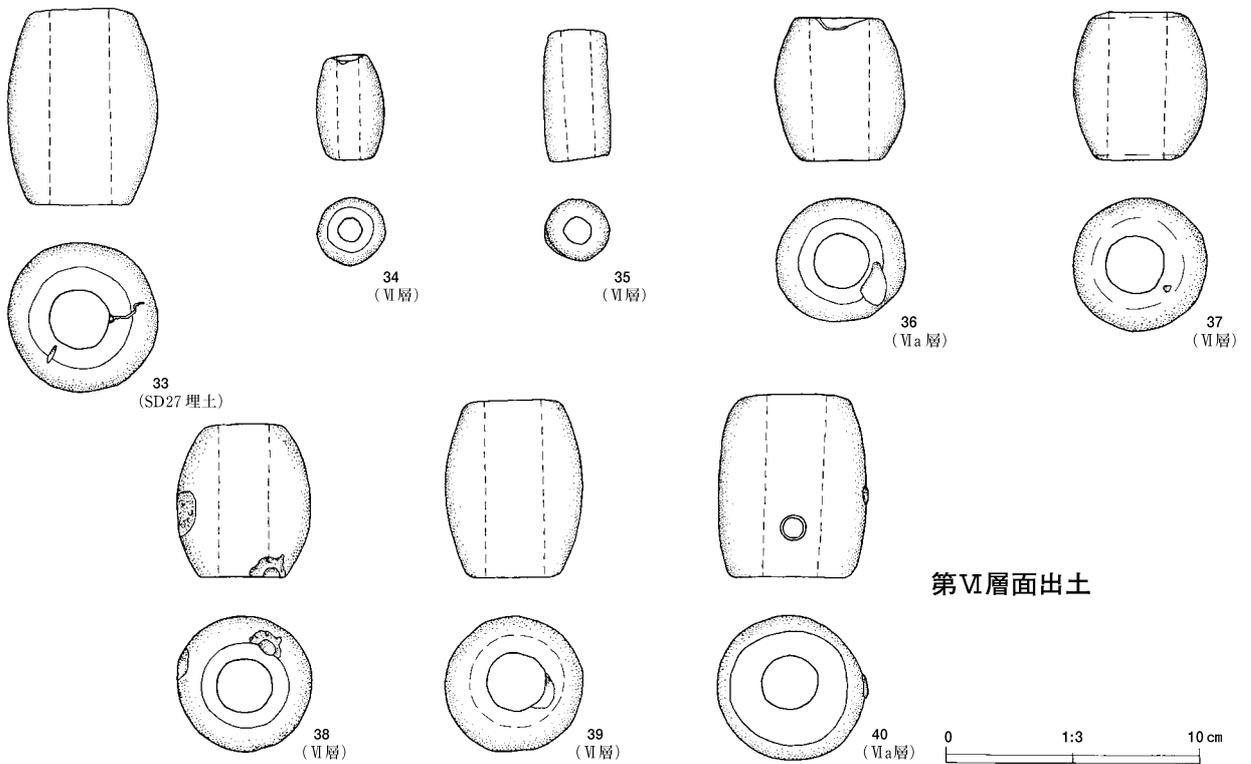
第V層面出土



第66図 土製品 (第IV層面、V層面出土)

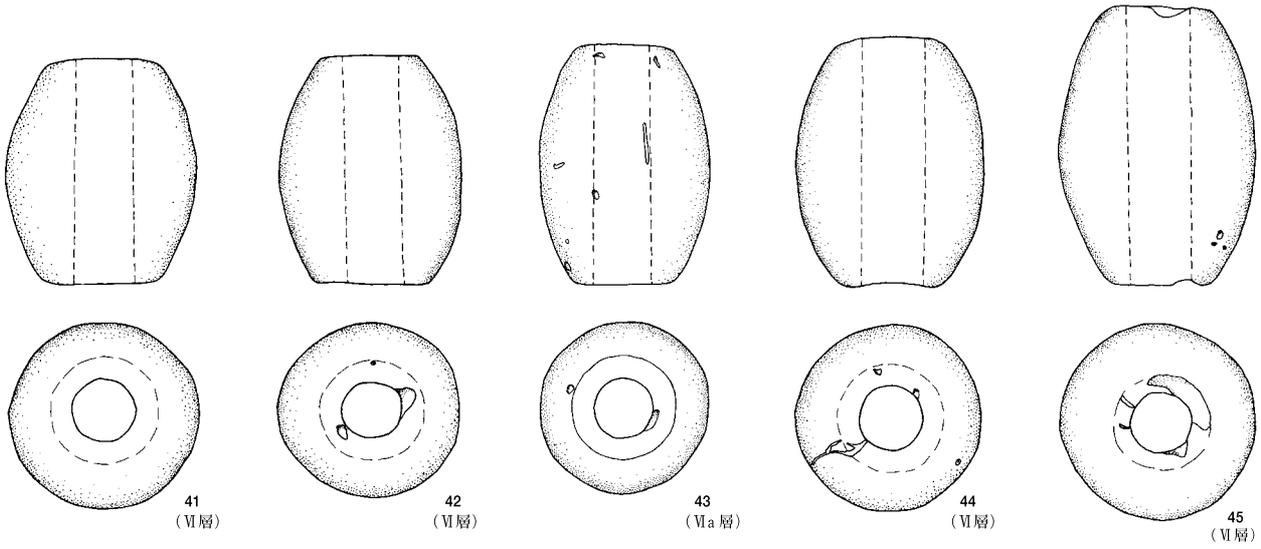


第V層面出土

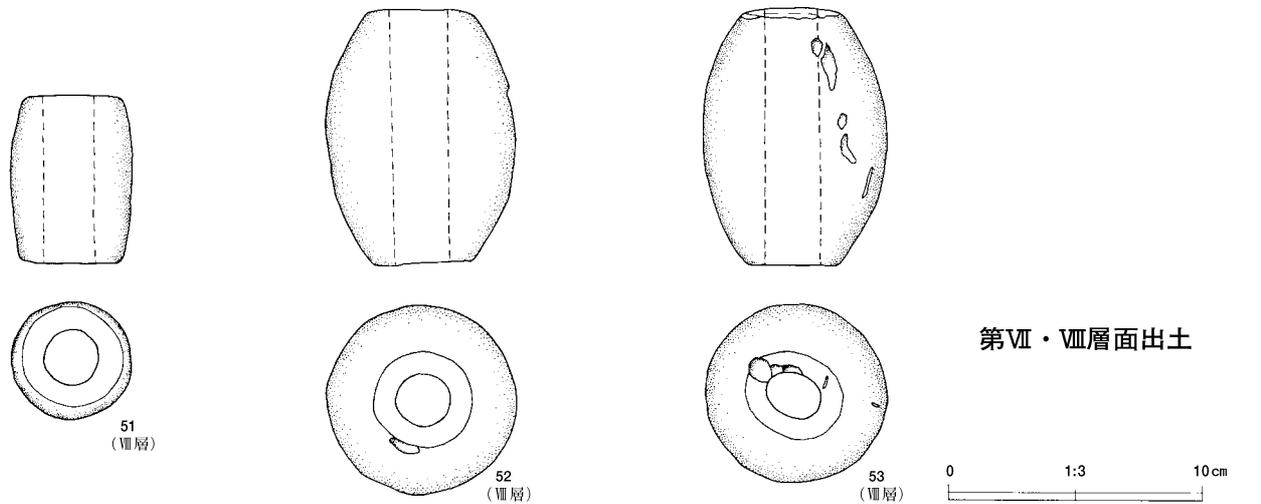
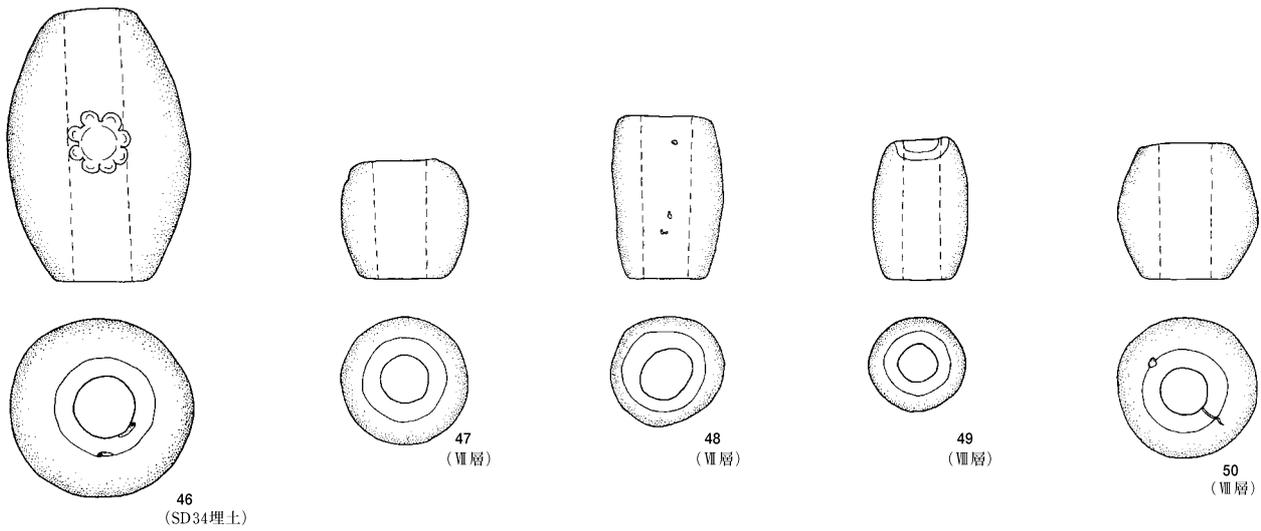


第VI層面出土

第67図 土製品 (第V層面、VI層面出土)



第VI層面出土



第68図 土製品 (第VI層面、VII・VIII層面出土)

表9 木製品属性一覧

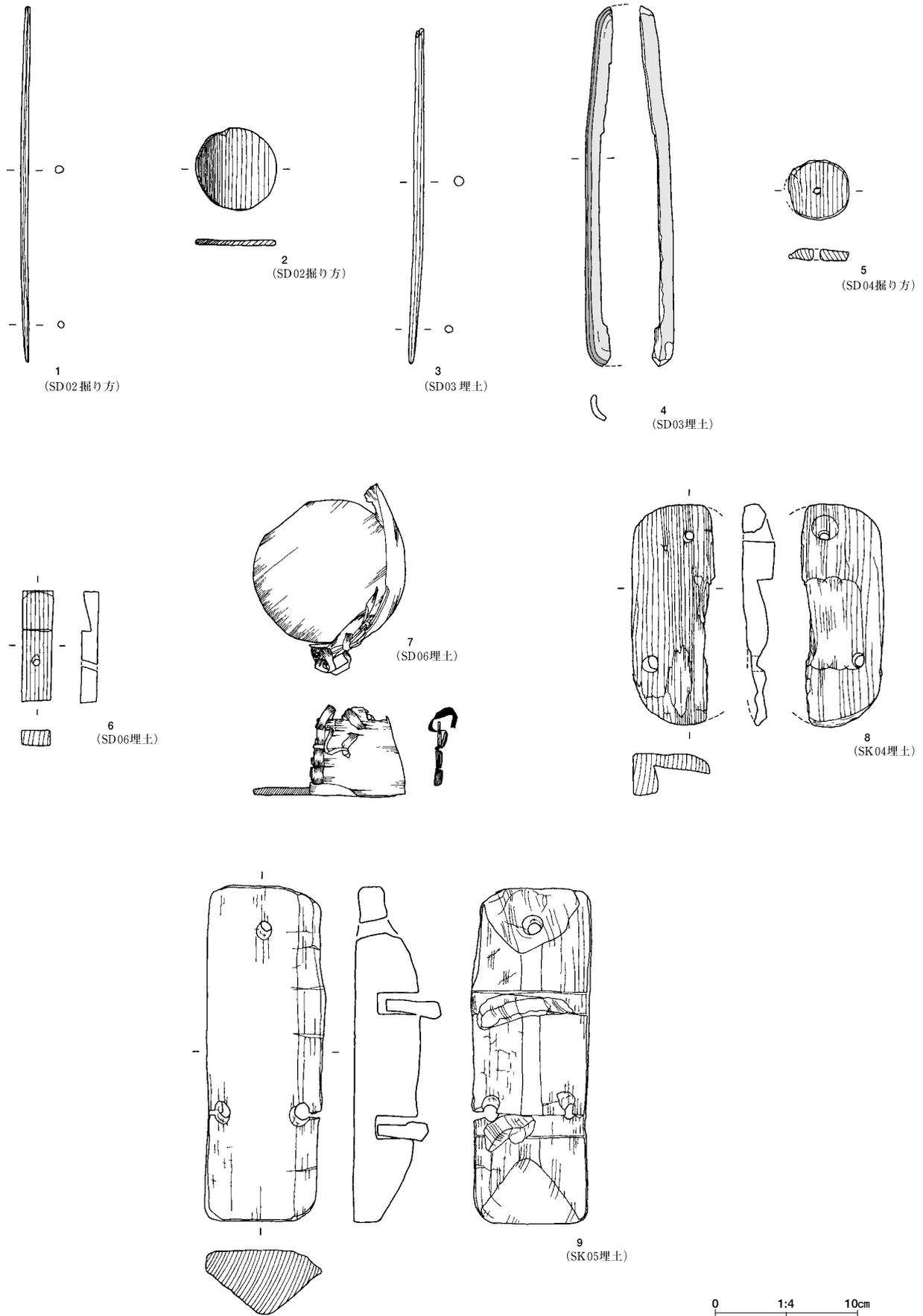
番号	図番号	出土地点・層位	グリッド名	器種	法量 (cm) [括弧のものは欠損]
1	第69図	SD02掘り方		筭	長さ25.2、最大幅0.5、最大厚0.5
2	第69図	SD02掘り方		曲物	長さ5.9、最大幅5.7、最大厚0.4
3	第69図	SD03埋土		筭	長さ23.8、最大幅0.7、最大厚0.7
4	第69図	SD03埋土		折敷	長さ25.6、最大幅(1.6)、最大厚(0.4)
5	第69図	SD04掘り方		不明	長さ4.3、最大幅(4.3)、最大厚0.8
6	第69図	SD06埋土		不明	長さ7.9、最大幅2.1、最大厚1.1
7	第69図	SD06埋土		曲物	長さ10.1、幅10.3、厚さ0.5、高さ6.4
8	第69図	SK04埋土		下駄	長さ15.7、最大幅(5.8)、最大厚3.0
9	第69図	SK05		下駄	長さ23.9、最大幅8.5、最大厚4.6
10	第70図	IV層	LU50	筭	長さ26.6、最大幅0.7、最大厚0.6
11	第70図	IV層	LY50	曲物	長さ10.5、最大幅(5.2)、最大厚(1.3)
12	第70図	IV層	LY50	折敷	長さ21.0、最大幅(9.1)、最大厚(0.4)
13	第70図	IV層	MC50	曲物	長さ43.6、最大幅(11.5)、最大厚(1.5)
14	第70図	IV層	MC50	下駄	長さ(21.5)、最大幅7.7、最大厚2.0
15	第70図	IV層	LW50	栓	長さ10.4、最大幅2.2、最大厚2.2
16	第70図	IV層	MC50	折敷	長さ(3.6)、最大幅(19.7)、最大厚(0.7)
17	第70図	IV層	LY50	不明	長さ24.0、最大幅1.5、最大厚1.5
18	第71図	SB02 P1掘り方		独朶	長さ3.9、最大幅2.4、最大厚2.4
19	第71図	SD10埋土		筭	長さ26.0、最大幅0.7、最大厚0.6
20	第71図	SD12埋土		筭	長さ26.2、最大幅0.6、最大厚0.5
21	第71図	SD13埋土		筭	長さ24.7、最大幅0.7、最大厚0.6
22	第71図	SD15埋土		不明	長さ11.9、最大幅4.8、最大厚0.9
23	第71図	SD15埋土		筭	長さ22.1、最大幅0.7、最大厚0.6
24	第71図	SD19埋土		筭	長さ26.4、最大幅0.8、最大厚0.7
25	第71図	V層	ME50	曲物	長さ35.5、最大幅35.1、最大厚2.3
26	第71図	V層	MB50	椀	長さ8.0、最大幅10.0、最大厚0.6
27	第71図	V層	LW50	筭	長さ21.5、最大幅0.7、最大厚0.7
28	第71図	V層	MB50	筭	長さ21.3、最大幅0.7、最大厚0.6
29	第72図	V層	LZ50	下駄	長さ15.1、最大幅6.3、最大厚1.8
30	第72図	V層	MB50	刷毛	長さ18.6、最大幅3.0、最大厚0.6
31	第72図	V層	MC50	不明	長さ、最大幅、最大厚
32	第72図	SB10 P3抜き取り		曲物	長さ7.7、最大幅9.7、最大厚0.5
33	第72図	SD25埋土		筭	長さ22.7、最大幅0.5、最大厚0.6
34	第72図	SD26埋土		不明	長さ(19.7)、最大幅(1.1)、最大厚(0.8)
35	第72図	SD27埋土		下駄	長さ12.6、最大幅7.1、最大厚3.6
36	第72図	SK23埋土		筭	長さ23.0、最大幅0.6、最大厚0.6
37	第72図	SK23埋土		筭	長さ24.0、最大幅0.6、最大厚0.6
38	第72図	SK23埋土		独朶	長さ4.7、最大幅4.0、最大厚4.2
39	第72図	SK28埋土		筭	長さ24.4、最大幅0.7、最大厚0.8
40	第72図	SK28埋土		筭	長さ24.7、最大幅0.7、最大厚0.6
41	第72図	SK28埋土		筭	長さ24.1、最大幅0.7、最大厚0.6
42	第72図	SK28埋土		櫛	長さ3.8、最大幅8.5、最大厚0.9
43	第73図	SK29埋土		筭	長さ22.7、最大幅0.7、最大厚0.8
44	第73図	SK29埋土		曲物	長さ(29.3)、最大幅(6.0)、最大厚(2.2)
45	第73図	VI層	MB50	下駄函	長さ9.0、最大幅11.8、最大厚1.8
46	第73図	VI層	MB50	栓	長さ6.1、最大幅3.2、最大厚3.0
47	第73図	VII層	MA50	筭	長さ25.6、最大幅0.7、最大厚0.6
48	第73図	VIII層	LY50	椀	高さ(3.2)、口径13.4、最大厚0.4
49	第73図	VIII層	LZ50	筭	長さ26.8、最大幅0.6、最大厚0.6
50	第73図	VIII層	MB50	筭	長さ25.2、最大幅0.8、最大厚0.6
51	第73図	VIII層	MA50	筭	長さ25.4、最大幅0.6、最大厚0.6

表10 石製品属性一覧

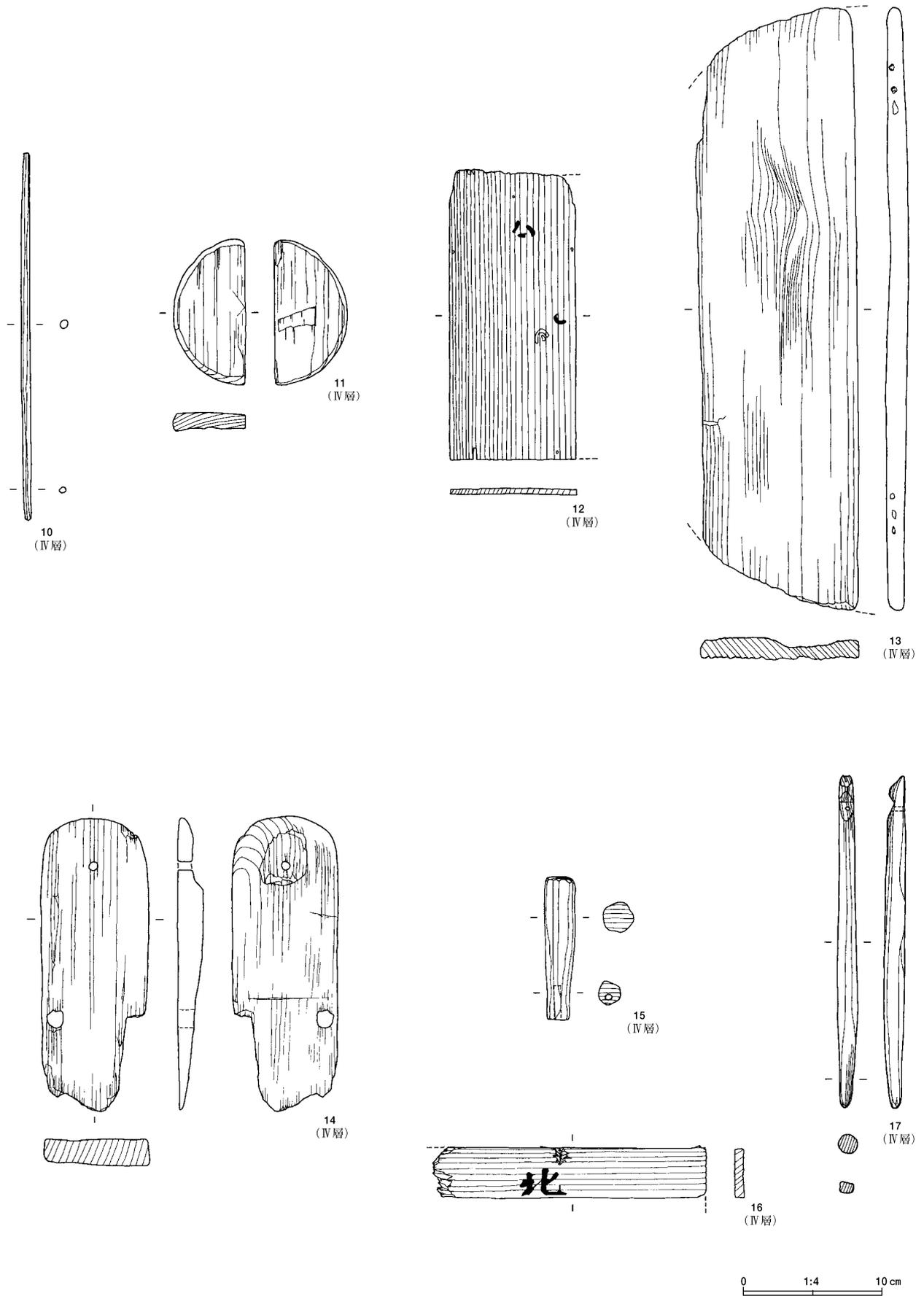
番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	器種	石材	重量 (g)
1	第74図	SK04埋土		砥石	凝灰岩	1030
2	第74図	IV層	LV50	硯	粘板岩	164
3	第74図	SB05 S2底面		碁石	泥岩	1
4	第74図	SK14埋土		砥石	凝灰岩	138
5	第74図	V層	LY50	硯	粘板岩	132
6	第74図	V層	LY50	砥石	凝灰岩	108
7	第74図	V層	LW50	砥石	凝灰岩	110
8	第74図	V層	MB50	不明	砂岩	8
9	第75図	SD26掘り方		砥石	凝灰岩	162
10	第75図	SD31埋土		砥石	凝灰岩	486
11	第75図	VI層	LZ50	硯	粘板岩	32
12	第75図	VIII層	LX50	硯	粘板岩	9

表11 瓦属性一覧

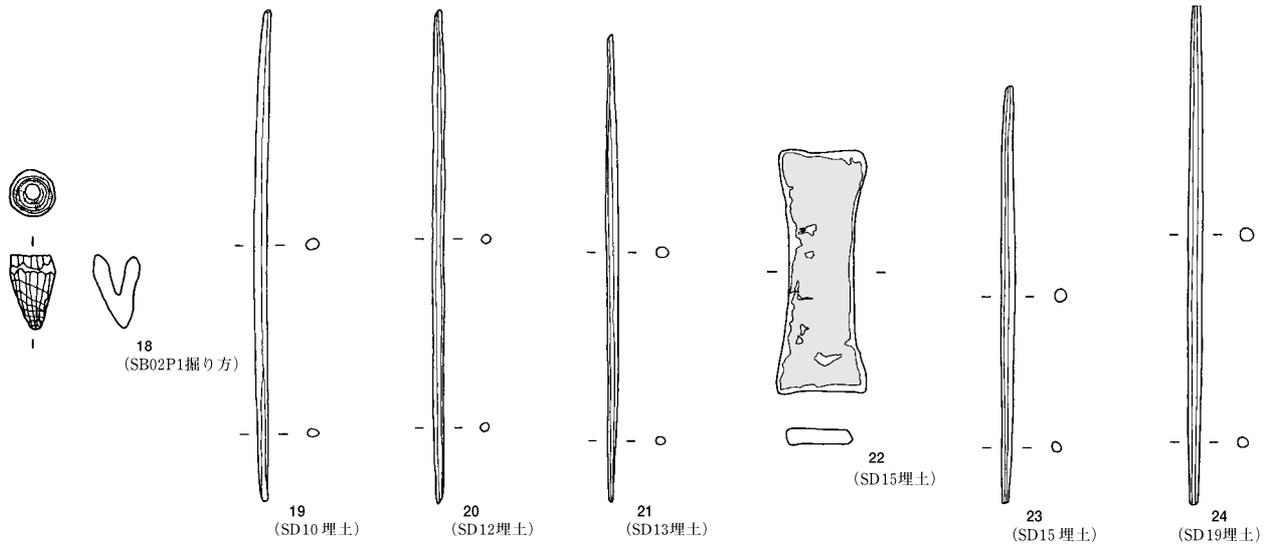
番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	分類	重量 (g)	備考
1	第76図	SD01埋土		棧瓦 (赤瓦)	870	
2	第76図	SD06埋土		棧瓦 (いぶし瓦)	162	
3	第76図	SE01掘り方		棧瓦 (いぶし瓦)	236	
4	第76図	IV層	MA50	棧瓦 (いぶし瓦)	282	
5	第76図	IV層	MC50	棧瓦 (赤瓦)	322	
6	第76図	SK08埋土		棧瓦 (いぶし瓦)	605	
7	第76図	VI層	MD50	棧瓦 (いぶし瓦)	210	
8	第76図	VIII層	MF50	丸瓦 (いぶし瓦)	146	裏面に布目圧痕



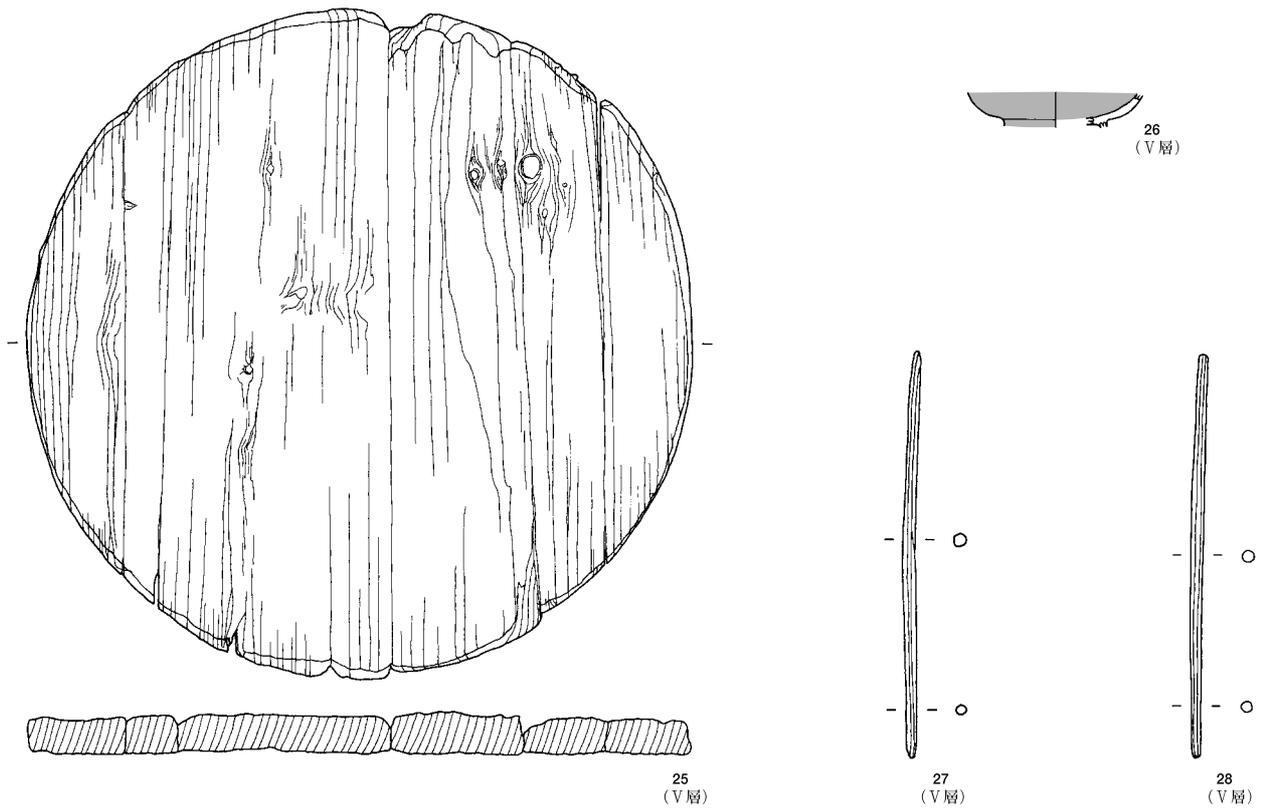
第69図 木製品 (第IV層面遺構内出土)



第70図 木製品 (第IV層出土)



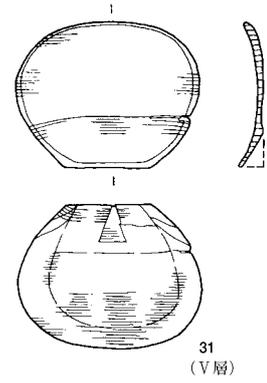
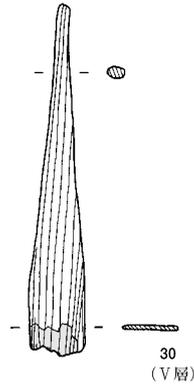
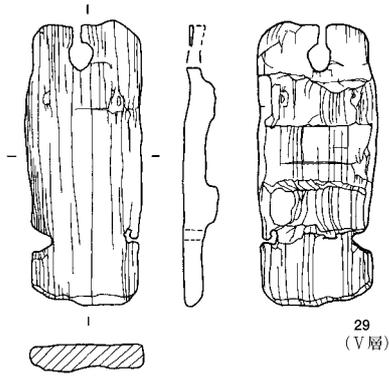
第V層面遺構内出土



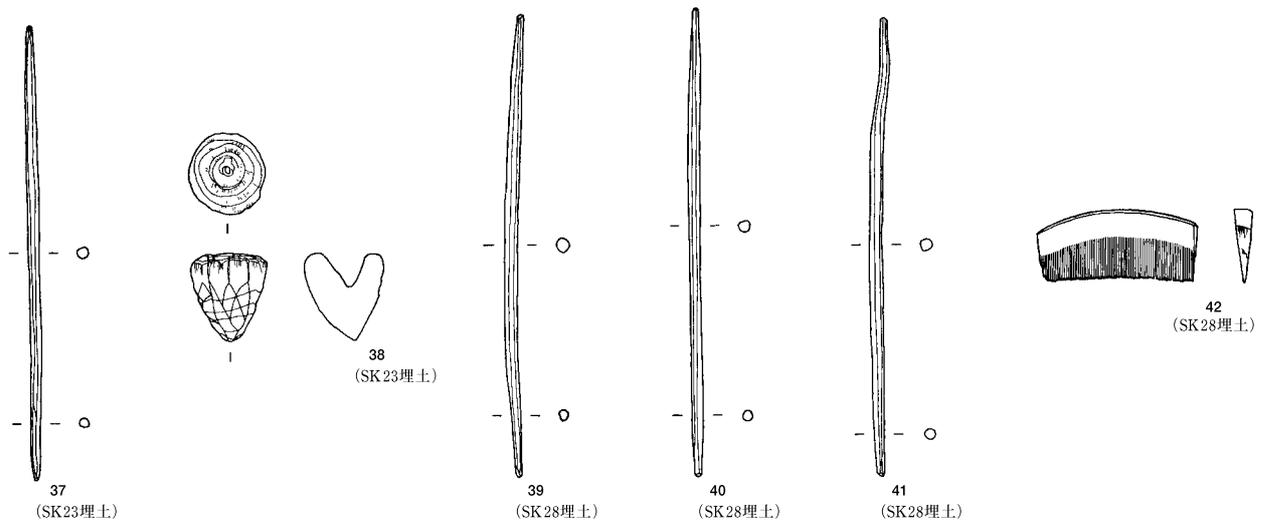
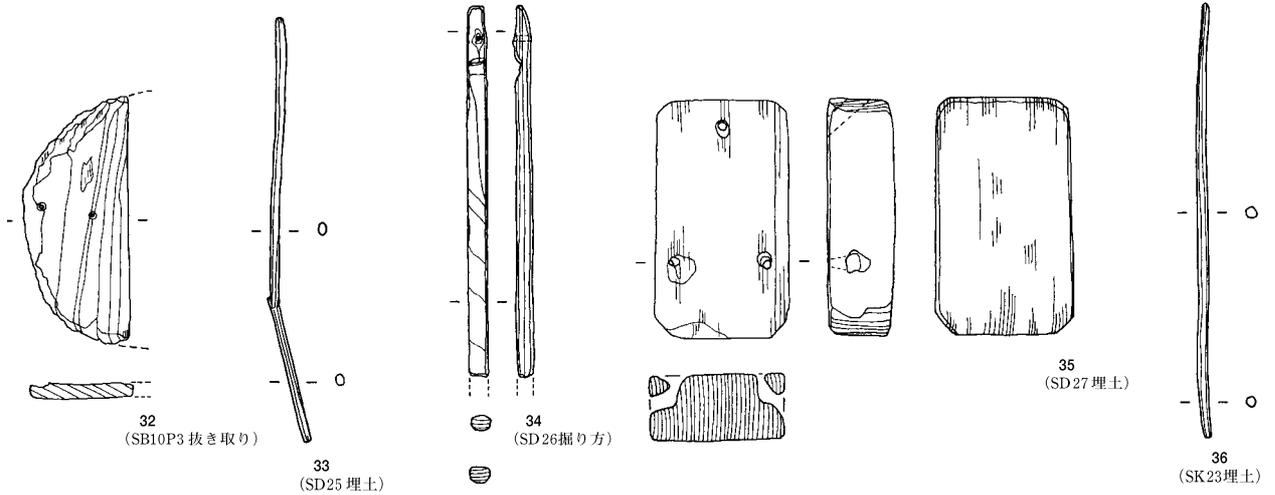
第V層出土

0 1:4 10cm

第71図 木製品 (第V層面出土)

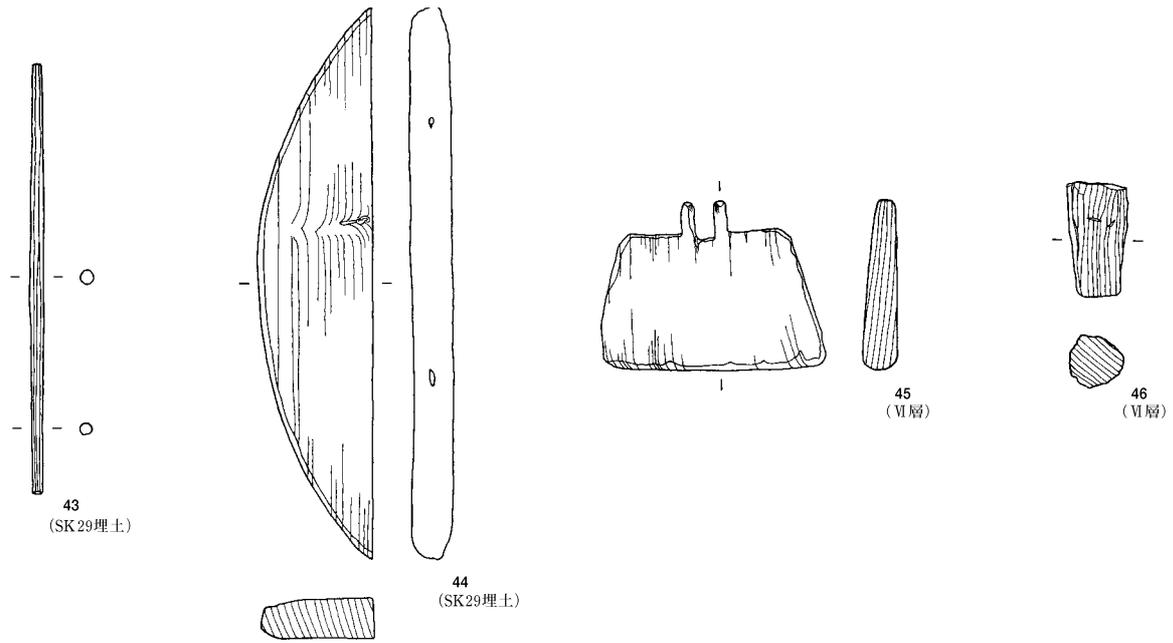


第V層出土

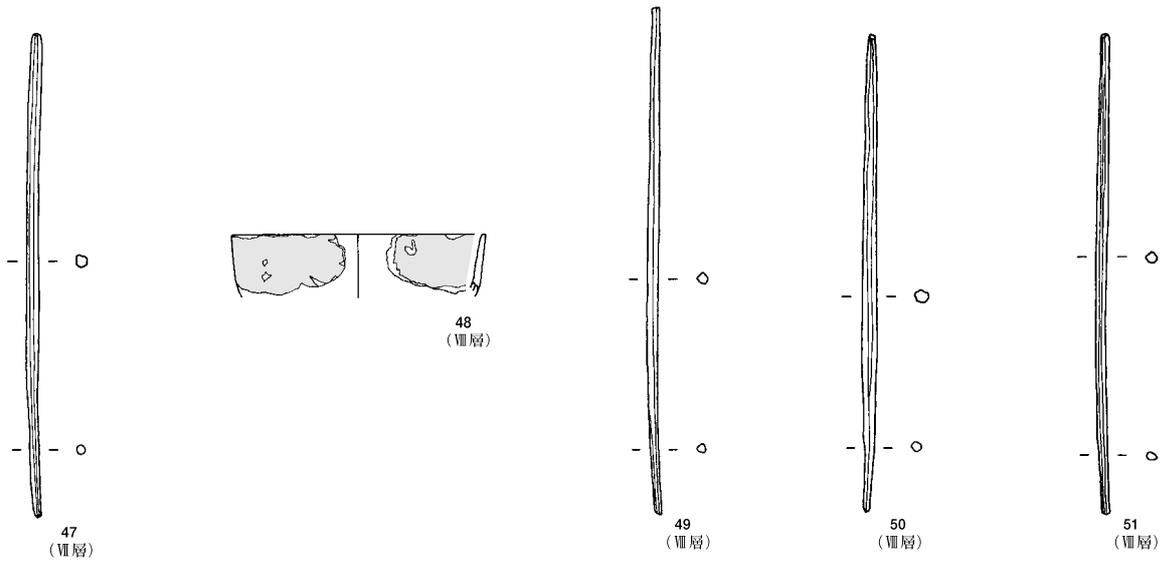


第VI層遺構内出土

第72図 木製品 (第V層、第VI層面遺構内出土)



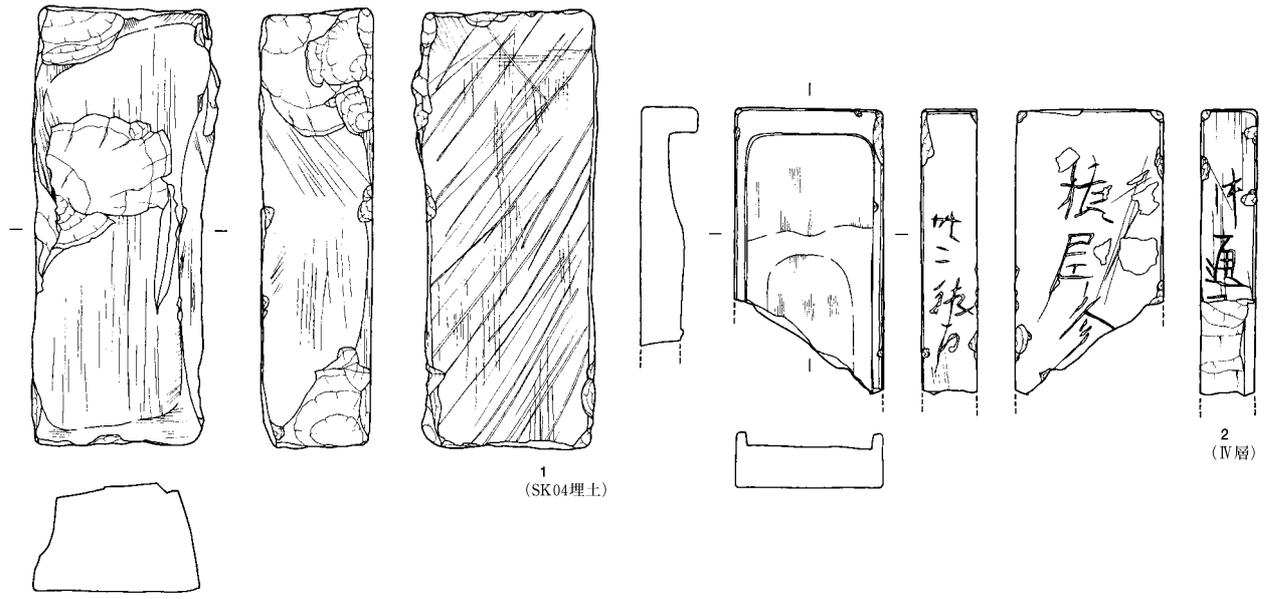
第VI層面出土



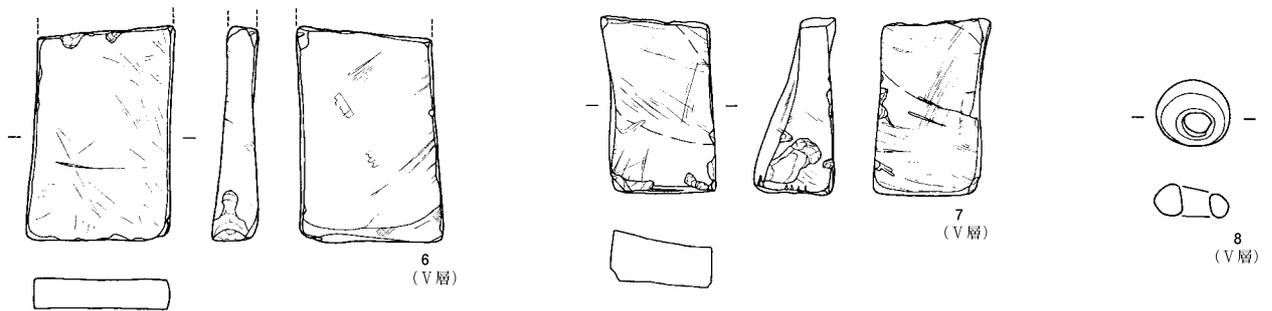
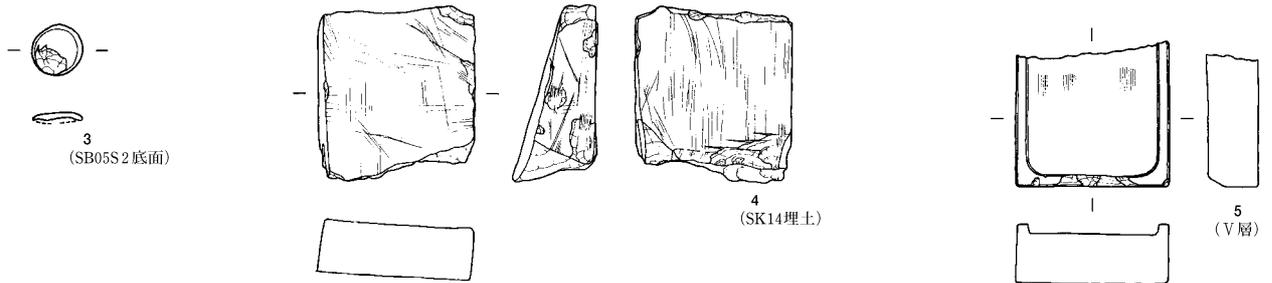
第VII・VIII層面出土



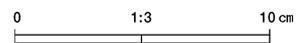
第73図 木製品 (第VI、VII・VIII層面出土)



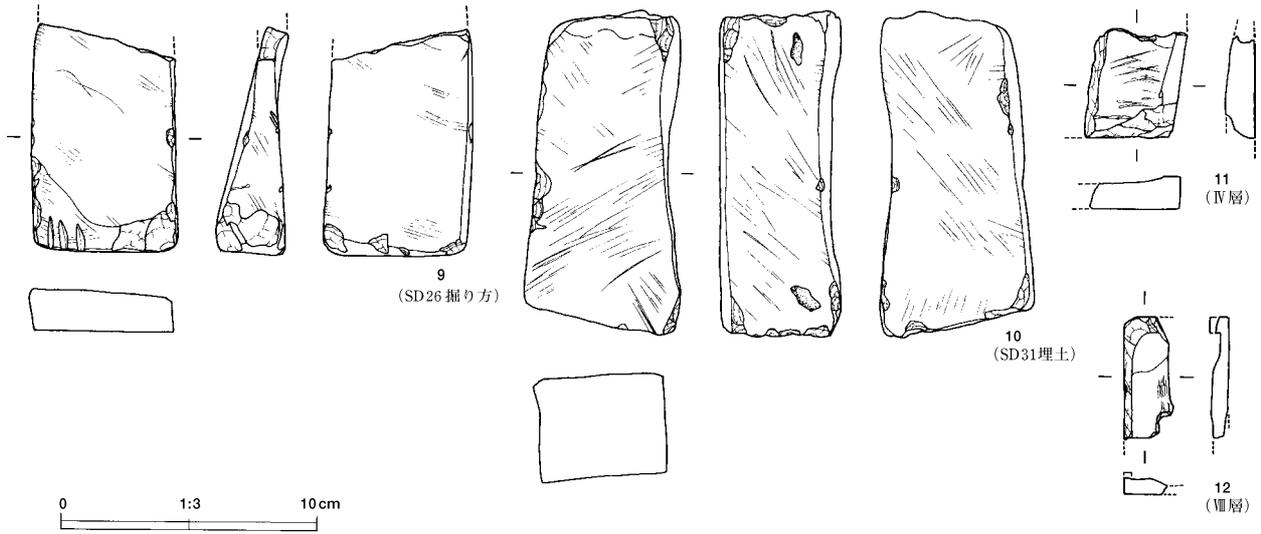
第IV層面出土



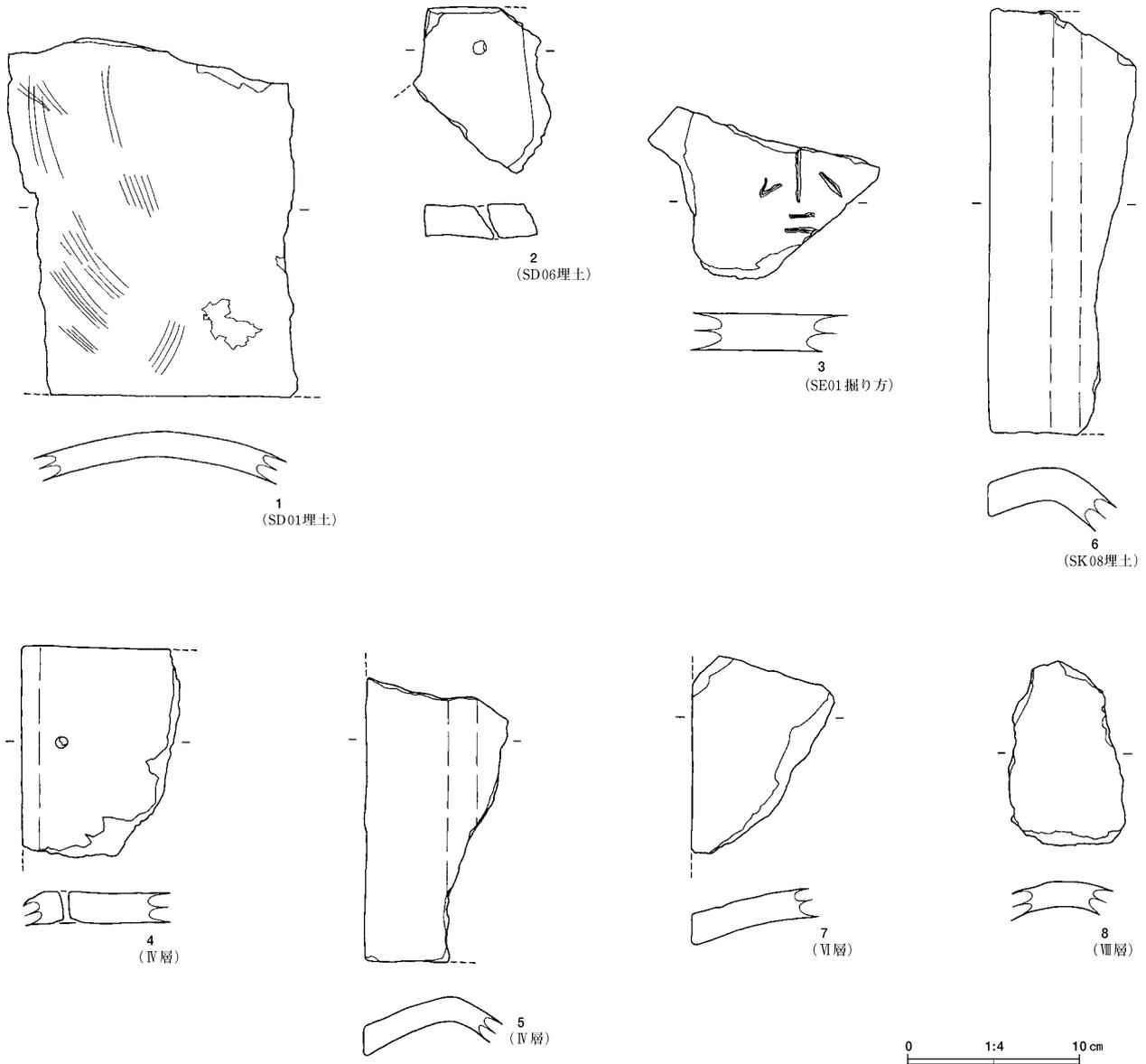
第V層面出土



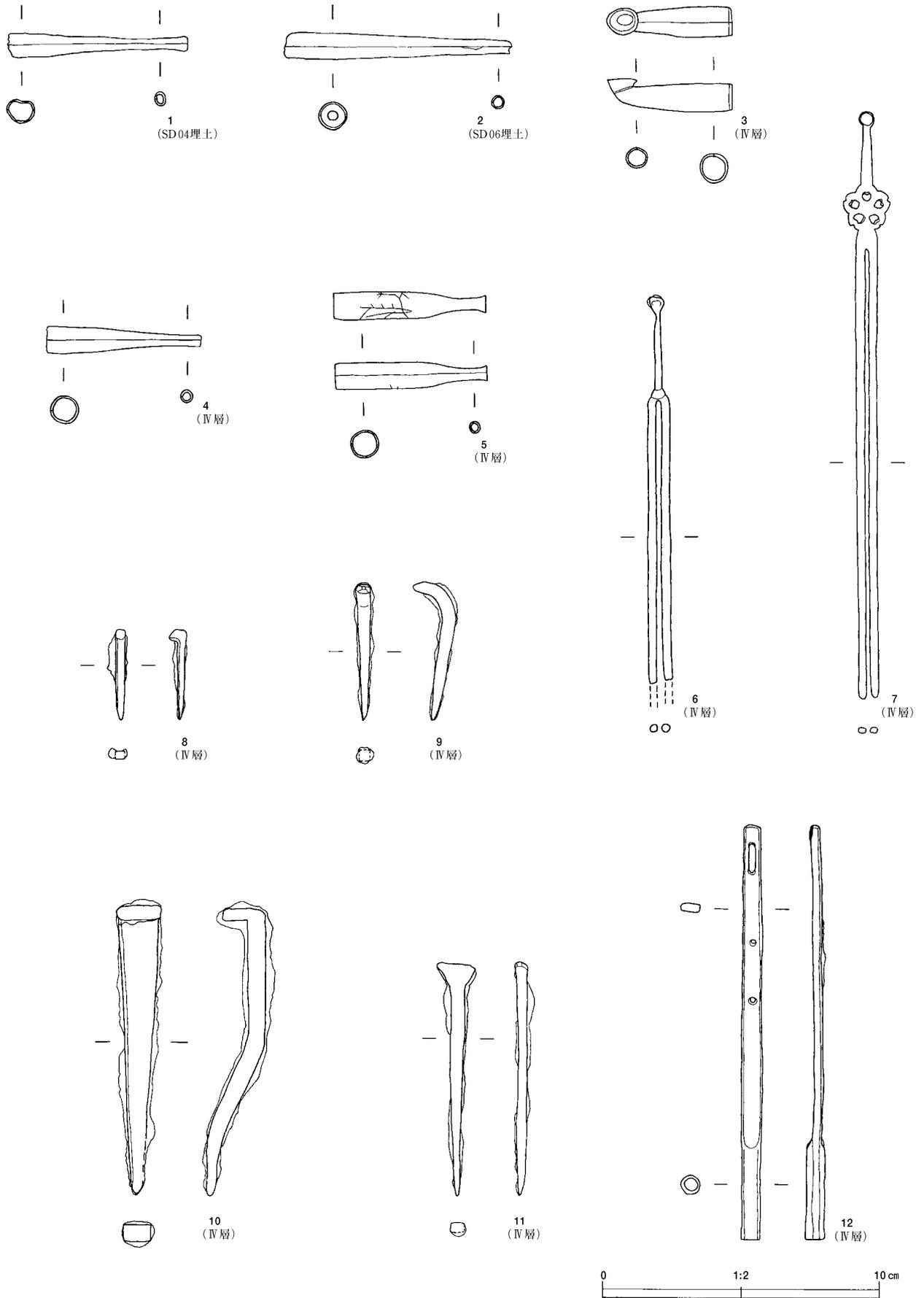
第74図 石製品 (第IV、V層面出土)



第75図 石製品 (第Ⅵ、Ⅶ・Ⅷ層面出土)

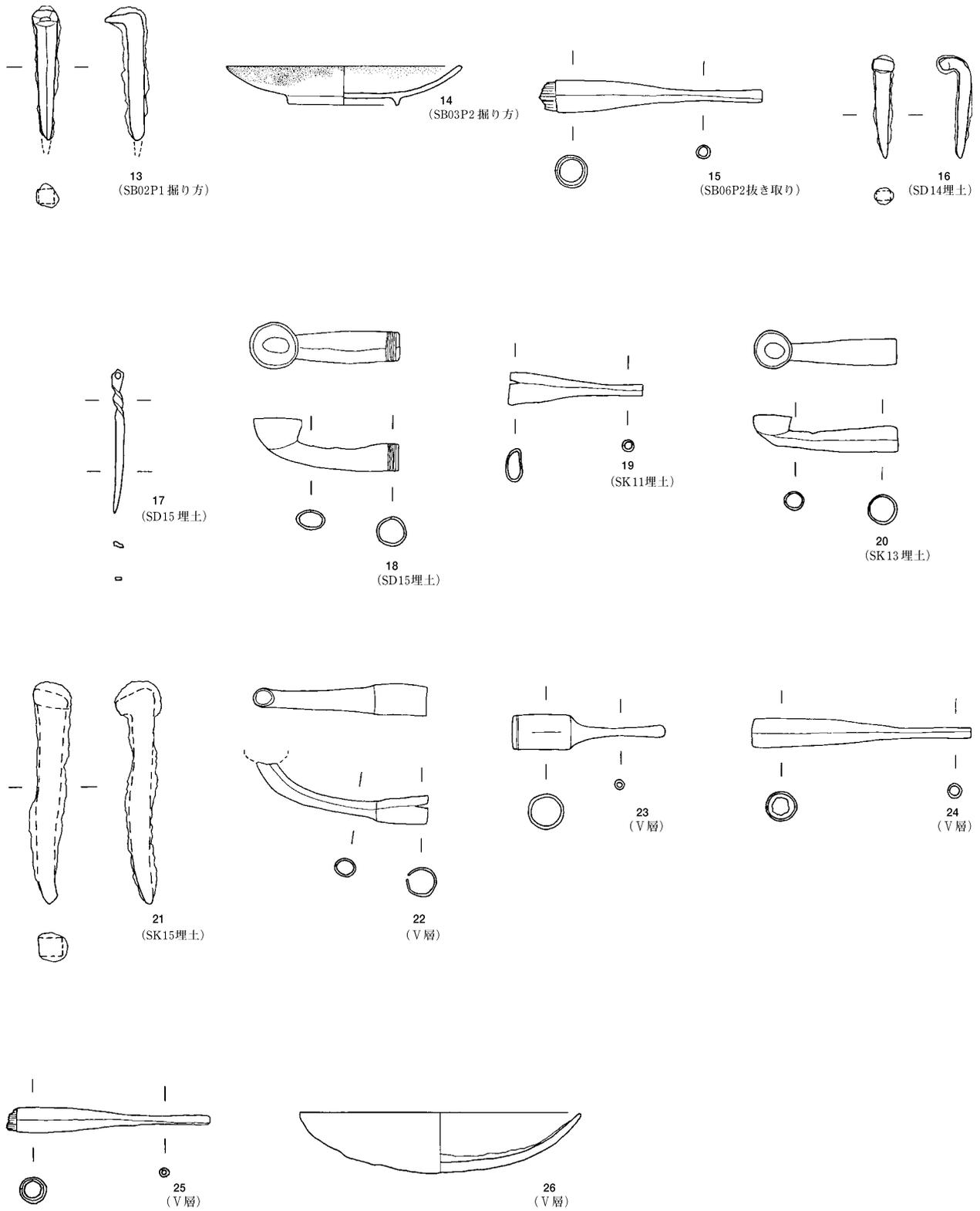


第76図 瓦



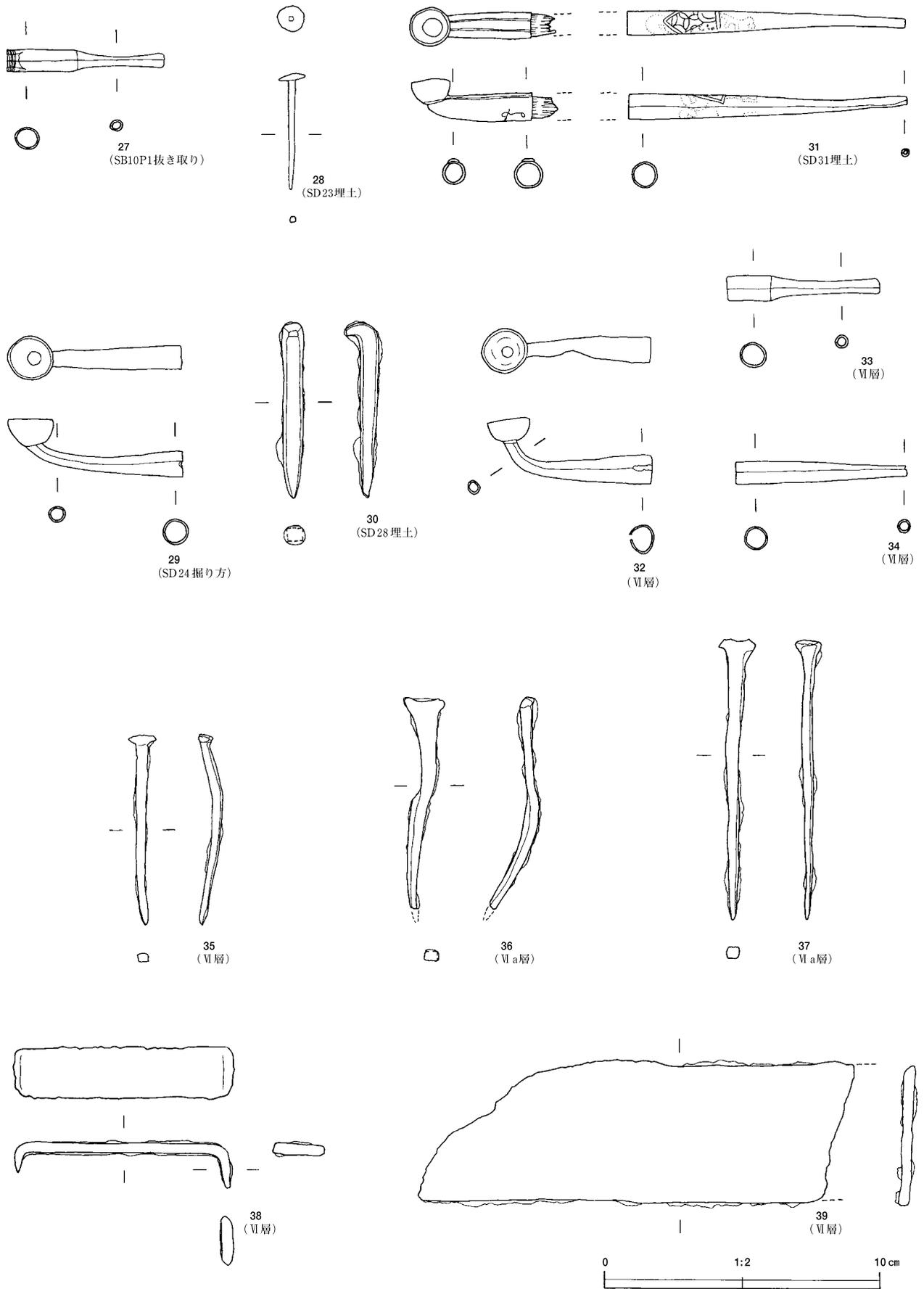
第77図 金属製品 (第IV層面出土)

第3章 調査の方法と成果
 (6) 属性表・実測図



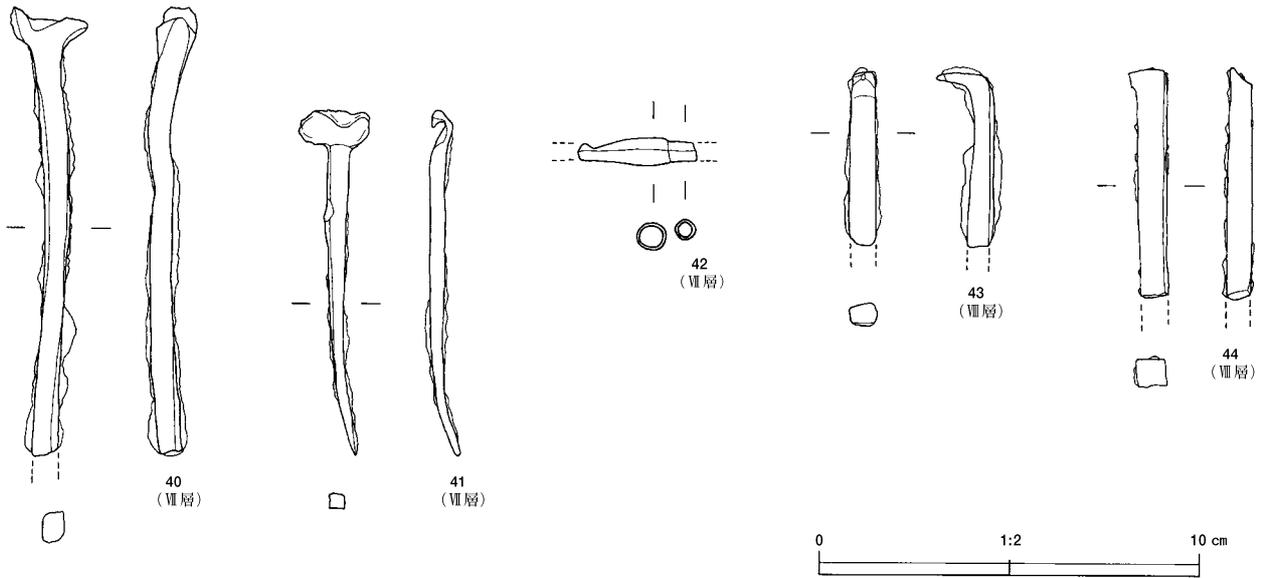
0 1:2 10 cm

第78図 金属製品 (第V層面出土)



第79図 金属製品 (第VI層面出土)

第3章 調査の方法と成果
(6) 属性表・実測図



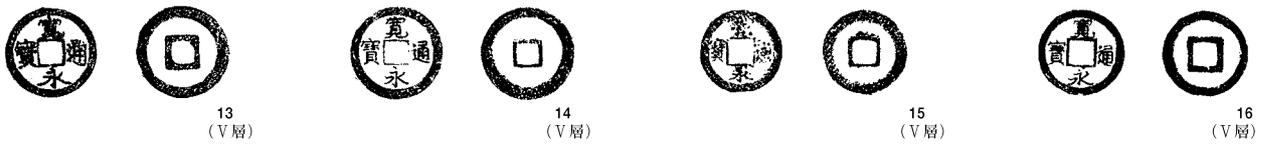
第80図 金属製品（第Ⅶ・Ⅷ層面出土）

表12 金属製品属性一覧

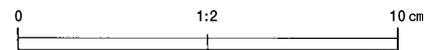
番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	器種	素材	重量 (g)	キセル分類	備考
1	第77図	SD04埋土		煙管吸口	真鍮	4	Ⅳ～Ⅴ期	
2	第77図	SD04埋土		煙管吸口	真鍮	9	Ⅳ～Ⅴ期	
3	第77図	Ⅳ層	MC50	煙管雁首	真鍮	7	Ⅴ期	
4	第77図	Ⅳ層	LY50	煙管吸口	真鍮	5	Ⅳ～Ⅴ期	
5	第77図	Ⅳ層	LV50	煙管吸口	真鍮	7	Ⅳ～Ⅴ期	
6	第77図	Ⅳ層	LY50	簪	真鍮	11		
7	第77図	Ⅳ層	LY50	簪	銅	16		
8	第77図	Ⅳ層	LX50	釘 (折釘)	鉄	1		
9	第77図	Ⅳ層	LY50	釘 (折釘)	鉄	4		
10	第77図	Ⅳ層	LY50	釘 (皆折釘)	鉄	28		
11	第77図	Ⅳ層	LV50	釘	鉄	7		
12	第77図	Ⅳ層	MC50	不明	銅	23		
13	第78図	SB02 P1掘り方		釘 (折釘)	鉄	6		
14	第78図	SB03 P2掘り方		皿	銅	63		
15	第78図	SB06 P2抜き取り		煙管吸口	真鍮	8	Ⅳ～Ⅴ期	
16	第78図	SD14埋土		釘 (折釘)	鉄	2		
17	第78図	SD15埋土		針	銅	1		
18	第78図	SD15埋土		煙管雁首	真鍮	7	Ⅴ期	
19	第78図	SK11埋土		煙管吸口	真鍮	2	Ⅳ～Ⅴ期	
20	第78図	SK13埋土		煙管雁首	真鍮	5	Ⅴ期	
21	第78図	SK15埋土		釘 (折釘)	鉄	16		
22	第78図	V層	LY50	煙管雁首	真鍮	6	Ⅱ期	
23	第78図	V層	LU50	煙管吸口	真鍮	9	Ⅱ～Ⅲ期	
24	第78図	V層	MB50	煙管吸口	真鍮	10	Ⅳ～Ⅴ期	
25	第78図	V層	MD50	煙管吸口	真鍮	5	Ⅳ～Ⅴ期	
26	第78図	V層	MB50	皿	鉄	100		
27	第79図	SB10 P1抜き取り		煙管吸口	真鍮	4	Ⅱ～Ⅲ期	
28	第79図	SD23埋土		鋸	銅	2		
29	第79図	SD24掘り方		煙管雁首	真鍮	7	Ⅳ期	
30	第79図	SD28埋土		釘 (折釘)	鉄	8		
31	第79図	SD31埋土		煙管吸口・雁首	真鍮	吸口9、雁首8	Ⅴ期	共伴出土
32	第79図	Ⅵ層	MD50	煙管雁首	真鍮	5	Ⅲ期	
33	第79図	Ⅵ層	MC50	煙管吸口	真鍮	4	Ⅲ期	
34	第79図	Ⅵ層	ME50	煙管吸口	真鍮	4	Ⅳ期	
35	第79図	Ⅵ層	MC50	釘	鉄	4		
36	第79図	Ⅵa層	MD50	釘	鉄	6		
37	第79図	Ⅵa層	MC50	釘	鉄	10		
38	第79図	Ⅵ層	ME50	鏝	鉄	27		
39	第79図	Ⅵ層	LZ50	鎌	鉄	56		
40	第80図	Ⅶ層	LW50	釘	鉄	29		
41	第80図	Ⅶ層	MB50	釘 (頭巻釘)	鉄	8		
42	第80図	Ⅶ層		煙管吸口	真鍮	2	Ⅰ～Ⅲ期	
43	第80図	Ⅷ層	LX50	釘 (折釘)	鉄	6		
44	第80図	Ⅷ層	LW50	釘 (角釘)	鉄	19		



第IV層面出土

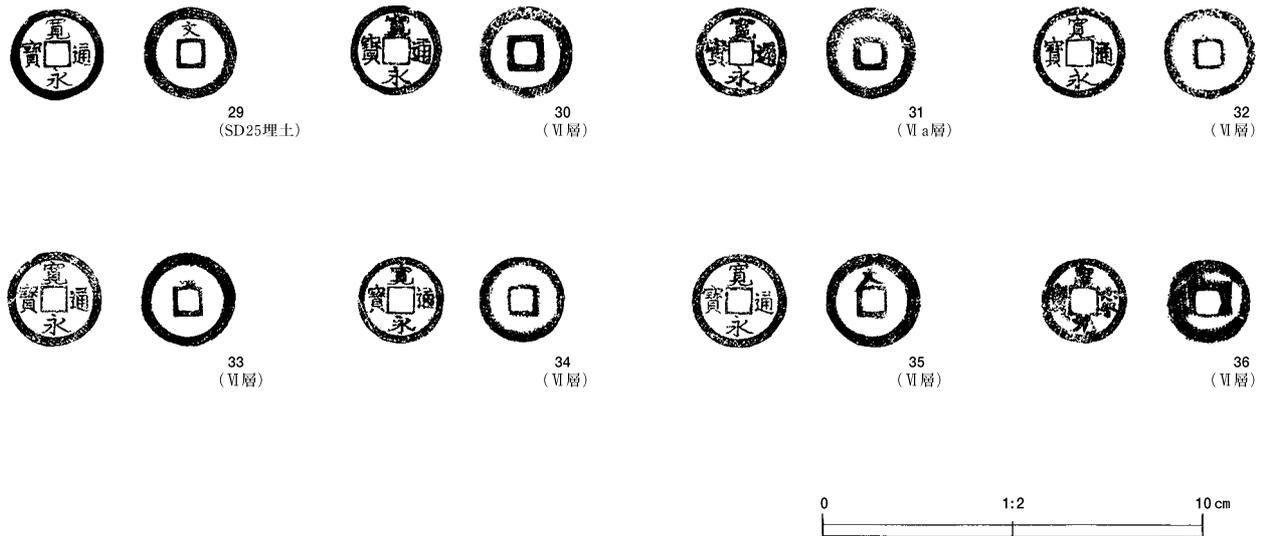


第V層面出土



第81図 銭貨 (第IV、V層面出土)

第3章 調査の方法と成果
(6) 属性表・実測図



第82図 銭貨 (第Ⅵ層面出土)

表13 銭貨属性一覧

番号	図番号	出土地点・層位	グリッド	銭貨名	分類	素材	外径 (mm)	銭厚 (mm)	重量 (g)
1	第81図	SD05埋土		寛永通寶	新寛永	銅	23.3	1.0	2.2
2	第81図	Pit03埋土		寛永通寶	古寛永	銅	23.9	1.6	3.3
3	第81図	Ⅳ層	LY50	寛永通寶	古寛永	銅	25.0	1.2	3.2
4	第81図	Ⅳ層	LX50	寛永通寶	新寛永	銅	23.0	1.1	3.0
5	第81図	Ⅳ層	LX50	寛永通寶	新寛永	銅	24.5	1.3	4.0
6	第81図	Ⅳ層	DW50	寛永通寶	新寛永 (川尻銭)	銅	23.6	1.2	3.1
7	第81図	Ⅳ層	DW50	寛永通寶	新寛永 (文銭)	銅	25.0	1.3	4.2
8	第81図	Ⅳ層	LZ50	寛永通寶	新寛永 (二十一波銭)	銅	27.6	1.6	4.5
9	第81図	SA02 P1 掘り方		寛永通寶	新寛永	銅	23.0	1.1	2.1
10	第81図	SB02 P2 掘り方		雁首銭		銅	20.1	2.9	2.3
11	第81図	SK18埋土		寛永通寶	古寛永	銅	24.4	1.5	4.1
12	第81図	SK18埋土		寛永通寶	新寛永	銅	24.7	1.0	2.0
13	第81図	V層	-	寛永通寶	古寛永	銅	24.5	1.2	3.1
14	第81図	V層	MB50	寛永通寶	新寛永	銅	25.0	1.3	3.9
15	第81図	V層	MB50	寛永通寶	新寛永	銅	22.6	1.1	3.1
16	第81図	V層	LU50	寛永通寶	新寛永	銅	23.0	1.1	2.1
17	第81図	V層	MC50	寛永通寶	新寛永	銅	23.7	1.4	2.0
18	第81図	V層	LZ50	寛永通寶	新寛永	銅	23.8	1.1	3.3
19	第81図	V層	LY50	寛永通寶	新寛永	銅	22.4	1.2	2.1
20	第81図	V層	MA50	寛永通寶	新寛永 (川尻銭)	銅	23.6	1.2	3.5
21	第81図	V層	LV50	寛永通寶	新寛永 (川尻銭)	銅	23.4	1.1	3.2
22	第81図	V層	MB50	寛永通寶	新寛永 (川尻銭)	銅	23.3	1.1	3.1
23	第81図	V層	MC50	寛永通寶	新寛永 (文銭)	銅	25.2	1.3	3.8
24	第81図	V層	MC50	寛永通寶	新寛永 (文銭)	銅	25.1	1.3	3.3
25	第81図	V層	MD50	寛永通寶	新寛永 (文銭)	銅	25.1	1.2	3.4
26	第81図	V層	LY50	寛永通寶	新寛永 (背元銭)	銅	22.9	1.0	2.3
27	第81図	V層	MD50	雁首銭		真鍮	20.3	1.6	2.0
28	第81図	V層	MC50	雁首銭		真鍮	16.7	1.7	2.1
29	第82図	SD25埋土		寛永通寶	新寛永 (文銭)	銅	25.3	1.4	4.2
30	第82図	Ⅵ層	LY50	寛永通寶	古寛永	銅	25.0	1.2	3.5
31	第82図	Ⅵa層	MB50	寛永通寶	古寛永	鉄	24.6	1.3	3.8
32	第82図	Ⅵ層	MA50	寛永通寶	新寛永	銅	25.0	1.5	2.9
33	第82図	Ⅵ層	LY50	寛永通寶	新寛永	銅	25.6	1.3	4.1
34	第82図	Ⅵ層	MC50	寛永通寶	新寛永 (川尻銭)	銅	23.3	1.1	2.8
35	第82図	Ⅵ層	LY50	寛永通寶	新寛永 (文銭)	銅	25.5	1.4	3.7
36	第82図	Ⅵ層	LU50	熙寧元寶		銅	23.4	1.3	4.2

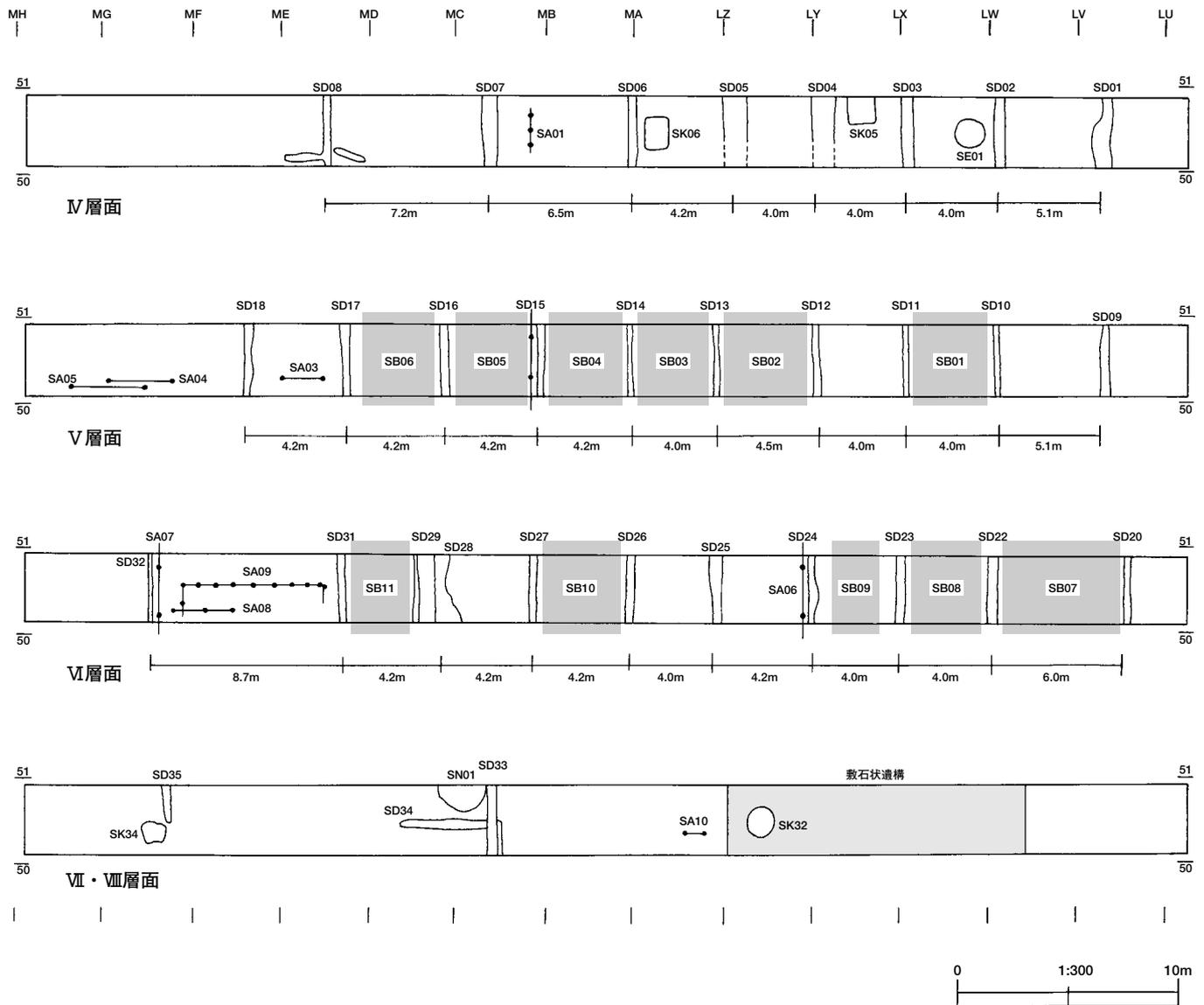
第4章 まとめ

第1節 検出遺構の性格とその年代について

調査区からは、第Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ・Ⅷ層面の4面から遺構が検出された。各遺構面の遺構配置および出土遺物の年代から、その性格について考察したい。第83図に各遺構面の主要遺構配置概略図を示した。

(1) 第Ⅳ～Ⅵ層面について

第Ⅳ～Ⅵ層面からは、南北に併走する溝跡が一定間隔で検出された。第Ⅳ層面では8条、第Ⅴ層面では10条、第Ⅵ層面では11条の溝跡が検出されている。これらの溝跡は、排水施設と屋敷割の境界を兼ねたものであると考えられる。屋敷割の基準尺度については、後述する。第Ⅴ、Ⅵ層面ではこれらの溝跡の間に建物跡が配置されている状況が確認された。建物跡は、調査区が狭小であったため桁行方向の間に



第83図 主要遺構配置概念図

数は不明であるが、梁間1～2間で桁行方向が長い町屋形式であったと考えられる。南北第Ⅳ層面では、建物跡は明確な遺構としては確認されなかったが、第Ⅴ、Ⅵ層面の遺構配置から考えて、これらの溝跡間に建物が配置されていたものと推定される。これは、建物跡が主に礎石式建物であり、その礎石が後世の攪乱により失われ、明確な遺構として検出されなかったという可能性が考えられる。なお、第Ⅳ～Ⅵ層面検出の溝跡の多くは、側壁板材と杭に焼け跡がみられ、各遺構面の一部は火災等により廃絶し、整地され、土層が堆積したものと考えられる。

溝跡・建物跡・柱列跡の方向は基本的に南北方向であるが、第Ⅴ層面の3～5号柱列跡、第Ⅵ層面の8・9号柱列跡は東西方向を基本としたものである。これらは、いずれも調査区西側に偏っており、また、屋敷割の間口も広いことから、建物方向等が他と異なっていた可能性を示唆している。

その他、特徴的な遺構としては、第Ⅳ層面における5・6号土坑のように、側板が設置され貯蔵穴としての機能が推定される土坑や、1号井戸跡が検出されている。

第Ⅳ～Ⅵ層面の年代は、各整地層・遺構内の出土遺物の年代から下記のとおりとなる（表14参照）。

①第Ⅳ層面…第Ⅳ層は18世紀後半～19世紀前半に整地されたものであり、遺構の構築年代は18世紀後半以降で、19世紀中葉までにはおおむね廃絶している。第Ⅳ層面は江戸時代後期の遺構群であると考えられる。

②第Ⅴ層面…第Ⅴ層は17世紀後葉～18世紀代に整地されたものであり、遺構の構築年代は18世紀前半で、19世紀前半までに廃絶している。第Ⅴ層面は江戸時代中期の遺構群であると考えられる。

③第Ⅵ層面…第Ⅵ層は17世紀代に整地されたものであり、遺構の構築年代は、17世紀代～18世紀前半で、18世紀代までにおおむね廃絶している。第Ⅵ層面は江戸時代前期の遺構群であると考えられる。

以上のように、第Ⅳ～Ⅵ層面の遺構は、江戸時代全般にわたる遺構面であり、基本的に南北方向の屋敷割が区画され、建物が配置された近世・土崎湊の一部であると考えられる。また建物方向等は、調査区中央から東側では南北方向で、調査区西側では東西方向の可能性がある。このことは、江戸時代後期に描かれた『秋田街道絵巻』の土崎湊周辺部分の絵図でも確認することができる（第84図）。絵図手前の人通りの多い道が羽州街道で、街道に面した部分は東西方向に建物が配置されている。一方、鳥居のある神明社側は、南北方向の建物が確認され、第Ⅳ～Ⅵ層の検出遺構の状況と基本的に一致している。

次に、第Ⅳ～Ⅵ層面検出の江戸期の遺構配置と周辺の地形を合わせて考え、近世・土崎湊の屋敷割の構成について考察する。

第Ⅳ～Ⅵ層面検出の溝跡・建物跡・柱列跡で、南北方向のものは方向が北で約5～6度東へ振れている。これは、屋敷割の方向は、調査区北側に隣接する現況道路に直交するものである（第7図）。平成17年度までの神明社境内の配置では、東西に伸びる神社参道の延長は、この調査地北側に隣接する現況道路と一致している（第2図）。近世・土崎湊の屋敷割は、神明社参道方向を基準に行われたものと考えられる。これらのことは、近世・土崎湊の絵図（第5・6図）でも確認することができる。『元文年中湊古絵図』（1730～1740）（第5図）、弘化三年（1846）の『湊町古絵図』（第6図）によれば、平成17年度調査区は神明社の門前町である「萱村町」と呼ばれていた一画であり、文政5年（1822）以降は、「肴町」と改称されている。第Ⅳ～Ⅵ層面の遺構・遺物はこれらの町屋敷の一部を具体的に示したものと考えられる。

表14 各遺構出土遺物年代一覽

第Ⅳ層面検出遺構		
	構築年代	廃絶年代
SA01	18C代	
SD01		19C前半
SD02	18C後葉～19C中葉	18C後葉～19C中葉
SD03		19C中葉
SD04	18C後半～19C中葉	18C後半～19C中葉
SD05		18C以降
SD06	19C前半	19C前半
SD07		18C代
SD08		
SE01	18C後半	19C後半以降
SK01		
SK02		18C後半～19C前半
SK03		
SK04		
SK05		19C前半
SK06		19C前半
SK07		18C後半～19C中葉
Ⅳ層	18C後半～19C前半	
第Ⅴ層面検出遺構		
	構築年代	廃絶年代
SA02		
SA03		
SA04	18C前半	
SA05		
SB01	18C代	
SB02	18C前半	
SB03	18C後半	
SB04		
SB05		
SB06	18C代	
SD09		
SD10		
SD11		18C代～19C前半
SD12		18C後半
SD13		18C後半
SD14		18C代
SD15		18C代
SD16		19C前半
SD17		18C前半
SD18		18C後半
SD19		18C前葉～19C前半
SK08		19C初頭
SK09		18C代
SK10		
SK11		18C後半
SK12		18C代
SK13		18C後葉～19C初頭
SK14		18C後半
SK15		18C代
SK16		18C前半
SK17		
SK18		
SK19		
SK20		
SK21		18C後半
Ⅴ層	17C後葉～18C代	

第Ⅵ層面検出遺構		
	構築年代	廃絶年代
SA06		18C前半
SA07		
SA08		
SA09		
SB07		
SB08		18C前半
SB09		18C後半
SB10	17C後半	18C代
SB11		
SD20		17C末以降
SD21		18C前半
SD22		
SD23	17C前半	
SD24		
SD25		17C後半
SD26		17C後半～18C初頭
SD27		17C中葉～18C前半
SD28	18C前半	
SD29		
SD30		18C代
SD31		18C末～19C中葉
SD32		
SK22		18C前半
SK23		18C後半
SK24		
SK25		18C後半～19C中葉
SK26		
SK27		
SK28		
SK29		17C後半
SK30		
SK31		
SQ01		
Ⅵ層	17C代	
第Ⅶ・Ⅷ層面検出遺構		
	構築年代	廃絶年代
SA10		
SD33		17C中葉
SD34		17C前葉
SD35		17C初頭
SK32		
SK33		
SK34		17C前葉
SQ02	17C初頭	
SQ03		
SQ04		
SQ05		
敷石	16C末～17C初頭	
SN01		
SN02		
SN03		
SN04		
Ⅶ層	16C末～17C初頭	
Ⅷ層	16C末～17C初頭	



第84図 『秋田街道絵巻』伝 荻津勝孝（秋田市千秋美術館蔵）

（2）第Ⅳ～Ⅵ層面の屋敷割と基準尺度について

第Ⅳ～Ⅵ層面の溝跡間隔は第83図に示すとおりである。溝跡間隔は、溝跡の芯々の距離を示してある。この測定方法で、間隔が4.0mとなるものが多い。また、4.2mとなるものもあるが、これらを溝の芯々ではなく、溝の端から端までの純粋な宅地部分を計測すると4.0mとなる。同様に、5.1m、6.5m、7.2mと端数のあるものを溝の端から端までの純粋な宅地部分で計測すると、それぞれ5m、6m、7mとなる。第Ⅵ層面の31号～32号溝跡間は、8.7mであるが、31号溝跡～7号柱列跡間は8mとなる。

これらを考慮すると第Ⅳ～Ⅵ層面で検出された近世・土崎湊の屋敷割は、1間を6尺5寸（196.95cm）とする京間で構成されていたと考えられる。京間で計算すると4.0mの溝間隔は2間となる。同様に、5mは2間半、6mは3間、7mは3間半、8mは4間となる。

以上のように第Ⅳ～Ⅵ層面の近世・土崎湊の屋敷割は京間で構成されており、江戸時代前期～後期まで一貫して京間が用いられていると考えられる。また、調査区における屋敷割は間口が2間のものが最も多く、その他に2間半、3間、3間半、4間の屋敷割が確認される。注目すべき点は、江戸期を通じて一貫して京間で屋敷割がなされていることである。一般に、江戸期の江戸城下では格式の高いものを1間＝6尺5寸とする京間を用い、町屋では1間＝6尺とする江戸間を用いるとされる（江戸遺跡研究会編2001）。日本海側沿岸部の本遺跡においては、江戸城下とは異なり、京間による屋敷割が江戸後期まで行われていたと考えられる。

（3）第Ⅶ・Ⅷ層面について

第Ⅶ・Ⅷ層面の遺構配置は、上層の第Ⅳ～Ⅵ層面とは様相が全く異なっている。検出された遺構は、礎石式の柱列跡、溝跡、土坑、集石遺構、敷石状遺構、焼土遺構である。この中で、33号溝跡は、南北

方向で側板があり、第Ⅳ～Ⅵ層の溝跡と類似した構造を持っており、切り合い関係も新しいことから、近世の溝跡と考えられる。その他の遺構については、第Ⅳ～Ⅵ層の近世遺構とは全く異質の構造を持つ。特に敷石状遺構の下部に分布する第Ⅷ層は、砂と粘土の互層になっており、大規模な整地作業を行っていることが確認されている。いずれも狭小な本調査区のみでは、各遺構の機能や全体像を知り得ないが、逆に言えば、これらの遺構はこの調査区内だけでは理解できないような、大きな全体像をもつ遺構群であると言えるであろう。

これらの遺構の基盤をなす第Ⅶ・Ⅷ層出土の遺物の年代は16世紀末～17世紀初頭であり、これらの遺構は、この時期に形成されたものと考えることができる。また、これらの遺構廃絶年代は17世紀前葉までであり、遺構の存続期間は短い。

このような第Ⅶ・Ⅷ層面検出遺構について、歴史的な位置づけを行うとすれば、『秋田家文書』の「御作事入用之目録」等に記されている慶長4～6年（1599～1601）の安東実季による湊城の大改修時によるものと考えることができる。同史料によれば、檜山安東氏と湊安東氏の湊合戦に勝利を収めた安東実季は、御広間・御奏者間、角屋倉・門屋倉・御台所・御鷹部屋・御料理之間・御長屋を整備し、湊城の大改修を行ったとされる。その後、慶長7年（1602）に佐竹義宣が常陸より湊城へ入城し、安東実季は常陸国穴戸へ国替えとなる。そして、慶長9年（1604）には、佐竹義宣が久保田城へ移り、湊城は破却されることとなる。以上をふまえると、第Ⅶ・Ⅷ層面検出遺構は、安東実季による大改修から佐竹氏の湊城への入城・破却までの慶長4～9年（1599～1604）前後に相当するものと考えられ、中世・湊城の城館の一部であると考えられる。

第2節 出土遺物について

遺物の種類は、土器・陶磁器、土製品、木製品、石製品、瓦、鉄製品、銭貨、動物遺存体などが出土している。全体の出土量は、整理作業後の収納時で、コンテナ（54×34×15cm）で60箱であり、そのうち陶磁器は特に多く29箱で全体の約48%を占める。この他、溝跡の側板や杭などの遺構に伴って出土した木質遺物は同コンテナで39箱と、収納できない大形品をまとめた形で約2m³出土している。調査区面積約180m²に対して、出土遺物量は非常に多いと言える。

（1）土器・陶磁器について

陶器は灰釉や鉄釉等の施釉陶器や無釉の焼締め陶器、陶胎染付などが出土している。磁器は染付・色絵・青磁・白磁等が出土している。器種構成としては、碗・皿・鉢類などの食膳具、搦鉢・鍋類などの調理具、甕・壺・瓶類などの貯蔵具、火入・火鉢・風炉などの火具、ひょうそく・受付皿などの灯火具、香炉・仏飯器・托子・人形・水滴・かわらけ等の祭祀具もしくは調度品などがあり、多種多様なものがみられる。

陶磁器類について年代を問わず生産地の同定が可能なものについて分類を行うと以下ようになる。

①中国産

明朝、清朝時代の中国産貿易陶磁器である。

陶器は、漳州窯産で16世紀末～17世紀初めと考えられる陶胎染付の碗（土器・陶磁器263）が出土している。胎土は軟質で黄白色を呈している。磁器は、白磁・染付が出土している。白磁は、白磁C群（森田1982）に比定すると考えられる白磁皿（土器・陶磁器280）などがみられる。染付は、碗や皿があ

り、染付皿F群（土器・陶磁器278、小野1982）に比定されるものがみられる。これらの多くは、福建省漳州窯系のものと考えられる。また、これらの貿易陶磁器は、第Ⅶ・Ⅷ層においてのみ確認され、相伴する胎土目段階の肥前系陶器の年代などから、16世紀末～17世紀初頭に比定される一群である。類似する資料としては、大阪城出土資料等があげられる（森2005）。

②肥前系（唐津系）

九州肥前系地方の窯で生産されたもの及び肥前の技術・技法を直接取り入れて生産されたものである。陶磁器の中ではもっとも出土量が多く大半を占める生産地である。

陶器は、16世紀末～17世紀初めの胎土目痕のある鉄絵皿に始まり、19世紀代の蛇ノ目釉剥ぎを施す灰釉皿までみられる。その中でも17世紀前半～18世紀前半にみられる灰釉溝縁皿や刷毛目を施す碗・鉢・片口などが最も出土量が多い。器種構成としては、碗・皿・鉢・片口・挿鉢・甕・托子・瓶などがあり、豊富である。

磁器は、17世紀前半の染付碗・皿に始まり、19世紀前半の端反碗・蓋までみられる。その中でも18世紀代の皿・碗が最も出土量が多い。器種構成としては、碗・皿・鉢・蓋・紅皿・仏飯器・人形・戸車・小坏・香炉・餌入・油壺などがあり、豊富である。種類としては、染付を主体とし、青磁・白磁・色絵がある。波佐見周辺の雑器窯の製品が多く、有田周辺窯の高級品も少量みられる。また有田窯産と考えられる製品は焼継痕がみられ、使用期間が長期であったと考えられる。

③瀬戸美濃系

美濃を含めた愛知県瀬戸地方周辺で生産されたものである。

陶器は、16世紀後半の大窯期の折縁皿、16世紀末～17世紀初頭の志野丸皿、17世紀前半の有段連房期の皿などが少量出土している。また、18世紀末～19世紀初頭の腰鍔碗も出土している。

磁器は、19世紀前半の蓋・碗が少量出土している。また、19世紀後半の西洋コバルトを用いた碗・皿も少量出土している。

④京信楽系

京都地方及び信楽地方などの京都周辺で京焼の影響を受けて生産されたものである。

陶器は、灰色で硬質緻密の胎土の地に、色絵・錆絵を施す碗（土器・陶磁器197）が少量出土している。

⑤白岩窯

秋田県仙北市（旧仙北郡角館町白岩）に所在した近世陶器窯で、明和8年(1771)の生産開始とされる（渡辺1979）。技術系譜では相馬焼の影響を受けて始まり、京焼や信楽焼の技術も加味されているという。薄く鉄釉を全面に施した後になまこ釉を施す特徴がある。皿・鉢・甕の陶器が少量出土している。

⑥寺内窯

秋田市寺内所在の在地の地方窯で、白岩窯から工人が移動し天明7年(1787)に陶器生産を開始したとされる。天保8年(1736)頃には肥前の技術を間接的に導入し、磁器生産も開始したとされる（小松・日野1991）。明治初め(1870年前後)頃まで操業した。陶器は蓋・土瓶、磁器は碗・蓋が少量出土している。

⑦その他

産地不明陶器・磁器のなかで東北地方の近世在産窯産のものが含まれている可能性がある。また、土器についても産地の同定は不可能であったが、大部分が近隣で製作されたものと考えられ、寺内窯製品も一定量含まれている可能性がある。

次に各遺構確認面ごとの時期と生産地の比率について述べる。各遺構確認面出土の陶磁器の年代は既に述べたが、陶磁器の生産地も含めて再度整理したい。第3章で図示した資料で、おおよその生産地の比率の検討は可能ではあるが、抽出資料は遺物の遺存度が高いものや年代決定の容易なもの、特徴的な資料を中心に選択しており、生産地の量的比率においては、観察者のバイアスがかかっているものと考えられる。そこで、選択者の意図が反映しないように母集団を設定し定量分析を加えて考察を行う必要がある。ここでは、統計上の母集団を調査区L X区・L Y区の整地層（Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ層）出土の土器・陶磁器全点とし、生産地の量的比率を比較した（表15・16）。重量比と点数比の両者を示した。以上のような定量分析結果と報告対象遺物として選択し図示したものを合わせて、各遺構確認面ごとに陶磁器類の生産地について述べる。

①第Ⅳ層面

第Ⅳ層出土遺物の年代はおおむね18世紀後半～19世紀前半頃で、遺構の構築年代は18世紀代後半以降で、遺構廃絶年代は19世紀中葉頃までを示す。全体で確認される生産地は、肥前系・瀬戸美濃系・京信楽系・寺内窯・白岩窯などである。その他、在地系土器が出土している。定量分析結果からは、重量比で肥前系71.2%、京信楽系0.8%、寺内窯2.3%、在地系土器21.5%となっている。肥前系が大半を占め、その他の生産地が数%占める。

②第Ⅴ層面

第Ⅴ層出土遺物の年代はおおむね17世紀後葉～18世紀代で、遺構構築年代は18世紀前半で、遺構廃絶年代は19世紀前半までを示す。全体で確認される生産地は、肥前系・瀬戸美濃系・寺内窯・白岩窯である。その他、在地系土器が出土している。定量分析結果からは、重量比で肥前系22.3%、白岩窯41.9%、在地系土器13.6%となっている。白岩窯産の比率が高いが、これは大型の白岩窯製品が含まれているため、点数比では肥前系58.2%、白岩窯6%となり、肥前系が比率としては大半を占め、その他の生産地が数%占める。

③第Ⅵ層面

第Ⅵ層出土遺物の年代はおおむね17世紀代で、遺構構築年代は17世紀代～18世紀前半で、遺構廃絶年代は18世紀代までを示す。全体で確認される生産地は、肥前系・瀬戸美濃系・京信楽系・白岩窯・中国産が確認される。その他、在地系土器が出土している。定量分析結果からは、重量比で、肥前系62.5%、瀬戸美濃系2%、在地系土器5.1%となっている。肥前系が大半を占め、その他の生産地が数%占める。

④第Ⅶ・Ⅷ層面

第Ⅶ・Ⅷ層出土遺物の年代はおおむね16世紀末～17世紀初頭であり、遺構廃絶年代は17世紀前葉までを示す。全体で確認される生産地は、肥前系・瀬戸美濃系・中国産が確認される。その他、在地系土器が出土している。定量分析の結果からは、重量比で、第Ⅶ層は肥前系70.7%、瀬戸美濃系0.3%、中国産0.3%、第Ⅷ層は肥前系80.8%、在地系土器19.2%である。第Ⅶ・Ⅷ層は、陶磁器類の生産地が肥前系・瀬戸美濃・中国産のいずれかに限られ、単純な組成となっている。比率としては、肥前系が大半を占め、その他の生産地が数%である。また、定量分析の対象から除かれているが、この層位の出土からは、中国産の貿易陶磁器類が一定量みられる。

以上のように、いずれの遺構確認面でも肥前系が主体となる。江戸期の第Ⅳ～Ⅵ層はこの他に瀬戸美濃系・京信楽系・寺内窯・白岩窯などの多様な生産地が数%占める構成となっているが、織豊期の第

Ⅶ・Ⅷ層では、肥前系が主体となるものの、瀬戸美濃系・中国産のみが数%占め、組成としてはシンプルなものとなっている。江戸期のこのような様相は、羽柴が指摘するように、北東北日本海側では肥前系が卓越し主体となるという流通消費状況と一致すると言える（羽柴1994）。また、秋田市『藩校明德館跡』で指摘された久保田城下町における陶磁器類の流通消費状況とも一致している（安田ほか2002）。また、第Ⅶ・Ⅷ層では、肥前系陶器が主体を占めるが、中国産の粗製の貿易陶磁器が若干含まれている。このような様相は、慶長年間にあたる中世後期貿易陶磁器の時期区分Ⅳ期の様相と類似する（小野1982、續1995）。この時期は近世的陶磁の再編成が行われる重要な画期であり、湊城跡第Ⅶ・Ⅷ層の土器・陶磁器類の組成は、まさにこの過渡的な様相を示しているものと考えられる。

表15 土器・陶磁器の出土層別生産地一覧（重量比）

	上段：重量〔単位g〕、下段：%							合計
	肥前系	瀬戸美濃系	京信楽系	白岩窯産	寺内窯産	中国産	在地系土器 産地不明	
第Ⅳ層	2706 (71.2)		29 (0.8)		87 (2.3)		816 (21.5) 163 (4.2)	3801 (100)
第Ⅴ層	275 (22.3)			516 (41.9)			168 (13.6) 273 (22.2)	1232 (100)
第Ⅵ層	368 (62.5)	12 (2.0)					30 (5.1) 179 (30.4)	589 (100)
第Ⅶ層	405 (68.5)	2 (0.3)				2 (0.3)		182 (30.9) 591 (100)
第Ⅷ層	105 (100)							105 (100)
合計	3859 (61.1)	14 (0.2)	29 (0.5)	516 (8.2)	87 (1.4)	2 (0.03)	1014 (16.0) 797 (12.6)	6343 (100)

※LX・LY区出土のみ集計

表16 土器・陶磁器の出土層別生産地一覧（点数比）

	上段：点数、下段：%							合計
	肥前系	瀬戸美濃系	京信楽系	白岩窯産	寺内窯産	中国産	在地系土器 産地不明	
第Ⅳ層	123 (77.4)		2 (1.3)		3 (1.9)		24 (15.1) 7 (4.3)	159 (100)
第Ⅴ層	39 (58.2)			4 (6.0)			12 (17.9) 12 (17.9)	67 (100)
第Ⅵ層	45 (78.9)	2 (3.5)					2 (3.5) 8 (14.1)	57 (100)
第Ⅶ層	15 (65.2)	1 (4.3)				1 (4.3)		6 (26.2) 23 (100)
第Ⅷ層	17 (94.4)							17 (100)
合計	239 (74.0)	3 (0.9)	2 (0.6)	4 (1.2)	3 (0.9)	1 (0.3)	38 (11.8) 33 (10.3)	323 (100)

※LX・LY区出土のみ集計

（2）土製品について

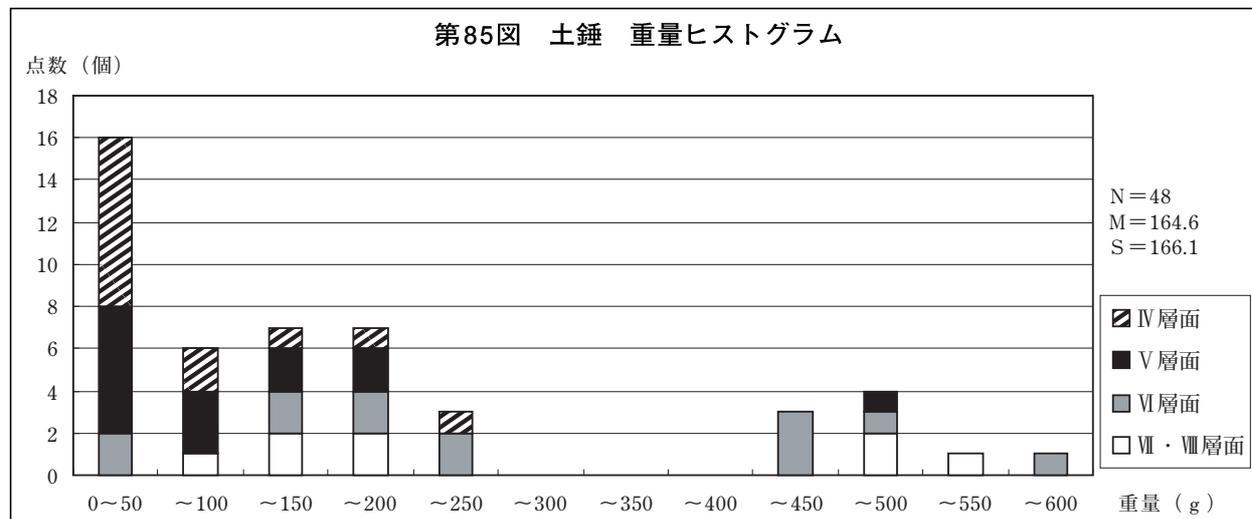
出土した土製品は、土錘、面子、羽口等がある。その中でも土錘は、完形品のみ掲載しているが48点あり、出土点数が多く、本遺跡の特徴的な遺物である。土錘は、重量と形態から下記のような4種に分類される（第85図）。

- 1類…重量が100g以下で、細長の形態で小型のもの。
- 2類…重量が100g前後～250g以下で、幅が広くずんぐりした形で中型のもの。
- 3類…重量が400～600gで大型のもの。端部がすぼまる形態をしているものが多い。
- 4類…粗雑な成形で、片側の端部が平坦につくられるもの。土製品32のみが該当する。

また、土錘の素材は土師質と須恵質の2者があり、ほとんどが土師質であるが、土製品28・38のみ須恵質の土錘であり、上記分類の2類にのみ含まれている。

出土層位別に上記類型を比較すると、第Ⅳ層面のものは3類の大型品が確認されないこと以外に、特に時期的な変遷は認められない。

土鍾は漁網鍾として使用され、重要な属性は重量である。漁場の地理的環境の違いにより網漁法が異なり、土鍾重量に反映されることが指摘されている（種石2006）。本遺跡において、1～3類は網漁法の違いによって使い分けられていたものと考えられる。なお、網漁法で土鍾とともに用いられたと考えられる浮子等の木製品は、出土していない。



(3) 木製品について

出土遺物としては比較多く、飲食器としての椀・箸・折敷、容器としての曲物・栓、履物としての下駄、玩具としての独楽、その他に刷毛・用途不明の木製品などが出土している。最も出土量が多いのは箸である。また下駄は、おおきく一木下駄と差歯下駄が確認され、一木下駄は連歯下駄（木製品29）と刳り下駄（木製品8・14・35）、差歯下駄は陰卵下駄（木製品9）のタイプがみられる。刳り下駄には歯のないタイプのもが多い。椀・折敷・刷毛には、漆が塗布されているものがあり、赤漆・黒漆の両者がみられる。その他、溝跡・井戸跡・土坑を構成する一部として木材が多数出土している。特に第IV～VI層面で確認された溝跡の側板には建築部材を転用し用いているのがみられ、またこれらは被熱を受けた痕跡があるものも認められる。

(4) 石製品について

出土量は少ないが、砥石・硯・碁石が出土している。中央に穿孔のある不明石製品もある。砥石は凝灰岩、硯は粘板岩、碁石は白色の泥岩が用いられており、器種による石材の選択が明確である。出土層位別による器種変化などは確認できない。

(5) 瓦について

確認された建物跡の棟数と比較すると出土量は少ない。瓦の種類としては、棧瓦と丸瓦が出土している。また、暗赤褐色を呈する赤瓦と灰色を呈するいぶし瓦の2者がみられる。江戸期の整地層である第IV層～VI層面出土の瓦1～7はすべて棧瓦であるのに対し、16世紀末～17世紀初め第VIII層からは瓦8のように丸瓦である。またこの瓦8は、胎土に白色砂が混じり、布目圧痕が残されるなど、江戸期の瓦とは様相が異なっており、製作技術等が大きく異なっていた可能性がある。

(6) 鉄製品について

比較的出土量が多く、喫煙道具である煙管、装飾品の簪、農具の鎌、飲食器の皿、建築部材等の接合具である釘・鉾・鏝などが出土している。

この中で最も出土量が多いのは煙管である。第Ⅳ～Ⅶ層面にかけてまんべんなく出土し、16世紀末頃から日本において流行した喫煙習慣を如実に反映している。煙管については、古泉による分類（古泉1987）に基づき行くと、第Ⅳ・Ⅴ層面からはⅣ～Ⅴ期（1750～1900）、第Ⅵ層面からはⅢ期（1700～1750）の煙管の出土が多い。第Ⅶ層からは、Ⅰ～Ⅲ期（～1750）のいずれか時期に相当する吸口の出土がある。出土陶磁器からみた各遺構面の年代と煙管の分類時期はおおむね一致するものと考えられる。

また、接合具の出土も多く、特に釘は折釘・角釘・頭巻釘などの種類がみられ建物の建築部材等に用いられていたものと考えられる。

使用される素材は、鉄・銅・真鍮などがみられる。煙管は真鍮、簪は真鍮と銅、鎌・皿は鉄、接合具は、鉄・銅が使用されている。

(7) 銭貨について

銭貨は出土量が多く、第Ⅳ～Ⅵ層面の江戸期の遺構と整地層から、合計130点出土し、代表的なもの36点を図示した。銭貨の種類としては、古寛永（初鑄1636年）、新寛永（初鑄1697年）、新寛永の「文銭」（初鑄1668年）、新寛永の「背元銭」（初鑄1741年）、新寛永の「背二十一波銭」（初鑄1768年）、新寛永の「秋田川尻銭」（1738年より1745年にかけて鑄銭）、熙寧元寶（北宋、初鑄1068年）が確認される。貨幣そのものではないが、雁首銭と呼ばれるものも出土している。これは煙管の火皿部分を意識的に平らにつぶし、縵に混ぜたり、縵の固定に用いられたともいわれる。使用される素材は、銭貨はほとんど銅であるが、銭貨31の寛永通寶のみ鉄が用いられている。また雁首銭は煙管と同様で、真鍮製である。

出土銭貨の種類と出土区分別一覧を表17に示した。17世紀代の整地層である第Ⅵ層から初鑄1636年の古寛永が最も多く出土し、新寛永の類は、17世紀後葉～18世紀代の整地層である第Ⅴ層から最も多く出土し、出土層位と銭貨種類にセリエーションがみられ、銭貨の初鑄年代と出土陶磁器による年代に一定の相関関係がある。

表17 銭貨出土層別種類一覧

	古寛永	新寛永	文銭	背元銭	背二十一波銭	川尻銭	雁首銭	熙寧元寶	不明	合計
第Ⅳ層面遺構内	1	4							2	7
第Ⅳ層	2	15	3		1				3	24
第Ⅴ層面遺構内	5	6				2	1			14
第Ⅴ層	4	24	6	1		4	2		6	47
第Ⅵ層面遺構内			1						3	4
第Ⅵ層	7	14				3		1	9	34
合計	19	63	10	1	1	9	3	1	23	130

(7) 動物遺存体について

代表的なもので、犬・鳥類・貝類が出土している。第Ⅳ～Ⅵ層面の近世遺構面からの出土が多い。特に出土量が多いのは貝類で、アワビ・ハマグリ・サルボウ・シジミなどがみられ、雄物川河口部に隣接する本遺跡の立地を特徴づけるものとなっている。

第3節 中世・湊城と近世・土崎湊について

以上のように、平成17年度調査区からは、第Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ・Ⅷ層面の4面において、遺構・遺物が確認された。第Ⅳ～Ⅵ層面は江戸期の遺構面で、第Ⅳ層面は18世紀後半～19世紀中葉までの江戸後期、第Ⅴ層面は17世紀後葉～19世紀前半までの江戸中期、第Ⅵ層面は17世紀代～18世紀代までの江戸前期を中心とした遺構面であることがわかった。遺構配置と絵図等から、神明社から延びる門前通りに面した近世・土崎湊の町屋敷の一部であったと考えられる。

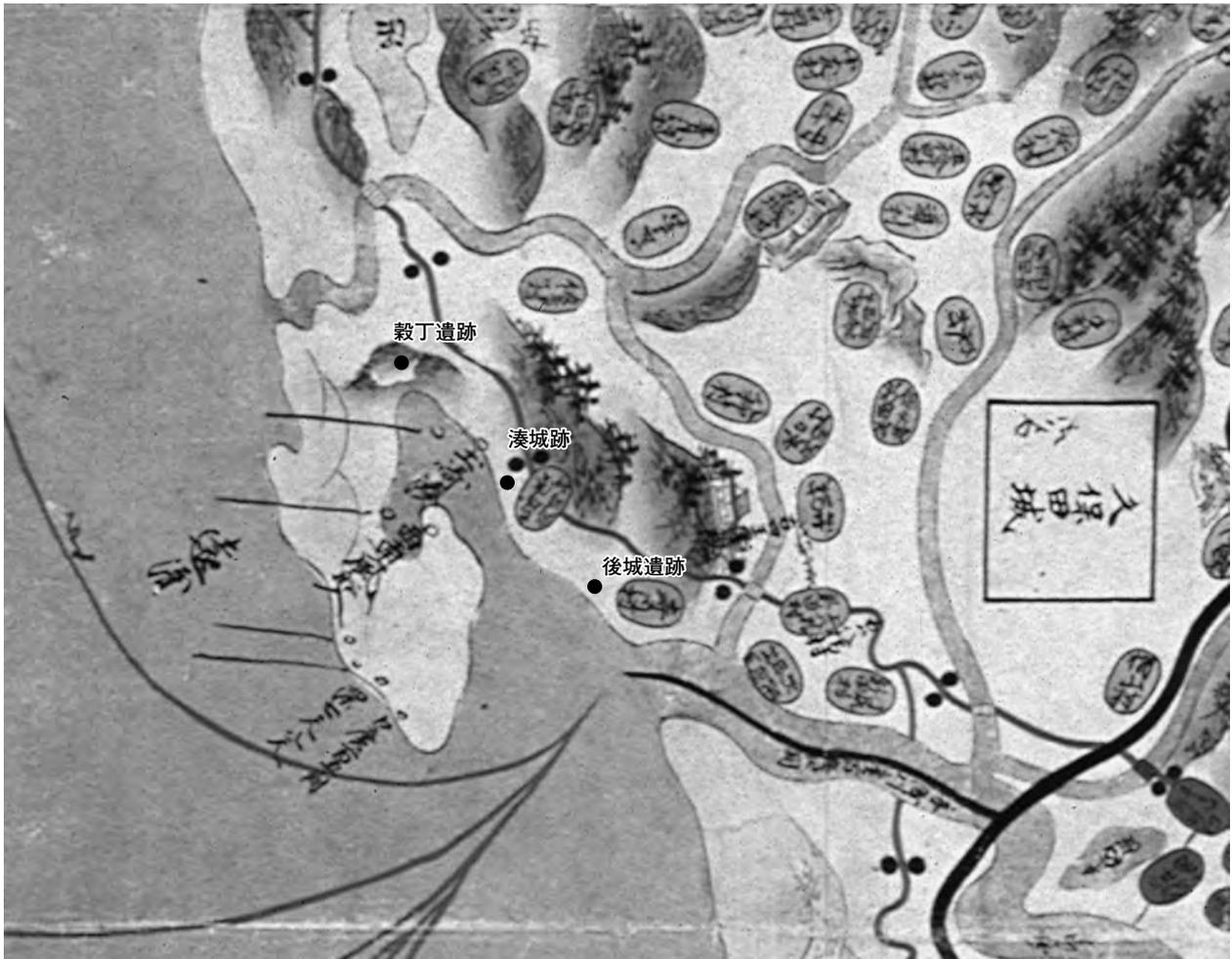
一方、第Ⅶ・Ⅷ層面は、安土桃山時代の織豊期を中心とした遺構面で、16世紀末～17世紀初めに形成され、17世紀前葉には廃絶しており、使用期間が比較的短い。文献史料から知り得る安東氏の動向と対比させると、安東実季による大改修から佐竹氏の湊城への入城・破却までの慶長4～9年（1599～1604）前後に相当するものと考えられ、大改修後の中世・湊城の城館の一部が検出されたものと考えられる。しかし、平成17年度調査区内からは、15世紀代以前の出土遺物は確認されず、文献史料で記される、応永年間（1394～1428）に津軽十三湊の安東鹿季が秋田の湊を伐ったとされる「秋田湊」、永享8年（1436）に湊城が築城されたとされる「古」湊城などの室町時代の「湊」が、当該地に存在したかどうかは平成17年度調査区の結果からは不明と言わざるを得ない。安東氏が居城とした「湊」は、必ずしも土崎地区の「湊城跡」だけでなく、飯島穀丁地区～寺内地区の旧雄物川河口部周辺で時代により移動していた可能性を指摘する見解もある（加藤1941、塩谷ほか1999）。

湊城跡が位置する旧雄物川河口部には、室町時代の遺跡が点在しており、14世紀後半～16世紀末が主体となる後城遺跡、15世紀代の遺物が出土する穀丁遺跡が所在する。正保2年（1645）頃に描かれたとされる出羽国秋田領六郡絵図によれば、旧雄物川河口部が湾状の地形であったことが確認できる（第86図）。湊城跡・後城遺跡・穀丁遺跡の室町時代～安土桃山時代（織豊期）に展開する遺跡は、いずれもこの湾の周縁部に位置することとなる。安東氏が居城とした「湊」は、このような旧雄物川河口部の湾状の旧地形に着目し、周知の遺跡としての「湊城跡」だけでなく、広い地域で考えていく必要がある。また、平成17年度調査区の結果では、中世・湊城跡が機能していた時期は、織豊期までしか遡り得なかったが、今後の調査によって当該地の「湊城跡」がいつ頃から機能していたかを確認していく必要がある。

第4節 おわりに

今回の調査は、湊城跡では初めての本格的な発掘調査であった。安東実季が大改修したとされる織豊期中世・湊城跡とその後の近世・土崎湊の町屋敷の一部である遺構・遺物が確認された。今回の発掘調査に基づく考古資料が、不明な点の多い中世の湊城跡の解明に役立つものと考えている。また、調査では近世・土崎湊に関する資料も多く得ることができた。近世・土崎湊の様相や江戸時代の生活の解明にも役立つものと考えている。

また今回の調査区は、狭小な都市軟弱地盤における地下水位の高い地点であった。そのため、発掘調査に際して矢板工を伴い、安全確保作業に多くの経費と労力を費やし、また調査方法に関しても多くの反省点を残した。今後、同様な条件での調査において、参考になればと考える。



第86図 出羽国秋田領六郡絵図（秋田県立博物館蔵）

〔第3・4章 引用・参考文献〕

- 上村和直・山本雅和 2001 『平安京左京二条四坊十町』京都市埋蔵文化財研究所報告第19冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 大橋康二 2000 『肥前陶磁』ニューサイエンス社
- 小野正敏 1982 「14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2 pp.71-88
- 加藤助吉 1941 『土崎港町史』秋田市役所土崎出張所
- 九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』
- 古泉弘 1987 『江戸の考古学』ニューサイエンス社
- 小松正夫・日野久 1991 『寺内焼窯跡—寺内小学校建設に伴う近世陶磁器・瓦・煉瓦窯跡の発掘調査—』秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所
- 利部修 2006 『久保田城跡・藩校明德館跡—秋田中央道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』秋田県文化財調査報告書第412集 秋田県埋蔵文化財センター
- 利部修ほか 2005 『東根小屋町遺跡—秋田県教育・福祉複合施設整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』秋田県文化財調査報告書第387集 秋田県埋蔵文化財センター

- 加藤嘉太郎・山内昭二 1995 『家畜比較解剖図説 上巻 第2次増改訂版』養賢堂
- 塩谷順耳ほか 1999 『秋田市史 第八巻 中世史料編』秋田市
- 鋤柄俊夫ほか 1994 『大阪城跡の発掘調査4』大阪城発掘調査概要7 財団法人大阪文化センター
- 関根達人 1998 「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報10』東北大学埋蔵文化財調査研究センター pp.51-90
- 瀬戸市史編纂委員会 1993 『瀬戸市史 陶磁史編4』
- 瀬戸市史編纂委員会 1998 『瀬戸市史 陶磁史編6』
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 2001 『瀬戸大窯とその時代』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立10周年記念企画展図録
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 2002 『江戸時代の瀬戸窯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 2003 『江戸時代の美濃窯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 2004 『江戸時代の瀬戸・美濃窯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 2006 『江戸時代の瀬戸・美濃—三都と名古屋—』平成17年度瀬戸市埋蔵文化財センター企画展示図録
- 田口昭二 1983 『美濃焼』ニューサイエンス社
- 種石悠 2006 「関東地方における原史・古代の土鍾について」『物質文化』80 pp.29-53
- 續伸一郎 1995 「〔3〕中世後期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 pp.485-501
- 東北陶磁文化館編 1987 『東北の近世陶磁』
- 東北中世考古学会編 2003 『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
- 東北中世考古学会編 2005 『海と城の中世』高志書院
- 羽柴直人 1994 「東北地方北部における近世陶磁器の様相—1690～1780の消費状況の集成—」『(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』XIV pp.95-118
- 安田忠市ほか 2002 『藩校明德館跡—市街地再開発事業に伴う発掘調査報告書—』秋田市教育委員会
- 森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2 pp.47-54
- 森達也編 1996 『呉州赤絵・呉州染付・餅花手—スワトウ・ウェアの世界—』愛知県陶磁資料館
- 森毅 2005 「中世後期輸入陶磁器の分類と変化—青花の分類と編年を中心に—」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—資料集』pp.445-464
- 渡辺爲吉 1979 『白岩瀬戸山』(復刻版)



遺跡遠景（南東から）



調査地全景（東から）



第Ⅳ層面 全景（西から）



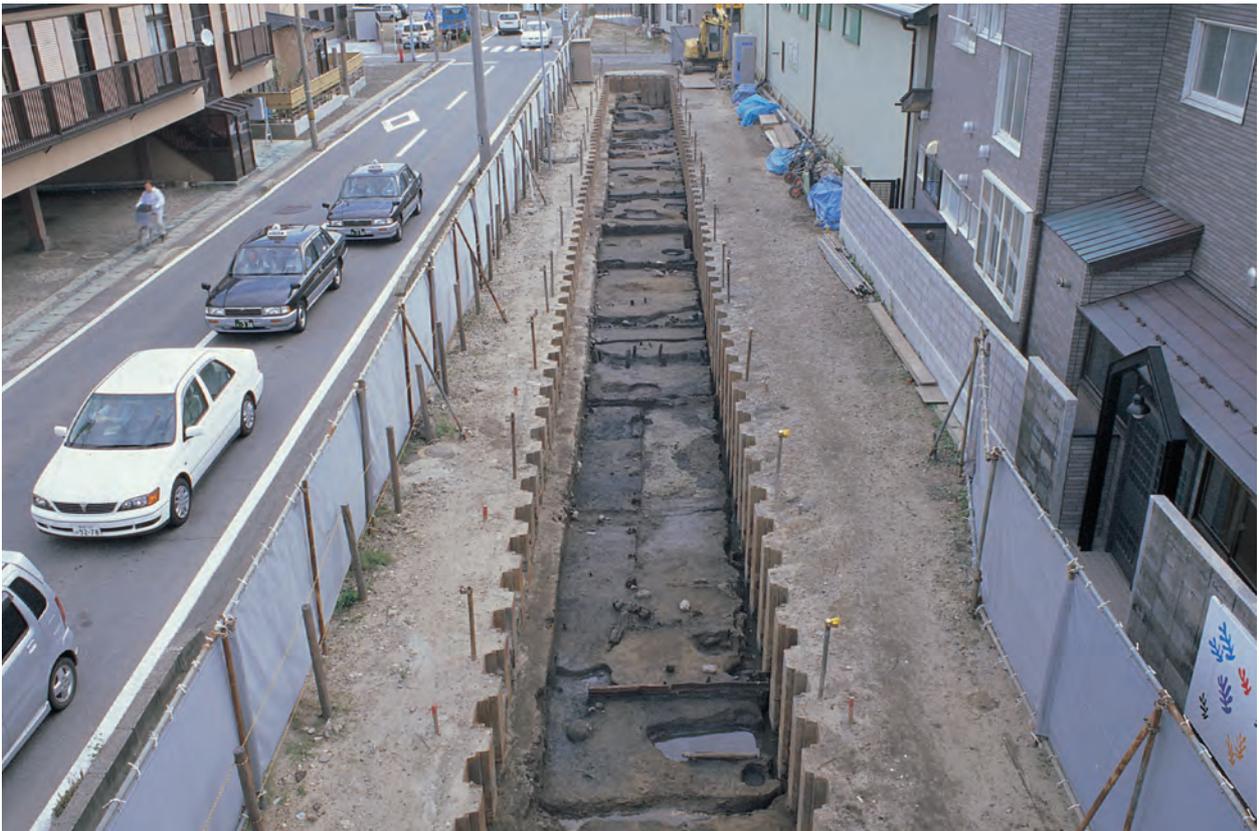
第Ⅳ層面 調査区東側（南西から）



第V層面 全景（西から）



第V層面 調査区東側（南西から）



第Ⅵ層面 全景（西から）



第Ⅵ層面 調査区東側（南西から）



第Ⅶ・Ⅷ層面 全景（西から）



第Ⅶ・Ⅷ層面 調査区東側（南西から）



調査区中央部 北壁土層断面（南東より）



第Ⅶ・Ⅷ層面 敷石状遺構土層断面状況（南から）



第Ⅳ層面 出土遺物



第Ⅴ層面 出土遺物



第Ⅵ層面 出土遺物



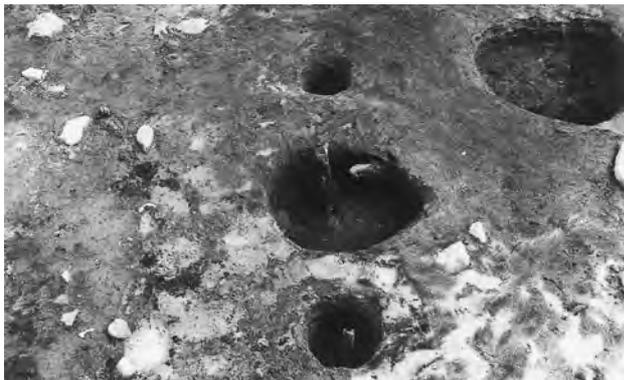
第Ⅶ・Ⅷ層面 出土遺物



第Ⅳ層面 調査区西側（南西から）



第Ⅳ層面 調査区東側（南西から）



1号柱列跡（南から）



1号柱列跡 P2半截状況（東から）



3号溝跡完掘状況（南から）



5号溝跡完掘状況（南から）



6号溝跡完掘状況（南から）



7号溝跡完掘状況（南から）



8号溝跡完掘状況（北から）



1号井戸跡上部半截状況（南東から）



1号井戸跡下部半截状況（南東から）



4号土坑完掘状況（南から）



5号土坑完掘状況（南から）



6号土坑完掘状況（南から）



6号土坑半截状況（南から）



7号土坑完掘状況（南から）



第V層面 全景（西から）



第V層面 調査区西側（南西から）



第V層面 調査区東側（南西から）



2号柱列跡ピット2半截状況（西から）



3号柱列跡完掘状況（西から）



4・5号柱列跡完掘状況（西から）



4号柱列跡ピット1半截（北から）



1号建物跡検出状況（南西から）



1号建物跡 P1完掘状況（南から）



2号建物跡（南西から）



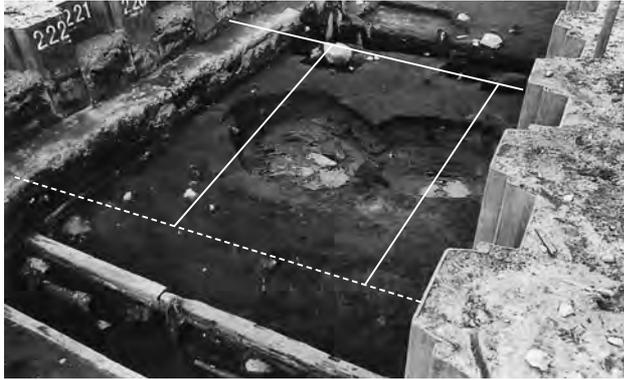
2号建物跡 P2半截状況（北から）



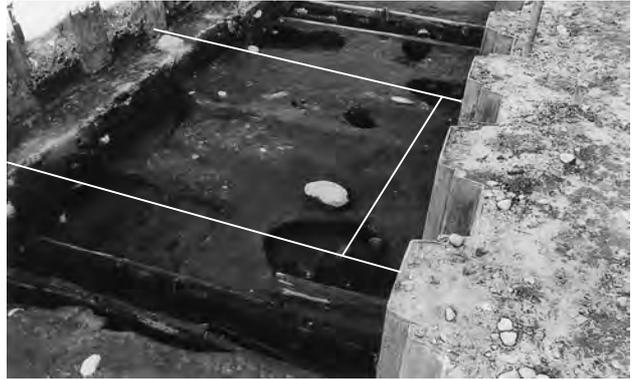
3号建物跡（南西から）



4号建物跡（南東から）



5号建物跡（西南から）



6号建物跡完掘状況（西南から）



11号溝跡完掘状況（南から）



13号溝跡完掘状況（南から）



19号溝跡完掘状況（南から）



19号溝跡土層断面状況（南から）



8号土坑完掘状況（南から）



9号土坑半截状況（南から）



第Ⅵ層面 全景（西から）



第Ⅵ層面 調査区西側（南西から）



第Ⅵ層面 調査区東側（南西）



7号柱列跡完掘状況（北から）



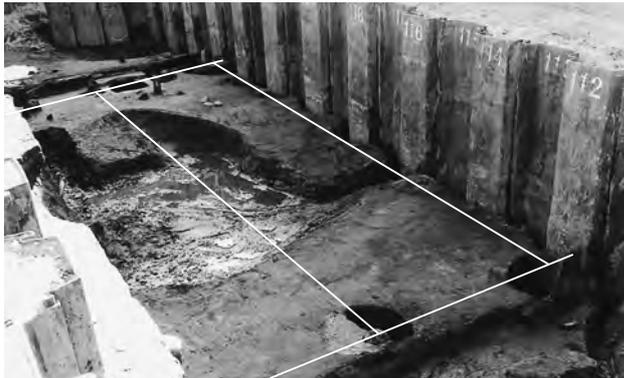
8号柱列跡検出状況（西から）



9号柱列跡 (南西から)



9号柱列跡 P1半截状況 (南から)



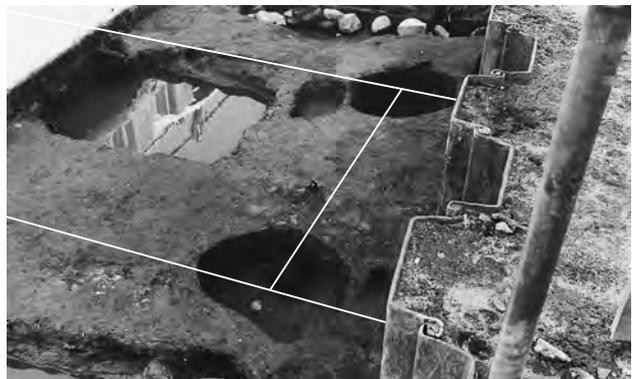
7号建物跡 (北から)



7号建物跡 P1半截状況 (南から)



8号建物跡 (南西から)



9号建物跡 (南西から)



10号建物跡 (南東から)



10号建物跡 P4半截状況 (南から)



11号建物跡（南西から）



20・21号溝跡完掘状況（南から）



23号溝跡完掘状況（南から）



23号溝跡土層断面状況（南から）



25号溝跡完掘状況（南から）



25号土坑完掘状況（西から）



25号土坑半截状況（西から）



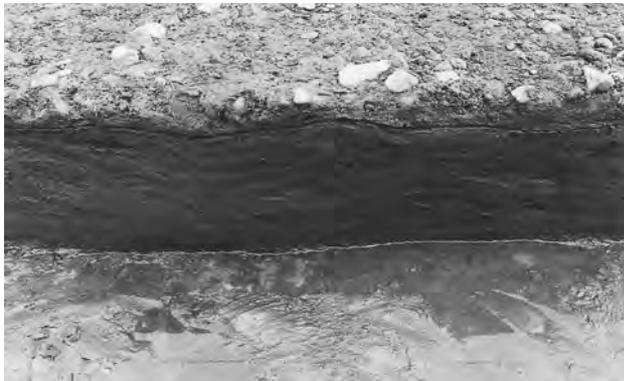
26号土坑完掘状況（南から）



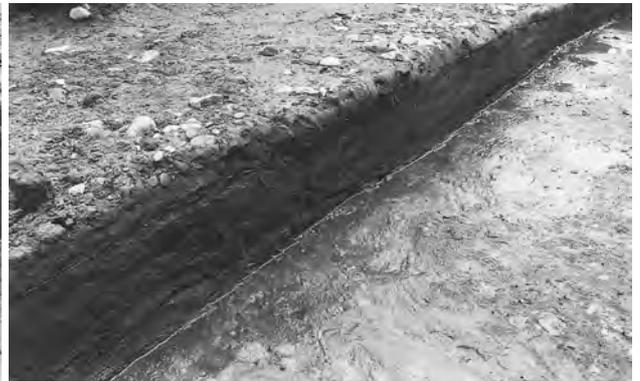
第Ⅶ・Ⅷ層面 全景（西から）



第Ⅶ・Ⅷ層面 調査区東側（南西から）



敷石状遺構土層断面状況①（南から）



敷石状遺構土層断面状況②（南西から）



33号溝跡完掘状況（南から）



33号溝跡土層断面状況（南から）



34号溝跡検出状況（北西から）



34号溝跡土層断面状況（西から）



35号溝跡完掘状況（南から）



35号溝跡土層断面状況（南から）



32号土坑1段下げ状況（西から）



32号土坑2段下げ状況（西から）



32号土坑半截状況（西から）



32号土坑完掘状況（西から）



2号集石遺構検出状況（南から）



1号焼土遺構検出状況（南から）



1号焼土遺構半截状況（南から）



2号焼土遺構半截状況（北から）



3号焼土遺構半截状況（北から）



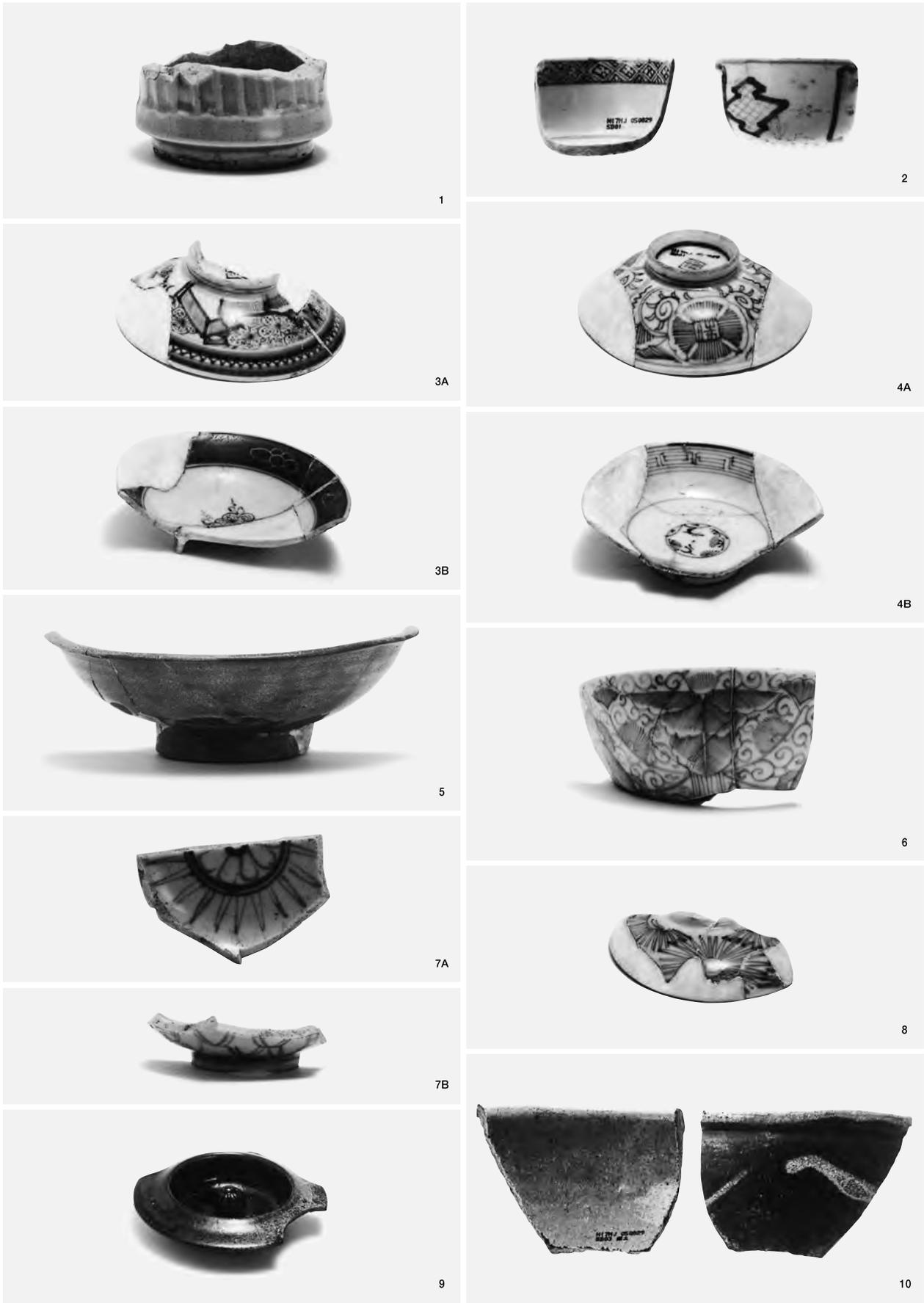
4号焼土遺構半截状況（北から）



ピット27完掘状況（南から）



調査風景



1~10 土器・陶磁器 (第Ⅳ層面遺構内)



11



12A



12B



13A



14



13B



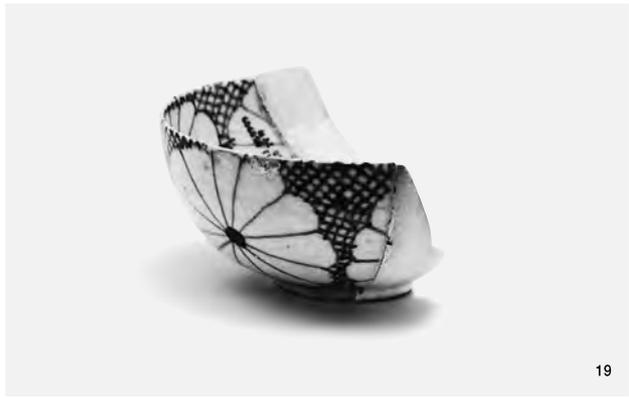
15

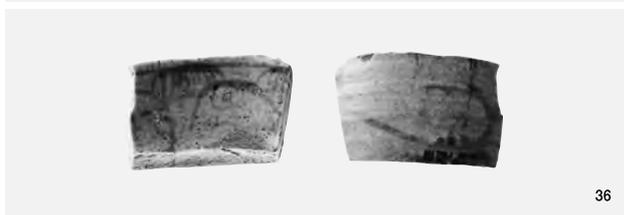
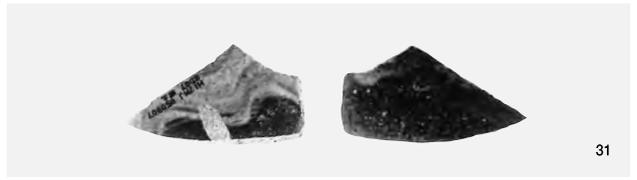


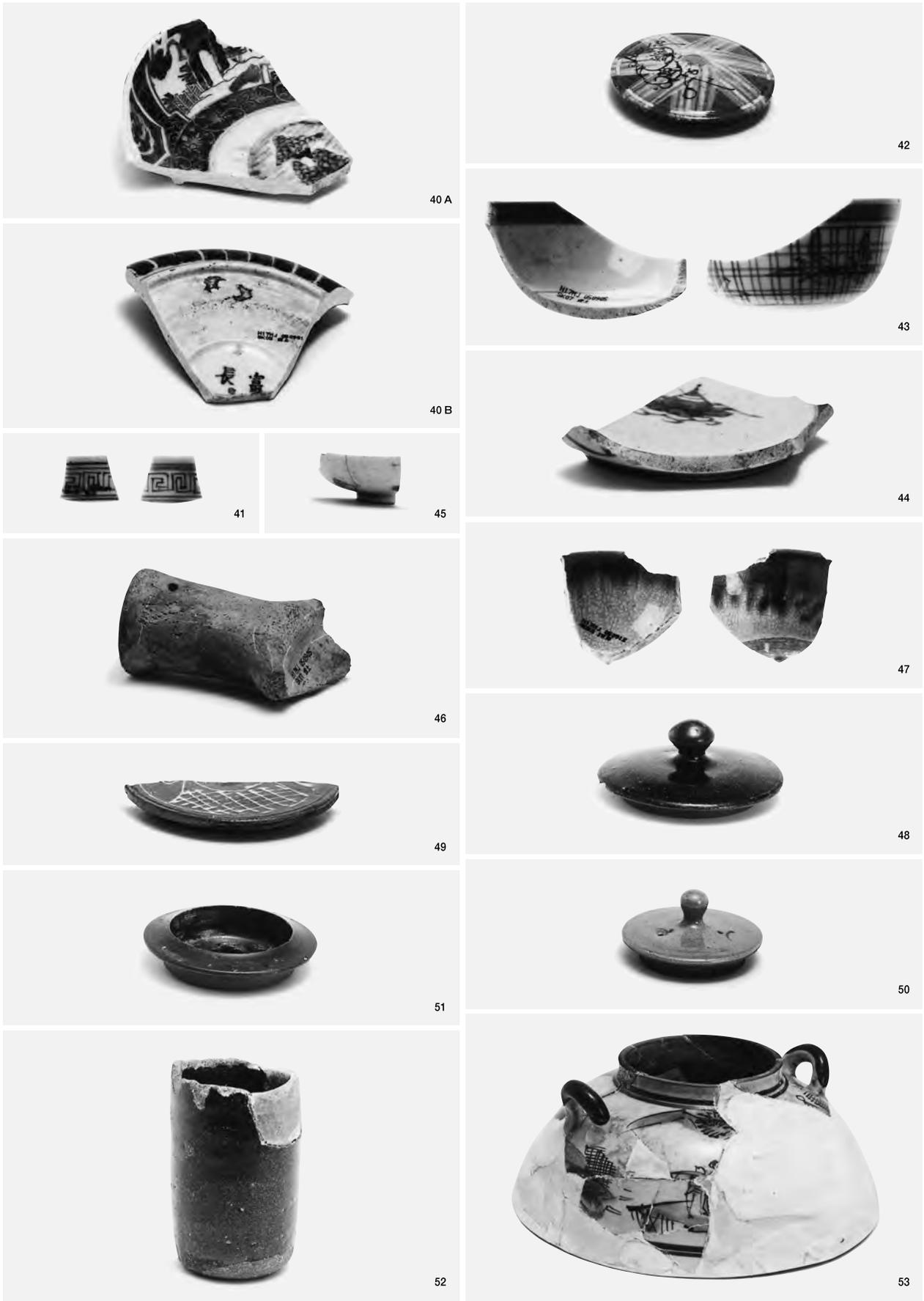
16



17







40~46 土器・陶磁器（第IV層面遺構内）、47~53 土器・陶磁器（第IV層）

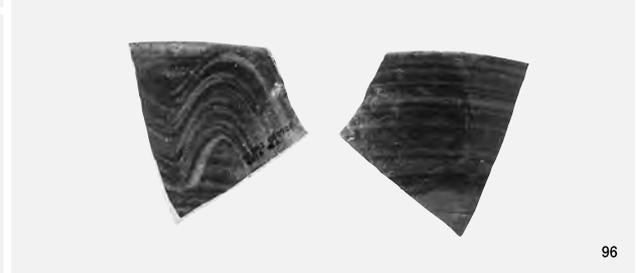
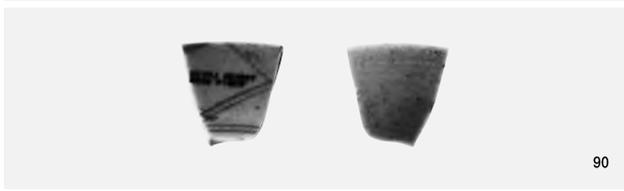
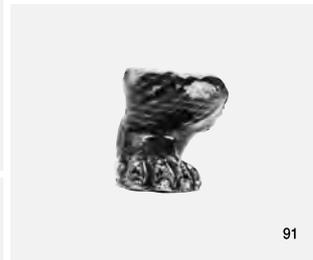
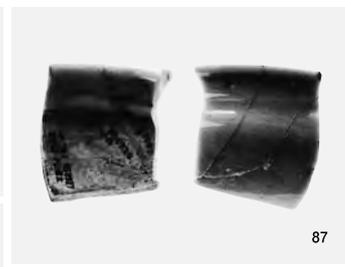
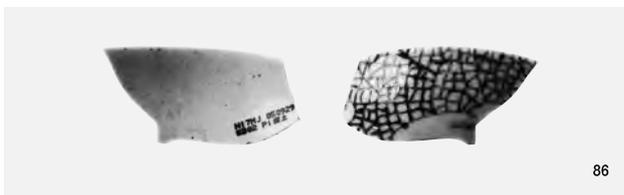
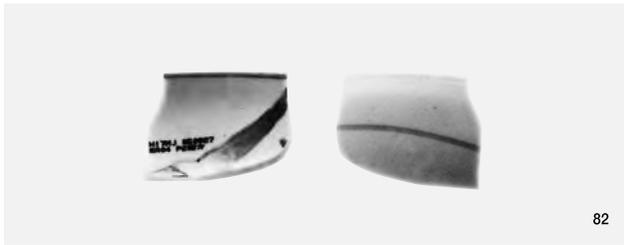


54～60 土器・陶磁器（第Ⅳ層）





70~81 土器・陶磁器 (第IV層)

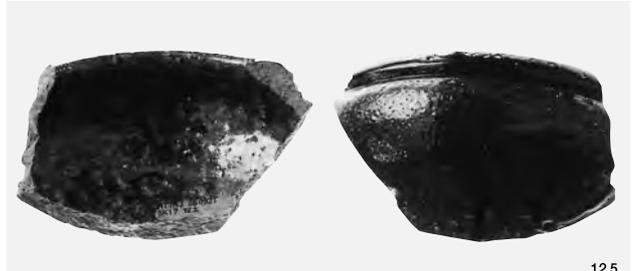
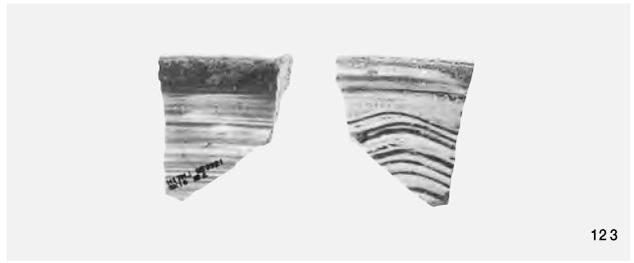




97~110 土器・陶磁器（第Ⅴ層面遺構内）



111~121 土器・陶磁器 (第V層面遺構内)





132



134



136



137



143



133



135



138



139



140



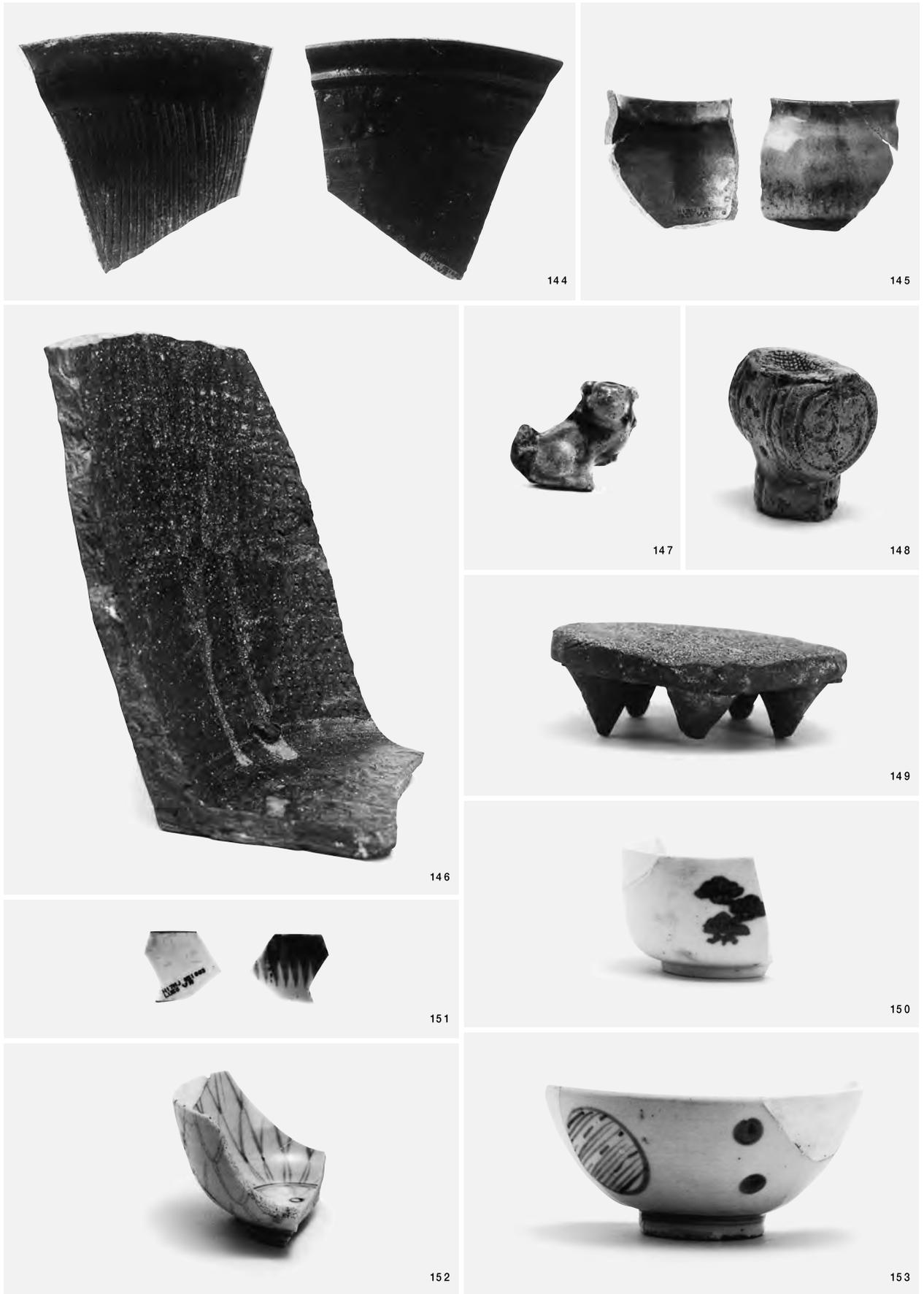
141



142

図版32

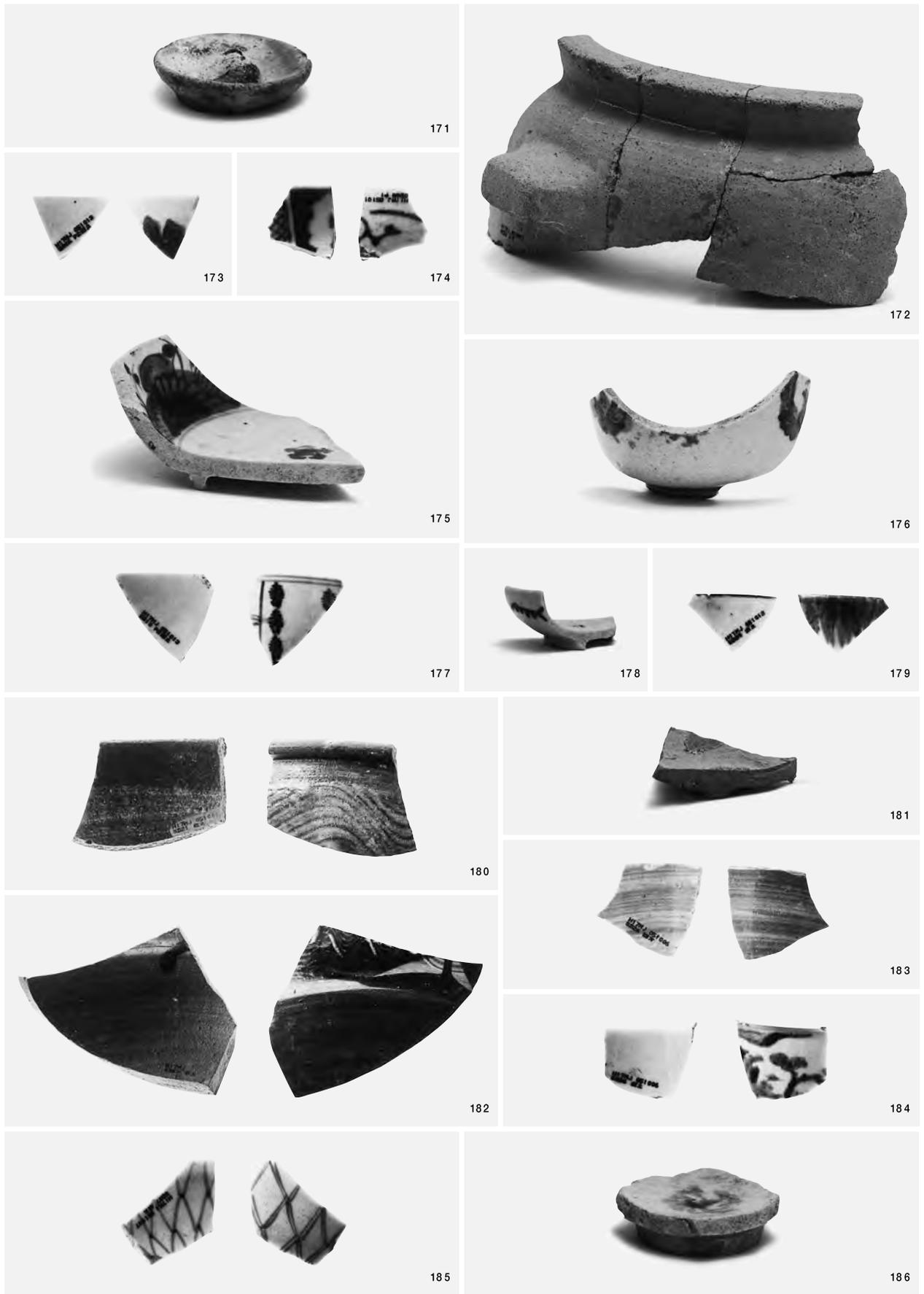
132~135 土器・陶磁器 (第V層面遺構内)、136~143 土器・陶磁器 (第V層)



144~153 土器・陶磁器 (第V層)



154~170 土器・陶磁器 (第V層)



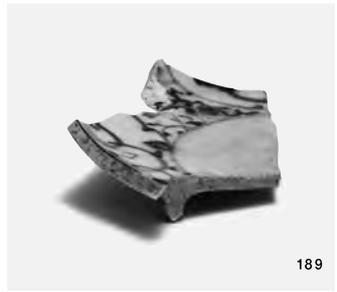
图版35 171·172 土器·陶磁器 (第V層)、173~186 土器·陶磁器 (第VI層面遺構内)



187



188



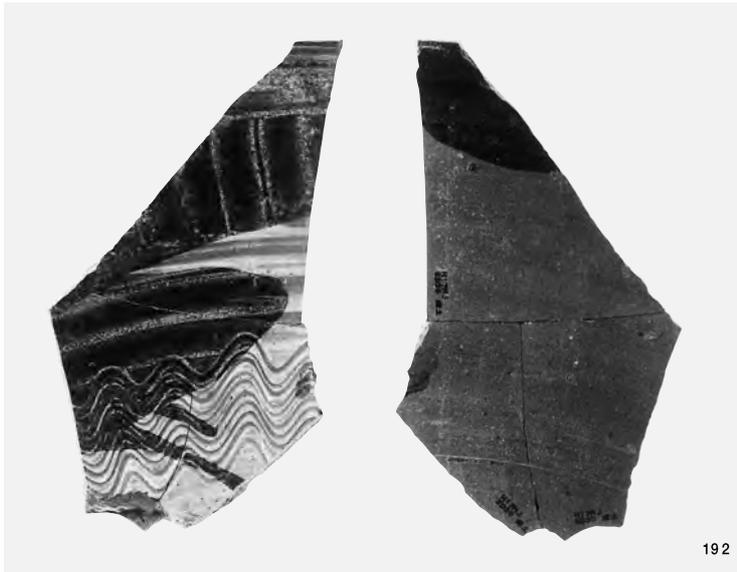
189



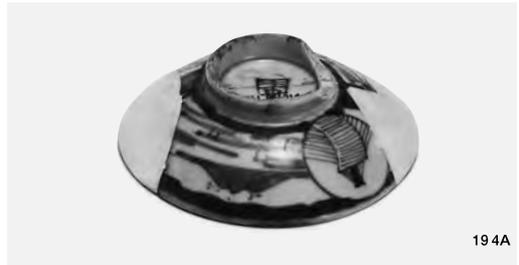
190



191



192



194A



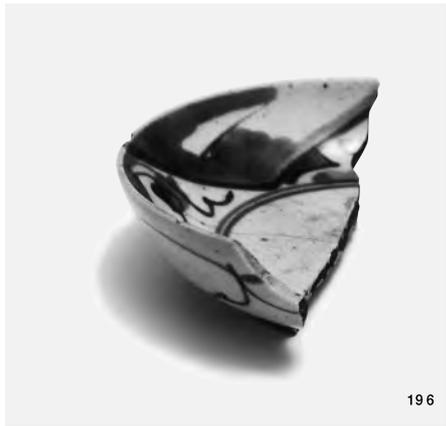
194B



193



195





202



204



203



205



206A



207



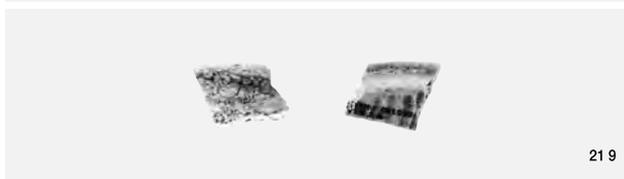
206B



208



209





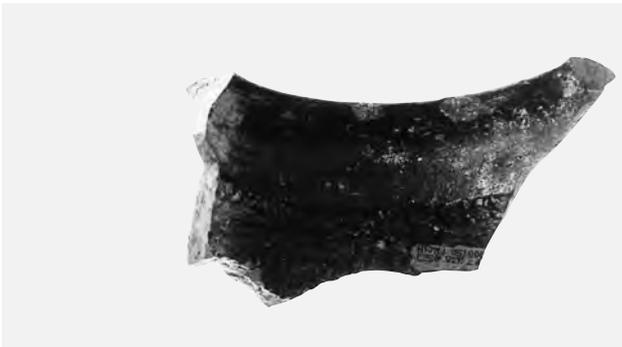
222



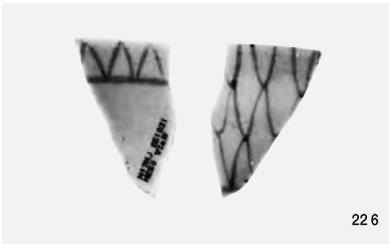
223



224



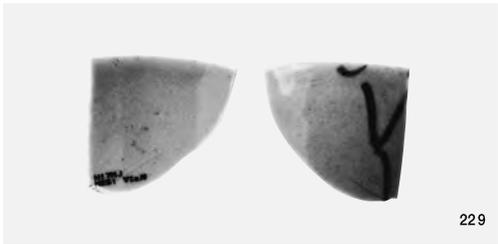
225



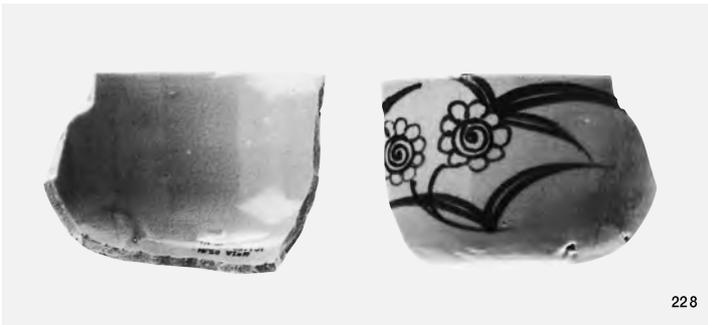
226



227



229



228



230



231



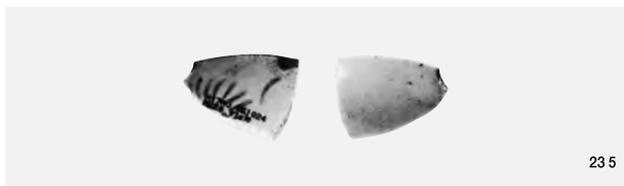
232



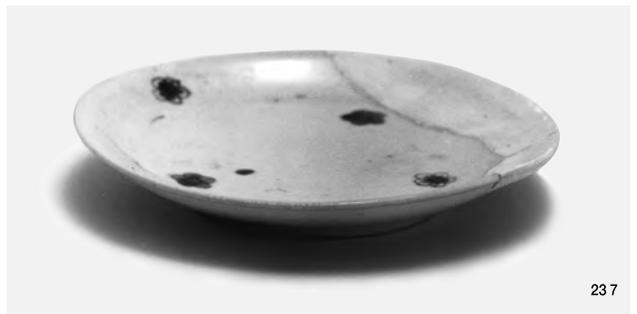
233



234



235



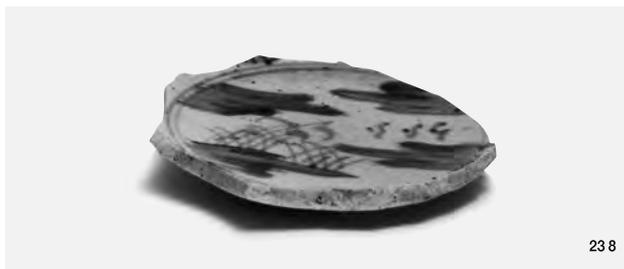
237



236



239



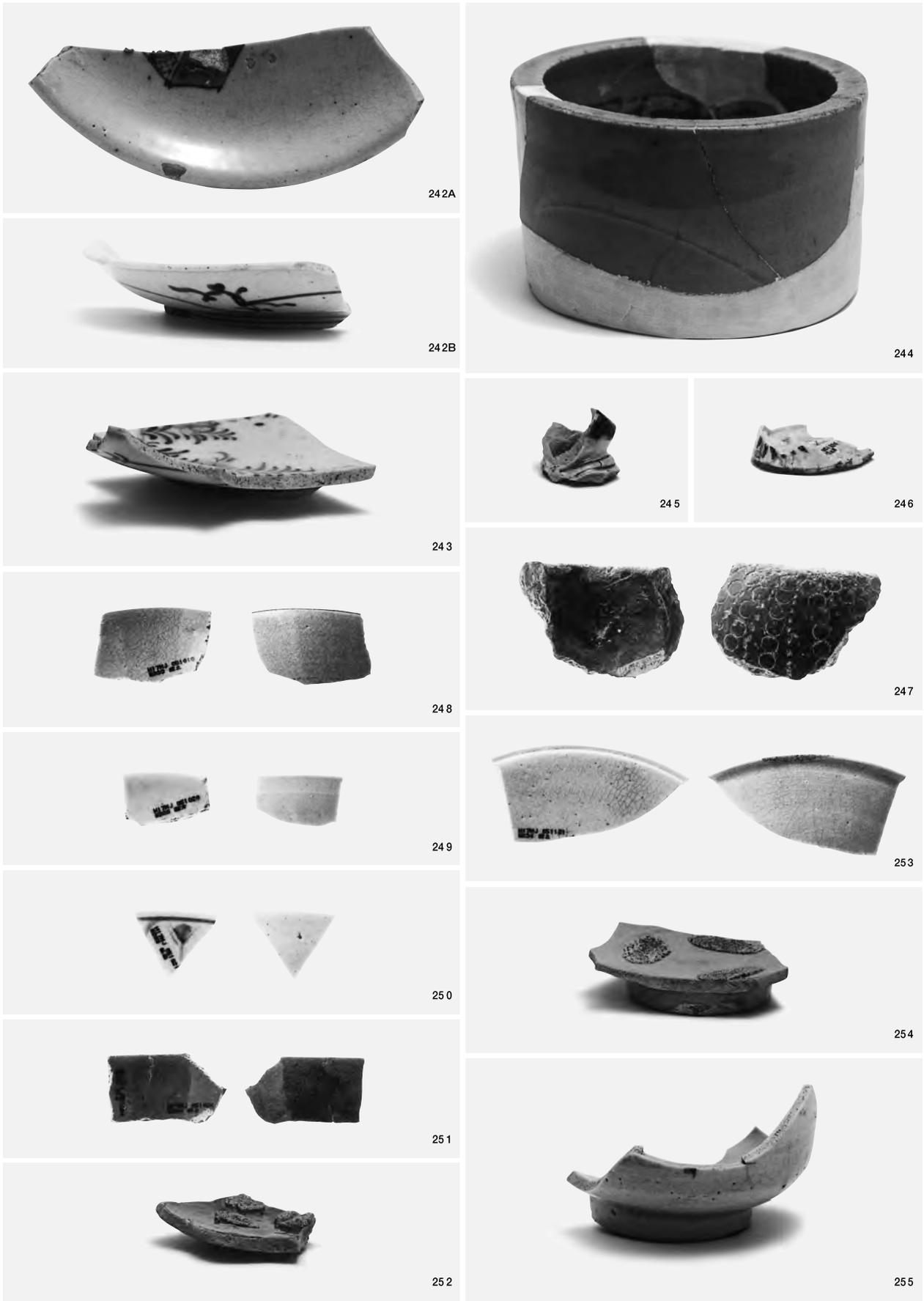
238



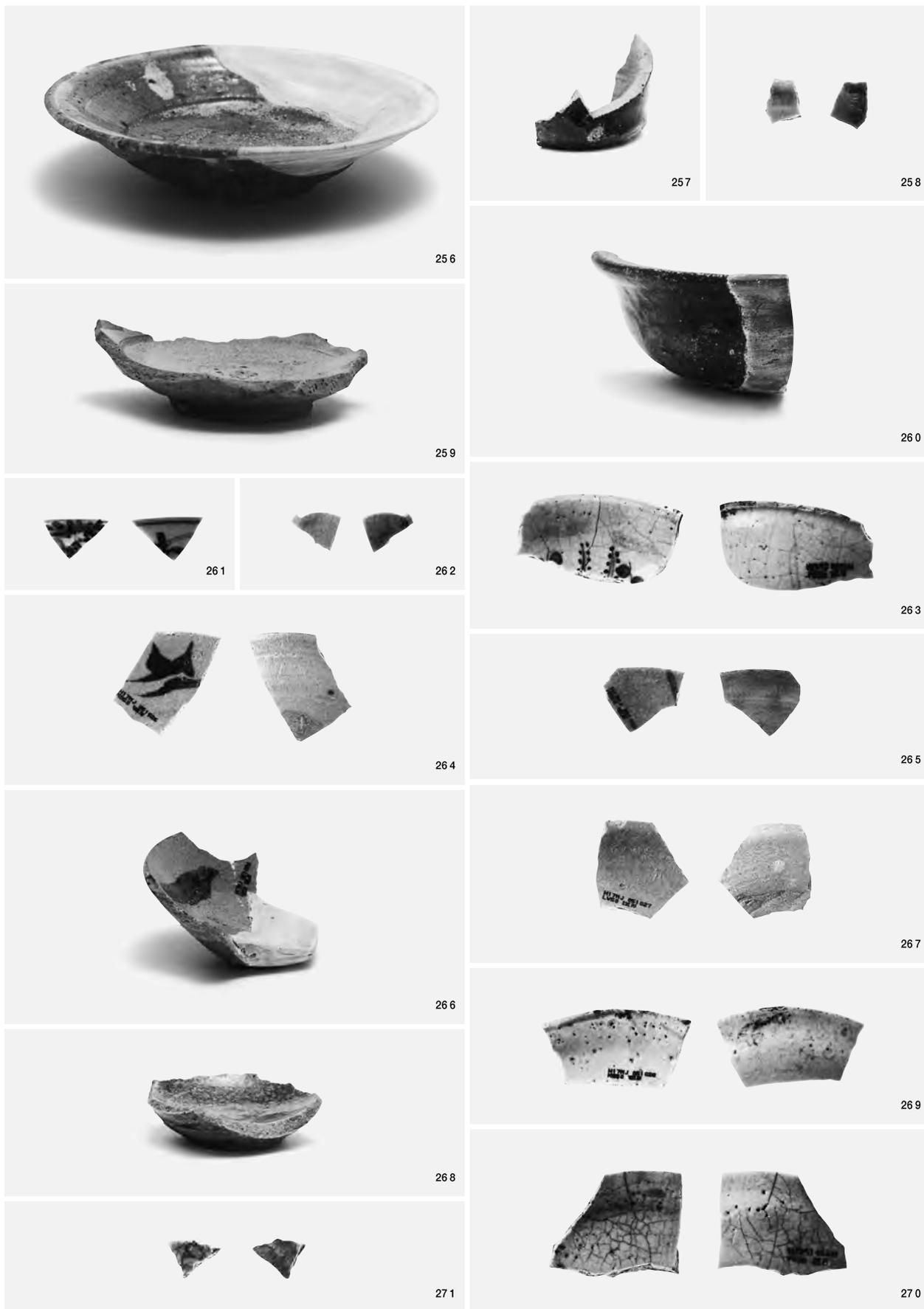
240



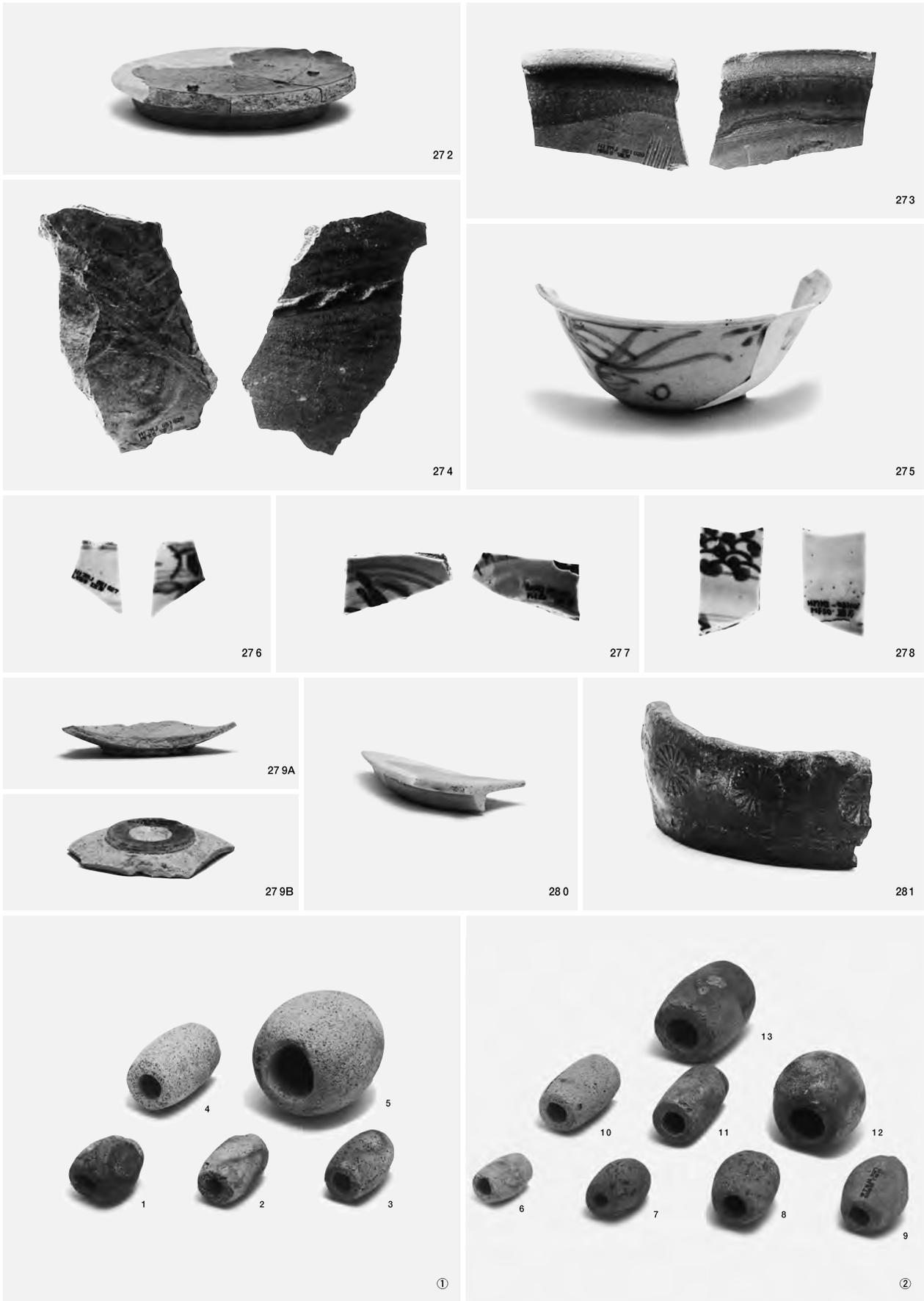
241



图版42 242~247 土器・陶磁器 (第Ⅵ層)、248~255 土器・陶磁器 (第Ⅶ・Ⅷ層面遺構内)



256・257 土器・陶磁器 (第Ⅶ・Ⅷ層面遺構内)、
 258～262 土器・陶磁器 (第Ⅶ層)、263～270 土器・陶磁器 (第Ⅷ層)



図版44

272～281 土器・陶磁器（第Ⅷ層）、
 ① 土製品（第Ⅳ層面遺構内）、② 土製品（第Ⅳ層）



①



②



④



③



⑤

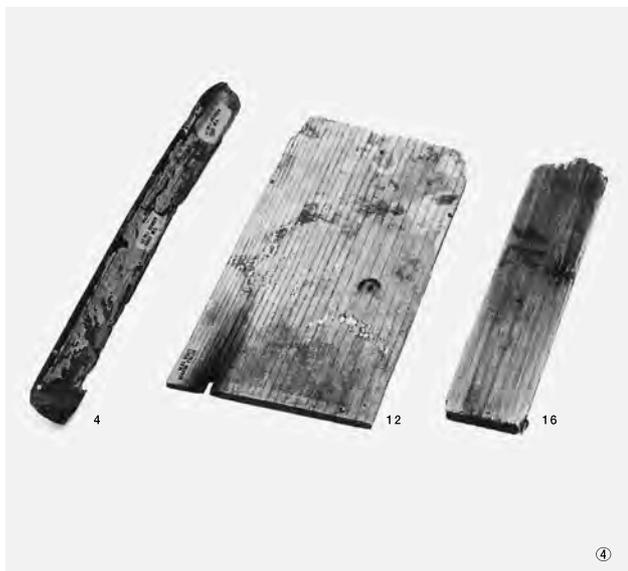
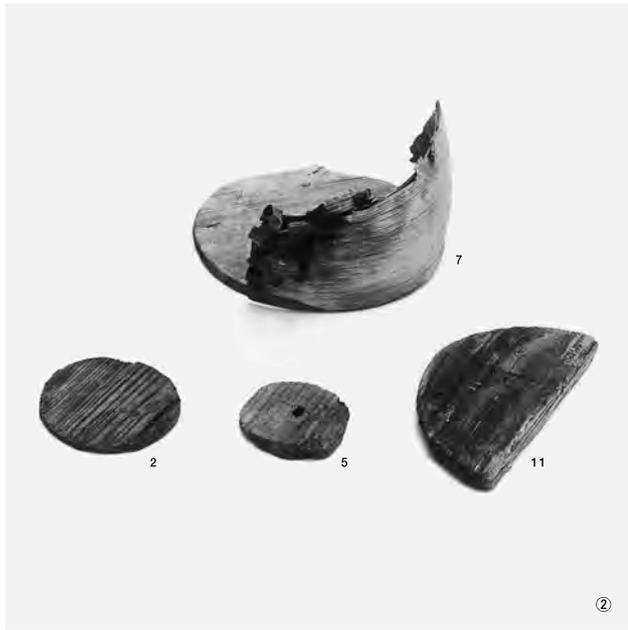
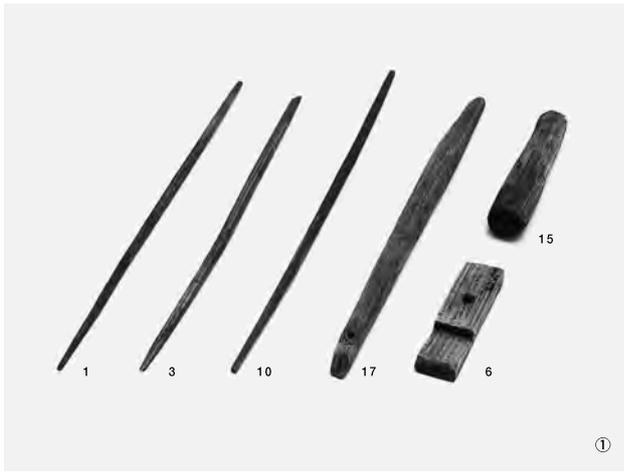


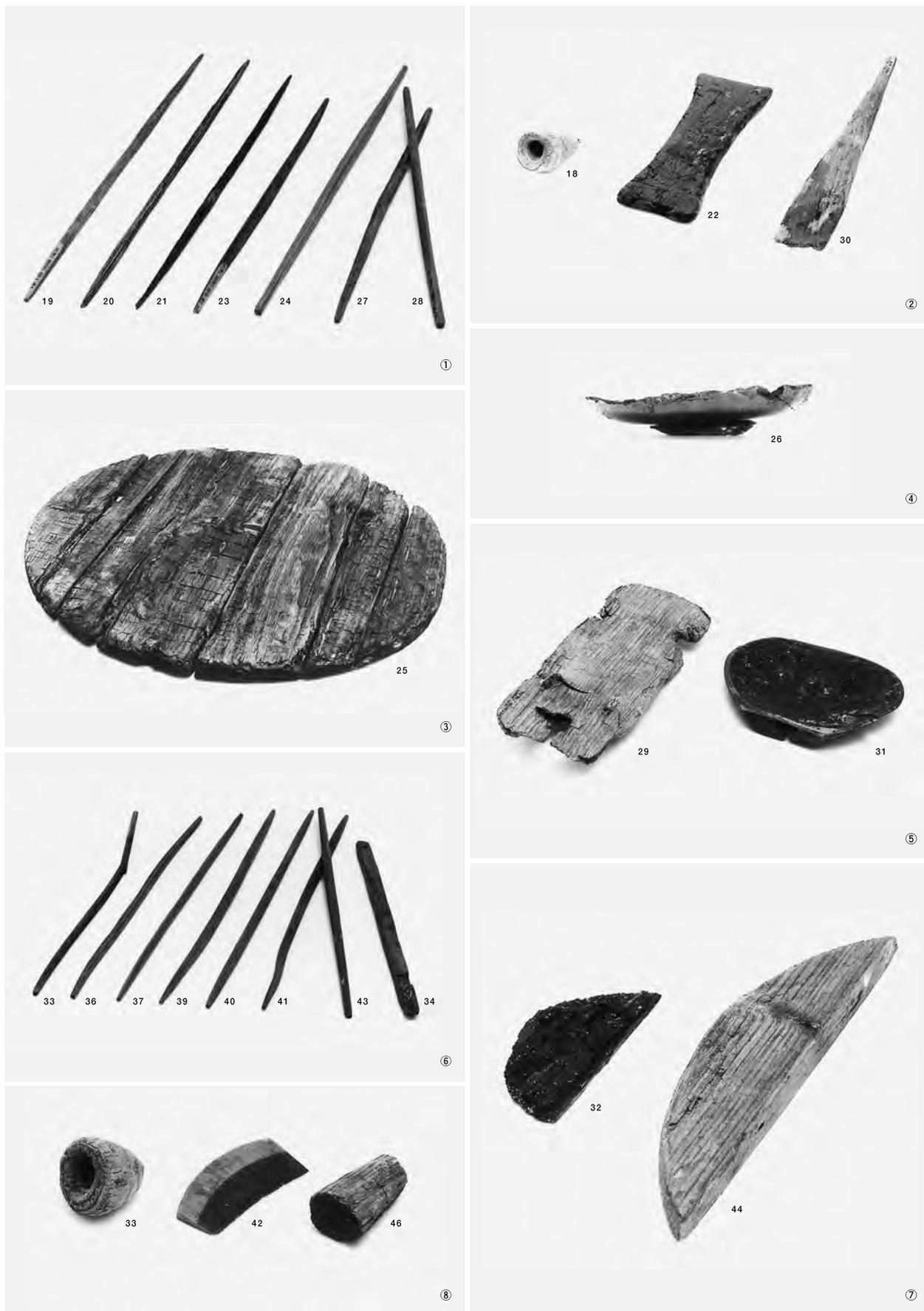
⑦



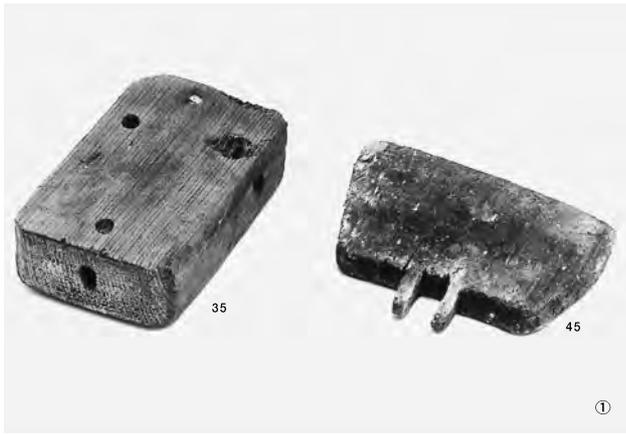
⑥

①・② 土製品 (第V層面遺構内)、③・④ 土製品 (第V層)、
⑤・⑥ 土製品 (第VI層面遺構内)、⑦ 土製品 (第VII・VIII層面)

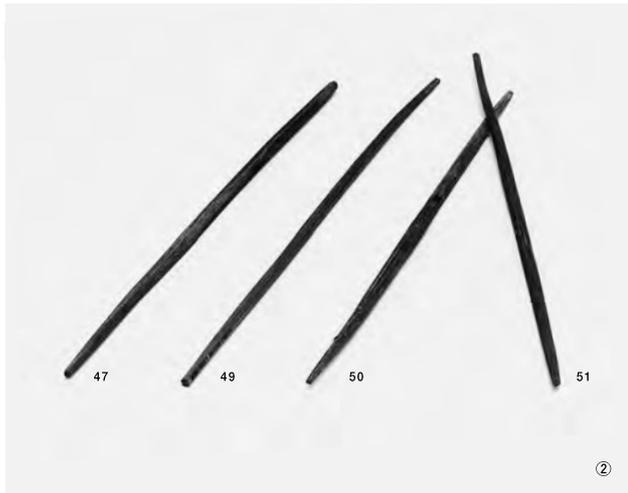




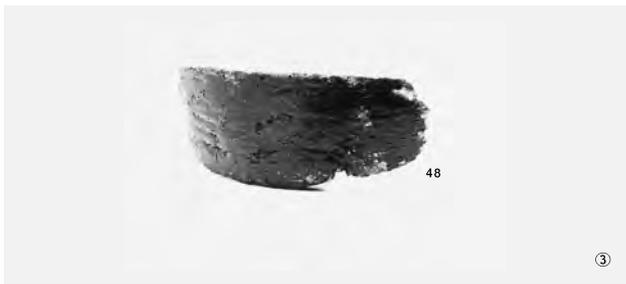
①～⑤ 木製品（第Ⅴ層面）、⑥～⑧ 木製品（第Ⅵ層面）



①



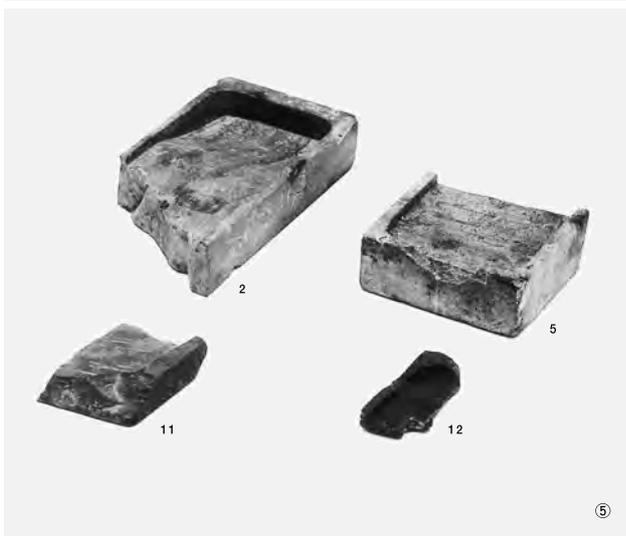
②



③



④



⑤



⑥

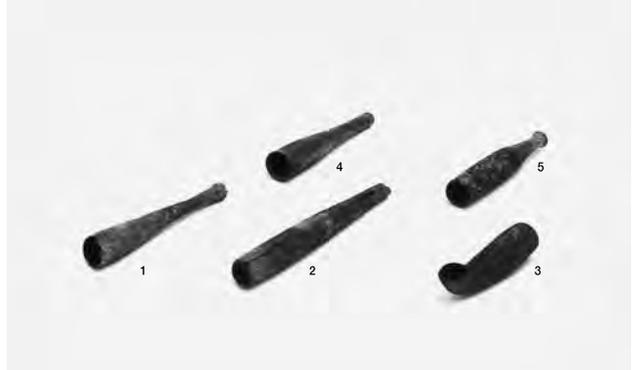
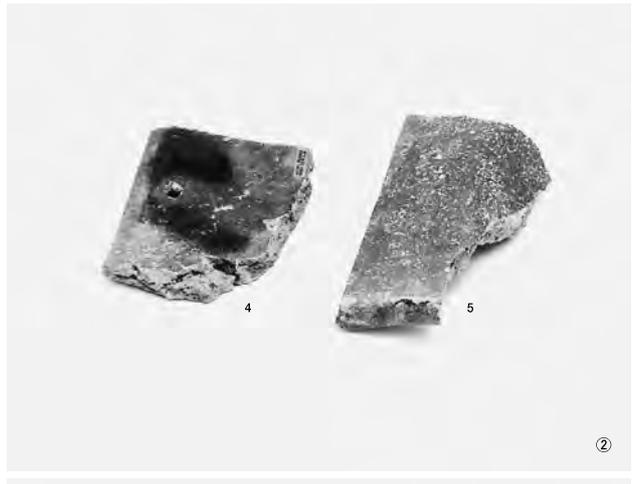


⑦

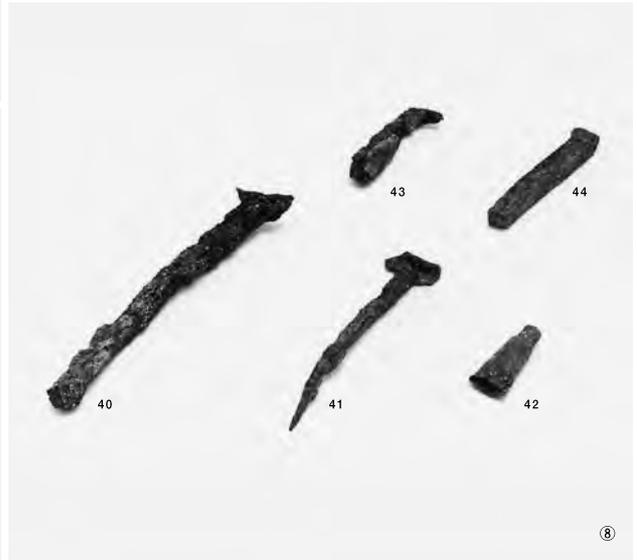
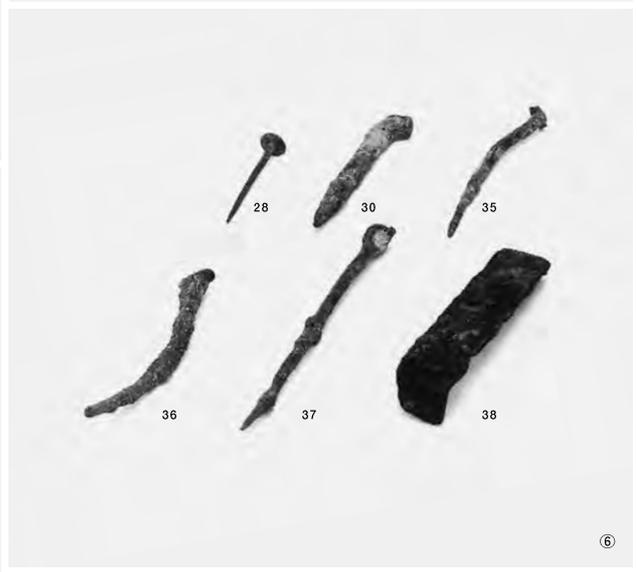
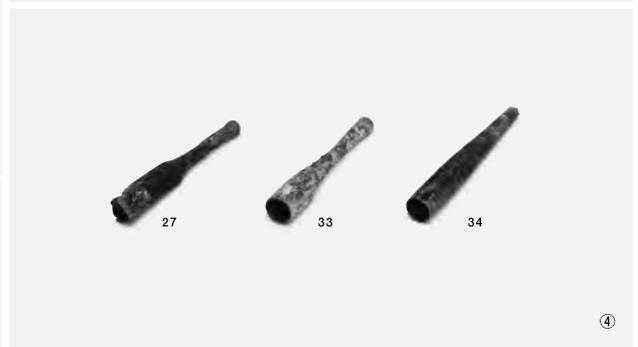
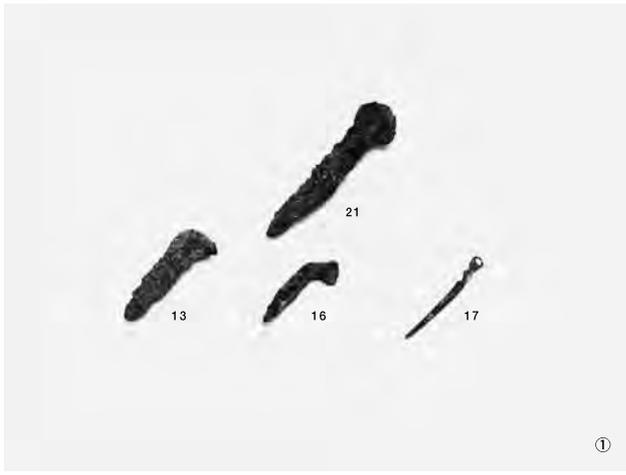


⑧

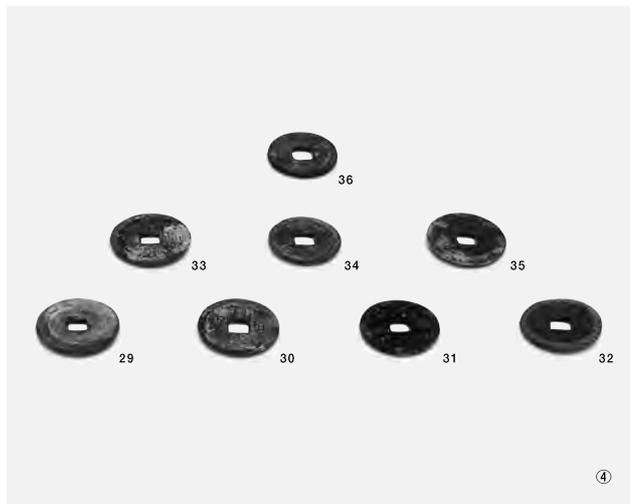
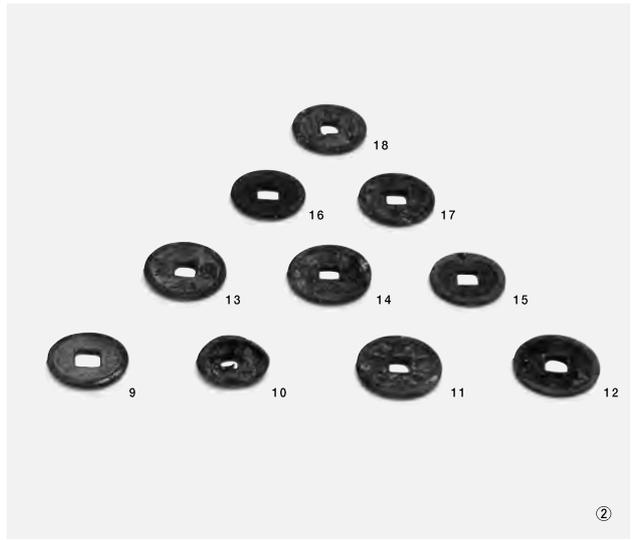
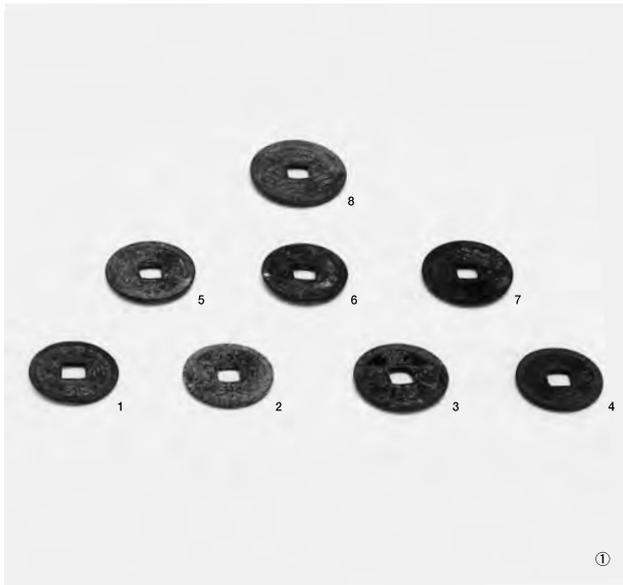
① 木製品 (第Ⅵ層面)、②・③ 木製品 (第Ⅶ・Ⅷ層面)、
④ 石製品 (砥石)、⑤ 石製品 (硯)、⑥ 石製品 (その他)、⑦・⑧ 瓦



图版49 ①~③ 瓦、④~⑥ 金属製品 (第Ⅳ層面)、⑦・⑧ 金属製品 (第Ⅴ層面)



①~③ 金属製品 (第V層面)、④~⑦ 金属製品 (第VI層面)、
⑧ 金属製品 (第VII・VIII層面)



① 錢貨 (第IV層面)、②・③ 錢貨 (第V層面)、④ 錢貨 (第VI層面)、
⑤・⑥ 動物遺存体

報告書抄録

ふりがな	みなとじょうあと							
書名	湊城跡							
副書名	秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成17年度調査区）							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	神田和彦							
編集機関	秋田市教育委員会							
所在地	〒010-0951 秋田県秋田市山王二丁目1番53号山王21ビル内 TEL 018-866-2246 FAX 018-866-2252							
発行年月日	2007年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みなとじょうあと 湊城跡	あきたしつちぎきみなと 秋田市土崎港 中央三・五・六 丁目地内	05201	165	39° 45' 26"	140° 4' 16"	20050801～ 20051130	180	道路拡幅事業に 伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
湊城跡	城館 町屋敷	中世 近世	柱列跡	10列	土器・陶器・磁器・	慶長4年～6年 (1599～1601)の大 改修前後の中世・湊 城に伴う遺構・遺物 が検出された。 17世紀～19世紀中 葉までの江戸時代の 近世・土崎湊の町屋 敷に伴う遺構・遺物 が検出された。		
			建物跡	11棟	土製品・木製品・石			
			溝跡	35条	製品・金属製品・瓦・			
			井戸跡	1基	銭貨・動物遺存体			
			土坑	34基				
			焼土遺構	4基				
			集石遺構	5基				
			敷石状遺構	1面				
			ピット	30基				

秋田市

湊 城 跡

—秋田都市計画道路事業（土崎駅前線）に伴う発掘調査報告書（平成17年度調査区）—

印刷・発行

平成19年3月

編集・発行

秋田市教育委員会

〒010-0951 秋田市山王二丁目1番53号

山王21ビル内

TEL 018-866-2246 FAX 018-866-2252

印 刷

有限会社タイヨー商会
